

アルマ1,*-*,アルマ書

アルマ1,*-*,アルマはアルマの息子である。

アルマ1,*-*,アルマ第1世の息子で、ニーファイの民を治める第1の大判事兼教会の大祭司アルマの記事。判事の治世を年代順に記す。国民の 中に行われた戦と不和の記事。ニーファイ人とレーマン人との間に戦われた戦争の記事。以上、第1の大判事アルマの記録による。

アルマ1,,アルマ書 第1章

アルマ1,*-*,教会の敵ニーホル、ギデオンを殺し、裁判を受けて死刑に処せられる。祭司の偽善売教と迫害。改善された状態、祭司も民も平等であること。

アルマ1,1,モーサヤ王はすでに一生の間善の戦を戦い、神の御前に義しい行いをなし、自分の後をついで国を治める王を立てずに世の人が必ず行かねばならぬ道を行ったが、王は亡くなる前に国法を立てて民がこれを証人した。従って、ニーファイ人を治める判事治世の第1年から

アルマ1,1-1,国民はモーサヤ王の立てた国法に従わねばならなかった。

アルマ1,2,アルマが判事の職について世を治めた最初の年に、裁判を受けるためにアルマの前に引き出された1人の男があったが、この男は身体が大きく力が強いので名高かった。

アルマ1,3,かれはそれまで民の間を歩き廻り自分で神の言葉と称した道を説いて教会に迫り、また祭司も教師も1人のこらず人望を得て、自分の手を働かせないで民に生活を支えられるのが当然であると民に言いひろめた。

アルマ1,4,かれらはまた万人は終りの日に救われるのであるから恐れたりおののいたりする必要はない、頭を高くあげて喜ぶがよいと言うことと、また主は万人を造ってこれを贖いたもうたから万人は終りの時になって永遠の生命を受けるはずであると言うことを民に向って証した

アルマ1,5,かれが熱心にこれらのことを教えひろめたから、多くの者がその言葉を信じてかれの生活を支えたまた金銭をかれに送るようになった。

アルマ1,6,そこでかれはしだいに慢心がつのって高価な衣を身に着け、ついに自分の教理にかなう教会を建て始めた。

アルマ1,7,しかしある時、かれは自分の言葉を信じている人々に説教をしようとして出て行く途中に、神の教会に属してその教師の1人に数えられる者に出逢い、烈しくこの者と論争して教会の聖徒らをまどわそうとしたが、教師もまた負けてはおらず神の言葉をもってこの男を戒

アルマ1,8,この教師はその名をゲデオンと言い、神の御手に使われてリムハイの民を奴隷の境涯から救い出したのはこの人であった。

アルマ1,9,ギデオンは自分と言い争うこの男に向い神の言葉を以て負けずに論じたから、この徒個々はギデオンに向って激しく怒り剣を抜いて打ちかかった。ところが、ギデオンはもはや年をとっていたので、かれの打ちかかってくるのを避けることができずに切り殺された。

アルマ1,10,それで教会の聖徒たちはその男を捕え、その犯罪によって裁判を受けさせるためにアルマの前に引いて行った。

アルマ1,11,ところがこの男はアルマの前に立って大胆に自分の弁解をしたが、

アルマ1,12,アルマはこれに答えて“見よ、この民の中に祭司の偽善売教の起るのはこれが始めてである。汝は祭司の偽善売教の罪があるのみならず、また剣の力を以てこれをひろめようとした。見よ、祭司の偽善売教をこの民の中にひろめて行かせたならば、民はことごとく亡びて

アルマ1,12-1,であう。

アルマ1,13,汝はこの民のためになる多くの善いことをした義人の血を流したのであるから、もしわれらが汝の命を許したならばその義人の血を流した責任はかならずわれらにかかって報復を受けるであろう。

アルマ1,14,故にわれらの最後の王のモーサヤがわれらに伝えた国法により、汝を死刑に処する。民はその国法を証人したのであるから、かれらはそれを守らなくてはならない”と。

アルマ1,15,ここに於て民はこのニーホルと言う男をマントイと呼ぶ小山の頂上へつれて行って、かれがこれまで人民に教えたことは神の道にそむくものであることを天地の間に於て白状させた。いやかれは自分からそれを白状してここに恥ずかしい最後をとげた。

アルマ1,16,しかしながら、このようにしても国中に祭司の偽善売教がひろがるのは止まなかった。それは国中に浮世の無益なものを好む人が多く居て、富と名誉が欲しいために出て行って偽の教えを説いたからである。

アルマ1,17,さりながら、偽を言う者は罰を受けるのであるから、かれらは国法を恐れて思い切って偽を言わずに、自分の信じている教えを宣べている風に見せかけた。それで国法は信仰について誰も罰する力がなかった。

アルマ1,18,かれらはまた盗みをはたらく者は罰を受けることを知っていたから、国法を恐れて思い切って盗みをせず、また人を殺す者は死刑に処せられるから思い切って強盗殺人の罪は犯かさなかった。

アルマ1,19,しかし、神の教会に加わっていない者たちが神の教会に属してキリストの御名を受けた者たちを迫害し

はじめ、

アルマ1,20,いろいろな悪い言葉でもって教会員をなやましたが、これは教会が謙遜で高ぶらず、金銭をとらずに無料で互に神の道を教えて伝えたからである。

アルマ1,21,さて教会の会員にはきびしいおきてがあつて、教会員は教会に属していない人を苦しめてはならない、また互いに苦しめてはならないと戒めてあつた。

アルマ1,22,それにもかかわらず、ついに強化委員の中に誇り高ぶって烈しく敵と争う者が多く起つた。そして甚だしい者は互いに打ち合うほどになり、かれらは互いにこぶしを奮って打ち合った。

アルマ1,23,これはアルマの代の第2年にあつたことで教会が多大の艱難に逢う原因となり、教会が多大の試煉を受ける原因となつた。

アルマ1,24,心がからくなつたためにその名が消されてもはや神の民たちの中に数えられない者が少なくなく、また自分から神の民たちの中から去る者も多かつた。

アルマ1,25,これはまことに信仰の固い人々にとって大きな試煉であつたが、それにもかかわらず、これらの人々は信仰堅固に確乎として動かず神の命令を守り、自分たちが受ける迫害を辛抱して耐え忍んだ。

アルマ1,26,そして祭司らが神の道を民たちに伝えるためにその仕事を休めば、民たちもまた神の道を聞くためにその仕事を休み祭司が民たちに神の道を説き終ると、民たちはみなすぐと帰ってまたその仕事にはげんだ。そして、教えを説く者はその教えを聞く者よりも偉いわけな

アルマ1,26-1,また教師はその教えを学ぶ者よりも偉いわけでないから、祭司は自分の教えを聞く者よりも偉いとは思わなかつた。このようにして民たちはみな平等であつて各々みなその力に応じて働き、

アルマ1,27,各々みなその財産の多い少いに応じて、貧乏な者や病気にかかっている者や苦しんでいる者たちに施しをした。かれらは高価な衣服で身を飾らなかつたがその服装は見ても気持が良く小ざっぱりした服装であつた。

アルマ1,28,このようにかれらは教会の万事を整えて、多くの迫害を受けたにもかかわらずまたひきつずき平和を保つようになった。

アルマ1,29,それで教会が確率したので強化委員は非常に物持ちになり始め、必要な品物が豊にあつて、家畜の群、いろいろな肥えた家畜、穀物、金、銀、貴重品、絹布、良いリンネルやいろいろの良い常用の織物などを多く持っていた。

アルマ1,30,そして、このように栄えていたとき、かれらは着る物のない者、飢えている者、渴いている者、病気をしている者、栄養の足らない者などを追い払わず、富に執着をせず、貧乏な者があるなら年よりと若い者、男と女、自由の民と奴隷の民とを区別せず、教会員であると

アルマ1,30-1,非教会員であるとの差別なく誰にも同じように惜しまず物を施した。

アルマ1,31,このようにして教会員は栄えて、その教会に属していない者たちよりもずっと者持ちになつた。

アルマ1,32,それは教会に属していない者は魔法を使い、間違つた神を拝み、怠けてばかり居てむだなことを言い、ねたんだり争つてばかり居たからである。またかれらは高価な衣を身に着け、自ら尊大にかまえ、偽を言い、盗みをし、強盗やみだらな行いや人殺しなどあらゆる罪惡

アルマ1,32-1,犯したからである。しかしながら、犯罪人はできるだけきびしく国法に照らし処分した。

アルマ1,33,このように罪のある者に法を適用しそれぞれの犯罪に応じて罰したから、民はひとときわ静になり、公然と犯罪をあえてするようなことはなかつた。従つて、判事治世の5年目までニーファイの民は至極平和に暮したのであつた。

アルマ2,,アルマ書 第2章

アルマ2,*-*,アムリサイ、王になろうとする。大多数の投票によって反対されたが、ついに王にされる。アムリサイ、戦に負ける。アムリサイ、レーマン人に加わる。アルマ、アムリサイを今年その軍を破る。

アルマ2,1,判事治世の5年目の始めに、民の間に争いが起つた。これはアムリサイと言う人のために起つたことであるが、アムリサイは非常にずるい、抜目のない男で世間の智慧に長じていて、さきに剣でフィデオンを殺し国法によって死刑になつた者と同じ宗派であつた。

アルマ2,2,さてこのアムリサイはそのずるかしこさで多くの人々をいざなつて自分に従わせたから、そのともがらは次第に大そう強く大きなものとなり、ついにアムリサイを立てて民の王にする努力をしはじめた。

アルマ2,3,これはまことに教会の会員らと、アムリサイにいざなわれてまどわされなかつた人たちにとってならぬ大事であつた。なぜならば国法によると王を立てるには全国の民の投票で定めなくてはならない。

アルマ2,4,従つて、アムリサイは悪人であつて神の教会を敗るつもりがあつたから、アムリサイが万一の投票の大半を得るようなことになれば、必ず会員から権利を奪い教会の特権をはぎ取るであろうと言うことをかれらは知っていたからである。

アルマ2,5,そこで国中いたる所に、人民はそれぞれの意見に従つてアムリサイに賛成する者はここに集り、アムリサ

イに反対する者はかしこに集り、両方が激論をして烈しく相争った。

アルマ2,6,このように人民は集ってこの問題について投票をし、その投票を判事たちの前に置いた。

アルマ2,7,ところが人民の投票の大半はアムリサイに反対であったから、アムリサイは民の王にされなかった。

アルマ2,8,そこでアムリサイに反対した者たちはこれで非常に喜んだ我、アムリサイは自分に味方するともがらを煽動して自分に反対する人々に対し怒りをいだかせた。

アルマ2,9,アムリサイに味方するともがらは、ついに集ってアムリサイを立てて自分らの王にした。

アルマ2,10,さてアムリサイはその王になるとその味方に対し同胞の民に向ってすぐに武器をとって戦えと命じ、同胞の民を自分に従わせようとした。

アルマ2,11,アムリサイのともがらはアムリサイと呼んでほかの民と区別し、その余の民はニーファイ人または神の民と呼んだ。

アルマ2,12,ニーファイ人はアムリサイ人が自分らを亡ぼそうとしていることを知ってかれらと戦う用意をし、剣、太刀、弓、矢、投石、投石器、そのほかあらゆる武器を以て武装した。

アルマ2,13,このようにしてニーファイ人はアムリサイ人が攻めてくるときにこれを迎え撃つ準備をととのえ、兵の数に応じて少士官、中士官、大士官などを選んで任命した。

アルマ2,14,アムリサイも自分の兵にあらゆる武器をもたせ、同胞と戦うときに味方の者を支配するために司らを立て、軍を指揮するために司令官らを置いた。

アルマ2,15,ついにアムリサイ人はゼラヘムラの地の近くに流れているセイドン川の東に当るアムナイヒユ山に進み、ここでニーファイ人と戦を開いた。

アルマ2,16,このときアルマはニーファイの民の大判事であってまたその統治者であったから、アムリサイ人と戦うために少士官、や大士官と共に軍を率いて進み、

アルマ2,17,サイドン川の東に当る山でアムリサイ人を殺しはじめたが、アムリサイ人は大きな力を発揮してニーファイ人と戦ったので、それがために多くのニーファイ人がアムリサイ人の前に倒れて死んだ。

アルマ2,18,それにもかかわらず、主はニーファイ人の腕に力を添えたもうたので、ニーファイ人は大いにアムリサイ人はニーファイ人から逃げて行った。

アルマ2,19,そこでニーファイ人は日の暮れるまでアムリサイ人を追撃して非常に多くこれを殺したから、アムリサイ人の戦死者は実に12、532人に上り、ニーファイ人の戦死者も6、562人に上った。

アルマ2,20,アルマはもはや敵を追撃することができなくなって、その軍をギデオンの谷に陣をとらせた。この谷はニーホルに殺されたギデオンからその名をとった谷である。ニーファイ人はここで夜を過ごそうとしてその陣を張った。

アルマ2,21,さてここにアルマは間者を出してアムリサイ人の残りの兵を追いかけさせたが、これはその民の亡びるのを防ごうとしたのである。

アルマ2,22,アムリサイ人の軍営をうかがうためにつかわされた者はゼラム、アムノル、マンタイ、リムヘルと呼ぶ4人の者であって、アムリサイ人の軍営をうかがうために兵卒をつれて出て行った。

アルマ2,23,ところがその翌る日、これらの者は非常に恐れ驚き、大いにうろたえながらニーファイ人の陣営へ急いで帰ってきて言うのには、

アルマ2,24,"私たちはアムリサイ人の軍を追いかけて行ったところ、思いもよらずゼラヘムラの地の南に当るミノンの地でニーファイの地からくる道にレーマン人の大軍を見た。アムリサイ人はすでにレーマン人と連合している。

アルマ2,25,かれらは今やミノンの地に住む私たちの同胞に迫っているので、同胞たちはその祭司と家畜とをつれて敵のこない先に私たちの都をさして逃げている。もし私たちが急いで行かないならばレーマン人とアムリサイ人は必ず都を占領して私たちの親や祭司を殺してしまう"

アルマ2,26,ここに於てニーファイの民は陣を払い、その都のゼラヘムラを指してギデオンの谷を出た。

アルマ2,27,そして今やサイドン川をわたっている時、レーマン人とアムリサイ人とはほとんど海の真砂のように数知れぬ大勢の兵でニーファイ人を亡ぼそうとおそいかかってきた。

アルマ2,28,それにもかかわらず、ニーファイ人は主に祈ってひたすら敵の手から救いたまえとねがったので、主はその嘆願を聞きとどけ主の御手によってニーファイ人を強めたもうたのでレーマン人とアムリサイ人はニーファイの前に倒れた。

アルマ2,29,このときアルマはアムリサイと顔を合わせて相対し、剣をもって近より相共に烈しく戦った。

アルマ2,30,アルマは神を信じ頼る人であったから強い信仰の力をふるい声高らかに"主よ憐みてわが命を助け、われが主の御手に使われてこの民を救い護ることを得させたまえ"と祈った。

アルマ2,31,このように祈り終ってまたアムリサイと戦ったところ、力を得て強くなりアムリサイを切り殺した。

アルマ2,32,それからアルマはまたレーマン人の王とわたり合ったが、王はアルマから逃げ帰り自分の護衛兵をやってアルマと戦わせた。

アルマ2,33,しかしアルマは自分の護衛兵と共にレーマン王の護衛兵と戦、1部を殺し1部を追い退けるまで力をつくした。

アルマ2,34,このようにしてアルマはサイドン川の西の岸から1人のこらず敵をうちほらい、レーマン人の司がい川の中へ投げこんだ。これはアルマの軍も川をわたり、レーマン人とアムリサイ人との戦を交える余地を川の西の方で得るためであった。

アルマ2,35,アルマの軍が全部川をわたり終ると、レーマン人とアムリサイ人とは数え切れぬほどの大軍でありながら逃走し始め、

アルマ2,36,西北の野を指して国境のはるか向うへ退却したが、ニーファイ人は力のかぎりこれを追撃してかれらを殺した。

アルマ2,37,まことに、レーマン人とアムリサイ人とはどこへ行こうとしても敵に逢い、あるいは殺されあるいは追われてヘルモンツと言う野に着くまでは西に北にと追い散らされた。このヘルモンツは飢え切った猛獣が満ちている荒野の1部であった。

アルマ2,38,それであるから、多くの者はその負傷のために荒野の中で死に、猛獣や空飛ぶ猛鳥の餌食となった。後にこれらの骨が見出されてうず高く地上に積まれている。

アルマ3,,アルマ書 第3章

アルマ3,*-*,アムリサイ人のしるしとレーマン人の受けたのろい。ニーファイ人再び勝利を得る。

アルマ3,1,この戦ニーファイ人の戦死者は非常に多くてその数が数えられなかったが、武器によって殺されなかった者は死者を葬ってから故国に帰りみな各々の家と妻子のもとに戻った。

アルマ3,2,戻って見ると女子供であって剣で殺された者が少なからずあり、またその家畜を多く殺され、その穀類の畑も多く軍隊のためにふみ荒らされていた。

アルマ3,3,さておよそサイドン川の岸で殺されたレーマン人とアムリサイ人との死がいみな川の水に投げ捨てられたから、その骨は今や海の深いところに沈んでいる。その骨はまことにおびたしかった。

アルマ3,4,アムリサイ人はレーマン人にならってその額に赤いしるしを塗っていたから、ニーファイ人と見分けることは用意であった。それでも、かれらはまだレーマン人のように頭の毛をそってはいなかった。

アルマ3,5,レーマン人は頭の毛をそり、腰に毛皮をまとい、よろいを着け弓、矢、投石、投石器などを持っているだけでほとんどはだかであった。

アルマ3,6,レーマン人の皮膚は先祖につけられたしるしのように黒かった。このしるしはレーマン人の先祖が、正しく聖い人であった兄弟のニーファイ、ヤコブ、サームの人に叛いて罪惡を犯し、

アルマ3,7,またこの4人を殺そうとしたので受けたのろいである。主なる神はまことにレーマンとレミュエルとイシメルの息子娘たちにしるしをつけたもうた。

アルマ3,8,主がこのようになしたもうたのは、こののろいを受けた者たちの子孫をその兄弟らの子孫と見分けるためであって、また主なる神の民のろわれた民と結婚して偽りの言伝えを信ずることによって滅亡を招かないよう、これを保護しようと思いたもうからである。

アルマ3,9,およそ自分の種をレーマン人の種と交えた者はみなレーマン人の受けたと同じのろいを自分の子孫に及ぼした。

アルマ3,10,従ってレーマン人のいざなうままになびいた者は皆同じくレーマン人と呼ばれてしるしをつけられた。

アルマ3,11,またレーマン人の言伝えを信ぜず、エルサレムの地から持ってきた歴史と、先祖の確かな言伝えとを信じ神の命令を信じてこれを守る者たちは、皆その時から後ニーファイ人またはニーファイの民と呼ばれた。

アルマ3,12,この民はすなわち自分の記録とレーマン人の記録とを書きついで伝えた者であって、その記録とを書きついで伝えた者であって、その記録は真実である。

アルマ3,13,さて再び戻ってアムリサイ人のことを書くと、かれらもまたしるしをつけられたが、これは本当はかれらが自分で額に塗った赤いしるしである。

アルマ3,14,こうして神の御言葉は成就した。、次は神がニーファイに仰せになった言葉である“見よ、われはすでにレーマン人をのろえり、故にかれらにしるしをつけんとす。もしもかれらがわが憐みを浮くるためにその罪惡を悔い改めてわれに立ち帰らずば、今より後いつまでも

アルマ3,14-1,このしるしによりて、かれらとその子孫とを汝と汝の子孫より区別すべし。

アルマ3,15,われは、こののろいを受けたる汝の兄弟たちとその種を交うる者たちにも、皆同じしるしをつけてのろうべし、

アルマ3,16,われは、また汝と汝の子孫と戦う者たちにもしるしをつけんとす。

アルマ3,17,汝と縁を絶ちて離るる者たちはもはや汝の子孫とは呼ばるるべからず。われは今より永遠に汝と汝の子孫と呼ぶるすべての人とを必ず祝福せん”と。これはすなわち主がニーファイとその子孫とに立てたもうた誓約である。

アルマ3,18,今アムリサイ人はその額にしるしを塗りながら、自分から神の言葉を成就しているのを知らなかった。しかしながら、かれらは公然と神にそむいた。従って神ののろいは当然かれらに下らなくてはならなかった。

アルマ3,19,私はあなたたちが、アムリサイ人自らがこののろいを招いたことと、のろわれる者はみなこのように自分からその罰を招くことを知ってほしい。

アルマ3,20,さてレーマン人とアムリサイ人がゼラヘムラの地でニーファイ人と戦をしてからあまり日が経たない中に、レーマン人のほかの軍勢は前に進んできた軍勢がアムリサイ人と連合した場所でニーファイの民を襲撃した。

アルマ3,21,そこでニーファイ人はこのレーマン人の軍を国の外に追いはらうために兵を出した。

アルマ3,22,この時アルマは不詳していたから、このたびの戦には自分から出て行くことはせず、

アルマ3,23,ただ多数の兵をつかわして戦わせたが、これらの兵は進んで行って多くのレーマン人を殺しその残兵を国境からそとへ追いはらった。

アルマ3,24,そして再び帰ってきたが、その後久しく敵に悩まされることがなかったから、その国の平和はようやく回復をした。

アルマ3,25,この戦争と不和とはみな判事治世の5年目に始まって同じ年に終わった。

アルマ3,26,そしてこの1年間に何千何万と言う民が殺されたが、これらの人々はその行いの善惡に従って各々報いを受けるためと、自分が選んで善い靈に従ったと悪い靈に従ったとに依じて、あるいは永遠の幸福を得たりあるいは永遠の不幸を得たりするために永遠の来世に赴いた

アルマ3,27,そもそも人はみな自分が選んで従う者から報いを受ける。これは予言の"みたま"の言葉にかなない従ってまた真理にもかなうところではないか。このようにして判事治世の5年目は終わった。

アルマ4,,アルマ書 第4章

アルマ4,*-*,教会の成長。繁栄と高慢と罪惡。ニーファイ大判事となる。

アルマ4,1,ニーファイの民を治める判事治世の6年目にはゼラヘムラの地に戦争も不和もなかった。

アルマ4,2,しかし民はすでに同胞や家畜の群を失い、レーマン人に畑を踏み荒らされて穀物の畑を失い非常に悩み苦しんだ。

アルマ4,3,かれらの苦悩はまことにひどかったから民は1人のこらず悲しみにたえず、これは全く自分らの罪惡と憎むべき行いのために受けた神の裁きであると信じたから自分たちの義務を思い出した。

アルマ4,4,ここに於てかれらはもっと完全に教会を確立することにとりかかり、多くの人がサイドン川の水の中でバプテスマを受けて神の教会に加えられた。この人たちはアルマからバプテスマを受けたが、このアルマはその父アルマの按手によって教会を司どる大総ユ司に聖任さ・

アルマ4,5,判事治世の7年目には神の教会に入った者が約3,500人あって、これらの人々はみなバプテスマを受けていた。ニーファイの民を治める判事治世の7年目はこのような有様で暮れ、年中ひきつずき平和であった。

アルマ4,6,判事治世の8年目になって教会の会員たちは次第に慢心を起した。それはかれらが勉めはげんで得た非常に多くの富と、声量な絹布、良いリンネル、多くの家畜、金、銀、あるいはあらゆる貴重な品物などを持っていたからである。このようにしてかれらは非常に高価な

アルマ4,6-1,身に飾るようになり、上に述べたような財貨を誇ってようやく高慢な心がつのった。

アルマ4,7,このようなわけで、アルマもまたアルマが教会の教師、祭司または長老に聖任した多くの人々も非常に心を痛めた。これらの人々はまた教会員の中に罪惡が出てくるのを認めて非常に悲しく思った。

アルマ4,8,強化委員たちは高慢に流れて富や浮世の無益な物に心を寄せ、互に侮り合って、自分に同意をせずまた自分の信ずるものを信じない人たちを苦しめるようになったが、アルマを始めとして多くの教師、祭司、長老たちはこの有様を見て大いに悲しく思った。

アルマ4,9,このようにして判事治世の8年目に強化委員の中にひどい不和が起り、ねたむこと、争うこと、うらむこと、迫害すること、そのほか神の教会に加わっていない者よりもひどく自慢をすることなどがあつた。

アルマ4,10,このような有様で、判事治世の8年目は暮れて行ったが、教会内部の罪惡は教会の会員でない者たちをつまずかせる石となり、教会の拡張はこのために非常にさまたげられた。

アルマ4,11,9年目の始めになって、アルマは教会内の罪惡を見、また教会の悪い手本があるために無信仰がますますその罪を深くして人民が亡びるようになることを認めた。

アルマ4,12,かれはまた人民相互の間に非常な不平等があつて、ある者は甚だしく傲慢になってほかの者をいやしみ、貧しい者や着物のない者や飢えている者や渴いている者や病気をしている者やナウ案でいる者をかえりみないことを認めた。

アルマ4,13,これはまことに民を非常に悲しませるものになったことであるが、一方にはへりくだる人たちがあつて、およそ救助を要する者を救助し、たとえば貧しい者に持物を分け与え、飢えた者に食物を与えて、予言の"みたま"の示すまに将来降臨したもうはずのキリストの

アルマ4,13-1,あらゆる艱難をその身に受けた。

アルマ4,14,そしてキリストが降臨したもう日を待ち望んで罪の赦しを保ち、キリストのみことと能力とその死の縄目を脱したもうたことによって起る死者の復活のことを考えて非常に喜んだ。

アルマ4,15,アルマは神に従う謙遜な人々の艱難辛苦と、ほかの人民がこれらの人たちに加える迫害と人民相互の不平等とを見て非常に悲しくなったが、主の“みたま”はかれを離れなかった。

アルマ4,16,アルマは教会の長老の中から1人の賢い人を選び、この人にすでに定められている国法にかなう新しい法律を制定する権能と、人民の罪惡ととがとに応じてこの法律を励行する権能とを民の投票によって与えた。

アルマ4,17,この人はニーファイハと言って大判事に任ぜられ、民を裁き民を治めるために裁判の職に就いた。

アルマ4,18,しかし、アルマはこの人に教会の大祭司の職を与えないで自分でこの職を保ち、ただ裁判をする職だけをニーファイハにゆずった。

アルマ4,19,アルマがこのようにしたのは、自分がその民であるニーファイ任の中を巡ってあるいて、神の道を民に宣べ伝え、民にその義務を思い起こさせてふるい立たせ、神の道をもって民の間に行われるあらゆる傲慢と狡猾と不和とを押さえようとしたためであった。全く純粋な

アルマ4,19-1,証詞を持ってこれ責めるよりほかに民を改心させる道がないと思えたからである。

アルマ4,20,このようにしてニーファイの民を治める判事治世の9年目の始めアルマはニーファイはに裁判をする職をゆずって、自分は神の神権の大神権にかかわる職をもっぱら務め、啓示と予言の“みたま”によって神の道を証した。

アルマ5,,アルマ書 第5章

アルマ5,*-*,全国各市や村に於て神の神権の大祭司アルマが人民に述べた言葉。アルマ、教会の逢った経験を再び教え上げる。罪惡を攻撃する。人民に悔い改めを要求する

アルマ5,1,さてアルマは人民に神の道を宣べ伝え始めたが、最初はゼラヘムラの地に於て宣べ伝え、それから全国をまわって伝道をした。

アルマ5,2,アルマが自分で記したところによると、ゼラヘムラ市で設立をした教会の会員たちにかれが宣べた言葉は次のようである。

アルマ5,3,“私アルマにより神の教会を司どる大祭司に聖任せられたが、私の父はこの職に任命をする権能と威力とを神から授けていた。あなたたちに言うが、父はニーファイの地の堺にあるモルモンと言う所で教会を立て始め、モルモンの泉の中で同胞にバプテスマを施した。

アルマ5,4,それから後に、その教会員らは神の憐みと能力とによりノア王の民の手から救い出された。

アルマ5,5,しかしその後荒野の中で レーマン人の奴隷となり、まことに自由を失った教会に居ったが、このときも主はその御言葉の能力をもってかれらを奴隷の境涯から救い出したもうた。このようにして私たちはこの地へ導かれ、この土地のいたるところにも神の教会を立て始

アルマ5,6,現在この教会の会員である兄弟諸君よ、あなたたちは先祖が自由を失った境涯に居たことを充分によく記憶しているか。神があなたたちの先祖に恩恵を与えて長い間かれらを堪忍したもうたことを充分によく記憶しているか。また神がかれらを地獄へ落ちないようになし

アルマ5,6-1,なしたもうたことを充分によく記憶しているか。

アルマ5,7,ごらん、神はかれらの心を改め、かれらの深い眠りを覚したもうたから、かれらは目を覚して神を信じた。かれらは暗やみの中に居たけれども、後にかれらの身も霊も永遠の言葉の光に照らされた。まことにかれらは死の縄目と地獄の鎖にとり巻かれて永遠の滅亡がかれ

アルマ5,7-1,待ちもうけていた。

アルマ5,8,しかしわが兄弟諸君よ、あなたたちの先祖は本当に亡びたか。いやいや、亡びはしなかった。

アルマ5,9,死の縄目は断ち切られたか、また先祖をしばっていた地獄の鎖は解かれたか。その通り、本当に解けた。従ってかれらの心は広く開けて、贖いたもう愛を讃美する歌を唱った。あなたたちに言う。かれらはすでに救われた。

アルマ5,10,それなら、どのような条件で救われたのか。何によって救いを望むことができたか。何によって死の縄目と地獄の鎖から救い出されたか。

アルマ5,11,ごらん私は説明ができる。すなわち、私の父のアルマはアビナダイが口ずから授けた教えを信じたではないか。そして、アビナダイは聖い予言者ではなかったか。かれは神の言葉を宣べ、それを私の父アルマは信じたではないか。

アルマ5,12,私の父は信仰のためにその心が非常に改まった。私はこれらのことが皆真実であることをあなたたちに証する。

アルマ5,13,2-内容? 私の父はあなたたちの父に神の道を宣べ伝えたと、あなたたちの父もその心を大いに改めて謙遜な心で生けるまことの神に頼り、終りまでその行いは忠実であった。それであるからあなたたちの父は救われたのである。

アルマ5,14,わが教会の兄弟諸君よ。私はあなたたちに聞くが、あなたたちは今日霊によって生れ神の子になっているか。あなたたちは神の御姿を自分の身に受けているか。あなたたちは今言ったような大きな改心をすでに感じているか。

アルマ5,15,あなたたちは自分を造りたもうたお方が贖い救いたもうことを本当に信じているか。あなたたちは信仰の目で未来を見通し、死んで亡びるはずのこの肉体がよみがえって不死不滅となるどころ、すなわちこの朽ちるはずのものが復活して朽ちないものとなって現世でわが

アルマ5,15-1,わが身のした行いに応じて裁判を受けるために神の御前に立つところが見えるか。

アルマ5,16,あなたたちは裁判の日に主の御声が自分たちに聞えて‘さいわいなる者たちよ、われに來れ。汝らが地上にてなしたる行いは義し’と言いたもうことを今から思いはかることができるか。

アルマ5,17,または、その日にあなたたちは主に偽を言って‘主よ、私たちが地上でした行いは義しい行いである’と言い、そして主があなたたちを救いたもうと今思っているのか。

アルマ5,18,あるいはまた、全く自分のした罪惡を明らかにみな思い出し、神の命令を無にしたことを思い起し、これによって心の中に自分が罪深い者であることを憶えて、ひどく後悔しながら神の法定に引き出されるのを今から思ってみることができるか。

アルマ5,19,あるいはその日に、あなたたちはすでに神の御姿を自分の身に刻んで清い心と清い手をもって神を仰ぎ身ることができると思うか。

アルマ5,20,あなたたちはもし自分の身を任せて惡魔に従ったなら救われると考えられるか。

アルマ5,21,あなたたちがもし惡魔に従ったならば、あの裁判の日になって自分たちは救われないと言うことを悟るにちがいない。なぜならば、誰でもその衣を洗って白くしなかったなら決して救われなからである。人の衣は、私たちの先祖が予言をしたように、その民をその各々

アルマ5,21-1,各々の罪から贖うために降臨したもう御方の血によって、その汚れが全く洗い去られるまで清められなくてはならない。

アルマ5,22,それであるから、わが兄弟諸君よ。あなたたちの中で血と種々の汚れで不潔になった衣を着たまま神の法定に立つ者があるとするならば、その人はどんな心持がするであろう。ごらん、その血と汚れとはその人に対してどんな証言をすることであろう。

アルマ5,23,その血と汚れとは、人を殺しあらゆる罪惡を犯したであることを証言するのではなからうか。

アルマ5,24,あなたたちはこのような汚れた人が1点のしみもなく現われた真白な清い衣を着ているアブラハム、イサク、ヤコブそのほかすべての聖い予言者と共に神の王国に坐る所が得られると思うか。

アルマ5,25,いやいや、このように坐る所は決して得られない。もし私たちの造り主を始めから偽りを言う者であると、またそのような者であると思うのでなければ、このような汚れた人々が天の王国に居れるとは思えない。かえって、このような人々は惡魔の国の子らであるから

アルマ5,25-1,天の王国から追い出されるのである。

アルマ5,26,私の兄弟諸君よ、あなたたちにもしも心を改めたことと、贖いを与える愛を讚美する唱いたいと思ったことがあるならば、今もそう思えるか私はたずねたい、

アルマ5,27,あなたたちはいつも神の御前に罪を犯さずに居ったか。あなたたちがもしも今にも死ぬとするならば、心の中に‘私は充分へりくだっている’と言い、また民の罪を贖うために降臨したもうキリストの血で洗われて白くなっている’といえるであろうか。

アルマ5,28,ごらん、あなたたちは高慢な心をすっかり取り去ったか。もしも取り去っていないならば、神に逢う用意はまだできていない。天国はすでに近づくている。もしも用意ができていないならば永遠の生命は得られない。それであるから、早く用意をしなくてはならない。

アルマ5,29,あなたたちの中にはまだねたみ心をすっかり取り去らない者がいるか。このような人はまだ用意ができていない。用意のできていない人は無罪にはされない。天国は近いけれどもその来る時刻が知れていないから、用意のできていない人は早く用意をしてもらいたい。

アルマ5,30,またあなたたちの中に兄弟を侮りこれを苦しめる者があるか。

アルマ5,31,このような人は禍である。なぜならばこのような人も用意がしてない者であって、悔い改めなければ救われない時がすでに近づいているからである。

アルマ5,32,それであるから、罪惡を行うすべての人たちは禍である。悔い改めよ、悔い改めよ。主なる神はこのように仰せになる。

アルマ5,33,ごらん、神はすべての人を招いて憐みに満ちた手をかれらの方へ伸し‘悔い改めよ、さらばわれ汝らを受けん’と仰せになる。

アルマ5,34,また主は言いたもう‘われに來れ、さらば生命の木の實を食い、無料にて自由に生命のパンを食い生命の水を飲むことを得ん。

アルマ5,35,われに来て義を行え、さらば切られて火に投げ入れらるることなし。

アルマ5,36,良き実を結ばざる者、義を行わざる者がみな泣き悲しむべき時はすでに近し'と

アルマ5,37,ああ罪惡を犯す人たちよ、浮世の無益な物を誇る人たちよ、義の満ちを知っていると人の前で言いながら、羊飼がこれまでも呼び現にまた呼んで居たものにその御声に耳を傾けず、あたかも羊飼のない羊のように迷っている者よ。

アルマ5,38,良い羊飼は今もあなたたちを呼んで招き、しかも自分の名であなたたちを呼んで居りたもう。その御名はすなわちキリストである。しかるにあなたたちがもしもこの良い羊飼の声に耳を傾けず、またあなたたちがもしもこの良い羊飼の声に耳を傾けず、またあなたたちを

アルマ5,38-1,呼びたもう御名に耳を傾けないならば、あなたたちはこの良い羊飼の羊ではない。

アルマ5,39,もしもこの良い羊飼の羊でないならば、あなたたちは何の群に属するか。ごらん、悪魔はすなわでいあなたたちの羊飼であって、あなたたちは悪魔の羊の群の中に居るのである。そうでないと言える者は誰もいない。そうでないと言う者はうそつきであって悪魔の子である

アルマ5,40,何となれば善はみな神から出るけれども悪はみな悪魔から出るからである。

アルマ5,41,それであるから、人がもしも良い行いをするならば、その人は良い羊飼の声を来いてこれに従うのであるが、悪い行いをする者は悪魔の声を来いてこれに従うのであるから悪魔の子になるのである。

アルマ5,42,悪魔に従う者は悪魔から報いを受ける。その報いは義しいことに関する死であってすべて良い事について死んでしまっている有様になることである。

アルマ5,43,さて私の兄弟諸君よ、私は全心全力をこめて話し、またあなたたちが必ず間違いをしないようにはっきりと神の命令のままに話を下。どうか私の話を聞いてこれを守ってもらいたい。

アルマ5,44,私はキリスト・イエスにある神の神権を受けている者であるから、このように話をするのは私の務めである。私はまた将来起ることについて私たちの先祖が告げたこともこの民に証をせよと命令されている。

アルマ5,45,こればかりではない。あなたたちは私自身これらのことを知らない者であると思わないか。ごらん、私は自分がこれまでに話したことはみな本当であると自分で知っていることを証する。どのようにしてそれが確であることを知っているかと問うならば、

アルマ5,46,これは神の聖い__"みたま"が私に示したもうたのである。私は自分がこれを知るために長い間断食をして祈った。そこで主なる神がその聖い"みたま"によってこれを私に示したもうたので、私は自分でこれが真理であることを知っている。この聖い"みたま"とはすな

アルマ5,46-1,私の中にある啓示の"みたま"である。

アルマ5,47,また神は私たちの先祖が告げた言葉が本当であって、私の中にある予言の"みたま"にかなうものであることを私に啓示したもうた。この予言の"みたま"も神のみたま"によって示されたものである。

アルマ5,48,これから私は将来起るはずのことについてあなたたちに告げる。私はその告げることがみな本当であることを知っている。イエス・キリストは将来この世に来りたもう。これは神の生みたもう独子であって恩恵と憐れみと真理とに満ちたもう御方である。ごらん、世の人の

アルマ5,48-1,まことにその名を確く信ずる一切の人の罪を贖ってしまうために来りたもう御方はすなわちイエス・キリストである。私はこのことを知ってあなたたちに証を立てる。

アルマ5,49,さてあなたたちに言うが、年をとっていると若いとの差別なく、束縛されていると自由であるとを問わず、老年と中年と青年であるとを問わず、私の愛する兄弟諸君と全国に住む1人のこらず人に満ちを宣べ伝え、悔い改めて新に生まれなければならないと勧めるのは、

アルマ5,49-1,私の召されている神権に定められている務めである。

アルマ5,50,まことに"みたま"は勧めて言いたもう'世界の隅々に至すべての人々よ、悔い改めよ、悔い改めよ。天国は近くして神の御子、栄光、異性、莊嚴、能力、主権を備えて来りたまわんとすればなり'と。私の愛する兄弟諸君よ、"みたま"はまた言いたもう'全世界の王

アルマ5,50-1,王にして天の王なる者の栄光は、間もなく世の人々の中に輝かん'と。

アルマ5,51,この"みたま"は大きな声で私に呼ばれて言いたもう'起きて出でよ。しかしてこの民に"悔い改めよ、しからずば決して天の王国に住むこと能わず'"と告げよ'と。また言いたもう。

アルマ5,52,'見よ、斧はすでに木の根に置かれたり。故に善き実を結ばざる木はみな切れ、消すこと能わずいるまでも尽きざる火に投げ入れられん。これを覚りて記憶せよ。聖者これを言いたまいたればなり'と。

アルマ5,53,さて私の愛する兄弟諸君よ。あなたたちはこの言葉を拒むことができるか。この言葉を無視して聖者を足の下に踏みつけることができるか。その上、自分の心に誇り高ぶることができるか。やはり高価な衣で身を飾ることを改めず、浮世の無益な物と自分の富とに執着を

アルマ5,54,自分が他人よりもすぐれていると、どこまでも考えを改めないのか。またあなたたちの兄弟を迫害するのを改めないのか。ごらん、その兄弟たちとは謙遜な心を持ち、聖い神権が定めている道に従ってこの教会に入れら

れ、聖霊によって聖められ、悔改めにかなう行いを

アルマ5,54-1,をするものを言う。

アルマ5,55,私の兄弟たちよ、あなたたちはやはり貧しい者貧乏で困っている者たちに背を向けて、自分の持物を惜んで施さないことを改めないのか。

アルマ5,56,かたくなでその罪惡を改めない一切の者たちは、もし速に悔い改めないならばついに切られて火に投げ入れられるであろう。

アルマ5,57,今私はあなたたちに告げる。良い羊飼いの声に従いたいと思うすべての者よ、悪い者たちから去ってこれと別れかれらの不潔なものに接触してはならない。悪人の名は削りとられて義人の名と一しょに火事得られない。これは「悪人の名はわが民の名と並ぶべからず」。

アルマ5,58,義人の名は生命の書にのるべし。さればわれこれらにわが右において1つの嗣業を与えん」と言う神の言葉が成就するためである。さて私の兄弟諸君よ。あなたたちはこれに対して異議を唱えることがあるか。たとえ異議を唱えたとしても何であろう。神の言葉は必ず成

アルマ5,58-1,違いないからである。

アルマ5,59,多くの羊をもつとき、おおかみが入ってきて羊を食い殺さないようにこれを保護しない羊があなたたちの中にあるか。ごらん、もしもおおかみがどうかして羊の群に入ってくることがあれば、羊飼いは直ちにこれを追い払うのではないか。本当にその通り、最后にもしできる

アルマ5,59-1,おおかみを殺すにちがいない。

アルマ5,60,さて私はあなたたちに告げる。良い羊飼いは今やあなたたちを呼んで招いて居りたもう。あなたたちがもしその声に聞き従うならば、そのお方はあなたたちをその羊の群に加えたまい、あなたたちはその羊になるのである。そしてそのお方は、あなたたちに命じて汝らの亡

アルマ5,60-1,貧欲なおおかみを汝らの中に侵入させると言いたもう。

アルマ5,61,今私アルマもまた命令を私に下したもうたお方の言葉を借りて、私がすでにあなたたちに告げた言葉を守って行えとあなたたちに言う。

アルマ5,62,私はこれを命令として教会に属する人々に語り、また教会に入っていない人たちは、あなたたちも生命の木の実を共に食べることができるよう、教会へきてすでに悔い改めた証拠にバプテスマを受けよと言って、これらの人を導くのである”。

アルマ6,,アルマ書 第6章

アルマ6,*-*,ゼラヘムラ市に始まった改革運動、ギデオン市に及ぶ。

アルマ6,1,アルマはゼラヘムラ市に立てられた教会の会員に話し終ってから、教会を司どってこれを守護するため、神権に定まっている式法に従い按手札を施して祭司や長老たちを聖任した。

アルマ6,2,また教会に入っていなかった人々の中でその罪を悔い改めた人々の中でその悔い改めた人たちは、すでに悔い改めをした証拠にバプテスマを受けて教会に入れられた。

アルマ6,3,また教会員の中で自分の罪惡を悔い改めず神の御前にへりくだらない者、すなわち高慢の心がつのっている者はみな除かれてその名を義人の名の中から削りとられた。

アルマ6,4,このようにしてゼラヘムラ市の教会の神権の規定を確立し始めた。

アルマ6,5,私は、神の教えが誰にも惜しまずに与えられ、神の教えを集って聞く特権が、誰からも奪われなかったことを皆にわかめたい。

アルマ6,6,しかし神の子らは、まだ神を知らない者の身も霊ものためにたびたび集合し、一しょに断食して一心に祈るように命ぜられた。

アルマ6,7,アルマはこのように規定を定め終ってから、ゼラヘムラ市の教会に別れサイドン川の東にあるギデオンの谷へ赴いたが、ニーホルに剣で殺された人の名をとってギデオンと名づけたこの谷の中にギデオンと言う市があった。

アルマ6,8,アルマはこの市へ行って自分の先祖が告げたことが真実であることを示す啓示と、自分の中にある予言の“みたま”と、その民を贖うために降臨したもうはずである御子イエス・キリストにかかわる証詞と、自分が聖任された神権とによってギデオンの谷に立てられた教

アルマ6,8-1,教会に神の道を宣べ伝えた。ここに記すところは以上の通りである。アーメン。

アルマ7,,アルマ書 第7章

アルマ7,*-*,アルマがギデオンに住む民に宣べ伝えた言葉。これはアルマが自分で造った記録による。贖い主にかかわるアルマの証詞。アルマ、民の義しいことを賞める。

アルマ7,1,私の愛する兄弟諸君、私はあなたたちの所へくる折を得たので今口ずからあなたたちに話したいと思っている。私が今口ずから親しくあなたたちに話をするのはこれが始めてである。私はこれまでもつぱら裁判の職に従っていて多くの事件があったのでここへ来るのが

アルマ7,1-1,できなかった。

アルマ7,2,私がもしも裁判の職をほかの人にまかせて私の代りに治めさせ、また主の大きな恩恵を得てここに来ることを許されなかったならば、このたびも来ることができなかったであろう。

アルマ7,3,ごらん、私はあなたが神の御前にへりくだってその御恵みをたえず祈っていることと、あなたが神の御前にとがのない者になっていることと、またゼラヘムラにある私たちの兄弟らのように恐ろしい困った状態に居ないことを知りたいとひとえに望んでここへや

アルマ7,4,しかし、神はゼラヘムラに居る私たちの兄弟らがすでに神の義しい道に立ち帰って固くこの道を守っていることを私に知らせて、大いに私を喜ばせたもうたから、私は神の御名を讃美している。

アルマ7,5,私は私の中にある神の“みたま”によって、あなたがたのことに就いても喜ぶことを望んでいる。しかし、私はゼラヘムラに居る兄弟らのことについて感じたような大きな憂いと悲しみを再び感じてからあなたがたのために喜ぶようになりたくない。なぜならば、私は

アルマ7,5-1,私は大きな憂いと悲しみを踏みこえてから初めてゼラヘムラの兄弟たちのために喜んだからである。

アルマ7,6,しかしながらごらん、私はあなたがたがその兄弟たちのようにひどい不信仰な有様でないこと、高慢な心がつのっていないこと、富と浮世の無益な物に執着していないこと、間違った神を拝まないで生けるまことの神を拝むこと、また永遠になくならない信仰をもって将

アルマ7,6-1,将来起ることを信じながら、罪の赦しを得ることを待ち望んでいると信じている。

アルマ7,7,ごらん、将来起ることは大井けれども何よりも大切なことが1つある。ごらん、贖い主が生きた身でその民の中に来りたもう時が遠くない。

アルマ7,8,私は贖い主が死ぬはずの肉体を持って居たもう間に、この地にいる私たちの中に来りたもうとは予言しない。それは“みたま”がそうであると示したまわらないからである。私はこのことについて知ってははいないけれども、主なる神はその言いたもう一切のことを為す能力

アルマ7,8-1,備えて居たもうと言うことは確にこれを知っている。

アルマ7,9,ごらん“みたま”はこれだけを私に命じたもうた‘この国民に裂けんで’天国は近づきて、神の御子はいよいよ地上に降臨したまわんとすれば、悔い改めて主が降臨になる道の用意をなし、主の道をふみ行え、その道を真直ぐなり’と宣べよ’と。

アルマ7,10,神の御子は私たちの先祖の地であるエルサレムのあたりでマリヤから生れたもう。マリヤは神の能力に覆われ、聖霊のちからによって懐妊し、男の子すなわち神の御子である固を生むはずの処女であって、選ばれた貴い器である。

アルマ7,11,この男の子は世の中へ出て苦難とあらゆる誘惑である試みとを受けたもう。これは、この方が自分でその民の苦しみと病いとを引き受けると言いたもう言葉が成就するためである。

アルマ7,12,ご御方はその民を縛る死の縄目を解くために甘んじて死を受けたまい、また肉体をもつ物として慈悲の心に富みたまい、虚弱の度に応じてその民を救う方法を知るために民と同じく虚弱を受けたもう。

アルマ7,13,“みたま”はすべてのことを知れたもうが、それでも神の御子はその民の罪を負い、自分が贖う力によって民のとがやまちを取り消すために肉体に苦痛を受けたもう。これは私が心から証をすることである。

アルマ7,14,今私はあなたがたに言う。あなたがたは悔い改めて新に生れなくてはならない。それは“みたま”が‘汝らもし新に生れずば天の王国に住む能わず’と仰せになるからである。それであるから、出て来てすでに悔い改めた証拠にバプテスマを受け、自分の罪を現われて神

アルマ7,14-1,神の子羊を信ぜよ。子羊は世の人の罪を贖う御方であって、人を救い人を一切の不義から清める大能のある御方である。

アルマ7,15,来れ、恐れずに来れ。容易に迫ってきてあなたがたを縛りそして亡ぼしてしまう一切の罪を捨てよ。来れ、そして進んで自分の罪を悔い改めることと、進んで神の命令を守る誓約を神と結ぶことをあなたがたの神に示し、今日バプテスマの水の中に入ってまことにこの

アルマ7,15-1,心があることを神に証明せよ。

アルマ7,16,誰であっても本当にこの通り行い、これからさき神の命令を守る者は、私の心の中に証をする聖い“みたま”の証詞によって‘あなたがたはこの後永遠の生命を受ける’と私が言ったことをあとから思い起すであろう。

アルマ7,17,私の愛する兄弟諸君よ、あなたがたは私の言うこれらのことを信ずるか。私は実際あなたがたがこれらのことを信ずることを知っている。私がこれを知っているわけは私の中にある“みたま”がこれを私に示したもうからである。あなたがたは私が宣べたことを深く信ず

アルマ7,17-1,非常に喜ばしい。

アルマ7,18,私はこの話の始めに、あなたがたがその兄弟たちのような恐ろしい困った状態に居ないことをひとえに望んでいると言ったが、今や私の望が遂げられたことを認めて大そう嬉しい。

アルマ7,19,私はあなたがたが義しい道を履み行い、神の王国へ行く道を歩み、現に神の道を直くしていることを認

めている。

アルマ7,20,私はまたあなたたちが神の御言葉の証詞によって神は決して曲った道を歩きたまわないことを知るようになっていることを認める。神はその御言葉を違えたまわず、右や左へ曲りたもう気色さえも見えず、また善から悪へ移りたもう気色さえも見えない。それであるから

アルマ7,20-1,神の履みたもう道は永遠に同じである。

アルマ7,21,また神は清くない宮に宿りたまわない。清くない者と汚れた者とは神の王国に入ることはできないから、清くない人がやはりそのまま清くない有様に止まる時がくる。これがすなわち終りの日である。

アルマ7,22,私の愛する兄弟諸君よ、私がこれらのことをあなたたちに話したのは、あなたたちに神に対して尽くさねばならぬ義務を思い起させ、神の御前にとがのない者とならせ、またあなたたちを神の教会へ入れた神の神権に定まっている神権の法に従わせるためである。

アルマ7,23,私はあなたたちが謙遜、従順、柔和であって、容易に勧告に従い、忍耐強くよく堪忍し、何事にもひかえ目であっていつも神の命令を熱心に守り、肉体の上にも霊の上にも必要なものを願い求め、何事を受けてもいつも神に感謝をすることを望んでいる。

アルマ7,24,信仰と希望と愛とを必ず固くもつように心がけよ、そうすればいつも善い行いを多くするにちがいない。

アルマ7,25,ねがわくは、あなたたちがアブラハム、イサク、ヤコブのほか世界始まって以来この善に出た言っ第の聖い予言者の衣のように自分の衣を潔白にして、ついにそのまま高くあげられ、この予言者たちと共に天の王国に席を得て再び天の王国を去らないよう、主があなたた

アルマ7,25-1,祝福してあなたたちの衣を潔白であるままに保たせたもうように祈り奉る。

アルマ7,26,さて私の愛する兄弟諸君よ、私は私の心の中に証をする“みたま”により、以上のことをあなたたちに話した。そしてあなたたちが非常に熱心に私の言葉を聞いてくれたから私は心に非常に嬉しく思っている。

アルマ7,27,ねがわくば、あなたたちの信仰と善い行いとによって、あなたたちならびにその土地、家屋、いろいろの家畜の群、一切の持物も女も子供も、今からとこしえにいたるまで神の平和を受けんことを祈り奉る。私の話したことは以上の通りである。アーメン”。

アルマ8,,アルマ書 第8章

アルマ8,*-*,アルマ、ミレクの地で成功する。アモナイハ市の民、アルマを追いつく。天使に慰められてアルマ帰る。アミュレク、アルマに加わって神の道を宣べ伝える。大いなる能力を与えられる。

アルマ8,1,さて、アルマは今ここに掛けない多くのことをギデオンの人々に教え、前にゼラヘムラの教会で神権の規定を確立したようにギデオンの教会でも神権の規定を確立してからそこを去り、働きを休もうとしてゼラヘムラにある自分の家へ帰った。

アルマ8,2,これでニーファイの民を治める判事治世の9年目は暮れた。

アルマ8,3,判事治世の10年目の始めごろ、アルマはゼラヘムラを出立してサイドン川の西にあって西方の荒野と境するミレクの地へ旅をした。

アルマ8,4,やがてアルマは自分が聖任された神の神権の神権によりミレクの全地の民に教えを伝え始めた。

アルマ8,5,すると、荒野に近い土地の四方の榮えに住む人々がアルマのところへやってきて、ついにその地のいたるところへやってきて、ついにその地のいたるところで人々はバプテスマを受けた。

アルマ8,6,さてアルマはミレクでその務めを果たしたので、そこを去って3日の間北の方へ旅をし、アモナイハと言う都市へ着いた。

アルマ8,7,ニーファイの民はその土地にも都市にもまだ大小の村々にも、最初にここに住んだ人の名をつける風習であったが、アモナイハの地の名も同様であった。

アルマ8,8,アルマはアモナイハ死に着くとすぐ神の道をそこの住民に宣べ伝え始めた。

アルマ8,9,しかし、サタンはすでにアモナイハ市に住む人々の心を固く捕えていたから、民はアルマの言葉に耳を傾けようとはしなかった。

アルマ8,10,それでもアルマは精神をはげまして一生けんめい神に祈り、この市に住む人々に“みたま”を注ぎたもうようにねがい、また自分がこの人々に悔改めをさせてその証拠にバプテスマの施すことができるようにおねがいをした。

アルマ8,11,ところが、それでも民はそのところをかたくなにして“われわれは汝がアルマであることを知っている。また汝が自分のもっている言伝えによって、国内の所々に立てた教会の大祭司であることも知っている。われわれは汝の教会とは何ら関係がないから、そのような愚

アルマ8,11-1,言伝えは信じない。

アルマ8,12,われわれは汝の教会に属していないから、汝はわれわれを司どる権利はない。これもわれわれは知っている。その上汝はすでに裁判の職をニーファイハにゆずってしまったから、われわれの大祭司でもない”と言った。

アルマ8,13,アモナイハ市の人々はこのように言ってアルマの言うことを何にも聞かず、アルマをののしり、アルマに唾を吐きかけ、ついにアルマを市外へ追い出したから、アルマはそこを立ち去ってアロンと言う市の方へ向って旅をした。

アルマ8,14,そしてアロンを然して旅をしている間、アルマはアモナイハ市の民が犯した罪悪のために悲しみ嘆き、その心は痛み苦しんだが、このように悲しみ嘆いている時に主の使がアルマに現われて、

アルマ8,15,"アルマよ、汝はさいわいである。頭を高くあげて喜べ。汝は喜ぶ充分の理由がある。なぜならば、汝は始めて神の戒めを受けてからこのかた、忠実にその命令を守っているからである。見よ、われは汝が始めて受けて神の戒めを汝に伝えた使である。

アルマ8,16,われは汝にアモナイハ市へ帰ってまたその民に教えを説けと命ずるためにつかわされた。まことに善く道を民に説き聞かせ、悔い改めざるときは主なる神汝らを亡ぼしたもう'と告げよ。

アルマ8,17,見よ、かれらは今汝の民の自由を奪おうと考えている。これは本当に主がその民に下したもうた国法と裁判と命令とにそむくのである(主がこのように言いたもう)"と。

アルマ8,18,アルマは主の使からこの命令を受けると、急いでアモナイハの地へ帰ったが、このたびは最初とちがった道、すなわちアモナイハ市の南にある道から市内へ入って行った。

アルマ8,19,アルマは市内へ入ったときに飢えていたからある人に"私はつまらないものであるが、神の僕であるから何か食べ物をもらえないか'と言った。

アルマ8,20,するとその男は'私はニーファイ人であって汝が神の聖い予言者であることを知っている。なぜなら示現の中で天使が迎えて接待せよ'とお言いになった人はほかでもない汝であるからである。一しよに私の家へ入れ。

私は食べ物をわける。私は汝が、私と私の家族と

アルマ8,20-1,祝福になることを知っている"と言って、

アルマ8,21,この男はアルマを自分の家へ迎え入れた。これはその名をアミュレクと言う者であったが、かれはパンと肉とを出してアルマの前に置いたから、

アルマ8,22,アルマは充分にパンを食し、アミュレクとその家族とを祝福して神に感謝を捧げた。

アルマ8,23,アルマは充分に食べてからアミュレクに"私はアルマと言って全国に於ける神の教会の大祭司である。

アルマ8,24,ごらん、私は啓示と予言の"みたま"によって全国の民の間に神の道を宣べ伝える職に召されている。そして前にも1度ここへ来たが人々が私を歓迎しないで追い出したから、この土地へ背を向けてもう3度と来ないときめようとした。

アルマ8,25,ところが、また戻ってきてこの民に予言をし、その罪悪を責める証詞を立てよと命令をされた。

アルマ8,26,さて、アミュレクよ、汝は私に食を与え、私に宿をしてくれたから祝福を受ける。私は長居間断食をして飢えていた"と。

アルマ8,27,それからアルマは市民に教えを説き始めるまでアミュレクの家にしばらく滞在をした。

アルマ8,28,そして市民の罪悪は次第に増長したが、

アルマ8,29,とうとう神の言葉がアルマに下った"行け。しかしわが僕なるアミュレクにも次の如く命ぜよ。すなわち'出でてこの民に予言して言え、"悔い改めよ、そは主がもし悔い改めずばわれは怒りをこの民に及ぼし決してわが烈しき怒りを解かざらん'と宣いたればなり

アルマ8,29-1,言いたもう'"と。

アルマ8,30,それでアルマとアミュレクとは、神の御言葉を民に宣べ伝えるために民の間に出て行ったが、この2人は聖霊に満たされていた。

アルマ8,31,そしてこの2人は誰もこれを牢屋に閉じこめることもできず、また殺すこともできないほどの力を受けていた。それでもこの2人は縄目をうけて牢屋に入れられるまではその能力を用いなかった。なぜならば、主はこの2人によって主の力を現そうとしたもうたからであ

アルマ8,32,さてアルマとアミュレクとは主にたまわった"みたま"と力とを以て、出て行って民に教えを説き予言をし始めた。

アルマ9,*-*,アルマとアミュレクとがアモナイハの地の住民に宣べ伝えた言葉。この2人は牢屋に入れられたが、自分たちの中にある神の奇跡的な力で救われる。以上アルマの記録による。第9章より第14章まで。

アルマ9,,アルマ書 第9章

アルマ9,*-*,アルマ、アモナイハの民に教えを宣べ伝えて悔改めを叫ぶ。民、アルマの証を拒む。

アルマ9,1,再び話をすると、私アルマはアミュレクをつれて出てもう1度アモナイハの住民に教えを宣べ伝えよと神に命を受けたので、住民に教えを宣べ伝え始めたところ、その人たちが私と争って、

アルマ9,2,"汝は誰だ。ここに1人だけの男が大地は消えてなくなるとわれわれに解いても、われわれがその1人の証を信ずると思うか"と言った。

アルマ9,3,この人たちは大地が確に消えてなくなること知らなかったの、自分の言ったことが本当にそうなること

がわからなかった。

アルマ9,4,またこの人たちは”もし汝が、この大きな都会が1日の中に滅びると予言をしても、われわれは汝の言葉を信じない”と言った。

アルマ9,5,かれらはこう言ったが、心がかたくなで強情な民であったから、神にこのような驚嘆すべき業をする力があることを知らなかった。

アルマ9,6,そこでまた”神は何者であって、このように驚嘆すべき大業が真実行われることを民に証するために、ただ1人の証言のほかにもっと拠り所のあるものを与えないのか”と言った。

アルマ9,7,そしてかれらは進んできて私たちを捕らえようとしたが、本当に捕えはしなかった。そこで私はかれらに話そうとして大胆に立ち上り、勇気をふるって証をして言った。

アルマ9,8,”不道徳でよしまな拠の人たちよ。あなたたちはまことに先祖からの言伝えを忘れ、またいかにも早く神の命令を忘れた。

アルマ9,9,あなたたちは、私たちの先祖のリーハイが神の御手によってエルサレムから導き出されたことを覚えていないか。また先祖たちがみな神に導かれて荒野を過ぎて言ったことを覚えていないか。

アルマ9,10,またあなたたちは、神が幾度も私たちの先祖を敵の手から救だし、または兄弟たちの手にかかっても殺されないように守って下さったことを忘れたか。

アルマ9,11,ごらん、もしも神のたぐいがない力と神の私たちに対する憐みと堪忍とがなかったならば、私たちは必ずはるか以前にすでに地の面から亡ぼされて、おそらく永遠に不幸なみじめな境涯に置かれていたであろう。

アルマ9,12,今、私はあなたたちに言う。神はあなたたちに悔い改めよと命じて居たもう。それであるから、あなたたちが悔い改めないならば決して神の王国に住むことはできない。そればかりでなく、神は悔い改めよとあなたたちに命令したもうたのであるから、もしこの命令に

アルマ9,12-1,従わないと、神はあなたたちをすっかり地の面から亡ぼしてしまいたもう。と言うのは、すなわち神はその怒りをあなたたちに及ぼし、決してその激しい怒りを去りたまわない。

アルマ9,13,あなたたちは、神がリーハイに’わが命令に従わば汝はこの地に栄ゆべし’と言いたもうたのを憶えているか。また神は’わが命令を守らずば汝は主の御前より追い払わるべし’と言いたもうた。

アルマ9,14,レーマン人は神の命令を守らなかったから、すでに主の御前から追い払われた。あなたたちはこれを覚えてほしい。これによっても主の御言葉が本当に実現して、レーマン人がこの国で罪惡を犯し始めて以来、主の御前から追い払われたことは明らかである。

アルマ9,15,そうではあるが、ごらん、もしもあなたたちが相かわらず罪を犯すならば、裁判の日になってレーマン人の受ける裁きはあなたたちが受ける裁きよりも軽いであろう。またあなたたちが悔い改めないならば、この世にいる内にさえもレーマン人の受ける裁きはあなたたち

アルマ9,15-1,少いであろう。

アルマ9,16,なぜならばレーマン人には多くの約束が与えられたからである。そもそも、レーマン人を長い間無知の状態に居させたのはその先祖の言伝えであるから、主はかれらを憐んでこの地に居る期間を伸したもう。

アルマ9,17,そしてレーマン人は、その中に主の道を信じその先祖の言伝えが義しくないことを知る。また主はその御名を呼び頼む一切のレーマン人を憐みたもうから、多くのレーマン人が救われる。

アルマ9,18,しかしごらん、私はあなたたちに言う。あなたたちがもしも相かわらず罪惡を犯すならば、この地に居る期間は伸ばされないであろう。それはレーマン人があなたたちを亡ぼすためにつかわされるからである。もしあなたたちが悔い改めないならば、レーマン人はあなた

アルマ9,18-1,不意を襲ってあなたたちはこれがために全く亡ぼされるであろう。これは主の恐ろしい激しい怒りによって起ることである。

アルマ9,19,あなたたちが罪惡をつづけて神の民を亡ぼすことは主が許したまわないことである。まことにその通りである。もしもニーファイの民と呼ぶこの民がその神である主から非常に多くの理解と知識とを受けた後、どうにかして罪惡におぼれるようなことがあるならば、主が

アルマ9,19-1,主がニーファイの民をみな亡ぼしてしまうことをレーマン人に許したもうのはかえって主のみこころにかなう。

アルマ9,20,誠にニーファイの民は主から厚い恩恵を受けた民でほかのあらゆる国民、あらゆる血族、あらゆる国語の民、あらゆる人々よりもすぐれて恵まれ、その願いと信仰と祈りとにに応じてすべて過去現在未来のことを示され、

アルマ9,21,神の”みたま”を受けて感じ、直接に天使と語り、主の御声で御告げ、予言の”みたま”と啓示の”みたま”と、そのほか異った言語を話す能力、説教する能力、聖靈を受ける能力、翻訳をする能力などの多くの賜物を受け、

アルマ9,22,主の御手によって神にエルサレムの地から導き出され、飢饉といろいろの病気から救われ、戦うときには滅びないように強くされ、幾度も奴隷の境涯から救だされて今日まで保護せられ、富み栄えていろいろな財に富

むようになった。

アルマ9,23,このように数多く豊かな恩恵を主の御手から受けたこの民が、もしもすでに受けた理解と知識とにそむいてとがあやまちを犯し、罪惡の淵に陥るならば、レーマン人はかえってこの民よりもはるかに軽い裁きを受けるであろう。

アルマ9,24,なぜならば、主の約束はレーマン人に及ぶけれども、あなたたちがもしも罪を犯すならば主の約束はあなたたちには及ばない。あなたたちがもしも主にそむいたならば地の面からまったく亡ぼされてしまうことは、主が明らかに誓って固く定めたもうたことではないか。

アルマ9,25,しかし、あなたたちが亡ぼされないよう、主はその民の中の多くの者の使をつかわして、その使たちが出て行って大いにその民に叫び次のように言えと命じたもうた'悔い改めよ、天国はすでに近ければなり。

アルマ9,26,この後、日ならずして神の御子はその栄光をそなえて降りたまわん。その栄光とは恩恵、公平、真理、忍耐、憐み、肝要に富ませたまひ、すみやかにその民の嘆願をききとどけ、その祈りに答えたもうイエス・キリストすなわち御父の生みたまえる独子の栄光なり。

アルマ9,27,神の御子が降臨したもうは、その御名を信じてすでに悔い改めたる証拠にバプテスマを受くるすべての者を贖い救わんがためなり。

アルマ9,28,されば、汝ら主の道を備えよ。万の民がその行いの善し悪しに応じて報いを受くべき時節はすでに近し。行いの義しき者はイエス・キリストの権能と贖う力によりて身も霊も救わるるを得、行いの悪しき者は惡魔の力と束縛とに負け身も霊も永遠に神の前より断ち切らる

アルマ9,28-1,受く'と。

アルマ9,29,ごらん、これは民に呼ばわる天使の声である。

アルマ9,30,それであるから、私の愛する兄弟諸君よ、あなたたちはまことに私の兄弟であるから、私が愛さなくてはならない人たちである。しかし、あなたたちは神の道に対してその心を甚かたくなにして墮落して神の前から追い出された民であるから、本当に悔改めにかなう行い

アルマ9,30-1,しなくてはならない'と。

アルマ9,31,私アルマがこのように話したところが、アモナイハの市民は私に腹を立てた。それは私が市民を然して心がからくんで強情な人たちであると言ったからである。

アルマ9,32,また私が市民を墮落して神の前から追い出された民であると言ったので、市民は怒って私を牢屋に入れるために捕らえようとした。

アルマ9,33,しかし、主はかれらが今私を捕えて牢屋に入れることをお許しにならなかった。

アルマ9,34,さてアミュレクも出て行って立ち、アモナイハ市民に説教をしたが、ここにはその言葉を全部書き誌さず、ただその1部だけを誌す。

アルマ10,,アルマ書 第10章

アルマ10,*-*,アミュレクの血筋。リーハイはヨセフの子マナセの裔。アミュレク自身の改宗を語る。アミュレクの証詞。あみゆれく腹黒い判事と法律業者とを避難する。ゼズロム。

アルマ10,1,アミュレクがアモナイハに住む人々に述べた言葉は次の通りである。

アルマ10,2,"私はアミュレクと言ってギドーナの子である。ギドーナはまたアミナダイの裔のイシメル子である。このアミナダイは、神がその指で神殿の壁に書きたもうた文字を解いたアミナダイであって、

アルマ10,3,エルサレムの地から出てきたリーハイの子であるニーファイの裔である。リーハイはマナセの裔、マナセはヨセフの子であって、ヨセフは兄弟たちのためにエジプトへ売られた。

アルマ10,4,亜他紙も、私を知っている人々の間では少からぬ名譽ある者であって、親戚友だちが多くまた自ら勉めはげんで大きな富を得た。

アルマ10,5,さりながら、私は主の道と奥義と驚嘆すべき能力とについては、まだ多くのことを知っていない。しかし実は私が今これらのことを多く知っていないと言ったのは間違いである。なぜならば、私はこの民の命を護りたもう所に現われている主の奥義と驚嘆すべき能力とを

アルマ10,5-1,見たことがあるからである。

アルマ10,6,ところが私は心をかたくなにしてたびたび呼ばれても聞き従おうとしなかった。それであるから、これらのことが確にあることを知りながら、これらについて知りたがらなかった。従って、私は悪い心を持ったまま神にそむき、判事治世の10年目の7月、すなわち今月

アルマ10,6-1,4日までもそうであった。

アルマ10,7,このようにして私がごく縁の近い親戚を訪ねようとして出て行く途中、主の使が私に現われて言いたもうた'アミュレクよ、汝は主の予言者に食物を与えなくてはならないから自分の家へ帰れ。その予言者は神の選びたもうた聖い人である。この人はこの民の罪惡のた

アルマ10,7-1,長い間斷食をして今飢えている。故に、汝はこの人を迎えて汝の家に宿らせ食を与えよ。さらばこの

人は汝と汝の家族とを祝福し、これによって主の恵みは汝と汝の家族の上にとどまるであろう」と。

アルマ10,8,それで、私は天使の命に従って家の法へ帰ってくると、その途中で天使が‘迎えて家に宿らせよ’と仰せになったお方に逢った。ごらん、これが神のことについて今まであなたたちに話しておいでになったこの方である。

アルマ10,9,天使は私に‘この人は聖い人である’と仰せになったから、私はこの方が聖い人であることを知っている。それは、神の使がそう仰せになったからである。

アルマ10,10,私はまたこの方が証をしたことが真実であることを知っている。それは、この方アルマが私の家に宿って居られたときに、主が使をつかわしたもうてこれらのことを私に顕わしたもうたからである。主の使が私のところに来たもうたことは、主が生きてましますように

アルマ10,10-1,確である。

アルマ10,11,ごらん、この方は私と一家中の女と子供と父とそのほか親族などあらゆる私の一族を祝福したから、その言葉の通り私たちは恵みを受けた”と。

アルマ10,12,さてアミュレクがこのように話をしたとき、民は自分たちが訴えられた原因となる事実について証言をする者が1人ばかりでないのを見て、またこれらの証人はみなかれらと共にある予言の”みたま”によって将来起ることも証言するのを見て驚いた。

アルマ10,13,しかし、この民の中にはアルマとアミュレクに問いかけようと考えた者があった。これらの者はその狡猾な謀ごとによって、2人の言葉じりを取ってこれを訴える口実を造り、2人を判事たちにわたして法律上の裁判を受けさせ、2人を訴えて証明する罪の重い軽いに従

アルマ10,13-1,従ってこれを殺すかまたは牢屋へ入れさせようと計画した。

アルマ10,14,このように2人を亡ぼそうと計画した者たちは法律業者であって、判事たちの前で民の罪を審問するときに法律を扱うために民に雇われ、または委任を受ける者たちであった。

アルマ10,15,この法律業者たちはその職業を巧みに行うために、民の間に行われる悪い謀ごとや企を深く知っていた。

アルマ10,16,さてかれらはアミュレクに質問をかけて、それで前後不揃いのことを言わせようとした。

アルマ10,17,しかしかれらはアミュレクのためにその企を覚られたことを少しも知らなかった。それで、かれらがアミュレクに問いかけた時にアミュレクはその内心を見抜いて次のように答えた。”悪いことを行うよこしまな世の人々よ。

お前たち法律業者のともがらよ。偽善者のと

アルマ10,17-1,お前たちは悪魔の基をすえ、神の聖い者たちを捕えるために謀ごとをしてわなをかけ、

アルマ10,18,義しい人の道を曲げようと企て、この民を全滅させるまで自分の頭に神の怒りを招こうとしている。

アルマ10,19,われわれの最後の王のモーサヤが位をゆずろうとしたがその位を受ける者がなかったので、王の位を廃して民の投票によって政事を行わせようとしたとき、布告を出してこの民の大半がもしも悪を選びまたは罪悪におぼれる時がくるならば、それは民の滅亡する時である

アルマ10,19-1,言ったが、それは本当に旨いこと言っている。

アルマ10,20,主がお前たちの悪事をさばき、その使たちの言葉を借りてこの民に‘天国は近ければ悔い改めよ’とのたもうのはまことに至言である。

アルマ10,21,また主の使たちの声によって‘われは公平と正義とをてにたずさえてわが民の間に降らん’と宣うたのもまた至言である。

アルマ10,22,もしもこの地に住む義人たちの祈りがなかったならば、お前たちはすでに全く亡ぼされていたことであろう。しかし、それはノアの時代の人々のように洪水で亡ぼされるのではなくて、飢饉と疫病と剣によって亡ぼされるのである。

アルマ10,23,見よ、お前たちの救われるのは義人たちの祈りによる。それであるから、もしお前たちが義人を追い払うならば、主はその御手をひかえたまわず激しく怒りながら来てお前たちを責めたもう。その時お前たちは飢饉と疫病とに苦しみ剣に悩まされるにちがいない。もし悔

アルマ10,23-1,悔い改めなかったならばこの時がすぐやってくる”と。

アルマ10,24,これを来いてアモナイハ死の民はいよいよアミュレクに腹を立て、大声を出して”この者はわれわれの正しい法律とわれわれの選んだ賢い法律業者とをのしる”と言った。

アルマ10,25,しかしアミュレクはその手をひろげいよいよ力をふるって民によばわって”悪い行いをするよこしまな世の人々よ、サタンがこのようにあなたたちの心を支配するのはなぜであるか。サタンはあなたたちをいざなってその目を暗まし聞く言葉の真意を悟らせないようにす

アルマ10,25-1,あなたたちがこのようにサタンに負けるのはなぜであるか。

アルマ10,26,ごらん、私はこれまでにあなたたちの法律に反対する証を立てたことがあるか。あなたたちは間違っている。あなたたちは私を訴えて法律に反対する証を述べたと言うけれども、私は1度もそうしたことはなくかえってその法律に賛成をして話しあなたたちに罪があると

アルマ10,27,「ごらん私はあなたたちに言う。あなたたちの法律業者と判事たちの不正によって今この民が亡びる基ができて始めている」と。

アルマ10,28,「アミュレクがこのように言うと、人々はかれを訴えて“今やわれわれはこの者が悪魔の子であることを知っている。かれはわれわれに偽を言っている。見よ、かれはわれわれの法律に反対することを言ったが今は自分で反対したことはないと言っている。”

アルマ10,29,「その上、かれはわれわれの法律業者と判事たちとをののしった”などと言った。

アルマ10,30,「しかし民にアミュレクをこのように訴えさせたのは法律業者たちであった。

アルマ10,31,「この法律業者たちの中にゼーズロムと言う人があった。その仲間の中では技倆が1番すぐれていて人民から多くの依頼を受けていたが、かれはアルマとアミュレクを最も力をつくして訴えた。

アルマ10,32,「しかしこの法律業者たちの目的は利益を得るのが目的であったから、民に頼まれてその利益を得たのである。

アルマ11,,アルマ書 第11章

アルマ11,*-*,「判事とその俸給。ニーファイ人の貨幣と度量法。ゼーズロム、アミュレクに言い破られる。

アルマ11,1,「モーサヤ王の立てた国法には、判事たる者も判事の職に任ぜられる一切の者も、その前に引き出される人を裁くに費す時間に応じて俸給を受けるものとすると定めてあった。

アルマ11,2,「もしもある人が他人に借金をしてこれを帰さないならば、判事に訴えられる。すると判事はその権力を用いて下役をつかわし、この人を自分の前につれてこさせ、国法とその人に対する証拠とによって裁判をし、その結果強制力を以て借金を支払わせる。それでも借金を

アルマ11,2-1,「返さないとその持物を取り上げ、または盗賊として民の中から放逐した。

アルマ11,3,「判事はその時間の長短によって俸給を受けたが、その額は1日毎に金1セナイン、または銀1セヌムは銀1セナインに相当していた。立てられた国法にはこのように定めてあった。

アルマ11,4,「ニーファイ人の用いた金銀の貨幣の名をその価格の順番にあげると次のようである。これはニーファイ人のつけた名であって、ニーファイ人はエルサレムに居たユダヤ人の使った計算法と升目とは用いなかった。判事治世の時になるまでは、民の意見と事情とに応じて時

アルマ11,4-1,「計算の仕方と升目とを変えたが、モーサヤ王の時に王がこれを一定にした。

アルマ11,5,「すなわち金貨にはセナイン、セオン、シャム、リンムナがあり、

アルマ11,6,「銀貨にはセヌム、アムノル、イーゾロム、オンタイがあり、

アルマ11,7,「銀1セヌムは金1セナインに当り、どれも大麦1升または各種の穀物1升に替わる。

アルマ11,8,「金1セオンは2セナイン、

アルマ11,9,「金1シャムは2セオン、

アルマ11,10,「金1リンムナは1シャムと1セオンと1セナインとを合せた価に当る。

アルマ11,11,「また銀1アムノルは2セヌム、

アルマ11,12,「銀1イーゾロムは4セヌム、

アルマ11,13,「銀1オンタイは1イーゾロムと1アムノルと1セヌムとを合せた価に当る。

アルマ11,14,「また計算に使う価の低い貨幣は次のようである。

アルマ11,15,「1シブロンは半セヌムであって大麦半升に替わる。

アルマ11,16,「1シブルムは半シブロン、

アルマ11,17,「1リーアは半シブルムに当る。

アルマ11,18,「小貨幣の計算法は以上の通りである。

アルマ11,19,「また金1アンテオンは3シブロンと同じ価であった。

アルマ11,20,「さて判事たちは事件を裁くに費す時間に応じてその俸給を受けたから、自分の裁判をする事件の数を多くし、また利益を得るために民をおだてて一揆を起させ、あらゆる騒ぎや悪事を行わせた。これは自分のところへくる訴状によって金銀をもうけようとするのであるか

アルマ11,20-1,「このたびも民をそそのかせてアルマとアミュレクに逆らわせたのである。

アルマ11,21,「さきに言ったゼーズロムはアミュレクに向って“お前はいま問いかけようとするわずかの質問に答えてくれるか”と言ったが、ゼーズロムは善を破ろうとするために悪魔のはかりごとで熟練している男であるから“お前は私の質問に答えてくれるか”と言ったのである。

アルマ11,22,「それに大使アミュレクは“もし答えることが私の中にある主の“みたま”にかなうならば答えるが、主の“みたま”にかなわないならば私は何にも答えない”と言った。するとゼーズロムはアミュレクを試みて“見よ、ここに銀6オンタイある。汝がもしも全能の神がな

アルマ11,22-1,「言うなら私はこれをみな汝にやろう”と言った。

アルマ11,23,ここに於てアミュレクは答えて“ああ地獄の子よ、なぜ私を試みるか。義人はこのような誘惑に従わないことを汝は知っているではないか。

アルマ11,24,汝は神がないと信じているか。いやいや、汝は神があることを知っている。しかし汝は神よりもそこにある金を愛している。

アルマ11,25,汝は今神の前で私に偽を言っている。汝は今私に‘この大枚の6オンタイを見よ。これを汝にやる’と言ったが、本当は始めから私に与えないと心にきめているのであって、ただ私に生ける真の神はないと言わせて私を亡ぼす口実を造ろうとするだけである。見よ、この

アルマ11,25-1,大きな罪のために汝はその報いを受けるであろう”と言った。

アルマ11,26,そこでゼズロムがまた“それならば、汝は生ける真の神があると言うのか”ときくと、

アルマ11,27,アミュレクは“さよう、生ける真の神はまします”と答えた。

アルマ11,28,そこでゼズロンが“神は1つよりも多いか”と問うと、アミュレクはそうではないと答えた。

アルマ11,29,アミュレクはそうではないと答えた。

アルマ11,30,またゼズロムが重ねて“それではどうしてそれらのことを知っているか”ときくと、

アルマ11,31,アミュレクは“天使が私に示した”と答えた。

アルマ11,32,またゼズロムが“降臨をするはずの者は誰か、神の子であるか”と聞くと、

アルマ11,33,アミュレクは“その通り、神の御子である”と答えた。

アルマ11,34,またゼズロムが“神の子はその民を罪があるままに救うのか”ときくと、アミュレクはこれに答えて“いや、その通りにはお救いにならない。自分が仰せになった誓約の言葉を違えたもうことはできぬからである”と言った。

アルマ11,35,ここに於てゼズロムは民に向って言った“諸君、この言葉を忘れたもうな。この男は神はただ1つであると信しながら、また神の子は降りたもうてもその民を救わないと言った。これは神に命令する権能をもっているかのような言葉ではないか”と。

アルマ11,36,さてアミュレクはまたゼズロムに答えて言った“ごらん汝は偽を言っている。私が神の御子はその民を罪があるがままにはお救いにならないと言ったから、汝は私が神に命令をする権能を握っているかのように言ったと言う。

アルマ11,37,私はもう1度汝に言う。神の御子はその民を罪のあるままに救いたもうことはできない。私は神が誓約で言いたもうた言葉を否定することはできない。神は不潔な者は天の王国に住むことができないと誓言をなされた。それであるから、もしも天の王国に住むことができ

アルマ11,37-1,できないならば、どうして救われることができるか。従って、あなたらは罪のあるままに救われることはできない”と。

アルマ11,38,そこでゼズロムはまたアミュレクに“神の御子は真の永遠の父であるか”と聞くと、

アルマ11,39,アミュレクはこれに答えて“さようである。神の御子は天地と天地の間にある万物との永遠の父である。神の御子は始めにしてまた終り、最も前にしてまた最も後である。

アルマ11,40,また神の御子はその民の罪を贖うためにこの世に降臨し、その名を信ずるすべての者の罪とがを追いたもう。このような人たちは永遠の生命を受ける者であって、そのほかには1人も救いを与えられない。

アルマ11,41,従って、悪人は神の子による罪の贖いがなかったと同じような有様であって、ただ1つ死の縄目だけは解かれるのである。ごらん、あらゆる人は皆死から復活して神の御前に立ち、それぞれの行いに応じて裁判を受ける日がくる。

アルマ11,42,世には肉体の死と名づける死があるが、キリストの死によって肉体の死の縄目が解かれあらゆる人がこの肉体の死から復活することができる。

アルマ11,43,ここに於て霊と体とは再び合して完全な形となり、手足も骨の関節も私たちが今持っている本来の形に返り、私たちが今持っているような知識を保ち、明らかに自分が持っている一切の罪を思いめぐらしてそのまま神の御前に引き出されるのである。

アルマ11,44,この復活はあらゆる人が全部受けるのであって、老若男女の区別なく悪人と善人とを問わず奴隷と自由人とのへだてなく、1すじの髪の毛さえも失われずに、総身の何れの部分もあたかも今の世にあるようになり、完全な形にかえるのである。それから後で、その行いの

アルマ11,44-1,応じて裁判を受けるため、1つの永遠の神会を成すお方、すなわち御子なるキリストと父なる聖霊との法廷に召される。

アルマ11,45,今私は肉体の死と肉体の復活とについてあなたたちに話したが、この死なくってはならない肉体は不死不滅の体となって死からよみがえる。すなわち、第1の死から復活して後に永遠の生命を受けるのである。それであるから、人はもう死ぬはずがない。人の霊は体と

アルマ11,45-1,いつまでも再び離れない。そしてこのように相合したものはみな霊性体となって不滅となり再び句秩

ことがないのである”と言った。

アルマ11,46,さてアミュレクがこのように話終るとアモナイハ死の民はまた驚きゼズロムもまたおののきはじめた。これでアミュレクの話したことは終った。私が誌したアミュレクの言葉はこれだけである。

アルマ12,,アルマ書 第12章

アルマ12,1,ゼズロム、アミュレクを亡ぼそうとして用いた偽りと詐欺とがすでにアミュレクに見現わされたことを知り、自分に罪があることを覚えておののきはじめた。ゼズロムはアミュレクの言葉に言い破られたのである。アルマはこの様子を見てゼズロムに話しかけて、ア

アルマ12,1-1,アミュレクの言葉を証明し、またアミュレクよりもさらに1歩進めてくわしく聖文を解き証、またアミュレクの話さなかったことまでも解き聞かせた。

アルマ12,2,アルマがゼズロムに言った言葉はその場に集っていた多くの者たちに聞えた。その子束は次の通りである。

アルマ12,3,“ゼズロム汝の偽と悪企はすでに見現わされた。汝は人に偽を言ったばかりか神にもまた偽を言った。見よ、神は汝が心に思っていることをみな知りたもう。神の“みたま”によってこれがすでに明らかになったことは汝がよく知っている。

アルマ12,4,私は汝の謀ごとが悪魔から見てもことに巧妙であって、偽をついてこの民を欺いて私たちに反対をさせ、私たちに侮らせ、私たちを追い払わせる利口な初段であることを知っている。これも汝がよく知っている。

アルマ12,5,これはすなわち汝の敵である悪魔の企てであって、悪魔はただ汝を道具に使って自分の力をたくましくしている。私は汝に告げることをまたこの地のすべての民にも告げる。ねがわくは汝がこのことを覚えていてほしい。

アルマ12,6,ごらん、私はあなたたち皆に言う。この謀ごとは悪魔のかけたわなであって、悪魔はこれをかけてこの民を捕え、そしてあなたたちを自分に従わせ、自分の鎖でもってあなたたちをとりかこみ、自分の束縛の力によってあなたたちを縛って永遠に亡ぼそうとしている”

アルマ12,7,アルマがこう言うときゼズロムはいよいよ甚しく恐れおののいた。なぜならば彼はますます神の能力を信じて、自分が心に思っていることも志していることもみなアルマとアミュレクに知られたことを認めたからである。アルマとアミュレクとは、予言の“みたまによ

アルマ12,7-1,このようなことを知る能力を受けたのである。

アルマ12,8,ここに於てゼズロムは、神の王国についてもっと多くのことを知ろうとして熱心にアルマとアミュレクに問いたずねた。ゼズロムはアルマに“アミュレクが死者の復活について語り、善人も悪人も人は皆死からよみがえって、それぞれの行いに応じて裁判を受けるた

アルマ12,8-1,神の御前に引き出されると言ったのはどう言うことであるか”と言った。

アルマ12,9,アルマはこのことをゼズロムに解き明かして“神の奥義を知ることは多くの人に許されている。しかしその人々は神が世の人に下さるほかに、何の教えも伝えてはならないと言う神のきびしい命令を受けている。神がその教えを世の人に許したもうのは、世の人が神

アルマ12,9-1,熱心と従順の度合いによる。

アルマ12,10,それであるから心をかたくなにする者は僅ばかり神の教えを賜わり、その心をかたくなにしない者は全く1つのこらず神の奥義が解るまで教えを賜わる。

アルマ12,11,心wかたくなにする者はただ僅な神の教えを賜うだけであるから、ついに神の奥義を知らぬ有様となる。それからこれらの人は悪魔に捕らえられて亡びるまで悪魔の意に従う。地獄の鎖とはすなわちこのことである。

アルマ12,12,アミュレクは死のことと、この死ななければならぬ状態から復活をして不死不滅の状態に移ることと、また人々が各々の行いに従って裁判を受けるために神の法廷魔ノ引き出されることとについてすでに明らかに述べている。

アルマ12,13,それであるからもしわれわれの心がからくなになり、胸の中に神の道がないほど道に大して強情を張ったとするならば、われわれは恐ろしい有様に陥るであろう。その時にわれわれは罪があるとされるからである。

アルマ12,14,われわれの言葉はわれわれを罪に定め、われわれの行いもまたみなわれわれを確に罪があるとす。われわれは潔白な者と認められず、思うことでさえもわれわれを罪に定める。このような恐ろしい有様では、われわれは思い切って自分の神を仰ぎ見ることができず、か

アルマ12,14-1,かえって神の前から隠れるために山や岩に向って自分の上に落ちてこいと命ずることができたならば好いと思うであろう。

アルマ12,15,しかしこのようなことができるはずはないから、われわれは仕方なく進み出て神が栄光、能力、威勢、莊嚴、主権をもちたもう御前に立ち、尽きながら神の裁判がすべて正義であることと、神の御業がすべて正統であることと、神が人間を憐みたまうことと、神にはその

アルマ12,15-1,信じて悔改めにかなう実を結ぶ人々を救いたもうすべての権能があることとを認めなくてはならない。

アルマ12,16,見よ、そのあとで死がまたやってくる。これは第2の死すなわち霊の死である。この第2の死の時はおよそ罪があるままに肉体の死を遂げた者が霊の死に逢わなくてはならぬ時である。すなわち義しいことから断ち切られた有様になる。

アルマ12,17,ここに於てこのような者たちが受ける苦しみは、とこしえに炎をあけて燃える硫黄の湖のようである。これはすなわちこれらの人々がサタンの能力と束縛とのために鎖にしばられてとこしえに亡びる時である。それはサタンがもはやこれらの人々を思いのままに従わせた

アルマ12,18,その時これらの人々はあたかも身代りによる罪の贖いがないと同じ様である。それは神の正義に照らして贖われることもできず、またもう朽ちることがないから死に失せることもできないからである”と。

アルマ12,19,アルマがこのように話し終るとアモナイバ市の人々はいよいよ驚いた。

アルマ12,20,ところがその高官の1人にアンテオナと言う人があったが、やってきてアルマに次のように問うた”汝が人は死からよみがえって、この死ななくてはならぬ状態から不死不滅の状態に移ると言う、またその”霊の結合体”はいつまでも死滅することができないと言ったの

アルマ12,20-1,言うことか。

アルマ12,21,神はわれわれの始祖がエデンの園に入って生命の木の実を食い、そして永久に生き永らえることのないように、天使たちと焔を吐く剣とはエデンの園の東の方に置きたもうたと言う聖文はどういうことが言っているか。もしもそうならば、われわれの始祖は決してとこし

アルマ12,21-1,生き永らえる途がないではないか”と。

アルマ12,22,アルマはこれに答えて言った”これは私が解き明そうとしていたことである。アルマが禁断の実を食べたために神の御言葉のように墮落をしたことは明らかである。またアダムが墮落のためにあらゆる人類も墮落して神の御前から追い出されている者となったことも明らか

アルマ12,23,その時もしもアダムが生命の木の実を食うことができたとしても、死と言うものがなくてそのために神の御言葉は空しくなり、神は偽りを言う者になったもうたであろう。なぜならば、神は’汝食わば、必ず死すべし’と誓いたもうたからである。

アルマ12,24,そしてアミュレクの話した肉体の死は、すでにすべての人々に及んでいる。しかしながら、人が悔改めをすることができるように猶予が与えられたから、この好の生涯は試しの時期となり、神に逢う用意をする時期となり、またわれわれが話す死者の復活の後にくる永遠

アルマ12,24-1,受ける用意をなすべき時期となった。

アルマ12,25,もしも世の始めから備えてある贖いの計画がなかったとするならば、死者の復活があるはずがない。しかしながら、前に証をした死者の復活を来す贖いの計画はすでに備えてあった。

アルマ12,26,見よ、もしもわれわれの始祖が出て行って生命の木の実を食うことさえできたならば、用意をすべき時期はなく、とこしえに不幸な状態のままに居て、贖いの計画は向日となり、神の御言葉は空しくなって成就しなかったであろう。

アルマ12,27,しかし、見よ実際はこうならなくて人類が死なねばならぬことと、死んでから行って裁判を受けねばならぬことが定められた。この裁判とはすなわちわれわれがすでに話した裁判であって終りの日である。

アルマ12,28,神はこれらのことが人類にくることをすでに定めたもうてから、人類の身にくるはずのこれらのことを、人類に知らせるのが必要であると認めたもうた。

アルマ12,29,それであるから、神は天使らをつかわして直接人々と話をさせたまい、天使たちは神の栄光を人々に示した。

アルマ12,30,人々はこれから後神に祈るようになった。従って神は人々と話し合って創世の前から備えてある贖いの計画を示したもうたが、これは人々の信仰と悔改めと清い行いとに依じて示された。

アルマ12,31,人はもはやこの世にかかわる最初の法令に背き、あたかも神々のように善悪を弁え、自分から思う存分に悪でも善でも行うようになった。本当はこのように行うことのできる自由がある境涯に置かれたのである。それであるから神は人類に新しい法令を与えたもうた。

アルマ12,32,すなわち、神は贖いの計画を示したもうてから、悪を行ってはならないと言う法令を人類に下したもうた。この法令に伴う罰は第2の死である。第2の死とは義しいことから永遠に断ち切られる有様となることを言う。このような死に逢う者は贖いの計画の能力を及ばな

アルマ12,32-1,それは神のもちたもう最高の徳に照らして正義の働きをさまたげることができないからである。

アルマ12,33,しかし神はその御子を通して人々に勧めたもうた(これがすなわちわっている贖いの計画である)。すなわち’汝らもし悔い改めてその心をかたくなにせず、われはわが生む独子によりて汝らを憐むべし。

アルマ12,34,よりて悔い改めてその心をかたくなにせざる者は、わが生む一人によりて罪の赦しを得ざる憐みを求むる権利を受く。かかる者はわが安息に入ることを得。

アルマ12,35,されど、およその心をかたくなにして罪惡を犯す者は、われは怒りてこれをわが安息に入らしむべから

ずと誓うと。

アルマ12,36,それであるから、わが兄弟らよ、あなたたちがもしもその心をかたくなにするならば主の安息に入ることができない。従ってあなたたちの罪悪が主を怒らせ、ちょうど人が最初神の怒りを招いた時のように、あなたたちも怒りを招く。これは最初神の怒りを招いた時に神

アルマ12,36-1,通りになったのみならず、また後に神の怒りを招く時にもそうなるのである。こうして、あなたたちの身も霊も永遠に亡びてしまう。従ってあなたたちは第1の死だけではなく第2の死も受ける。これは神の言葉通りである。

アルマ12,37,私の兄弟よ、私たちはこれらのことを悟り、それが本当であることを知っているから、私たちの神である主の下したもうた第2の法令に背いて神を怒らせ、その激しい憤りを招かないように悔改めをして心をかたくなにせず、主がその御言葉のように備えたもうた安息に入

アルマ12,37-1,入ろうではないか”と。

アルマ13,,アルマ書 第13章

アルマ13,*-*,アルマの説教つづく。神の御子の神権。大祭司たち。按手礼によって聖任をするわけ。メルケゼデクとアブラハム。

アルマ13,1,アルマはなお言葉をつづけて言った”さて、わが兄弟らよ。私は主なる神がこの法令をその子たちである世の人々に下したもうた時のことに、あなたたちの注意を向けたいと思う。主なる神はこの法令をその民に教えて伝えるために、人々を選んで按手礼によって神の聖な

アルマ13,1-1,祭司らに任命をなしたもうたが、神の聖なる神権はすなわち御子の神権と同じである。

アルマ13,2,この祭司たちは神の御子の神権に任ぜられたが、この任命の歯牙他は贖い救われるためにはどのように神の御子を待ち設けるかを、人々に知らせようとして定めた仕方である。あなたたちはよくこれを覚えていてほしい。

アルマ13,3,祭司たちが聖任された仕方は次のようである。かれらはそのすぐれて堅固な信仰と善い行いとがあるために、神の先見の明によって創世の前からすでに備えておかれた。かれらはまず善を選ぶのも悪を選ぶのも許しておかれたが、すでに善を選んでその信仰がすぐれて堅

アルマ13,3-1,あったから、聖い召を受けてこの職に召された。この聖い召はこれを受ける資格のある者たちのために備えられた贖いによって備えられ、またその贖いの計画によって備えられた。

アルマ13,4,かれらがこの聖い職に任ぜられたのはその信仰に由ったのであって、ほかの人々はそのころがかたくなでその精神が位ために神の”みたま”をたびたび小判だったのである。もしもこう言うことがなかったならば、その兄弟たちと同様に大きな特権を受けたであろう。

アルマ13,5,または、要するにかれらは最初その兄弟たちと同様であった。そしてこの聖い召は心をかたくなにしなない者たちのために創世の前から備えてあったものであって、かねて備えられた神の生みたもうた独子(イエス・キリスト)の行いたもうはずの贖罪を通して、またそれ

アルマ13,5-1,定められたのである。

アルマ13,6,それであるから、祭司たちは世の人々もまた神の安息に入れるように神の命令をこれらの人に教えるため、この聖い召によって選ばれ、按手礼によって神の聖なる神権の大祭司に任ぜられた。

アルマ13,7,この大神権はすなわち神の御子の神権の大神権であって、神の御子の神権は創世の前から存在していた。或は言い換えると、この大神権は始めもなく終りもなく、万物にかかわる神の先見の明によって無限の過去から備えられ無限の将来につづくものである。

アルマ13,8,さて祭司らの任ぜられた仕方は次のようである。すなわち、聖い召によって選ばれ、聖い儀式により聖任せられて聖なる神権の大神権を受けた。この召と儀式と大神権とはどれもその存在に始めもなく終りもないものである。

アルマ13,9,このように永遠にその祭司たちは御父の生みたもうた独子(イエス・キリスト)の神権の大祭司となり、この御子(イエス・キリスト)は始めもなく終りもなくまし、恩恵と正義と真理とに満ちたもう。まことにその通りである。アーメン。

アルマ13,10,さて私がすでにこの大神権が属する聖なる神権について話したように、按手礼を受けて神の大祭司に聖任されたものが多かったが、これは全くその人たちのすぐれて堅固な信仰と、心からの悔改めと神の御前に於ける義しい行いとによるものであって、この人々は亡びる

アルマ13,10-1,むしろ悔い改めて義しいことを行う方を好んだ。

アルマ13,11,それであるから、この人々はこの聖なる神権に召されて聖くせられ、子羊(イエス・キリスト)の血によってその衣を白く洗われた。

アルマ13,12,今やこの人々はすでに聖霊によって聖くせられ、神の御前に清浄になったのであるから、罪悪を憎み嫌うのを禁ずることができなかった。このように浄くされて自分の神である主の安息に入ったものが非常に数多くあ

った。

アルマ13,13,さて、私の兄弟よ、私はあなたたちもまた神の安息に入るようにその御前にへりくだり、悔改めにふさわしい実を結んでもらいたい。

アルマ13,14,まことにメルケゼデクと言う人の時代の民のように謙遜になれ。メルケゼデクは私が今話をしたこの神権の大祭司であって、永遠に大神権を受けた人である。

アルマ13,15,私たちの先祖のアブラハムがその一切の持物の10分の1を納めたのはこのメルケゼデクであった。

アルマ13,16,さて、前に示した儀式が神権によって施されたのは、神の御子の神権のひながたである。いよむしろ御子の神権そのものである。それはこれによって人々に神の御子を待ち設けさせるため、また人々に自分の罪を赦されようとして御子を待ち望み、ついに主の安息に入ら

アルマ13,16-1,ためにさきのように行われたのである。

アルマ13,17,メルケゼデクはサレム国の王であったが、その民は悪事と憎むべき行いとに耽り、ことごとく迷ってあらゆる罪惡をほしいままにした。

アルマ13,18,しかしメルケゼデクは信仰が堅固で神の聖なる神権の大神権の職を受けていたので、その民に悔い改めなくてはならないことを勧めた。ところがその民はその聞いて悔改めをしたため、メルケゼデクは残る生涯の間全国に平和な政事を布いた。それでメルケゼデクは平和

アルマ13,18-1,平和の君となえられた。かれはサレム国の王でその父に代って国を治めたからである。

アルマ13,19,メルケゼデクよりも前にまたメルケゼデクよりも後に多くの人があったが、これよりも優れて偉大な人は一人もなかった。それであるからメルケゼデクのことは特に述べてある。

アルマ13,20,しかし、私は今これをくり返すには及ばない。今までに言ったことで充分であろう。ごらん、聖文はあなたたちの前にある。あなたたちがその意味を曲げて解釈するならばあなたたちは亡びる”と、

アルマ13,21,アルマはこのように話してから民に向って手を延し大声に呼ばわって言った”救いの日が次第に近づいてくるから、今は悔い改めねばならぬ時である。

アルマ13,22,主の御声は天使たちの口を借りてこれを万国の民に告げたもうている。これは万国の民にまことに喜ばしい音ずれを告げるためである。主は全世界に散っている主の民にこの喜ばしい音ずれを響かせたもうから、その音ずれは私たちの所へもきた。

アルマ13,23,その音ずれは私たちが誤なく会得をするように明らかな言葉で私たちに教えて伝えられる。これは私たちが不案内な国にさまよっている者たちであるからである。この音ずれはすでに私たちの全国いたるところに知れわたっているから、私たちは深く恵まれている。

アルマ13,24,今天使たちは、私たちの国の多くの人にこの喜ばしい音ずれを伝えているが、これは世の人々が、主が栄光を具えて降臨したもう時、その御言葉を受け入れるような心がまえをさせるためである。

アルマ13,25,それであるから私たちはただ、主が今降りたもうと言う喜ばしいしらせを天使の口から聞く時を待つだけである。このような時は必ずくるのであるが、どれくらい速くくるかは解らない。私は自分の生きている間にその時に逢うことをこいねがう。しかしながら、その時

アルマ13,25-1,早くても私は必ずその時がくるのを嬉しく思う。

アルマ13,26,なぜらば、私たちの先祖がその身の中にある予言の”みたま”の言わせるまに主について述べた言葉がそのまま成就をするよう、主が降りたもう時になって天使らは聖くて聖くて正しい者たちに主の降臨を知らせるであろう。

アルマ13,27,さて、私の兄弟たちよ、私が心の底からこいねがい、胸が痛むまで心配をしているのは、あなたたちが私の言葉に聞き従い、自分の罪をすて、悔改めの時を延ばさず、

アルマ13,28,主の御前にへりくだり、その聖い御名を呼び、自分に堪えられない誘惑に逢わないようたえず目を覚まして祈り、これによって聖霊の導きを得、謙遜、柔和、従順であって忍耐強く堪忍と愛情とに富み、

アルマ13,29,主を信じ、永遠の生命を受ける望みを抱き、終りの日にあげられて神の安息に入ることができよう、常に神の愛を心に忘れないようにしてほしいことである。

アルマ13,30,ねがわくば、あなたたちが主の怒りを招かず、地獄の鎖につながれず、第2の死を受けないように、主があなたたちを悔い改めさせたもうよう祈り奉る”と。

アルマ13,31,アルマはなお多くのことを民に宣傳伝えたが、ここには書き誌さない。

アルマ14,,アルマ書 第14章

アルマ14,*-*,アルマとアミュレク、牢屋に入れられる。2人を信ずる者たち迫害される。火ぶりで殺される。今は悔い改めたゼエズロム、2人のために弁解をして追い払われる、予言者たち救われて、その敵は殺される。

アルマ14,1,アルマが人民に話し終ると多くの人々はその言葉を信じ悔い改めて聖文を研究し始めた。

アルマ14,2,しかしその中の大半の人々は、アルマがゼエズロムにあからさまに遠慮なく言ったことを起り、またアミュレクが自分たちに偽を言い、自分たちの国法、法律業者、判事たちよをののしったと言ってアルマとアミュレクの2

人を亡い者にしたいと思った。

アルマ14,3,またアルマとアミュレクとに怒りを感じて、この2人があからさまに民の罪惡を証言したから、民は2人をひそかに片つけてしまおうとした。

アルマ14,4,しかしながら、かれらは2人を殺さないで、ただ2人を捕えて強いなわでしばり、その地方の高等判事の前へ引いて行った。

アルマ14,5,そして民もまた出て言って2人に反対する証を立てたが、かれらは2人が国法も言う率業者らも判事らも住民もしり、また唯1人の神があつてその子を世の人の間につかわすが、人を救わないと宣べたと証言し、そのほかこのようなことを多く賞翫をしてアルマとアミ

アルマ14,5-1,反対をした。これはみなその地方の高等判事の前でしたことである。

アルマ14,6,ところが、ゼーゾロムがこの証言を聞いて驚き、自分が偽を民に行つたために、多くの人の心を暗ませたことを認めて自分に罪があることを悟りその心を非常に悩ました。ゼーゾロムはまことにようやく地獄の苦しみに取り囲まれたのである。

アルマ14,7,そこでゼーゾロムは民に向つて大きな声を出して“見よ、われこそ罪がある。2人は神の前に無罪潔白である”と叫び、そのときから2人のために弁解し始めた。しかし民はゼーゾロムをののしって“汝もまた悪魔につかれたのか”と言ってかれに唾を吐きかけかれを追

アルマ14,7-1,そしてアルマとアミュレクの言葉を信じた人たちも追い払った。民はこれらの人を追い払った上に石を投げつけて撃とうとして追手をつかわした。

アルマ14,8,それから、民は追い出された人々の祭司をよせ集め、その中で神の道を信ずる者たちと神の道を信ぜよと教えられた者たちを火の中に投げ入れ、また聖文をのせている記録も取り出してこれを火の中に投げこんで焼きすてた。

アルマ14,9,ここに於て民はアルマとアミュレクとをこの殉教場に引き出して言って、火で焼き殺されるものが滅亡するさまを見せたが、

アルマ14,10,アミュレクは火で焼き殺される女子供の苦しみを見て自分も苦しみ悩み、アルマに向つて“私たちはとてもこの残酷な有様を見てはおられない。さあ、手をさしのべて私たちに宿る神の力でこれらの者を火の中から救い出そうではないか”と言った。

アルマ14,11,ところがアルマはアミュレクに答えて“‘みたま’が私に手を出してはならぬと制したもう。ごらん、主は殉教者たちを自分の居る所へ入れて栄光を授けたもう。また、人民がその心のかたくなままにこのように信者を殺すことを許しておきたもう。それは、主が怒っ

アルマ14,11-1,この民に下したもう裁きが正義にかなうためであつて、また罪のない者たちの血がこの民に反対する証となり、終りの火にはげしく民を訴えんがためである”と言った。

アルマ14,12,しかし、アミュレクはアルマに“あの人たちはおそらく私たちも火で焼くようになるかも知れぬ”と言った。

アルマ14,13,するとアルマはこれに答えて“主のみこころにかなうならば、そうなつてもかまわない。しかし、私たちのしなくてはならぬことがまだ成就していないから、あの人たちを火で焼くことはない”と言った。

アルマ14,14,さて火の中へ投げこまれた者たちの身体と、これらの人と一しょに火の中へ投げすてられた聖文が焼けてしまつてから、その地方の高等判事がやつて来てアルマとアミュレクがしばられながら立っている前に立ち泊、手で2人の頬を打つて言った“このような有様を見な

アルマ14,14-1,まだお前らはこの民に教えを宣べ伝えてかれらを燃える硫黄の湖へ入れようとするのか。

アルマ14,15,見よ、明らかにお前らは火の中へ投げこまれた者たちを救う能力を以ていなかったではないか。またかれらがお前らと同じ信仰と教えとを持っているからと言って神はかれらを救わなかったではないか”と。そしてこの高等判事はまた2人の頬を打つて“お前ら自身何と

アルマ14,15-1,弁解をするか”と聞いた。

アルマ14,16,この判事はギデオンを刀で殺したニーホルと同じ宗派で信仰と教えも同じであつた。

アルマ14,17,アルマとアミュレクはこれに対し何の答えもしなかったが、判事はまたもこの2人を打ち、下役に引きわたして牢屋に入れさせた。

アルマ14,18,さて2人が牢屋に入つて3日たった時、ニーホル宗を信ずる多くの法律業者、判事、祭司、教師らが2人を見ようとして牢屋の中へ入つてきて、いろいろなことを尋ねたが2人は何にもこれに答えなかった。

アルマ14,19,ここに於てあの高等判事が2人の前に立つて“お前らはなぜこの人々のたずねることに答をしないのか。自分はお前らを火の中へ投げこませる権力があるのを知らないのか”と言って答をせよと命じたが、2人は何にも答えなかった。

アルマ14,20,そこでかれらは牢屋を去り各々帰路に就いたが、またその翌日やつてきた。そしてあの高等判事はまたも2人の頬を打ち、そのほかの者たちも多く進み出て2人を打ち“お前らはまた起つてこの民を裁き、またわれわ

れの法律をとがめようとするか。お前らにもし大きな

アルマ14,20-1,能力があるなら何故自分自身を救わないか”とあざけって言った。

アルマ14,21,この者たちは歯がみなしながら、また2人に唾を吐きかけながら、このようなことを多く言いならべて”われわれが死んだ後で罰を受けるときにはどのような姿を現わすか”と聞いた。

アルマ14,22,かれらはこのようにいろいろなことを言って、何日も2人をあざけり、2人を飢えさせるために食物を与えず、2人を渴かせるために水も飲ませず、その飢えその着物をはぎ取って2人をはだかにした。2人はこのようなままで強い縄でしばられ、牢屋に閉じこめておか

アルマ14,23,さてアルマとアミュレクの2人はこのように苦しみながら何日も過したが(ついにニーファイの民を治める判事治世の10年、10月12日になって)アモナイハの地の高等判事と同地の多くの教師と法律業者とがつれ立って牢屋へ入ってきて、アルマとアミュレクとが

アルマ14,23-1,しばられている所まで進み出た。

アルマ14,24,この時高等判事は2人の前に立ちまた2人を打って言った”お前らに神の能力があるならば、このいましてある縄から自分の身を救え。そうしたらわれわれはお前らの言うように、主がこの民を亡ぼすことを信ずる”と。

アルマ14,25,それからほかの者たちも最後の1人に至まで皆進み出て、高等判事と同じことを言って2人を打った。ところが最後の者が言い終るや、たちまち神の能力がアルマとアミュレクとに下り、2人は起きて立ち上がった。

アルマ14,26,そしてアルマが大声で”主よ、いつまでもこんなひどい苦痛を忍ばねばならないのか。主よ、私たちがキリストを信ずる信仰に応じて自ら救うほどの力を与えたまえ”と祈ると、たちまち2人はその身をしばる縄を断ち切った。人々はこのを見ると自分の身が亡びること

アルマ14,26-1,おそれて逃げ始めた。

アルマ14,27,しかしかれらはうろたえたあまり牢屋の外の扉へ行きつかない中に地へ倒れた。するとこの時地がはげしく震い牢屋の壁が裂けて地に倒れて、アルマとアミュレクを打った高等判事も法律業者らも祭司教師の連中に至るまで倒れた壁のために殺されてしまった。

アルマ14,28,ところが、アルマとアミュレクとはキリストを信ずる信仰のために主から御力を授かり、傷も受けずに縄を解かれて牢屋をすぐ出たが、牢屋はすでに地に倒れていた。アルマとアミュレクを除くほか、牢屋に居た者は皆死んだ。2人はこれからすぐに市内へ進んで言った

アルマ14,29,このとき、人民はさきに大きな響を聞いたのでそのわけを四郎として大勢かけつけてきたが、アルマとアミュレクとが牢屋から出てくるのを認め、また牢屋の壁が地に倒れているを見て非常に恐れ戦いて、ちょうど山羊がその子を連れて2匹の獅子から逃げるようにアル

アルマ14,29-1,アミュレクの前から逃げて行った。

アルマ15,,アルマ書 第15章

アルマ15,*-*,ゼズロム、奇跡的に病を医されて教会に入り、教えを宣べ伝える。多くの者がバプテスマを受ける。アルマとアミュレク、ゼラヘムラへ帰る。

アルマ15,1,アルマとアミュレクとはその市から立ち去れと命ぜられたので、ここを立ってサイドムの地方へ行ったが、ここでアモナイハの地を立ち退いた者たちに逢った。この人々はアルマの言葉を信じたからアモナイハから追い出され、石で撃たれた者たちであった。

アルマ15,2,アルマとアミュレクとはここでこの人たちの妻子が逢った災難をくわしく物語、また自分たちの上のこと、自分たちを救だした能力のことなどを述べて聞かせた。

アルマ15,3,ゼズロムもサイドムに居て燃えるような熱病にかかり床についていたが、この病気はかれの罪惡のために心にはげしく苦しみを覚えて起ったのである。ゼズロムはアルマとアミュレクの2人がもうこの世にいないと思い、2人が殺されたのは自分の犯した罪惡がもと

アルマ15,3-1,考えて、この大きな罪やそのほかいろいろな罪にひどくかれの心を覚められ頭を痛めて少しも慰めを得ず、そのために燃えるような熱で身を焼かれたのである。

アルマ15,4,しかし、アルマとアミュレクとがサイドムの地へ来ていると聞いたので、ゼズロムは心に力を得てすぐ使をアルマとアミュレクの所へやり自分の許へ来てもらいたいと言った。

アルマ15,5,アルマとアミュレクとはゼズロムの頼みに応じてすぐに行ってその家へ入ったが、このときゼズロムは燃えるような熱病にかかって床の上に臥し危篤の有様であって、その心も頭も罪惡のためにひどく痛んでいた。ゼズロムは2人を見るや、その手をさし伸べて自

アルマ15,5-1,医やしてくれと嘆願をした。

アルマ15,6,そこでアルマは手をとって言った”救いを与えるキリストの能力を信ずるか”と。

アルマ15,7,ゼズロムは答えて言った”さよう。私は教えた一切の言葉を信ずる”。

アルマ15,8,アルマはさらに言った”もしも汝が贖罪を信ずるならば医される”と。

アルマ15,9,ゼズロムはこれに答えて言った“はい、私は汝の言った通りに信ずる”と。

アルマ15,10,そこでアルマは主に祈り求めて言った“われらの神なる主よ、ねがわくはこの人を憐み、そのキリストに対する信仰に応じてかれを医したまえ”と。

アルマ15,11,するとゼズロムがたちまちとび上って歩き出したので、民は1人のこらずびっくりし、このような奇跡が行われたことがサイドムの全地に言いふらされた。

アルマ15,12,アルマはゼズロムにバプテスマを施して主の聖徒とし、それからその民の間に伝道を開始した。

アルマ15,13,そしてアルマはついにサイドムの地に教会を設立し、誰でもバプテスマを受けたいと思う者はこれにバプテスマを施して主の聖徒とするために、祭司らと教師らとを聖任してその地に置いた。

アルマ15,14,バプテスマを受けたいと言う人は多く、サイドムの周囲にある各地から多くの人が集ってきてバプテスマを受けた。

アルマ15,15,しかし、アモナイハ地に住む民はやはりまだその心がからくなで強情であったから、その罪を悔い改めず、アルマとアミュレクの権能はみな悪魔から来たものであるとしていた。なぜならばかれらはニーホル宗を信じて、その罪を悔い改める必要があると信じなかったか

アルマ15,16,アミュレクはかつて友人であった人たちからすてられ、また自分の父にも親戚にも見放され、アモナイハの地にある自分の金銀、貴重な品々をことごとく神の道のために見捨ててきた。

アルマ15,17,アルマはサイドムに教会を設立してから、民が慢心をよく抑えて神の御前にへりくだり、聖壇の前に神を礼拝するためたびたび聖堂に寄り集り、サタンと死と亡びから救われるようにたえず目を覚まして祈るようになったことを認めた。

アルマ15,18,すでに私が示したようにアルマはこの様子を見て、アミュレクをつれてゼラヘムラの地へ帰り、自分の家にとめてかれが難儀な目に逢ったことを慰め必要なものを与えて、主に対する信仰を強め知識を深くしてやった。

アルマ15,19,このようにして、ニーファイの民を治める判事治世の10年目は過ぎて行った。

アルマ16,,アルマ書 第16章

アルマ16,*-*,戦争があると言う叫び声。罪惡の都市、アモナイハ、レーマン人に亡ばされる。ゾーラムとその2人の息子、的軍を潰走させる。ニーホル宗徒の絶滅。教会がひろく設立される。

アルマ16,1,ゼラヘムラの地には久しく平和がつずいて、ニーファイの民を治める判事治世の11年2月5日になるまでは数年の間戦争もなかったが、この日全国に戦が起ったと言う叫び声が聞えた。

アルマ16,2,これは、レーマン人の軍勢がすでに荒野の方から国境に侵入して来て、アモナイハ市にまで信軍しその住民を殺し都会を破壊し始めたからである。

アルマ16,3,そしてニーファイ人が軍勢を国から追い払うに足る兵を募らない内に、レーマン人はやくもアモナイハの寿海nを殺し、ノアの地の附近に住む人々をいくらか殺し、またほかの人々をとりこにして荒野へつれて行った。

アルマ16,4,そこでニーファイ人はとりことなって荒野へつれて行かれた人々を取り戻したいと思った。

アルマ16,5,ニーファイ人の軍の司令長官に任ぜられた人はゾーラムと言ひ。れ一敗とエーハと言う2人の息子があつた。ゾーラムとその2人の息子は、アルマが教会の大祭司であることを知って、またアルマには予言の“みたま”が共にあることを知って、一しよにアルマの所へ行

アルマ16,5-1,自分たちがもしも軍を野に出してレーマン人に捕らえられた兄弟らを探したなら、それは主のみこころにかなうかどうかとアルマにたずねた。

アルマ16,6,そこでアルマはこの事件について主に祈り、それから3人の前へ帰って来て答えた“見よ、レーマン人はマンタイ地の境のはるか向日にある南の野に於てサイドン川をわたるはずであるから、汝らはこれを川の当方にむかえて戦え。されば主はレーマン人が捕えた汝らの

アルマ16,6-1,兄弟らを汝たの手に返したもうであらう”と。

アルマ16,7,これによってゾーラムは2人の息子と一しよに軍をひきつれてサイドン川をわたり、マンタイの地の境をはるか後にしてサイドン川の南の野まで進軍し、

アルマ16,8,ここでレーマン人の軍に向ったところ、レーマン人は撃ち散らされて荒野の奥へ払われた。そこでニーファイ人はレーマン人に捕らえられた自分の兄弟たちを取り返したが、その数は1人も欠けていなかった。よって、かれらは兄弟たちに連れられてそれぞれの所有地に

アルマ16,8-1,帰った。

アルマ16,9,それで判事治世の11年目は終り、レーマン人はすでに国外に追われ、アモナイハの住民は亡びた。アモナイハ人は1人ものこらず殺されたが、大きな都会であったから神でさえも破壊することができないとかれらが誇った大都会も、

アルマ16,10,1日の中に荒れすたれた所となり、その住民の死体は犬と野の猛獣のために食い裂かれてその餌となった。

アルマ16,11,しかし多くの日が経ってから、その死体はうず高く地上に積み上げられ浅く土をかけて覆ってあったが、その臭気がひどかったから、長年の間アモナイハの地へ行って住む者はなかった。そしてその地は“ニーホル宗徒全滅の地”となえられた。それは糊塗された者た

アルマ16,11-1,ニーホル宗を信じ、その地が荒れすたれたまますててあったからである。

アルマ16,12,ニーファイの民を治める判事治世の14年目まで、レーマン人は再びニーファイ人の国へ戦に出てこなかったの、ニーファイの民は3年の間ひきつずき全国に平和を保った。

アルマ16,13,その間、アルマとアミュレクは出て行って神殿、聖堂、またはユダヤ人風に建てた街道などで、民に悔改めを宣べ、

アルマ16,14,自分たちの言葉を喜んで聞いた人たちには、誰にも偏ることなくたえず神の道を伝えた。

アルマ16,15,このようにアルマとアミュレクと教えを宣べる職に任ぜられた多くの人たちは、全国の神の道を宣べ弘めるために出て行ったから、ニーファイ任の住む国の方々にはいたる所に教会が設立され、

アルマ16,16,民の間には等差がなく、主はその“みたま”を全国に注ぎたもうた。これは主が降臨をなさる際に教えたもうことを人々に受け入れる用意をさせ、

アルマ16,17,また神の道に対してかたくなにならず、無信仰で亡びに赴くことなく、喜んで神の道を受け入れさせ、その神である主の安息に入るため、枝のように真の木に接がせさせるためであった。

アルマ16,18,民の間を歩き廻った祭司たちは、一切の虚言、詐欺、嫉妬、争い、遺恨、罵り、盗み、強盗、りやく奪、人殺し、姦淫およびいろいろのみだらな行いをとがめる説教をし、声を大きくしてこのような行いをしてはならないことを諭した。

アルマ16,19,かれらはやがて将来起ること、すなわち神の御子(イエス・キリスト)の降臨とその苦しみと市と死者の復活とを親切丁寧に教えた。

アルマ16,20,それで多くの人々は、神の御子の降臨したもう場所をたずねたところ、神の御子は復活の後にこの地の民にも現われたもう由を教えられ、人は皆これを聞いて非常にここに喜んだ。

アルマ16,21,このように教会はすでに全国に設立されて悪魔に打ち勝ち、神の道は純粋なままにあまねく国内に宣べ伝えられ、主は祝福を民に注ぎたもうた。ニーファイの民を治める判事治世の14年目はこのように幸福な有様で暮れた。

アルマ17,*-*,神の道のために、国を治める権能をすててレーマン人に道を伝えようとニーファイの地へ行ったモーサヤの息子たちの記録。すなわちその艱難と救いの記事。以上アルマの記録による。第17章から第26章まで。

アルマ17,,アルマ書 第17章

アルマ17,*-*,イシメルの地に於けるアンモン。アンモン、ラモーナイ王の僕となる。アンモン、勇敢に王の羊の群を護る。

アルマ17,1,アルマは南の方を指してマンタイの地から旅に出かけたが、その途中で思いもよらずモーサヤの息子たちに出逢った。モーサヤの息子たちはゼラヘムラの地の方へ旅をしているのであった。

アルマ17,2,モーサヤのこの息子たちは、天使が最初アルマに現われたときアルマと一しょに居た者たちであったから、アルマはこのように兄弟たちに逢って非常に喜び、ことにかれらがやはり元の通り主の教会の兄弟であったからまたその上一方ならず喜んだ。この兄弟たちはまこ

アルマ17,2-1,正しい理解をもっている者たちで、神の道を知るために熱心に聖文を研究したから、すでに真理について不快知識を持つようになっていた。

アルマ17,3,そればかりでなく、かれらは非常に熱心に祈りと断食とをしたから“予言のみたま”と啓示のみたま”とを受け、その教えを宣べるときには神に授かった権能と威勢とによって教えた。

アルマ17,4,そして今14年間レーマン人の中に居って神の道を教え、多くの人によく真理を悟らせることができた。まことにかれらの言葉の力によって、この多くの人は神の聖壇の前にきて神に祈り、その御前で自分の罪を告白した。

アルマ17,5,さてモーサヤの息子たちが旅をしていた間の事情はと言うと、かれらは多くの艱難に逢って肉体上にも精神上にも大いに悩み苦しみ、ある時は飢えある時は渇きある時は疲れて精神飢えの苦勞も少くなかった。

アルマ17,6,かれらの旅のことを記すと、始めにその父はモーサヤ王も国民もかれらに王位を伝えたいと思ったけれども、かれらはこれを辞退して判事治世の1年目にその父モーサヤ王と別れ

アルマ17,6-1,石投器などを持って行った。

アルマ17,7,ゼラヘムラの地を去ったのであるが、荒野にある間に食物をとるために剣、槍、弓、矢、石投器などを持って行った。

アルマ17,8,そして荒野に旅立つときにはすでに選んでおいた人々を一しょにつれて行った。これはニーファイの地ののぼって行ってレーマン人に神の道を伝えるためであった。

アルマ17,9,1行は荒野の中に長い間旅をしたが、主がその“みたま”の幾分かを下したもうて自分たちと一しょに行

かせ、また自分たちと共に居らせたもうように大いに断食をしました祈りをした。それは神の御手に使われて、できるならば同胞であるレーマン人に真理を悟らせ、そ

アルマ17,9-1,その先祖の正しくない言伝えが不純であることを知らせるためであった。

アルマ17,10,それで主は“みたま”をかれらに与え、安心せよと言いたもうたのでかれらはそれで心が安らかになった。

アルマ17,11,それから主はまた“汝らの兄弟なるレーマン人の所へ行きわが道を宣べてこれを確立せよ。汝らはわれに由りてかれらに模範をあらわすよう忍耐強く堪忍をし、また艱難に堪えよ。さらばわれは汝らをわが手に使い多くの人を救わん”と言いたもうた。

アルマ17,12,そこでモーサヤの息子たちとその1行は、みなレーマン人の所へ行行って神の道を宣べ伝える勇気が出た。

アルマ17,13,そしてレーマン人の故郷に着くと、かれらは互いに別れて各々違った方面へ行行ったが、その伝道が成功してからまた皆が共ことを主に信頼して出て行行った。皆の者は、すでに始めたこの伝道の事業が偉大なものであることを予想していたからである。

アルマ17,14,全くその通りその伝道の事業は偉大であった。それは今かれらが神の道を宣べ伝えようと企てた民は野蛮猛悪頑固であって、ニーファイ人を殺したりニーファイ人の者を盗んだりかすめ取ったりすることを喜び、いろいろな財宝や金、銀、宝石などに執着をしていたから

アルマ17,14-1,このような物を手に入れるために自分で働く必要のないように人殺しとりやく奪とを行行ったのである。

アルマ17,15,このようにレーマン人ひや非常に怠け者の民であって、その中には偶像を拝む者が多くあり、皆先祖からの言伝えのために神ののろいを受けていた。しかしながら、かれらがもしも悔い改めるならば主の誓約にある職福がかれらにも与えられるはずであった。

アルマ17,16,従って、モーサヤの息子たちはレーマン人に悔い改めさせるために、またあるいは贖いの計画を悟らせるために伝道の事情に着手したのであった。

アルマ17,17,それであるから、かれらは互いに別れて、各々与えられた神の誠めと権能とを以て1人ずつレーマン人の中へ入って行行った。

アルマ17,18,さてアンモンは1行の頭であって、むしろかれらに必要なものを与え教え導く者であったから、互いに別れる前それぞれの職に応じてこれを皆祝福し、その上神の御言葉を教えてかれらを勇気づけはげまし、ついにかれらと別れを告げたが、それから1行は互いに別れて

アルマ17,18-1,違う道に向いレーマン人の全国を経ねぐった。

アルマ17,19,そしてアンモンはイシメルの地へ行行ったが、この土地の名はイシメルの息子であって後にレーマン人となった者たちの名をとってつけられた。

アルマ17,20,アンモンがイシメル of 地へ配流とレーマン人はすぐにかれを捕えてしばった。これはレーマン人のならわしであって、およそレーマン人の手に落ちたニーファイ人は皆しばって王の前に引いて行き、これを殺すもこれを束縛しておくも、これを牢屋に入れるもまた国外に

アルマ17,20-1,追い出すのも王の意のままに任せた。

アルマ17,21,このようにして、アンモンはイシメル of 地の王の前へつれて行かれた。この王はイシメルの後裔でその名をラモーナイと言った。

アルマ17,22,王はアンモンに向ってかれがこの地にとどまってわが民であるレーマン人の中に住みたいと思うかどうかと聞いた。

アルマ17,23,するとアンモンは“さよう。私はしばらくこの民の中で住みたいと思う。多分私が死ぬまでここに住むかも知れない”と答えて言った。

アルマ17,24,これを聞いて王は大そうアンモンが気に入ってかれをしばってある縄を解かせ、その上自分の娘の1人をアンモンの妻にしたいと言った。

アルマ17,25,しかしアンモンは“そうではなく、私はただ王の僕になるだけが願いである”と答えた。やがてアンモンはレーマン人のならわしに従って、ラモーナイ王の羊の群を見守るためにほかの僕たちと一しょにつかわされた。

アルマ17,26,アンモンは3日間王に仕えてから、レーマン人である僕たちと一しょに羊の群を追いながらゼブスの水と言う水のある所(レーマン人はみなその羊に水を飲ませるためにここへ群を追って行く)へ行く途中、

アルマ17,27,その前に水を羊に飲ませてしまつて帰ってくる幾人かのレーマン人がじゃまをして、アンモンと王のほかの僕が飼っている羊の群を追い散らしたから羊は四方八方に逃げ散った。

アルマ17,28,そこで王の僕たちは“私たちの兄弟らの飼っている羊の群もこの連中の悪い行いのために追い散られそのために王は私たちの兄弟らを殺した。この度はまた王が私らを殺すにちがいない”とつぶやき始め、非常に投げいて“ごらん、私たちの羊の群はもう散り散りになつ

アルマ17,28-1,しまった”と言った。

アルマ17,29,かれらは殺されはしないかと思って泣き悲しんだが、アンモンはこの様子を見て喜びが胸に一ぱいとなり“私はこの羊を集めて王のところへ返し、そして同役の僕たちに私の能力を示し、いや私に宿る力を現してみせて、同役の僕たちの信用と歓心とを得て私の言葉を信

アルマ17,29-1,信じさせよう”と独言を言った。

アルマ17,30,これはアンモンが自分の兄弟と読んだ同役の僕たちが悲しんでいる様子を見て心に浮かんだ考えであった。

アルマ17,31,そこでアンモンはかれらを慰めはげまして“私の兄弟らよ、心配するな。さあこれから行って羊を佐賀市、これを集めて水の所へ追い返そう。こうして王のために羊を護るならば王は私らを殺さないにちがいない”と言った。

アルマ17,32,僕たちは羊を探すためにアンモンの後ろについて行き、急いで走りまわって王の羊の先に立ち、またこれを水ぎわに追い集めた。

アルマ17,33,ところが前に言ったレーマン人たちが、また王の羊の群を散らそうとしてやってきてそこに居った。アンモンは同役の僕たちに“羊がまた逃げないようにこれを囲んでおけ。私は独りで行って羊を散らす者たちと戦う”と言った。

アルマ17,34,そこで同役の僕たちはアンモンがせよと言った通りにしたから、アンモンはただ1人出て行ってゼブスの水ぎわに立っている者どもと戦ったが、敵の数は少なくなかった。

アルマ17,35,それで、かれらはただの1人で思いのままにアンモンを殺せると思ってアンモンを恐れなかったが、主がモーサヤに約束をしてその息子たちをレーマン人の手から救い出すと仰せになったことを知らず、また主のことを少しも知っていなかった。ただその同胞の亡びるの

アルマ17,35-1,そう言うわけで王の羊を散らそうとして待ち受けていた。

アルマ17,36,ところがアンモンが進み出て驚くほどの大力をふるって石投器でかれらに石を投げ始め、その数人をうち殺したのでかれらはアンモンの強いのにびっくりした。しかし見方の中に殺された者があったので大いに怒り、必ずアンモンを殺すと決意をしたが、とても石では撃

アルマ17,36-1,ことを認め、アンモンを打ち殺そうと棒をもって出てきた。

アルマ17,37,ところが棒をふり挙げてアンモンをうち倒そうとした者たちは、アンモンに剣でもってみなその腕を切り落とされた。このように剣をもって腕を切り落しうちかかってくる棒を防いだから、敵はうろたえてアンモンの前から逃げて行った。まことに敵の数は少なくなかつ

アルマ17,37-1,アンモンは腕に受けた力をもってこれを撃ち退けた。

アルマ17,38,この敵の中で6人は石投器のために死んだが、アンモンはその張本人のほかには1人も剣にかけず、ただ向って来て腕をあがた者の腕を切り落としただけであった。しかし、その数は少なくなかった。

アルマ17,39,アンモンは、レーマン人を遠く追い払ってから、同役の僕たちの所へ帰ってきて一しよに羊に水を飲ませ、やがてその群を追って王の牧場へ帰った。そしてアンモンを殺そうとしてアンモンの剣で腕を切り落された者どもの腕を王の前へ持ってきた。これを王の前へ持っ

アルマ17,39-1,一同がしたことを証明するためであった。

アルマ18,,アルマ書 第18章

アルマ18,*-*,ラモーナイ王、アンモンが大霊であると間違える。ラモーナイ王、真の神について教わる。主の“みたま”に打たれる。

アルマ18,1,このときラモーナイ王はその僕らを自分の面前によび出し、この出来事についてかれらが見た次第を証言させた。

アルマ18,2,そこで僕らはみなその見たことを証言したので、王はアンモンを殺そうとした者たちと戦うに当って現した大力とを知って非常に驚いて言うのに“これはまことに人間の及ぶところではない。見よ、アンモンはこの民の行う人殺しの罪のために重い罰を下すあの霊では

アルマ18,3,僕らは王に答えてアンモンが大霊であるかまたは人であるかは知っていない。私たちはただかれが王の敵に殺されるような人ではなくて、私たちと一しよに居るならばその技倆と大力とのために敵も王の羊を追いかすことができないから、王のために忠実な友人であ

アルマ18,3-1,言うことを確に知っているだけである。王よ、私たちは誰でもこの人を決して殺さないことを知っているから、普通の人間にこのような大力があるとは信じないと言った。

アルマ18,4,すると王はこれを聞いて僕らに“われは今やこの人が大霊であることを知っている。またこの人は、われがお前らの兄弟を前に殺したようにまた今お前らを殺さぬように、このたび降ってお前らの命を助けようとする者である。この人はすなわちわれらの先祖が教えた大

アルマ18,4-1,と言った。

アルマ18,5,世の中に大霊というものがあると言うことは、ラモーナイがその父から言い伝えられたことであって、レー

マン人は大霊を信じているがこれまで自分らのしたことは何ごとによらずみな正しいと思っていた。しかし、ラモーナイは今や僕らを殺したことが間違っていたか

アルマ18,5-1,知れないと非常に恐れて心配をするようになった。

アルマ18,6,実際、ラモーナイ王は今までにその僕を多く殺した。それは僕たちが水飲み場で同国人に羊の群を散らされたからである。

アルマ18,7,レーマン人の中にはゼブスの水ぎわに立って他人の羊の群を散らし、散らした羊をたくさん自分の地へ追って行く癖があった。これはすなわちかれらのするりやく奪の一種であった。

アルマ18,8,そこでラモーナイ王は僕らに聞いて“このような大力のある者は今どこに居るか”と言った。

アルマ18,9,僕たちは答えて、今王の馬にまぐさを与えていると言った。王は僕たちが羊に水を飲ませる前に、馬と車とを用意し自分に従ってニーファイの地へ行けと命じておいた。それはラモーナイの父がニーファイの地で大きなふるまいをすると前から定めてあったからである。

アルマ18,9-1,ラモーナイの父は全国の王であった。

アルマ18,10,ラモーナイ王はアンモンが馬と車の用意をしていると言うことを聞いて、いよいよその忠義に驚いて“まことにわが僕たちの中にいまだかつてこの男のように忠実な者はなかった。この男はよくわが命令を記憶してことごとくこれを行う。

アルマ18,11,われはこの人が必ず大霊であることを知っている。よってかれをわが前に召し たいと思っはいるが、思い切ってそれができない”と言った。

アルマ18,12,しかし、アンモンは王とその僕たちのために馬と車の支度を終って王の所に入ってきたが、王の顔色がかわっているのを見て王の前を立ち去ろうとした。

アルマ18,13,その時王の1人の僕が、ラバナよ、王は汝にここに居てもらいたいと思っておられると言った。ラバナとは勢力のある王、または大王と言う意味であって、レーマン人はそのもろもろの王がみな勢力があると思ったのでアンモンをもラバナと呼んだのである。

アルマ18,14,そこでアンモンは王の方をふり向いて、王よ私にせよと仰せになるかと聞いてが、王は何と言ってよいかわりなかつたので、レーマン人の時刻で1時間経っても何にも答えなかつた。

アルマ18,15,アンモンはまた王に向って、王よ、私に何をせよと仰せになるかと聞いたがこのたびも答えがなかつた。

アルマ18,16,このときアンモンは、神の“みたま”に満されて王の心の中を見抜き王に向って、王は私が王の僕らと羊の群とを守り、石投器と剣でその同国人の7人を殺し、また王の僕らと羊の群とを守ためにほかの者たちの腕を切り落としたと聞いて驚き怪しんでおいでになるので

アルマ18,17,王はなぜそんなにひどく驚くのであるか。私はただの人間であって王の僕であるから、何でも王が正しい命令を下さるならばこれを行う、と言った。

アルマ18,18,ラモーナイ王はこれを聞き、アンモンが自分の心の中を見抜いたことを知って再び驚き怪しんだがこのたびは口を開いてアンモンに“汝は一体誰であるか。一切の言を知る力をもっている大霊であるか”と聞いた。

アルマ18,19,アンモンがそうではないと答えたので、

アルマ18,20,王はまた“汝はどうしてわが心に思っていることを知ることができるか。思い切って言ってよいからこれをわれに話してくれ。汝はどのような力があるからわが羊の群を散らした同国人を殺したりまたはその腕を切り落としたか、どうかこれを教えてくれ。

アルマ18,21,汝がもしこれらのことを教えてくれるならば、何でもほしいものをやるしまた必要があるならわが軍隊を以て汝を保護してやる。われは汝が1人でもわが全軍よりも強いことを知っているが、しかし汝のほしいものは何でもこれをやる”と言った。

アルマ18,22,アンモンは賢いけれども悪い心のない人であったからラモーナイ王に、もし私がどのような能力でそのようなことをしたか申し上げたならば、王は私の言葉をお聞きになるか。これが王に私が望むことであると言った。

アルマ18,23,すると王は“よし、われは汝の言うことはみな信ずる”と言ったので、アンモンの計ごとが当たった。

アルマ18,24,ここに於てアンモンは勇ましく語り出して、王にまず、王は神のましますことを信ずるかとなぞねた。

アルマ18,25,王は答えて“われはそれが何のことだかわからない”と言った。

アルマ18,26,そこでアンモンは、王は大霊のあることを信ずるかと聞くと、

アルマ18,27,王が“その通り大霊は信ずる”と答えたので、

アルマ18,28,アンモンは、大霊はすなわち神であると言い、つづいて王は神であるこの定例が最初に天地の間の万物を造りたもうたことを信ずるかとなぞねた。

アルマ18,29,すると王が“その通り。神は始めて地上にある万物を造りたもうた。しかし、われは天と言うものを知っている”と答えたので、

アルマ18,30,アンモンは、天とは神とその一切の聖い使とが居りたもう所であると教えた。

アルマ18,31,すると、王は“天は地の上にあるか”とたずねたので、
アルマ18,32,アンモンは、その通りである。そして人はもともとみな神の御手で造られたものであるから、神は天から一切の人間を見てその心の思いと心にくわだてることを知って居たもう、と答えた。
アルマ18,33,ラモーナイ王はこれに対し“われは汝の言ったことをみな信ずる。汝は神からつかわれたか”と言った。
アルマ18,34,そこでアンモンは答えて次のように言った。私は人間である。人間は最初神の姿かたちにかたどって造られた。私はこの民にこれらのことを教えて民に正しい真の道を知らせるために神の聖い“みたま”に召されている。
アルマ18,35,それであるから“みたま”の幾分は私と共にあって、神に対する私の信仰と希望とに応じ私に知識と能力とを下さるのである。と言った。
アルマ18,36,アンモンはこれらのことを宣べてから、世界とアダムが造られたことから話を始め、人類の始祖の墮落に関する一切のことを教え、予言者たちの作った人類の歴史と聖文とを、自分らの先祖であるリーハイがエルサレムを立ち去った所まで王に話して、その歴史ならびに
アルマ18,36-1,書物を王に見せた。
アルマ18,37,アンモンはまたかれら(王とその僕たちのこと)に向い、その先祖が荒野で旅をしたこと、その間に飢えや渇きに苦しんだこと、またその旅路のことなどを話し、
アルマ18,38,レーマンとレミュエルとイシメルの息子たちがたびたび叛いたことなどをすっかり話し、リーハイがエルサレムを出てから現在になるまでの歴史と聖文とを説き聞かせた。
アルマ18,39,そればかりでなく、創世の前から贖いの計画をかれらに教え、キリストの降臨についてのことと主のあらゆる御業とを知らせた。
アルマ18,40,アンモンが以上のことをすっかり話してこれを解き明したので王はその言葉をみな信じ、
アルマ18,41,主に嘆願をして“主よ、憐みを垂れたまえ。ニーファイの民を深く憐みたまうようにわれもわが民も憐みたまえ”と言った。
アルマ18,42,このように祈り終ると王は地に倒れて死んだような有様になった。
アルマ18,43,そこで王の僕たちは、王をその後の所へかついで行って寝所に横えたが、このような有様で王は2昼夜の間死んだような有様で寝ていたから、その後も息子も娘もレーマン人のならわしに従ってラモーナイの喪に服し、非常にその死を悲しんだ。
アルマ19,,アルマ書 第19章
アルマ19,*-*,驚嘆すべき見事な改心。レーマン人の女エービシ。レーマン人の王と后、信仰に入る。アンモン、イシメルの地に教会を立てる。
アルマ19,1,2日2晩たってから、死者を葬るために設けた墓に王の遺骸をかついで行ってまさに葬ろうとしたところが、
アルマ19,2,王の后はアンモンの評判を聞いて使の者をつかわし、自分の所へ来るように言った。
アルマ19,3,そこでアンモンはその言葉の通り王の後の許へ行って、自分に何をさせたいと思っておられるかと問うた。
アルマ19,4,すると王の后はアンモンに向い“わが夫の僕らは汝が聖い神の予言者であって、その神の御名によっていろいろの大きな業をする力を具えているとわれに告げた。
アルマ19,5,もしはたしてそうならば、汝は入ってわが夫を見てくれ、夫はもはや2日2晩の間寝所に寝ているが、王はまだ死んだのではないと言う者がある。またすでに死んでいて臭気があるから墓に葬らなくてはならぬと言う者もある。しかしわれの見るところでは臭気はないと思う
アルマ19,6,これはまさにアンモンが望むところであった。なぜならばラモーナイ王は神の威勢が下ったために弱ったのであって、王の心から黒い幕のような無心行がすでに離れ幸手、その心を照す光、すなわち神の栄光の光、あるいはまた言い換えれば神の善徳の驚嘆すべき光は、
アルマ19,6-1,王自身に大きな幸福を注ぎこみ、暗やみの雲のような無信仰と無知とを散らして永遠の生命の光を王自身の中に輝かせたのであるから、これがためにその身体が弱って王は神に連れられて行ったのであると言うことをアンモンは知っていたからである。
アルマ19,7,それであるから、王の后がアンモンに望んだことは、まさしくアンモンの唯一つの願いであった。そこで、アンモンは後の望む通り入って王を見ると、アンモンは王がまだ真で居ないことを知った。
アルマ19,8,それを知ってアンモンは後に王は死んでいるのではない。ただ神に連れられて行ったために身体が眠っているだけである。明日は再び起き上がるのであるから葬ってはならない。
アルマ19,9,汝はこれを信ずるかと言った。すると王の后は答えて“われは汝の言葉とわが僕らの言葉のほかには何の証拠もないが、汝の言葉通りになると信ずる”と言った。

アルマ19,10,そこでアンモンは“汝は信仰が堅固であるからさいわいである。女よ、よく言うておく。今日までニーファイのすべての民の中にもこのような篤い信仰を見たことがない”と言った。

アルマ19,11,王の後はその時からアンモンが王が起き上がると言った翌日まで、王の寝所のそばについていたところ、

アルマ19,12,王はアンモンの言った通り起き上がって、起きながら後に手を延ばして言った“神の御名に感謝し奉る。妻よ、汝はさいわいである。

アルマ19,13,見よ、汝が生きている言が確であると同じく、われがわが贖い主を見たことは確である。贖い主はこの世に降りたもうて女から生れ、その御名を信ずる一切の人々を贖い救いたもう”と。このように言うてしまうと王の心はひどく感動し、大いに喜んでまた倒れてしまっ

アルマ19,13-1,王の後も“みたま”に満されて同じように倒れた。

アルマ19,14,アンモンは、罪惡と言伝えとのために神の民であるニーファイ人を大いに悲しませた同胞のレーマン人にも、自分の祈りに応じて主の“みたま”が降るのを見、ひざまずいてその全身全霊をうち傾けて祈り、神が同胞になしたもうたことを神に感謝したが、自分もまた大

アルマ19,14-1,喜びにたえずここに3人とも地に倒れた。

アルマ19,15,さて王の僕らちは3人が倒れたのを見て主をおそれる心が起って神に祈った。この僕らちは王の前に立ってアンモンの大きな力を証した者たちである。

アルマ19,16,そしてかれらもまたみな地に倒れるまで一心に主に祈った。ただエービシと言う1人のレーマン人の女だけ倒れなかったが、この女はその父が見た不思議な示現のために長らく前からすでに改心をして主を信じていたのであった。

アルマ19,17,しかしこの女はこれまでまだその信仰を人に知らせたいことはなかったが、今ラモーナイの僕たちも自分の仕える後も王もまたアンモンまでが地に倒れて動く力がなくなっているのを見て、これはひとえに神の威勢によるものであることを知った。それでこれは好い機械で

アルマ19,17-1,思い、今ここに起ったことを民に示すならば、民はこの有様を見て必ず神の力を信ずるようになるであろうと考え、急いで家から家へ走りまわってこの出来事を人々に知らせた。

アルマ19,18,そこで人民は大勢で王の宮殿へ集って来て、生と后と僕らが地に倒れて動く力がなく死んだようになっている有様を見て大いに驚いたが、またアンモンを見てそれがニーファイ人であることを知った。

アルマ19,19,ここに於て民は互いにつぶやき始め、王がこのニーファイ人にこの国に住むことを許したから、この国民の上に、いや王とその一族の上にこの大きな災が下ったのだと言う者があった。

アルマ19,20,またこの者たちをとがめて“王はゼブスの水ぎわで羊の群を散らされた僕たちを殺したから自分の家にこの災を真似いたのだ”と言う者もあった。

アルマ19,21,しかしこう言った者たちは、セブスの水ぎわに立て王の羊の群を散らした者たちにかえってとがめられた。なぜならば、王の羊を散らした者たちはアンモンが王の羊を護ったとき、セブスの水ぎわでアンモンのために自分の味方が殺されたからアンモンのことを怒ったか

アルマ19,22,ここにアンモンの剣のために、セブスの水ぎわで自分の兄弟を失った者が1人いて、非常にアンモンのことを怒り剣を抜いてアンモンを殺そうとして進んできたが、まさに剣をあげてアンモンを打とうとする拍子に自分から倒れて死んだ。

アルマ19,23,これでアンモンは殺されるような者でないことがわかる。なぜならば、主は“われはその命を護る故、かれにかかわるよろずのことは汝の信仰通りになる”とアンモンの父であるモーサヤに誓いたもうたから、モーサヤはアンモンを主にお任せしたのである。

アルマ19,24,王の宮殿に集った人々は、アンモンを殺そうとして剣をあげた者が倒れて死んだのを見てみな大いに恐れおののき、アンモンにもまた一しよに倒れている者にもあえて手を触れることをせず、ひとえにこの大きな能力の現われた原因とこのようなことの意味が何であるか

アルマ19,24-1,怪しんだ。

アルマ19,25,多くの民の中にはアンモンをあの大霊であると言う者が多かったが、またアンモンは大霊からつかわれた者であると言う者もあった。

アルマ19,26,しかしこれら2つの切をとがめて、アンモンは自分たちを苦しめるためにニーファイ人からつかわれた怪物であると言う者もあった。

アルマ19,27,またある人々は、アンモンは自分らが罪惡を犯したから、自分らを責めるために大霊からつかわれた者であって、この大霊はいつもニーファイ人について居てこれをレーマン人の手から救だし、また自分らの兄弟であるレーマン人を多く亡ぼした者であると言った。

アルマ19,28,このようにかれらの争いは非常に激しくなったが、その争いが盛んであるとき、前に多くの民を集らせた婢がやって来て多くの人が争い論じているのを見て大そう悲しみ涙を流した。

アルマ19,29,そしてこの女が進み出て王の后を地から起そうとしてその手をとったところ、婢の手が後の手に触れるやいなや后は立ち上って大声で人々に言った”おそろしい地獄からわれを救いたまえる恵み深きイエスよ、恵み深き神よ、この民を憐みたまえ”と。

アルマ19,30,このように言い終って后は喜びが胸に一ぱいとなり、両手を合わせてそこに居合す人々に通じない多くの言葉を語ったが、語ってしまってラモーナイ王の手を取るとまた立ち上がった。

アルマ19,31,王はすぐとその民の中に争論のあるのを認めてこれをとがめ、アンモンから聞いた言葉を民に教え始めたが、耳を傾けて王の言葉を聞いた者たちはみなこれは本当であると信じ改心して主の教えにしたがった。

アルマ19,32,しかし民の中には王の言葉に聞き従わずに立ち去った者も多かった。

アルマ19,33,アンモンも立ち上がったときに民を教え導き、ラモーナイの僕もまたその通りしたが、かれらはみな同じことを民に証した。それはすなわちすでに心を改め、もうこれから悪いことをしたいとは思わないと言うことであった。

アルマ19,34,ごらん、その僕たちの多くは天使らを見、また天使らと話をしたと言うことをこの民に証した。かれらはこのように神のこごとを神の義とを民に宣べ伝えたのである。

アルマ19,35,その僕たちの話を信じた人々は多くいて、みなバプテスマを受けて義しい民となり、その国に教会を設立した。

アルマ19,36,このようにして主の御業がレーマン人の中に始まり、また主はこの国の民に主の”みたま”を注ぎたまうた。これによって見るに、主の御手が悔い改めてその御名を信ずる人々にみな差し伸べられることは明かである。

アルマ20,,アルマ書 第20章

アルマ20,*-*,アンモンとラモーナイ王、ミドナーイの地へ行く。この2人、全国を司どるラモーナイの父に逢う。最初敵意を抱いたが、後に心を和げて大きな恩恵を与えた。

アルマ20,1,この地に教会を設立した後ラモーナイ王はアンモンを自分の父に引き合せようと思い、一しょにニーファイの地へ言ってくれないかとアンモンに言った。

アルマ20,2,すると主の御声がアンモンに聞えて”汝はニーファイの地へ行くべからず、ニーファイの地の王汝を殺さんとすればなり。さりながら、汝はミドナーイの地へ行け。汝の兄弟のアロンはその同僚のムロカイおよびアンマと共に獄につながれたり”と仰せになった。

アルマ20,3,アンモンはこの御言葉を聞いてラモーナイに言った”私の兄弟とその同僚たちは今ミドナーイの牢屋に入れているから、私はそれを救うためにミドナーイへ行く”と。

アルマ20,4,するとラモーナイは”われは汝が主の能力で何事でもできることを知っているが、このたびわれは汝と一しょにミドナーイの地へ行こう。ミドナーイ地の王はアンテオムノと言ってわが友である。それ故われは自らミドナーイの地へ行き、汝の兄弟たちを牢から出すよう

アルマ20,4-1,王に勧めよう。しかし、汝はその兄弟たちが牢に入れられて居ることを誰から聞いてのか”と言った。

アルマ20,5,アンモンはこれに答えてこれを私に示したのは神にほかならない。神は”汝の兄弟たちはミドナーイの獄につながれている故、行ってこれを解き放て”と私に命令なさったと言った。

アルマ20,6,よって、ラモーナイはこれを聞くとその僕たちに馬と車とを用意させ、

アルマ20,7,さてアンモンに”さあ、われは汝と一しょにミドナーイの地へ行き、汝の兄弟たちを牢から出すようにその王にとりなしをしよう”と言った。

アルマ20,8,そしてアンモンとラモーナイとはミドナーイの地を然して行つたが、その道でラモーナイの父である全国の王に出逢った。

アルマ20,9,すると父は王は”先日わが息子らと民のために大ぶるまいをした際、汝は何ゆえに来なかったか。

アルマ20,10,汝は今偽りを言う者の子孫の1人であるこのニーファイ人とどこへ行くか”と聞いた。

アルマ20,11,これでラモーナイは父を怒らせるといけないのでその行先を話し、

アルマ20,12,また父が催した祭の時に父の所へ行かないで自分の国に居ったわけを事こまかに述べた。

アルマ20,13,ラモーナイがこれらのことを父王に話すと、思いもよらず父はラモーナイに腹を立て”ラモーナイよ、汝は偽りを言う者の子孫であるニーファイ人を救おうとして行くことを知らないのか。その偽りを言う者はわれらの先祖の者を取ったが、今やその子孫は狡猾と詐欺と

アルマ20,13-1,以てわれらを欺き、再びわれらの持物を取ろうとしてわが国にきたのである”と言った。

アルマ20,14,そして父王はラモーナイに剣をもってアンモンを殺せ、またミドナーイ地へ行かず一しょにイシメル地へ帰れと言った。

アルマ20,15,しかしラモーナイはこれに答えて、私は決してアンモンを殺さない。またイシメル地へも帰らない。私はアンモンの兄弟たちが義しい者で誠の神の聖い予言者であることを知っているから、これを牢から解き放つために必ずミドナーイ地へ行くと行った。

アルマ20,16,父王はこれを聞いてますますラモーナイに腹を立て、剣を抜いてラモーナイを打ち倒そうとした。

アルマ20,17,この時アンモンはその前に立ちふさがり父王に向って“見よ、汝は自分の子を殺してはならない。汝の子はすでにその罪を悔い改めているから、もしも死んでも汝が死ぬよりも優っている。しかし、汝が今このように起ったままで死んだならば汝自身は救われない。

アルマ20,18,また汝のこの息子は罪の無い者であるから、汝がもしも殺すならばその血は仇を返して下さるよう自分の神に地の中から叫んで嘆願するであろう。そうしたら、汝の身も霊もおそらく亡びてしまう。それであるから、汝は自分の子を殺すことを思い止まるべきである”と

アルマ20,19,アンモンがこのように父王を戒めたときに、父王は答えて“われはわが子を殺すならば、罪なき人の血を流すことになるを知る。しかし汝こそわが子を亡ぼそうとした者である”、

アルマ20,20,と言ってアンモンを殺そうと手をあげたところ、アンモンは父王の打ってくる刃をふせぎ、かえって父王の腕を利かなくなるほど強く打った。

アルマ20,21,そこで父王はアンモンには自分を殺す力があることを認めて命を助けてくれとアンモンに乞うた。

アルマ20,22,しかしアンモンは自分の剣をふり上げて“もしも汝が私の兄弟たちの出獄を許さないならば、必ず汝を叩き切る”と言った。

アルマ20,23,この時父王は、これは命を失うかと思って“私の命をさえ許してくれるならば、汝のほしいものは国の半分でも望のままに取らせる”と言った。

アルマ20,24,そこでアンモンは自分の望み通り年老った父王をおどすことができたのを見て“汝がもしも私の兄弟たちを牢屋から出すことと、つづいてラモーナイにその国を治めることを許し、またラモーナイに大して立腹せず、何事でもその思うところをさせると言う誓約をする

アルマ20,24-1,私は汝の命を助ける。そうでなければ、地に打ち倒す”と言った。

アルマ20,25,さてアンモンがこのように言ったので、父王はその命が助かったのを喜んだ。

アルマ20,26,また父王はアンモン我自分を殺す心のないこととわが子ラモーナイを深く愛していることを知って非常に驚いて言った“汝の心に欲するところは、汝の兄弟らを解き放ち、またわが子ラモーナイがひきつづきその国を治めることを許すことだけであるから、わえは今か

アルマ20,26-1,いつまでもわが子が王の位を保つことを赦し、もうこれからかれに指図はしない。

アルマ20,27,またわれわれは汝の兄弟らを牢から出すことを赦し、またわが国で汝を迎えたいと思っているから、汝が兄弟らと一しょにわが国へ来て、わが所へ配流ことを許す”と。父王はアンモンやわが子ラモーナイの言葉をまことに不思議に思い、これを学ぼうと思ったからであ

アルマ20,28,そこでアンモンとラモーナイとは、ミドーナイ地へ向って進んで行っただが、ラモーナイはミドーナイの王に気に入られたので、アンモンの兄弟らはついに許されて牢屋から出た。

アルマ20,29,ところが、アンモンは兄弟らに逢って非常に悲しく思った。それはこの兄弟たちがはだかの上強い縄でしばられていたため、その皮膚が縄でこすられ剥がれていたからである。兄弟たちはまた飢えや渇きになやみ、あらゆる艱難を受けたが、それにもかかわらずあらゆる

アルマ20,29-1,耐え忍んだ。

アルマ20,30,この兄弟たちはアンモンが逢った民よりは一層残酷で頑固な民の手に落ちる不幸な目に逢ったので、その人々が兄弟らの言葉を聞かずに追い出し、打ち叩き、家から家へここからかしこへと追い立てた末かれらはミドーナイの地へやって来た。かれらはそこで捕えられて

アルマ20,30-1,しばられ、長い間牢屋につながれていたが、とうとうラモーナイとアンモンとによって救い出されたのであった。

アルマ21,*-*,アロンとムロカイとその兄弟たちがレーマン人に道を宣べ伝えた記事。第21章から第26章まで。

アルマ21,,アルマ書 第21章

アルマ21,*-*,アマイカイ人に拒まれて、アロンとムロカイ、ミドーナイ地へ行く。2人は牢屋に入れられる。牢屋から解き放たれて伝道の働きをする。アンモン更に成功をする。街道が建てられたこと。

アルマ21,1,アンモンとその兄弟たちとがレーマン人の国の境で別れたとき、アロンはレーマンがその先祖が生れた地の名をとってエルサレムと呼んだ地方へ旅をして行っただが、これはモルモンの地の隣になっている所であって、

アルマ21,2,レーマン人とアマレカイ人とアミュロン人とは、ここにエルサレムと言う大きな都会を建てて一しょに住んでいた。

アルマ21,3,レーマン人はもともと充分かたくなであったが、アマレカイ人とアミュロン人とはもっとかたくなであったから、レーマン人の心をますますかたくなにさせ、かれらに罪惡と自分らがするような憎むべき行いとを増長させた。

アルマ21,4,さて、アロンはエルサレム市へきて最初アマレカイ人に道を宣べ伝えたが、アマレカイ人の中にもアミュロン人の中にもニーホル宗の信者が多くいて、すでにこの宗の会堂も建っていたので、アロンはこの会堂の中で道を伝え始めた。

アルマ21,5,アロンは民に道を宣べ伝えようとして1つの会堂に背離、ちょうど民に話をしていたときに1人のアマレカ

イ人が聴衆の中から立ち上がり議論を吹きかけて“今汝が証をしたことは何だ。汝は天使を見たことがあるか。天使らはなせわれわれにも現れないのか。見よ、こ

アルマ21,5-1,この国の民は汝の国の民ほど善いではないか。

アルマ21,6,汝はわれわれが悔い改めないなら亡びると言うが、どうして汝はわれわれの心の思いと志していることを知っているか。どうしてわれわれが悔い改めなくてはならぬいわれがあるのを知っているか。どうして、われわれが義しい民でないと言うことがわかるか。見よ、

アルマ21,6-1,われわれは聖堂を建て、神を拝むために集り、神があらゆる人間を救いたもうことを信ずる”と言った。

アルマ21,7,よってアロンはこれに答えて“汝は神の御子(キリスト)が世の人をその罪から贖うために降りたもうことを信ずるか”と言った。

アルマ21,8,するとその人は“われわれは、汝がそのようなことを知っているとは思わない。われわれはそのような愚な伝説を信じない。また汝が将来起ることを知っているとも思わない。また汝の先祖とわれわれの先祖とが自分で告げた将来のことを予め知っていたとも思わない”

アルマ21,9,そこでアロンは、キリストの降臨と死者の復活とにかかわる聖文を改宗に説明し、キリストの死と苦しみとその血によって行いたもう罪の贖いとに頼らなくては、世の人が贖われるはずがないと言うことを明らかに示そうとした。

アルマ21,10,しかしアロンがこの教理を解き明かし始めると人々はかれに腹を立ててあざけり、その言葉を聞こうとしなかった。

アルマ21,11,アロンは人々が自分の言葉を聞こうともしない様を見ると、その会堂を去ってアナイ・アンタイと言う村へ行ったが、そこでムロカイに出逢った。ムロカイはここで人々に神の道を宣べて居り、アンマとその兄弟も居てまた神の道を宣べていたが、かれらはこれについて

アルマ21,11-1,人々と議論をしていた。

アルマ21,12,しかし、かれらは人々がその心をかたくなにするのを認めて、一しよにここを幸手ミドーナの地へ行き、この地で神の道を多くの民に宣べ伝えただけでも、ただ僅な人だけがその教えを信じた。

アルマ21,13,ところがついにアロンはその兄弟らの中の数人と共に捕えられて牢屋に入れられ、残った兄弟たちはミドーナの地から近所の地へ落ちて行った。

アルマ21,14,そして牢屋に入れられた人々は、多くの苦しみと艱難に逢ったけれども、とうとうレモーナイとアンモンに助けられて牢屋から出され、着る物も食べる物も与えられた。

アルマ21,15,それからまた兄弟たちは出て言って世の人に神の道を宣べたが、かれらが初めて牢屋から救い出されたのはこのような次第であって、その苦難も以上のものであった。

アルマ21,16,さてかれらは主の“みたま”が導きたもうまに導かれて行き、どこでも配流ことを許されたアマレカイ人の会堂やレーマン人の集会で神の道を宣べ伝えたが、

アルマ21,17,主がかれらを祝福したもうたので、多くの人々に真理を悟らせ、多くの人々にその罪があることを認めさせ、またその先祖の言伝えが正しくないことを解いて認めさせた。

アルマ21,18,やがて、アンモンとラモーナイはミドーナの地からその住む土地であるイシメルヘーしよに帰ってきたが、

アルマ21,19,ラモーナイ王はもはやアンモンを自分に仕えさせて僕にすることを許さず、

アルマ21,20,イシメルの地に会堂を建てさせ、自分の統治下にある人民を集らせ、

アルマ21,21,民のことを喜んで、民に多くのことを教えまた民に宣言した。すなわちラモーナイ王自身はその父である大王から、イシメルの地に住む民とそのまわりの地に住む民とを治める権をことごとく譲り受けたから、この地に住む民はもはや自分の統治下にある民であって大王

アルマ21,21-1,大王の制裁をはなれて自由の民になったと宣言をした。

アルマ21,22,ラモーナイ王はまた民に宣言をして、自分が治めている地に住む限り、誰でもその望むままに自分の神である主を礼拝する自由があると告げた。

アルマ21,23,アンモンはラモーナイ王の民に道を伝えて義にかかわる一切のことを民に教え、日々勉めはげんで民を勧め民を導き、また民はその言葉に心を留めまことに熱心に神の命令を守った。

アルマ22,,アルマ書 第22章

アルマ22,*-*,ニーフアイの地に於けるアロン。王とその一族ことごとく改心して神を信ずる。王の国、ニーフアイとレーマン人とに別れる。

アルマ22,1,さて、アンモンはたえずラモーナイの民に教えていたから、私はアロンとその兄弟たちの物語に帰ろう。アロンはミドーナの地を去ってから“みたま”に導かれてニーフアイの地へ行き、王の宮殿へ入った。この王はラモーナイの父でイシメルの地を除くほかは全国を支

アルマ22,2,アロンはその兄弟らと一しょに終電の中へ入り、王の前にひざまずいて言った。王よ、私たちはアンモンの兄弟で、汝に牢屋から救い出していただいた者である。

アルマ22,3,王よ、もし王が私たちの命を許して下さるならば、私たちは王の僕になると。しかし王はかれらに言った”起て、われはお前たちの命を許そう。われはお前たちがわが僕になることは許さない。むしろお前たちがぜひわれを教え導くことを求めている。われはお前たちの

アルマ22,3-1,アンモンの言葉が寛やかで偉いために多少心が安らかでない。アンモンがお前たちと一しょにミドーナイからここへ来なかったのはなぜであるか。われはこのことを知りたい”と。

アルマ22,4,そこでアンモンは王に答えて、主の”みたま”がアンモンを別の所へ呼びたもうたので、ラモーナイの民に教えを授けようとしてイシメルの地へ行ったと言った。

アルマ22,5,すると横臥”お前たちが主の”みたま”について言ったこのことは何であるか。これがすなわちわが心が安らかでないところである。

アルマ22,6,アンモンは”悔い改めるならば救われるが、悔い改めなければ終りの日に捨てられる”と言ったが、これはどう言うことであるか”と言ったので、

アルマ22,7,アロンは王に問うて”汝は神がいますことを信ずるか”と言った。これに答えて王は”われはアマレカイ人が神がいますと言っているのを私利、かれらが集ってそれを拝むことができるように、聖堂の建築をかれらに許した。しかし、今汝がもしも神がいますと言うなら

アルマ22,7-1,われは信じよう”と言った。

アルマ22,8,アロンはこの言葉を聞いて喜びが胸にわき”王よ、汝生きておられることが確な通り、神がいますことは確である”と断言をした。

アルマ22,9,すると王はまた”神とはわれわれの先祖をエルサレムの地から導き出したあの大霊であるか”とたずねたので、

アルマ22,10,アロンは王に答えて”その通り、あの大霊のことであって、その方は天地にあるすべてのものを造りたもうた。汝はこれを信ずるか”と言った。

アルマ22,11,そうすると王は”さよう。われは大霊が万物を造ったことを信ずる。ねがわくはこの一切のことをわれに教えよ。さらばわれは汝の言葉をことごとく信じよう”と言った。

アルマ22,12,そこでアロンは王が自分の言葉を信ずるのを認め、聖文を王に読んで聞かせたが、アダムの造られたことから始めて、神が自分の形にかたどって人を造りたもうたことと、神はこの人に命令を下したもうたが、この人が神の命令にそむいたがために墮落をしたことを教え

アルマ22,13,アダムが造られてこのかたの聖文を解き証、人類が神の前から墮落をしたこととその肉欲にふける有様と、キリストの御名を信ずる一切の者のために、キリストにより創世の前から用意された贖い救う計画とを宣べ伝えた。

アルマ22,14,それからまた人類は墮落をしたのであるから自分で何者も受ける価はないけれども、信仰と悔改めなどによりキリストの苦しみと死がその罪を贖うことができるのを解き明し、またキリストが死の縄目を断ち切りたまひ、墓はもはや勝利を得ず、また栄光が得られると言

アルマ22,14-1,と言う望みによって死の苦しみが消え失せることを知らせた。アロンは以上のことをみな王に解き明した。

アルマ22,15,アロンがすでにこれらのことを王に教えたので、王は”汝が話したこの永遠の生命を得るためにはわれはどうしたらよいか。どうしたら、この悪い心をわが胸からとり去り、神の子となり、神の”みたま”を受けて心に喜びを満し、終りの日に捨てられないようになるか

アルマ22,15-1,この大きな喜びを得るためには、われは一切の持物を捨てる。わが王の暮らしを人にゆずってもよろしい”と言った。

アルマ22,16,しかしアロンはこれに答えて”王がもしもそのように望むならば、よろしく神の御前にひれ伏し、まことに一切の罪を悔い改めてから神の御前にひれ伏し、必ず受けると信じて信仰堅固に神に祈るならば、王の望はきつと成就する”と言った。

アルマ22,17,アロンがこのように言ったから、王は主の御前にひざまずき、低く地にひれ伏してひたすら嘆願をして言った。

アルマ22,18,”神よ、アロンは神のましますことをわれに教えたり。神はたしてましまし汝すなわちその神ならば、汝のことをわれに知らしめたまえ。さらば、われは汝を知り、死よりよみがえりて終りの日に救われるようわが一切の罪を捨てん”と。このように祈ると王は死んだよ

アルマ22,19,ここに於て王の僕たちは走って言って王の身に起ったことを後に知らせたので、後は王の所へ入ってきて王が死んだような有様で伏しているのを見た。ところがその場にアロンとその兄弟らの建っているのが、あたかもかれらが王を殺したかのように見えた。それで後はか

アルマ22,19-1,怒り、自分の僕らにもまた王の僕らにも、アロンとその兄弟らを捕えて殺せと命じた。

アルマ22,20,ところが僕たちはみな王の倒れたわけを知っていたので、アロンとその兄弟たちに思い切って手をつけず、かえって後に勧めて、見よ、この人たちの中の1人でさえも私たちが全部かかってもかなわないから、私たちはすぐに破られて死んでしまう。どうして殺せと言う

アルマ22,20-1,言った。

アルマ22,21,後は僕たちが恐れろたえるのを見て災がわが身にふりかかるかも知れないと思って自分も非常におそれおののいたが、やがて僕たちに早く行って人民を呼び集め、かれらにアロンとその兄弟らを殺させようと命じた。

アルマ22,22,ところでアロンは後の決心を知り、また民のこころのかたくななことも知ったので、人民が大勢むらがってきてその中に大きな騒ぎと争いがもち上ってはいけなと思ったので、その手を伸して王の手をとり王を地から起して立てと言ったところ、王はその身に力を得て

アルマ22,22-1,上がった。

アルマ22,23,さてこのことは后と多くの僕たちの目の前で起ったことであるから、かれらはこれを見て非常に驚きおそれるようになった。ここに於て王はかれらに向って話を始め、王の一家がみな心を改めて主を信ずるようになるまでかれらに神の教えを伝えた。

アルマ22,24,ところがさきに後の命令があったので多くの民が集り、アロンとその兄弟たちのために非常に苦情を鳴らす有様となった。

アルマ22,25,しかし、王がその中に立って人々を訓戒したから、人々はアロンとその連れの人々に大して心を和げた。

アルマ22,26,王は人民が心を和げたのを見ると、アロンとその兄弟たちに民の群れの中に立って神の道を宣べさせた。

アルマ22,27,王はまた自分が治めている全地のいたるところに住む民に布告を出した。この地は東の海から西の海に及び、これとゼラヘムラの地に接しているところには狭い荒野があってこの2つの国を分ける境になっていた。この狭い荒野は東の海から西の海に及び、ゼラヘムラに

アルマ22,27-1,北の方の荒野とサイドン川の源とマンタイの地の境を経て、さらに海岸に沿って進み、東の方から始まって西の方へ及んでいた。レーマン人とニーファイ人とはこの兄弟によって別れていた。

アルマ22,28,さて、レーマン人の中で最も怠惰な者たちは荒野の中に住んで天幕を家にしていたが、またニーファイの地の中にある西の方の荒野にも、ゼラヘムラの地の西に当る海岸附近にも、ニーファイの地の西に当る最初にその先祖が住んだ海にほど近い所にもはびこっていた。

アルマ22,29,また東の方の海辺にも多くのレーマン人が住んでいたが、これはニーファイ人のためにここへ追いこまれたのである。こう言うわけでニーファイ人はほとんどレーマン人にとりかこまれていた。しかしニーファイ人は、サイドン川の源にある荒野に沿って東から西にわた

アルマ22,29-1,荒野から北の方にあるバウンテフルと言う所に至る地の全体を占めていた。

アルマ22,30,バウンテフルはニーファイ人がデソレション(荒廢地)と言った地に接していたが、このデソレション(荒廢地)とははるか北の方にあつて、昔人々が住んでいたことがあるがその後荒れ廢れて、前にも言ったことがあるようにゼラヘムラの民がその人々の骨を発見した

アルマ22,30-1,である。この土地はまたゼラヘムラの民がこの大陸にわたってきた時、最初に上陸した地である。

アルマ22,31,しかしかれらはそこから移って南の方にある原へのぼってきた。こうして北の方の地はデソレション(荒廢地)と呼ばれ、南の方の地はあらゆる野獣がここに満ちていたからバウンテフル(豊かな地)と呼ばれた。この野獣の1部は食物を得るために北の方から移ってきた

アルマ22,32,さて、バウンテフルとデソレション(荒廢地)との教会に於て東の海から西の海までのへだたりは、ニーファイ人が一日半で行ける道のりであった。それであるから、ニーファイの地とゼラヘムラの地とはほとんど海にかこまれ、ただ北の方の地と南の方の地とをつなぐ

アルマ22,32-1,地峡があるだけであった。

アルマ22,33,ニーファイ人はすでに東の海から西の海に至るまでバウンテフルの地を占めてここに住んでいたが、このようにニーファイ人は賢明にその衛兵と軍隊とを以て南の方に居るレーマン人の道をふさぎ、レーマン人が北の方に進んで地を占めそして北の方の地を踏みにじるこ

アルマ22,33-1,できないようにした。

アルマ22,34,このわけでレーマン人はニーファイ人の地とそのまわりの荒野とにある土地のほかには地を占めることができなかった。これはニーファイ人の賢明な策であった。なぜならば、レーマン人はその敵であったが、こうしておけばもはや4方から責められるおそれはなく、ま

アルマ22,34-1,またどこへでも思うままに逃げて行ける所があったからである。

アルマ22,35,さて、このことはこれで終りとし、次はアンモン、アロン、オムネル、ヒムナイおよびその兄弟たちの記事に返ることにする。

アルマ23,,アルマ書 第23章

アルマ23,*-*,宗教自由の宣言。多くのレーマン人、心を改めて神の道に入る。アマレカイ人とアミュロン人は神の道に入ることを拒む。アンタイ・ニーファイ・ラーハイ人。

アルマ23,1,さて、レーマン人の王は全国に布告を廻して、国内どこに於ても人民はアンモン、アロン、オムヌル、ヒムナイまたはその兄弟であって神の道を弘めてある者たちをしぼったり、

アルマ23,2,または牢屋に入れるために捕らえたり、唾を吐きかけたり、打ち叩いたり、会堂から追いだしたり、むち打ったり、石を投げつけてはならない、この人たちは自由に民家、神殿、聖堂へ出入りすることができる、と王の言葉をつたえさせた。

アルマ23,3,このようにこの人たちは、自分の思うように方法へ行つて神の道を宣べ伝えることができた。それは王とその1族が全部みな心を改めて主の道に入ったからこの布告を全国に出したのであるが、これは神の道が何のさまたげにも逢わず全国に弘められ、これによって先祖

アルマ23,3-1,悪いものであることを国民に認めさせ、また自分たちはみな兄弟同胞であるから、人殺し、掠奪、盗み、姦淫そのほか何でも罪惡を犯してはならないことを認めさせるためであった。

アルマ23,4,王がこの布告を出してから、アロンとその兄弟たちは都会と礼拝堂とを一々経めぐり、全国いたる所レーマン人の中に教会を設け、また神の道を宣べ教えるために祭司らと教師らとを聖任して置いた。このようにしてアロンたちはようやく大きな成功を治め始めた。

アルマ23,5,そして何千と言う人々が主のことを知るようになった。すなわち、これらの人々はニーファイ人の言伝えを信じ、当時まで伝わってきた歴史と予言とを教えられた。

アルマ23,6,アンモンとその兄弟たちが啓示と予言の“みたま”に由って行つた伝道と、かれらを使つて奇跡を現わしたもうた神の大きな能力とに由って真理を悟るようになったレーマン人、すなわちアンモンたちの宣べ伝えることを信じて主に立ち帰つたすべてのレーマン人は、い

アルマ23,6-1,神の道から外れなかった。これは主が生きてまします通り確なことである。

アルマ23,7,なぜならば、このレーマン人たちは義しい民となつて、まことにその謀叛を起こす武器を捨てて再び神にそむかず、もはやその同胞と戦わなかったからである。

アルマ23,8,改心をして主の道に入った者たちは、

アルマ23,9,すなわちイシメルの地に住んだレーマン人、

アルマ23,10,ミドーナイの地に住んだレーマン人、

アルマ23,11,ニーファイ市に住んだレーマン人、

アルマ23,12,シャイロムの地とシュムロンの地とレミュエル市とシムナイロン市に住んだレーマン人たちである。

アルマ23,13,以上は心を改めて主の道に入ったレーマン人の住んでいた都市の名であつて、以上のレーマン人は謀叛を起す一切の武器を棄てた者たちである。

アルマ23,14,ところがアマレカイ人はたった1人改心しただけであつて、アミュロン人の中には1人も改心した者がなかった。かれらはかえつてその心をかたくなにし、自分たちが住んでいる土地の市町村にいるレーマン人の心もまたかたくなにさせた。

アルマ23,15,それであるから、今悔改めをして真理を悟り神の道に入ったレーマン人の居た都市の名を1つ1つみなここに記したのである。

アルマ23,16,王とこのたび改心をしたすべての者たちは、心を改めない同国人たちから区別をされるように新しい名をつけてほしいと思つた。それで王は、区別をするためにつける名についてアロンと多くの祭司らとに相談をしたが、

アルマ23,17,とうとう自分からアンタイ・ニーファイ・ラーハイ人と名づけることにきめた。従つて、これから後はこの名で呼びもはやレーマン人とは言わなかつた。

アルマ23,18,このアンタイ・ニーファイ・ラーハイ人はそれから大そう勤勉な民となり、ニーファイ人と親密に交るようになったから、神が下したもうたあののろいはもはやこの民から離れ去つた。

アルマ24,,アルマ書 第24章

アルマ24,*-*,レーマン人、神の聖徒を襲う。聖徒となつたレーマン人、武器をとることを拒む。さらに多くの者改心して聖徒となる。

アルマ24,1,アミュロンの地、ヒーラムの地、エルサレムの地などの諸地方に住んでまだ改心をせず、アンタイ・ニーファイ・ラーハイと言う名で呼ばれなかつたアマレカイ人、アミュロン人、レーマン人とアミュロン人に扇動されて同国の兄弟たちを怒り始めた。

アルマ24,2,そしてこれらの者が兄弟たちに対して感ずる憎惡が非常にひどくなつて、ついにその王に叛くようにな

り、もはやその王に叛くようになり、もはやその王を上にあぐさすことを好まないようになったから、かれらはアンタイ・ニーファイ・リーハイ人と戦うために武装を

アルマ24,3,王はアンタイ・ニーファイ・リーハイと呼ぶ自分の息子に王の位をゆずったが、

アルマ24,4,レーマン人が神の聖徒らと戦いの準備を始めた年に亡くなった。

アルマ24,5,ここにアンモンとその兄弟たち、そのほかアンモンについて来ていた人たちは、レーマン人がその同胞を亡ぼす準備をするのを見て、ミデアンの地に集り、ここでアンモンはすべての兄弟たちと会合して一しょにイシメルの地へ言った。これはラモーナイとその兄弟のア

アルマ24,5-1,アンタイ・ニーファイ・リーハイとに会ってレーマン人を防ぐ手段を議るためであった。

アルマ24,6,さて改心をして神の道に入った人々は、誰1人同胞と戦う目的で武器を執ろうとしなかったのみならず、戦いの準備をしようとさえしなかった。まことにかれらの王もまたそうせよと命じたのである。

アルマ24,7,このことについて王が民に告げた言葉は次の通りである“わが愛する民よ、われはわが神に感謝をする。われらの大いなる神は憐み深くましまして、われらに道を宣べるため、また悪い先祖の言伝えが正しくないことをわれらに認めさせるために、われらの兄弟であるこ

アルマ24,7-1,このニーファイ人をここにつかわしたもうた。

アルマ24,8,また見よ、わが大いなる神はその“みたま”の幾分を賜うてわれらの心を和らげたもうたから、われらはこの兄弟であるニーファイ人と交わりを結ぶようになった。故にわれはわが大いなる神に感謝をする。

アルマ24,9,またこのように交わりを結ぶようになったから、われらは自分の罪とすでに犯した多くの殺人のところが認められることができるようになった。従ってわれはまたわが神に感謝をする。

アルマ24,10,大いなるわが神はこの種々の悪事を悔い改める機会をわれらに与え、またわれらの犯した多くの罪と殺人のところが赦して、御子(イエス・キリスト)の功德によってわれらから良心のところがめを除きたもうた。これによって、偉大なる神よ、われはまたわが神に感謝をす

アルマ24,11,さてわが兄弟らよ、われらは(世の中の人の中で1番迷っていて心の暗い者であったから)自分らが犯した多くの罪とその多くの殺人のところが悔い改めることと、これらの罪のためにそまつた心の汚れを神に清めていただくこととはほとんどわれらにできないことであ

アルマ24,11-1,われらの罪の汚れを神に清めていただくまで悔い改めることが、われらの力の限りであった。

アルマ24,12,さて、わが最も愛する兄弟らよ、神はすでにわれらの罪の汚れをとり去りたまひ、われらの剣は光を放つようになった。それであるから、これからわれわれは同胞の血でこの剣を汚してはならない。

アルマ24,13,見よ、われらは同胞の血で汚れないようにこの剣を治めなくてはならない。なぜならば、もしも再びこの剣を汚すならば、おそらくもはやわれらの大いなる神の御子(イエス・キリスト)の血でこれを洗い磨くことはできないであろう。御子の血はわれらの罪を贖うため

アルマ24,13-1,流されるはずである。

アルマ24,14,大いなる神は、われらが亡びないように憐れんでこれらのことを示し、われらの子孫たちと同じくわれら自身お愛したもうから前以てこれらのことをわれらに示し、また憐みの心が深いので神の使たちをわれらにつかわして、これからさき代々の人々と同じくわれらにも

アルマ24,14-1,救いの計画を示したもう。

アルマ24,15,われらの神はいかにも憐み深いではないか。見よ、われらがすでにその汚れを神によって清められたのは、できる限りの力を尽くしてようやく叶ったことであって、われらの剣はすでに光っている。それであるから、剣が光っているままとっておかれるよう、われらはこ

アルマ24,15-1,これを隠そうではないか。そうすれば、この光を放っている剣は終りの日に、すなわちわれらが裁判を受けるために神の御前に立つ時に、さきに神がその道をわれらに伝えてそれによってわれらを洗い清めたもうて以来、われわれがいまだかつて同胞の血でその剣を汚さ

アルマ24,15-1-1,証拠になるであろう。

アルマ24,16,さて、わが兄弟たちよ、われらの同胞がもしわれらを亡ぼそうとするならば、われらは自分の剣を輝いているままにとっておいて、終りの日に於てこの剣を使ったことがない証拠とするために隠して地の深い所に埋めよう。そうすれば、たとえわれらの同胞がわれらを殺

アルマ24,16-1,殺しても、われらは神がいます所へ昇って救われることができるのである”と。

アルマ24,17,よって王がこのように言ってしまうと、民はみな集ってその剣と人を殺すに使うあらゆる武器とを全部地中深く埋めてしまった。

アルマ24,18,かれらがこのようにしたのは、人を殺す武器を2度と使わないことを神と世の人々に誓った証拠であると思ったのであるが、これを埋めながら誓言をして同胞の血を流すよりはむしろ自分らの命をぎせいと、同胞の物を取るよりはむしろ同胞に物を与え、怠けて生涯を

アルマ24,18-1,むしろ自分の手を使って一生けんめい働くという誓約を神と結んだ。

アルマ24,19,これによって見るに、このレーマン人が一たび真理を信じてこれを悟ることができると、その心が堅固となって動かず、2度と罪を犯すよりはむしろ死ぬほどの苦難にも甘んじて堪え忍ぶことが明らかである。また平和のために自分の武器を埋めたことが明かである。

アルマ24,20,さて、その同胞であるレーマン人は戦の用意をしてニーファイの地へ出陣したが、これは王を殺してほかの人をその代りに立て、アンタイ・ニーファイ・リーハイ人を亡ぼしてその国に1人も残さないためであった。

アルマ24,21,1方アンタイ・ニーファイ・リーハイ人はレーマン人が攻めよせるのを見ると、これに向って出て敵の前で地に伏し主に祈っている中に、レーマン人はとびかかってきて剣でかれらを殺し始めた。

アルマ24,22,このようにしてレーマン人は何の抵抗も受けずにアンタイ・ニーファイ・リーハイ人を1005人まで殺したが、この時死んだ者は神と共に住むためにあの世へ行ったからさいわいである。

アルマ24,23,レーマン人の軍はその兄弟たちが剣を避けて逃げようともせず、右にも左にも逃げようとしないうちに地に伏し、甘んじて死を受けようとする様を受けて倒れる時にさえも神を讃美する様子を見て、

アルマ24,24,殺戮をすることを止めたが、軍隊の中にはこの大きな殺人の罪を悔い、剣を受けて殺された同胞のために非常に心を痛めた者が多かった。

アルマ24,25,そしてかれらはその武器を投げすて、すでに犯した殺戮の罪のために両親に責められていたから再び武器を執ろうとはせず、かえってその同胞のように地に伏して、剣をふり上げてかれらを殺そうとする者の為すままに任せた。

アルマ24,26,この日に神の聖徒に加わった者の数は殺された者の数よりも多かった。そして殺された人たちはみな義人であったから、この人たちが必ず救われたことは疑いがない。

アルマ24,27,このように死んだ者の中には1人の悪人もなく、また1,000人以上の人が始めて真理を知るようになった。これによって見るに、主は世の人々を救うためにいろいろな方法を用いたもうことが明らかである。

アルマ24,28,今このように多くの兄弟たちを殺したレーマン人の大部分は、アマレカイ人またはアミュロン人であって、大いニホル宗の信者であったが、

アルマ24,29,神の聖徒に加わった者たちには、アマレカイ人、アミュロン人またはニホル宗の信者である者はただの1人もなく、みなレーマンおよびレキュエルの正統の子孫であった。

アルマ24,30,これによって見るに、人が1度神の“みたま”に照らされて義にかかわることを知る深い知識を得てからとがと罪惡とに陥るならば、前よりも一掃かたくなになり、義にかかわることを知らなかった時よりも、もっと悪い有様になることが明かである。

アルマ25,,アルマ書 第25章

アルマ25,*-*,レーマン人の侵略、アミュロン人の復讐。殉教。アビナダイの予言がさらに成就したこと。

アルマ25,1,レーマン人はその兄弟たちを殺したからよくよく考えていよいよ腹を立て、ニーファイ人に復讐をしようと誓ったので、このころは再びアンタイ・ニーファイ・リーハイ人を殺そうとはしなかった。

アルマ25,2,しかし、レーマン人は軍を率いてゼラヘムラの地の境へ侵入し、アモナイハの地に住む民をせめてこれを亡ぼした。

アルマ25,3,その後レーマン人はたびたびニーファイ人と戦ったけれどもその戦で追い払われて殺された。

アルマ25,4,見ると、ノアの祭司であるアミュロンとその同量たちの子孫は、そのほとんど全部が殺されてレーマン人の戦死者の中にあった。これらはみなニーファイ人の手によって倒されたのである。

アルマ25,5,この祭司の子孫で殺されなかった者たちは、東の方の野へ逃げて行ってレーマン人を司どる権力を奪いとり、主を信仰するからと言って多くのレーマン人を火であぶりにして殺した。

アルマ25,6,このわけは、レーマン人の中で多くの人々はそれまでに多くの損害を受け、またいろいろの苦難をなけてから、前に自分の国でアロンとその兄弟たちに教えられた言葉を思い出し、それがためにようやく自分たちの先祖からの言伝えを信ぜずにかえって主を信じ、また主

アルマ25,6-1,ニーファイ人に大きな力を与えたもうことを信ずるようになったからである。野に於ては、このように心を改めて主の教会へ入った者が多くあった。

アルマ25,7,しかし、アミュロンの子孫の残りの者で司と成った者たちは、今言ったようなことを信じているレーマン人をみな殺させた。

アルマ25,8,このようにひどい虐殺をしたから、殉教をした者の同胞の中に怒りを起した者が多くあって、とうとう荒野で争闘が始まった。そしてレーマン人はアミュロンとそのふおうりょうたちの子孫を狩り出してこれを殺し始めたから、かれらは東の方の荒野へ逃げて行った。

アルマ25,9,しかし、今になってもレーマン人はかれらを野の獣のように狩り出しているのである。アビナダイが自分を焼き殺させた祭司らの子孫について行った予言は、ここに於て成就した。

アルマ25,10,その予言には“お前たちが私にする事は将来のことを示すものとなる”と言ってある。

アルマ25,11,アビナダイは神を信ずるために火あぶりにされた最初の人であった。それであるから、その予言は自

分が焼き殺されたように多くの者も焼き殺されると言うことである。

アルマ25,12,アビナダイはまたノアの祭司らに予言はちようど自分を殺すように多くの人々を殺すが、その後ちようど羊飼のない羊が猛獣に追われて殺されるようにかれらも追い散らされて殺されると言った。見よ、今はたしてこの予言が成就して、ノアの祭司らの子孫はレーマン人

アルマ25,12-1,散らされ、野の獣のように狩り出して撃たれた。

アルマ25,13,さてレーマン人はニーファイ人に勝てないことを認めて国へ帰ったが、その中の多くは移って来てイシメルシメルの地またはニーファイの地に住み、神の聖徒であるアンタイ・ニーファイ・リーハイ人の仲間に入った。

アルマ25,14,このレーマン人もまたその兄弟たちにならってその武器を地に埋めて義人となり、主の道をふみ行つて主の命令と律法とを守った。

アルマ25,15,これらの人々はまたモーセの律法も守った。なんとすれば、モーセの律法はまだ必ずしもその全部の目的を達せず、その効用があつたので、それを守る必要があつたからである。しかしかれらはモーセの律法を守りながらも、キリストの降臨を待ち望み、モーセの律法は

アルマ25,15-1,キリストの降臨を示すものであると思い、キリストが自分たちに現われたもうまでは、この律法の表面上の儀式を行わねばならぬと信じていた。

アルマ25,16,かれらはモーセの律法によって救われるとは信じていなかった。モーセの律法はただかれらのキリストを信ずる信仰を厚くしただけであつた。かれらは将来起ることを示す予言の“みたま”に頼りながら、永遠の救いにあずかると言う望を抱き、信仰によってこの望を

アルマ25,16-1,保っていた。

アルマ25,17,それであるから、アンモン、アロン、オムネル、ヒムナイおよびその同僚である者たちは、主がその祈りに応じて祝福を与えたまい、またこれまでに結んだ約束を1つのこらず守りたもうたにより、自分たちがすでにレーマン人の間に成功を治めたことを非常に嬉しく思

アルマ26,,アルマ書 第26章

アルマ26,*-*,アンモン、主に誇りを感じず。正義を誇る。自身と兄弟の受けた祝福を数え直す。

アルマ26,1,アンモンがその兄弟たちに話した言葉は次のようである“私の兄弟たちと私の同僚宣教師たちよ。私はあなたたちに言う。私たちは本当に喜ばなくてはならぬではないか。私たちがゼラヘムラの地を出たときに、神がこれほどまでに大きな祝福を下さると考えることがで

アルマ26,1-1,できただろうか。

アルマ26,2,神はどのような大きな祝福を私たちに下さったかあなたたちは知っているか。

アルマ26,3,ごらん、私はあなたたちに代って答える。私たちの同胞のレーマン人は暗黒の有様に在った。しかも最も暗い淵に沈んでいた。しかし、今は神の驚嘆すべき光を受けている者がいかにも多いではないか。私たちが神の御手に使われてこの大きな事業を為し遂げたのは、本

アルマ26,3-1,賜うた祝福である。

アルマ26,4,ごらん。何千人と言うレーマン人は喜び楽しんですでに神の羊の中へ入った。

アルマ26,5,たとえて見れば、畑の穀物が熟したときあなたたちが鎌を入れて1日中一生けんめいに借入をしたと同じことである。それであるから、あなたたちはさいわいである。あなたたちの刈田穀物のたばの数を見よ。このたばは無駄にならぬように倉の中へ納められるから、

アルマ26,6,終りの日に嵐に付記落とされることなく、つむじかぜに吹き散らされることなく、嵐が来ても前以て貯蔵すべき場所へ集めてあるから、嵐の吹き入る憂いがなく、敵が追いやろうと思う所へ嵐で吹きとばされることもない。

アルマ26,7,かれらは取り入れを司どりたもう主の御手にあつて主のものである。それであるから、主は終りの日にかれらを挙げたもう。

アルマ26,8,私たちの神の御名に患者し奉る。私たちは神の御名を讃美して歌おう。主はとこしえに義を行いたもうから、主の聖い御名に感謝をしようではないか。

アルマ26,9,私たちがもしもゼラヘムラの地からここに来なかったならば、私たちを心から愛し、また私たちが本当に愛しているこの同胞は、今でもやはり私たちに對し憎しみを抱いて苦しみを与え、また神を知らなかったであろう”と。

アルマ26,10,アンモンがこう言ったのはその兄弟のアロンがこれをとがめて言った“アンモンよ、おそらく汝は喜びのためにわれを忘れて大言を吐くようになったのであろう”と。

アルマ26,11,しかしアンモンはこれに答えて言った“私は自分の能力も智恵も誇るのではない。ごらん、私は喜びが満ち充ちて心に溢れるばかりであるから、私の神がましますことを喜ぼう。

アルマ26,12,私は自分が取るに足りない者であることを知っている。私の能力は弱い。それであるから、私は自分のことを誇らないでただ私の神のことを誇る。それは神のたもう能力によって何事もすることができるからである。ごらん、私たちはこの土地で多くの大きな奇跡を行つ

アルマ26,12-1,私たちはとこしえに神の御名にこの誉を帰して讃美する。

アルマ26,13,ごらん、神が地獄の苦痛から救い出したもうた私たちの同胞は何千人と言う数ではないか。これらの者は贖いを与えたもう御方の愛について讃美の歌を唱うようになった。これはひとえに私たちの中にある神の御言葉の能力によるのである。それであるから、私たちは本

アルマ26,13-1,非常に喜び楽しまなくてはならぬのではないか。

アルマ26,14,まことに神はいと高き神にましまして、私たちの同胞を地獄の鎖から解き放して下さったのであるから、私たちは本当にとこしえに神を讃美しなくてはならない。

アルマ26,15,この同胞たちは永遠の暗黒と滅亡とに取り巻かれていたが、神はその無窮の光でかれらを照し、永遠の救いを得る所へかれらを導きたもうた。このようにしてかれらは今比なく豊かな神の愛で取り巻かれている。私たちは本当に神の御手に使われてこの偉大にして驚嘆す

アルマ26,15-1,事業に成功を収めた。

アルマ26,16,それであるから、私たちは誇りを感じずべきではないか。本当に私たちは主に誇りを感じ、喜びが満ちてあふれるためにたのしみ、とこしえに私たちの神を讃美しよう。誰も主に誇りを感じすぎると言うことはできない。誰も主の大能と世の人々に尽くしたもう憐みと堪忍

アルマ26,16-1,堪忍とをほめすぎると言うことはできない。私が自分の心に感じていることはその万分の一も言えない。

アルマ26,17,神は私たちを汚れと罪惡に満ちているおそろしい有様から救いたもうた。神がこのように私たちを憐みたまうと、誰がかねてから考えることができたであろうか。

アルマ26,18,ごらん、私たちは怒って出て行き、おそろしい脅迫をして教会を破ろうとした。

アルマ26,19,その時神は、なぜ私たちにおそろしい滅亡を受けさせたまわなかったか、なぜ私たちにその正義の剣を落して永遠に望のない境涯にお置きにならなかったか。

アルマ26,20,このことを考えてみてさえも、私の身も心もあどずさる心持がする。ごらん、神はその正義を以て私たちに裁きを与えず、かえってその深い憐みを垂れてあの死と不幸悲惨との永遠の淵を私たちに越えさせ、私たちの身も霊も救われるところまで導きたもうた。

アルマ26,21,肉翌に従う者でこれらのことを知っている者は誰もいない。ごらん、悔い改めた者でなければこれを知っていないのである。

アルマ26,22,悔い改めて信仰をあらわし、善いことを行ってたえず祈る者は、神の奥義を悟る能力を授かり、まだ示されていないことを明らかに示す親王を与えられ、また何千人と言う人を悔い改めさせる能力を与えられることは、私たちがこの同胞を悔い改めさせる能力を与えられ

アルマ26,22-1,同様である。

アルマ26,23,私の兄弟たちがゼラヘムラの地に居ったとき、同胞であるレーマン人に道を宣べ伝えるために、ニーファイの地へ上ると言うことをその地の兄弟らに話したところ、かれらが私たちをあざけり笑ったことをあなたたちは覚えているか。

アルマ26,24,その兄弟たちは私らに言った‘お前たちはレーマン人に真理を悟らせることができると思うか。レーマン人は殺伐なことを楽しみ、ひどい悪事をして生涯を送りその為すところは始めから罪人のする行いである。お前らはこのように強情な民にその先祖の言伝えが義しくな

アルマ26,24-1,認めさせることができると思うか’と。兄弟たちよ、あなたたちはかれらがこのように言ったことを覚えている。

アルマ26,25,またかれらは‘レーマン人がわが国をふみにじり、われらを亡ぼさぬよう、武器を執ってかれらに刃向い、その罪惡と一しよにこれを地上から亡ぼしてしまおうではないか’と言った。

アルマ26,26,しかし愛する兄弟よ、私たちが野へ来たのはレーマン人を亡ぼすためではない。レーマン人の中の僅でもこれを救うことができるかと思ったためである。

アルマ26,27,それであるから、私たちがすっかり元気を失ってまさに引き返そうとしたときに、主が私たちを慰めはげまして仰せになった。‘汝らの同胞であるレーマン人の間に行き、身に迫る苦難を気長に堪え忍べ。われは汝らに成功を収めさせる’と。

アルマ26,28,ごらん、私たちはすでにレーマン人の中に来て、身に迫る苦難に堪え、あらゆる欠乏を忍び、世の人々の慈悲ばかりでなくまた神の憐みにも頼って、1軒1軒めぐって歩き、

アルマ26,29,レーマン人の家へ入って教えを伝え、道ばたで、山の上で、神殿でまた会堂で民に道を伝えた。また1方では、追い出され、あざけられ、唾を吐きかけられ、顔を打たれ、石で打たれ、また捕まって強い縄でしばられ、牢屋にも入れられた。しかし神の大能と智恵とによ

アルマ26,29-1,私たちは再び救われた。

アルマ26,30,私たちは自分の働きの結果、できるならば1人でも救うことができようかと思って甘んじてあらゆる艱難

を身に受けた。そして私たちは、もし私たちのために多少でも救われる人があったならば、この上もない喜びであると常に思っていた。

アルマ26,31,今見るに私たちの働きの結果は明かである。その結果は僅かであるか。そうではない。信者の数は非常に多く、しかも信者がその兄弟たちに対する愛情の深さは、かれらに真心のあることを証明している。

アルマ26,32,かれらは、その敵さえも殺すよりはむしろ自分の命を捨てる方がよいと思い、同胞に対する愛情が深いから、かれらの武器を深く地の中に埋めてしまった。

アルマ26,33,ごらん、今日までこの全地の中でこのように深い愛情があったことがあるか。いや、それはニーファイ人の中にさえもなかったものである。

アルマ26,34,ニーファイ人は兄弟たちに対してたびたび武装をし、またたびたび自分たちが殺されないようにしたが、ごらん、この信者の中にはその命をぎせいにしたものがいかに多いことか、しかし、このようにして死んだ信者はその愛情が深くて罪を憎んだ人たちであるから、私

アルマ26,34-1,かれらがすでに神のみもとへのぼっていることを知っている。

アルマ26,35,今私たちは本当に喜ぶべきではないか。およそ世界始まってこのかた、私たちほど喜ばねばならぬわけのある者はない。私は喜びが溢れて私の神に誇りを感じずようになった。神はことごとく的能力と、ことごとくの知識とを具え、一切の事とを悟り、憐み深くましま

アルマ26,35-1,およそ悔い改めてその皆を信ずる者はみなこれを救いたもう。

アルマ26,36,私のこう言うのがもしも大きなことを言っているのであるなら、私はこれらもこのように大きなことを言おう。なぜならば、神は私の生命、私の光、私の喜び、私の救いであって、また私を永遠の不幸悲惨の境涯から救いたもう方であるからである。イスラエルの木の枝

アルマ26,36-1,親木から張られてほかの土地へさまよって言ってしまったこの民を心にかけて居りたもう私の神の御名に感謝をせよ。また、不案内の土地にさまよっている私たちを心にかけて居りたもう私の神の御名に感謝をせよ。

アルマ26,37,さて、私の兄弟らよ、神は民がどこに居ってもこれを心につけて、これを数え、自身の心に満ちている慈悲深い恩恵を全世界に及ぼしたもう。これが私の喜びであり、また私が非常に感謝をするところである。私はとこしえに私の神に感謝を捧げよう。アーメン。

アルマ27,,アルマ書 第27章

アルマ27,*-*,アンタイ・ニーファイ・リーハイの民、ゼラヘムラに安全を求める。この民をアンモンの民と呼ぶ。ジェルシヨンの地をかれらに与える。

アルマ27,1,ニーファイ人と戦おうとして進んだあのレーマン人の軍は、ニーファイ人を亡ぼそうとたびたび戦った後、これを亡ぼすはかりごとが無益であることを悟ってニーファイの地へ帰った。

アルマ27,2,アマレカイ人は損害を受けたために非常に怒ったが、ニーファイ人に復讐ができないのを知り、レーマン人を先導してその同胞であるアンタイ・ニーファイ・リーハイ人に大して怒らせたので、レーマン人はまたアンタイ・ニーファイ・リーハイ人を殺し始めた。

アルマ27,3,ところが、アンタイ・ニーファイ・リーハイ人はこのたびも武器をとることを拒み、敵が思うままに自らを殺すに任せた。

アルマ27,4,アンタイ・ニーファイ・リーハイ人は、ちょうど永遠の滅亡から自分たちを救うために神からつかわれた天使をもてなすように、アンモンとその兄弟たちをもてなしたから、この両方は互いに深く愛していた。それであるから、アンモンとその兄弟たちは、かれらが

アルマ27,4-1,残酷に殺されるのを見て、憐みの情に絶えず、王に向って言った。

アルマ27,5,私たちは主の民であるこの人々を集めて、私たちの同胞であるニーファイ人の住んでいるゼラヘムラの地へ、私たちが亡びないように敵を避けて下って行こうではないかと。

アルマ27,6,しかし王齒“見よ、われらがニーファイ人に大して犯した罪とたびたびかれらを殺した罪があるから、ニーファイ人は必ずわれらを殺すであろう”と答えた。

アルマ27,7,よってアンモンは“私は行って主にお伺いをする。もしも主が同胞であるニーファイ人の所へ下って行くと仰せになったら、王はお行きになるか”と言った。

アルマ27,8,そこで王は“主がもしも行けと仰せになるならば、われらは必ず同胞であるニーファイ人の所へ下って行って、われらが今日までかれらを殺した罪とかれらに対して犯した多くの罪とをつぐのうまでニーファイ人の奴隷になろう”と言ったが、

アルマ27,9,アンモンは王にすすめて“民の中に奴隷のあることは、わが父の定めたニーファイ人の国法が禁じているから、私たちはただ行って同胞であるニーファイ人の情けに任そう”と言った。

アルマ27,10,そこで王が、“主に伺え。もしも主が行けと仰せになるならば、われらはすぐと行こう。そうでなければこの地で亡びるだけである”と言ったので、

アルマ27,11,アンモンが行って主に祈って何うと、主が、
アルマ27,12,"この民が亡びざるよう、この地を退かせよ。レーマン人を先導しその兄弟らを怒ってこれを殺させるアマレカイ人の心はすでにサタンが支配しているによる。われがこの民を保護するにより、この民はこの1代の間さいわいなり"と仰せになったから、
アルマ27,13,アンモンは早速行って主にうけたまわった一切の言葉を王に聞せた。
アルマ27,14,そこでかれらはことごとくその民、すなわち主の民たちとことごとくその家畜の群とを集めてその地を去り、ニーファイの地とゼラヘムラの地との間にはさまっている荒野へ入って、ついにゼラヘムラの国境近くへやって来た。
アルマ27,15,この時アンモンはかれらに勧めて"ごらん、私と私の兄弟たちはゼラヘムラの地へ入って行くから、お前たちは私共が帰ってくるまでここに待って居よ。兄弟であるニーファイ人がその地へ入って住むことをお前たちに許すかどうか、その胸の中をさぐってくるから"と
アルマ27,16,アンモンとその兄弟たちはゼラヘムラの地へ入って道を進んで言ったが、前に話したところのある場所でアルマに逢った。これはまことに喜ばしい対面であった。
アルマ27,17,アンモンは胸いっぱい喜びが溢れ、また神の恵にすっかり感じ入って、その身の力さえもなくなるほどとなりそのためにまた地に倒れた。
アルマ27,18,これはまことに非常な喜びではないか。ごらん、これはまことに心をこめて悔い改め、へりくだって幸福を求める者でなくては受けない喜びである。
アルマ27,19,兄弟たちに会った時にアルマの受けた喜びは本当に大きなものであった。アロン、オムネル、ヒムナイらの喜びもまた大きかったが、その身の力に勝つほど大きなものではなかった。
アルマ27,20,アルマはその兄弟たちは一緒に大判事のところへ行き、自分らの同胞であるレーマン人の中に滞在していた中に、ニーファイの地で逢ったことを一切話した。
アルマ27,21,そこで大判事は全国にふれを廻し、同胞であるアンタイ・ニーファイ・リーハイ人が自分らの国の中へ移住してくることを許してよいかどうか人民の意見を聞いた。
アルマ27,22,すると、人民は答えて言った"見よ、われわれは東の方にあつて海に近く、バウンテフルの地の南に隣しているジェルシヨンの地をアンタイ・ニーファイ・リーハイ人にゆずり、これをこの同胞に与えてその受け嗣ぎの地としよう。
アルマ27,23,またわれわれは、ジェルシヨンの地とニーファイの地の間に軍隊を置いて、同胞であるアンタイ・ニーファイ・リーハイ人をジェルシヨンの地で保護しよう。なぜならば、アンタイ・ニーファイ・リーハイ人は武器を執って自分の兄弟であるレーマン人と戦うならば、こ
アルマ27,23-1,これは再び罪を犯すこととなるのを恐れるからである。かれらが武器を執ることをこれほど恐れるのは、かれらが以前に多くの殺戮と恐ろしい罪を行った後にこれを痛く後悔しているからである。
アルマ27,24,今われわれは同胞であるアンタイ・ニーファイ・リーハイ人がジェルシヨンの地に住めるようにその地を与えてやり、またわが軍の給養を＋目るためにかれらの収入の1部分を治めると言う条件の下に、わが軍を置いてかれらをその敵から護ってやろう"と。
アルマ27,25,アンモンはこれを聞いてアンタイ・ニーファイ・リーハイ人が天幕を張っている荒野へアルマと一しょに帰り、かれらに以上のことをことごとく話した。またアルマは自分がアンモンとアロンとほかの兄弟らと一しょに心を改めて神の道は入ったときのことを話した。
アルマ27,26,そこで、アンタイ・ニーファイ・リーハイ人は非常に喜びジェルシヨンの地へ下つて行ってこれを所有した。ニーファイ人はアンタイ・ニーファイ・リーハイ人に"アンモンの民"と言う新しい名をつけたから、この時から後はこの名を以てこの民をほかの民と区別した
アルマ27,27,アンモンの民はニーファイの民の中に在って神の教会の民と共に数えられ、また神と万民とに対する熱心と前途句とに於て著しく、何ごとにも全く義しく正直であつて終りまでも固くキリストを信じた。
アルマ27,28,かれらは、同胞や兄弟の血を流すことを最も憎むべきことであると思つていたから、同胞や兄弟に向つて武器を執らせようとかれらを誘つても効果がなかった。またかれらはキリストと復活とに関する希望と考えがあるために、死を少しも恐ろしいと思わなかった。キリ
アルマ27,28-1,キリストが確に打ち勝ちたもうたと言うので、かれらにはあたかも死が無いかのようであつた。
アルマ27,29,それであるから、このアンモンの民は剣と太刀をとつてその同胞や兄弟を殺すよりも、むしろ同胞や兄弟が加えることのできる最も無残であつて惨ましい殺害の方を甘んじて受けた。
アルマ27,30,従つて、かれらは熱心であつて愛せられる善徳の民であり、また厚く主の恵を受ける民であつた。
アルマ28,,アルマ書 第28章
アルマ28,*-*,レーマン人。ニーファイ人に戦を開く。大きな戦。レーマン人敗れる。深い哀悼。
アルマ28,1,アンモンの民がジェルシヨンの地に居所を定め、教会もその所に設けられ、ニーファイ人の軍隊がジェ

ルシヨンの地とゼラヘムラの全地やその国境のまわりに配置された後、レーマン人の軍隊は早くもその同胞であるアンタイ・ニーファイ・リーハイ人を追って野へ侵入

アルマ28,2,こうしてここに1つの大戦が始まったが、これはリーハイがエルサレムを幸手このかた全地の民の中にこれまでなかったほどの大戦であって、レーマン人は数万人も殺されここかしこに散らされた。

アルマ28,3,またニーファイの民の軍も大きな殺戮に逢ったが、レーマン人の軍隊はついに追い散らされてニーファイの民の軍は帰国した。

アルマ28,4,ここに於て全国いたるところニーファイの民の中に大いに悲しみ嘆く声が聞え、

アルマ28,5,やもめはその夫の亡くなったのを、親は息子が亡くなったのを、また娘はその兄弟が、兄弟はその父が亡くなったのを嘆き、このようにして各人がその殺された親戚を悲しみ悼む声がいたるところに聞えた。

アルマ28,6,これはまことに悲しい時であって、人々が真面目になって大いに断食と祈りに努めた時である。

アルマ28,7,このようにしてニーファイの民を治める判事治世の15年目は過ぎ去った。

アルマ28,8,アンモンとその兄弟たちの記事、ニーファイの地に於けるかれらの旅行と苦難と悲嘆と苦痛と想像も及ばない喜びの記事、またアンモンの民がジェルシヨンの地へ迎えられて安全になったことの記事は上に誌した通りである。万民の贖い主である主が、アンモンとその兄

アルマ28,8-1,アンモンの民とをとこしえに祝福したまわんことをねがい奉る。

アルマ28,9,上に記したのはニーファイ人の国の内部の戦争と不和の記事であって、またニーファイ人とレーマン人との戦の記事である。これで判事治世の15年目は終った。

アルマ28,10,判事治世の1年目から15年目までの間に幾千人と言う人々が滅亡し。恐ろしい殺伐なことが行われたが、

アルマ28,11,死人でそのしかばねを地の中に葬られた者が何千人もあり、そのしかばねを地上につみ重ねられて今なお朽ちている者が何千人もあり、しかも死んだ親戚のために悲しみ憂っている者がまた何千人もある。せぜならば、主の誓言によってその親戚が家員に不幸な有様に

アルマ28,11-1,思う理由があるからである。

アルマ28,12,また一方では、何千人と言う人たちがその親戚の亡くなったことを悲しんだが、この親戚の人たちがよみがえって、いつまでも尽きない幸福な有様で神の右に居ることを望み、また主の誓約によってこの望みが叶うことを知って喜んだ。

アルマ28,13,それであるから、これによって、悪魔が人の心を惑わそうと工夫をしたずるい悪企から生ずる悪の力と罪と悪事とのために、人間が互に非常に違った者となっていることが明かである。

アルマ28,14,また主の葡萄畑で働く人々が、大いに勉めはげまなくてはならないことも、また悲しまねばならない重なる理由も喜ばねばならない重なる理由も明かである。その悲しみは人間に起る死と滅亡とのために生じ、喜びは生命を与えるキリストの光明のために生ずるのである。

アルマ29,,アルマ書 第29章

アルマ29,*-*,万人に悔改めを叫ぶアルマの切な願い。賢く万事を取り計いたもう神の御言葉。アルマ、その兄弟たちの成功を喜ぶ。

アルマ29,1,ああ私が天使になって私の心の願いを達することができたら善いものを。私の願いとは出て行って神のラッパのように地を震わせる声で話し、万民に悔改めをすすめることである。

アルマ29,2,まことに私は雷のような声で悔改めと贖いの計画とを万民に宣べ伝え、もはや全地の上に悲しみのないように悔い改めて私の神に立ち帰れと万民にすすめようと思う。

アルマ29,3,しかしごらん、私はただの人であるからこのように願うのさえも罪である。私は主が私に許したもうたことだけで満足しなくてはならないからである。

アルマ29,4,私は多過ぎる希望をもって正義の神の堅い取り極めを不満に思ってはならない。なぜならば、人が死を願うのにも生を願うのにも神はこれに応じたまい、人の心が救を求めるのも亡びを求めるのも神はこれを許したもうと言うことを知っているからである。

アルマ29,5,善も悪も一切の人々の前にある。善と悪とを区別することのできない者はこれを責めることができない。しかし、善悪の区別を知るのものは善を好むも悪を好むも生を好むも死を好むも、また喜びを好むも両親のところがめを好むも、各々の好むところに従って与えられる。こ

アルマ29,5-1,私は知っている。

アルマ29,6,私はこれらのことを知っているから、私は自分が任ぜられた務めをするほかに何も望むことはないはずである。

アルマ29,7,私は世界の隅々の人々にさえも道を伝えるためにどうして天使になりたいと望んでよからうか。

アルマ29,8,ごらん、主はどこもその国の人またはその国の言葉に通じている人に、智慧に於て違っていないかぎり、すなわち自分のみこころにかなう程度に於て神の道をその国民に宣べ伝えさせたも

う。それであるから、主が正義と真理とにたがわず賢く万

アルマ29,8-1,万事を取り計いたもうことが明らかである。

アルマ29,9,私は主が私に下したもうた命令を悟り、これに誇りを感じている。私は自分に誇りを感じずるのではない。主が私に命じたもうたところを誇りに思うのである。すなわち、私は神の御手に使われて誰かを悔い改めさせられるかと思って誇りを感じまた喜ぶのである。

アルマ29,10,それで、もしも、兄弟の中の多くが真心から悔い改めてそのかみである主に立ち蛙のを見るときには、私の全身全霊は喜びに満ちて、主が私のためになしたもうたこと、すなわち私の祈りを聞き届けて下さったことと、私に深い憐みの手を伸して下さったこととをその時

アルマ29,10-1,起すのである。

アルマ29,11,私はまた私の先祖が束縛せられていたことを思い出す。私は主が私の先祖を奴隷の境涯から救い出して、これによって主の教会を立てたもうたことを確に知っている。アブラハム、イサク、ヤコブの神であって主なる神は、まことに私の先祖を奴隷の境涯から救いたもう

アルマ29,12,私は先祖が束縛されていたことをいつも憶えている。私の先祖をエジプト人の手から救いたもうたと同じ神はまた先祖を奴隷の状態からも救いたもうた。

アルマ29,13,この同じ神は私の先祖の中にその教会を立て、また聖い召しにより私をこの国の人々に道を宣べ伝える職に任命し、著しい成功を収めさせたもうた。それであるから、私は喜びに満ち溢れている。

アルマ29,14,私はただ私1人の成功を喜ぶだけではない、またニーファイの地へ行って帰って来た私の兄弟たちが収めた成功をもっと喜ぶのである。

アルマ29,15,私の兄弟たちは非常によく働いて多くの実を作った。それであるから兄弟たちの受ける報いはいかにも大きいではないか。

アルマ29,16,この兄弟たちの収めた成功のことを考えると、私は嬉しくてたまらないので、霊が肉体から離れるかと思うほど夢中に楽しい。

アルマ29,17,ねがわくは、この兄弟たちとその骨折りの果実である人々とが神の王国に席を占めて、再びその国から出て行くことなく、永遠に神を讃美することを許したまえ、ねがわくは神よ、私の捧げるこの祈りをききとどけたまえ。アーメン。

アルマ30,,アルマ書 第30章

アルマ30,*-*,キリストに反対する者、コラホル。ジェルシオンから追放されてギデオンで捕えられる。ゼラヘムラで審問を受ける。コラホル、しるしを見せよと行って唾となる。コラホルのみじめな死。

アルマ30,,アルマ書 第30章

アルマ30,*-*,キリストに反対する者、コラホル。ジェルシオンから追放されてギデオンで捕えられる。ゼラヘムラで審問を受ける。コラホル、しるしを見せよと言って唾となる。コラホルのみじめな死。

アルマ30,1,さて、アンモンの民がその住居をジェルシオンの地に定め、レーマン人の軍隊がもはやニーファイ人の国から追い払われてその死者がニーファイ人に葬られ、

アルマ30,2,またニーファイ人が味方の死者を葬って、その断食と喪と祈りととの期節が終わってからは(ニーファイの民を治める判事治世16年目の内)全国が平和になった。レーマン人の死者はその数が非常に多かったから、これを勘定せず、またニーファイ人の死者もその数をしら

アルマ30,3,国民は主の命令に服従し、モーセの律法に従って固く神の儀式を守った。これはモーセの律法がその目的を達してその効能がなくなるまではこれを守れと教えられていたからである。

アルマ30,4,それであるから、ニーファイの民を治める判事治世の16年目は年中国民の間に不和がなく、

アルマ30,5,またその17年目も年中ひきつずき平和であった。

アルマ30,6,ところが17年目の末のころゼラヘムラの地に1人の男があらわれたが、これはキリストの反対者であった。それはこの男が予言者たちがキリストの降臨について宣べた予言に反対して民にかれの説を宣べ始めたからである。

アルマ30,7,このころは人の信教を禁止する法律はなかった。それは人々を不平等の地位に置く国法があることは全く神の命令に叛くからであった。

アルマ30,8,聖文に"今日汝ら各々己が事えんと欲する者を選べ"とある。

アルマ30,9,それであるから、もしも人が神に事えたいと思うならば神に事える特権がある、すなわち人がもし神を信ずるならば神に事える特権があった。しかし、もしも神を信じない者があってもこれを罰する法律はなかった。

アルマ30,10,しかし故意に人を殺せば死刑に処せられ、強盗、盗み、姦淫、またはすべてこのような罪悪を行えば罰を受けた。

アルマ30,11,当時、人はsno犯罪の重い軽いによって裁判を受けると言う国法はあったが、人の信教を禁ずる国法はなく、人はただ犯罪の罰を受けるだけであった。それであるから、人はみな平等の地位に居ったのである。

アルマ30,12,いまこのキリスト反対者はコラホルと言う者であって(国法も罰することができなかったから)、キリストと言うものはあるはずがないと民に教え始めた。この男の言ったことは次の通りである。

アルマ30,13,"愚で空しい望の奴隷になっている人たちよ。あなたたちはどうしてこのような愚なことのためにくびきを自分の身にかけけるのか。誰も前以て将来のことが知れないのに、あなたたちはどうしてキリストを待ち望んでいるのか。

アルマ30,14,あなたたちが聖い予言者から伝えられた予言であると言っていることは、あなたたちの先祖が伝えた愚な伝説にすぎない。

アルマ30,15,あなたたちは、どのようにしてその説が確であることを知っているか。あなたたちはまだ見ない物事については何にも知ることができない。それであるから、これからキリストがこの世に来ると言うことを前以て知ることにはできないのである。

アルマ30,16,あなたたちは前以て将来のことを推量して、自分の罪が赦されるのを先見すると言っているが、これは精神が狂っている結果である。このように精神が乱れるのはあなたたちをまどわして、偽を本当と信じさせる先祖の伝説から起ることである"と。

アルマ30,17,コラホルはこのようなことを多くの人民に話し、世の人の罪を贖うなどとはできるはずがないことである、またこの世に於て人の成功するとしまいとはそれぞれの人の工夫に由るのであって、各々の器量に応じて栄え、各々の力量に従って勝つと言うことを教え、また人

アルマ30,17-1,することは何をしてても罪にはならないと説いた。

アルマ30,18,この男はこのように教えて、多くの人の心をまどわして恥しげもなく罪を犯させ、多くの男女を誘ってにだらな行いをさせたが、また人間が死ねばそれで終りであると言って民に教えた。

アルマ30,19,この男はまたかつてレーマン人であったアンモンの民にもこれらの説を教えようとしてジェルシヨンの地へも行った。

アルマ30,20,しかし、アンモンの民は多くのニーファイ人よりも賢かったから、コラホルを捕えてかれを縛り、その地方の民の大祭司であるアンモンの所へ送った。

アルマ30,21,ところでアンモンはコラホルをその地から追放した。それでコラホルは今度はギデオンの地へ行き、その住民に自分の教えを宣べた。しかしここでも対して成功を収めなかった。そのわけはと言うと、かれが捕まって縛られその地方の大祭司と高等判事との前に光れて

アルマ30,21-1,行ったからである。

アルマ30,22,その時大祭司はコラホルに問うて言った"汝はどう言うわけで歩きまわって主の道を曲げるのか。どう言うわけで将来キリストは来りたまわないとこの民に教えてその喜びを妨げるのか。どう言うわけで聖い予言者たちの予言にことごとく反対して言うのか"と。

アルマ30,23,この大祭司はその名をギドーナと言ったが、コラホルはギドーナに答えて"そのわけは、私はあなたたちの先祖から来た愚な伝説をこの民に教えず、また昔の祭司たちがこの民を治める権力を奪い取って民をいつまでも無知の境涯に置き、その独立を妨げてあなたたちの

アルマ30,23-1,従わせるために立ってたあの愚な儀式と典礼とによって、民が自分で自分の自由を束縛するように教えないからである。

アルマ30,24,あなたはこの国民を自由の民であると言うが、私はこの国民は奴隷になっていると明言する。あなたは昔から伝わったあの予言が本当であると言うが、私はあなたがそれが本当であることを確に知ってはいないと断言する。

アルマ30,25,あなたはこの民がその始祖のたがのために罪があつて墮落したものとしているが、私はその及の行いのために罪があると言うことはないと言う。

アルマ30,26,そしてあなたはまた将来キリストがこの世に来ると言うけれども、私はあなたが将来キリストが来ることを確に知ってはいないと断言する。あなたはまたキリストが世の人の罪を贖うために殺されると言って、

アルマ30,27,この民をまどわし、その先祖から来た愚な伝説と自分の欲望に従わせるばかりでなく、民の骨折りによって自分の腹を肥すために奴隷のように民を抑えている。それで民は思い切って大胆に見上げることもせず、またその権利と特権をもつ勇氣もない。

アルマ30,28,まことにこの民は祭司たちを怒らせはしないかと思って、自分らの持物を使うことさえもおそれている。ところが、その祭司たちは心のままにくびきを民にかけ、その伝統と空想と出来心と幻と奥義とによって、もしもその言葉に従わないと神と言うまだ知られていない

アルマ30,28-1,触れると民に信じさせた。神と言うものはいまだかつて人に見られず知られないものであって、過去にもあつたことはなく、現在にも将来にもあることはないのである"と。

アルマ30,29,第差異sと高等判事とはコラホルの心がかたくなであるのを見、またかれが神さえもののしるのを認めるや、これに何の答もせず、ただかれを縛らせて下役にわたし、ゼラヘムラの地へ送ったがこれはコラホルをアル

マと全国を支配する大判事との前に出すためであった

アルマ30,30,ところが、コラホルはアルマと大判事との前に引き出された時にも、またギデオンの地で言ったように言って神をけがした。

アルマ30,31,かれはアルマに向い能弁を振って祭司らと教師らとをののしり、この人たちが民の骨折りで自分の腹を肥すために、民を誘ってその先祖の愚な伝説を信じさせることを訴えた。

アルマ30,32,そこでアルマはかれに答えて言った“われわれがこの民の骨折りで自分たちの腹を肥やしていないのは汝が知っていることである。私は、私の民に神の道を宣べるためにたびたび全国をまわってあるいたが、判事治世の始めから今になるまで自分の身を支えるためには自

アルマ30,32-1,労働をした。

アルマ30,33,私が教会でした働きは多いけれども、いまだかつてこれがために1セナインも報酬を受けたことはなかった。また私の兄弟らも裁判職を務める者のほかは皆そうである。裁判職を務めている私たちでさえも国法の定める通り務めの時間に応じて俸給を受けるだけである。

アルマ30,34,われわれがもし教会に於ける務めのために何にも受けないとするならば、われわれが真理を宣べ伝えて同胞の喜ぶところを見て自分も喜び楽しむほかに、教会で何のために働くのであろうか。

アルマ30,35,汝はわれわれが何の利益も受けていないのを知りながら、利益を得るためにこの人民に道を伝えていると訴えるのはどう言うわけであるか。見よ、この民の心に満ちているこれほどの喜びは、これがわれわれが民を欺いたために起ったと考えているのか”と。

アルマ30,36,するとコラホルは“その通り、そのために起ったと考えている”と答えた。

アルマ30,37,そこでアルマが“それでは汝は神がましますことを信ずるか”と聞くと、

アルマ30,38,コラホルは人事ないと答えた。

アルマ30,39,よってアルマはコラホルに言った“汝は神がましますことをまた否定するのか。またキリストも否定するのか。見よ、汝に言うが、私は神のましますことと、キリストが将来この世に来りたもうことを知っている。

アルマ30,40,汝は何の証拠があつて神がまします、またキリストは降臨したまわらないと言うのか。そう言う汝の言葉のほかには何にも証拠がないではないか。

アルマ30,41,しかし見よ。私は万物を以て神のましますこととキリストが降臨したもうことが本当であることを証明するばかりでなく、汝にもまた本当である証拠として万物があるのである。それであるのに、汝はまだこれらの事実を否定するのか。またこれらの本当であることを信ず

アルマ30,41,しかし見よ。私は万物を以て神のましますこととキリストが降臨したもうことが本当であることを証明するばかりでなく、汝にもまた本当である証拠として万物があるのである。それであるのに、汝はまだこれらの事実を否定するのか。またこれらの本当であることを信ず

アルマ30,42,見よ。私は汝がそれを信じていることを知っている。ところが汝は偽を言う霊につかれていて自分に神の“みたま”が宿らないようにこれを遠ざけた。今、悪魔が汝を支配してここかしこへ汝を行かせ、汝を使って悪事を行わせ、そして神の子らを亡ぼそうとしている”

アルマ30,43,するとコラホルはアルマに答えて“神があることを私に確に信じさせるために1つのしるしを示せ。神に能力があることを私に示せ。そうすれば汝の言葉が本当であることを確に信じよう”と言った。

アルマ30,44,しかしアルマはコラホルに向って“汝はもはや充分のしるしを持っている。汝は自分の神を試みようとするか。汝の同胞であるこれらの人々の証拠とすべての聖い予言者の証拠とがあるのに、まだ私にしるしを見せてくれと言うのか。見よ、聖文が汝の目の前にあるばかり

アルマ30,44-1,万物は神のあることを示している。大地もその表面にある万物も、大地の運動も、各々秩序正しくその軌道を運行する天体も、みなことごとく全能全権の創り主があることを証明している。

アルマ30,45,これでもまだ、汝は歩きまわってこの民の心をまどわし、神がないと言うのか。汝はこのように多くの証拠に反対しても信じないのか”と言ったが、コラホルがそれでも“もしもしるしを私に見せないならば、決して信じない”と言ったので、

アルマ30,46,アルマは再びコラホルに言った“見よ。私は汝がかたくなであつて、これまで言っても真理の“みたま”にそむき、自分の身も霊も永遠の亡びを招くから悲しく思う。

アルマ30,47,しかし見よ、汝がその偽とへつらいとを以て多くの人を亡ぼすよりは、むしろ汝1人の亡びの方がよい。それであるから、汝がもしも2度と神がないと言うならば、神は汝を打ちたもうてそれがために汝はおしとなりいつまでもその口を開けることができず、この民を欺

アルマ30,47-1,できなくなる”と。

アルマ30,48,ところがコラホルがアルマに向って“私は神がないとは言わないが、神があると言うことを信じない。私は汝もまた神があることを知らないと言っているのだ。だから、汝がもし私にしるしを見せてくれなければ私は決して神のあることを信じない”と言ってから、

アルマ30,49,アルマは“それなら汝は私の言ったように唾になれ。これは私が見せるしるしである。私は神の御名によって言う。汝は唾になって2度と口を利くことができない”と言った。

アルマ30,50,すると、果してコラホルはアルマが言ったように唾になって物を言うことができなかった。

アルマ30,51,大判事はこれを見て手をさし出し、コラホルに書き示して“汝は今や神の能力を確に信ずるか。汝は誰によってしるしを見せてくれとアルマに願ったか。汝にしるしを見せるためにアルマが汝を苦しめずにほかの人を苦しめるのを願ったか。見よ、アルマはすでに汝にし

アルマ30,51-1,示した。汝は今まだ疑っているか”と問うた。

アルマ30,52,するとコラホルもまたその手を差し出して書き記し“私はもはや物を言うことができないので唾になったことを知り、また神の能力のほかはこの禍を私に下すことのできるものはないことを認める。まことに私も前から神がましますことを知っていたのである。

アルマ30,53,ところが悪魔が私を欺いて天使の形で私に現われ‘この民はみなさまよってまだ知れていない神に仕えるようになってから、汝は行ってこの民を改心させよ’と命じ、また神はないと私に告げたばかりでなく私がこの民に教えねばならぬことも教えた。私は悪魔の言

アルマ30,53-1,心を喜ばすのを見てこれを本当だと信ずるようになった。こう言うわけで私は真理に逆らい、とうとうこのようなのろいをわが身に招いたのである”と言った。

アルマ30,54,そしてこのように書き示してから、のろいが自分の身からとり去られるように祈ってもらいたいとアルマに願った。

アルマ30,55,しかしアルマはこれに答えて言った“もしもこののろいが汝からとり去られると、汝はまたこの国民の心をまどわすであろうから、これは主のみこころにお任せする”と。

アルマ30,56,このようにしてコラホルが受けたのろいはとり去られなかったから、かれはついに追い出されて家から家へ食物を乞うてまわる身となった。

アルマ30,57,そしてコラホルの身に起ったこの言はすぐと全国に言いふらされた。すなわち大判事は全国の民にふれを廻し、コラホルの説を信ずる物はコラホルの受けたと同じ裁きを受けるといけなから皆すぐに悔い改めなければならないと戒めた。

アルマ30,58,これによってコラホルの信者たちはみなコラホルが罪人であることを認め、心を改めて再び主に立ち帰った。これでコラホルの行ったような悪事はみなそのあとを絶ち、コラホルは糊口のために家毎に食を乞うてあるいた。

アルマ30,59,さて、ニーファイ人から離れてゾーラムと言う人の配下に属し、自分からゾーラム人と言っている民がある。コラホルはこの民の所へ行ったとき、ある日その中をあるきまわっている際、押し倒されてとうとう踏み殺された。

アルマ30,60,このように私たちは主の道を曲げる者がどのような最後をとげるかを明らかに知り、また終りの日に当って悪魔は自分に仕えた者を助けず速にこれを地獄に陥し入れることも知ることができるのである。

アルマ31,,アルマ書 第31章

アルマ31,*-*,アルマ伝道隊を率いて神の教えに背くゾーラム人を改心させる。祈りに用いる聖台、ラメアムトム。ゾーラム人の礼拝の仕方。

アルマ31,1,コラホルが死んでからアルマはゾーラム人が主の道を曲げ、またその支配者であるゾーラムが人々の心を誘って物の言えない偶像を拝ませるなどの知らせを受けたから国民の罪悪のためにまたその心が憂い苦しんだ。

アルマ31,2,なぜならば、人民の中に罪悪が行われることを知るのはアルマにとって大きな憂いの種であったからである。それでアルマはゾーラム人がニーファイ人から分れたことを悲しんだ。

アルマ31,3,ゾーラム人は自分たちでアンテオヌムと名づけた所に集ったが、ここはゼラヘムラの地お東にあつてほとんど海岸に接しており、ジェルシヨンの地の南にあつて、その南の境はレーマン人が一ぱい居た野であつた。

アルマ31,4,それであるから、ニーファイ人はゾーラム人がレーマン人と交りを始めたならば、自分たちに大きな損害となるだろうと非常におそれていたが、

アルマ31,5,神の道を宣べ伝えるのは民に正しいことを行わせるのに非常に効があつて、剣やそのほかこれまでに用いたことのあるすべての方法よりも強く人の心を感化するから、アルマは神の道の力を用いる必要があると思つた。

アルマ31,6,それでアルマはヒムナイをゼラヘムラの教会にのこし、アンモン、アロン、オムネルをつれ、この3人のほかにミレクに居たアミュレク、ゼーブルムおよび自分の2人の息子をつれてゾーラム人の地へ行った。

アルマ31,7,この時アルマは長男のヒラマンをつれて行かなかった。アルマがつれて行った2人の息子は1人をシブロンと言い1人をコリアントンと言った。以上はアルマがゾーラム人に神の道を宣べ伝えるために、ゾーラム人の中へつれて行った人々の名前である。

アルマ31,8,このゾーラム人はニーファイ人と意見を異にしてニーファイ人から分れた者たちであつたから、前に神の

道を教えられたことがあった。

アルマ31,9,しかしながら、ゾーラム人はモーセの律法に従って神の誠命と法令とを守ることをせず、

アルマ31,10,また、誘惑に負けないようにたえず毎日神に祈り願えと言う教会の規則に従わず、

アルマ31,11,まことに多くの場合主の道を曲げたので、すでに大きな過ちに陥っていた。それでアルマとその兄弟たちはゾーラム人に神の道を伝えようとして一しょに出かけたのである。

アルマ31,12,さてアルマの1行がゾーラム人の国に着くと、アルマたちが驚いたことはゾーラム人はすでに会堂を建てて1週間の中の1日を“主の日”ととなえ、この日に一しょに寄り集ることにになっていた。しかしゾーラム人はアルマとその兄弟たちがまだ見たこともない仕方

で礼拝をしていた。

アルマ31,13,その礼拝の様子を見ると、会堂の中央に人が立つために建てられた1つの台があり、高さは人の頭よりも高くその頂上はただ1人の人が立てるだけの大きさであった。

アルマ31,14,そこで誰でも礼拝をしたいと思う者はこの台に登ってその上に立ち、両手を天に伸べて声高く次のように言わなくてはならなかった。

アルマ31,15,“聖い聖い神よ、私たちは汝が神であること、聖いこと、過去にも霊にましまし、現在も霊にましまし、将来もとこしえに霊にましますことを信ずる。

アルマ31,16,聖い神よ、私たちは汝が私たちを同胞から別けたもうたことを信ずる。私たちは、同胞の先祖が愚にも同胞に伝え同胞が今もなお守っている言伝えを信じない。汝が私たちを選んで汝の聖い子となしたもうたことを信ずる。汝はキリストがこの世に来ないことを示したも

アルマ31,17,汝はきのうも今日もいつまでも同じにまします。私たちのまわりの者がみな汝の怒りのために地獄へ投げこまれると定められているのに、汝は私たちを救われる者と定めたもうた。神よ、汝はこのように私たちを聖い者となしたもうたので、私たちは汝に感謝をする。汝

アルマ31,17-1,私たちを選んで、同胞の愚な伝説に迷ってさまよってあるくことのないようになしたもうたので、私たちは汝に感謝をする。同胞の伝説はかれらを束縛してキリストを信じさせ、その心を誘って私たちの神である汝から遠ざけている”と。

アルマ31,18,また“神よ、私たちは選ばれた民であって聖い民であることを汝に感謝する。アーメン”と言う祈りもあった。

アルマ31,19,そこで、アルマとその兄弟たちとアルマの2人の息子とはこの祈りを聞いてこの上もなく驚いた。

アルマ31,20,それはゾーラム人が、1人1人みな台に登って同じ祈りを捧げたからである。

アルマ31,21,祈りに使うこの台はゾーラム人がラメアムトムと呼んでいたが、その意味は聖い台と言うことである。

アルマ31,22,ゾーラム人は1人のこらずこの台の上で同じ祈りを神に捧げ、自分たちは神に選ばれたと言ってその神に感謝をし、また神は自分たちに同胞の伝説に迷うことをさせず、また自分たちは少しも知ることのできぬ将来のことを信ずるように心をまそわされないと言って神に

アルマ31,22-1,捧げた。

アルマ31,23,ゾーラム人はこのように一々感謝をしてから各々の家へ帰ったが、またこのやり方で感謝を捧げるために聖い台へ集ってくるまでは少しもその神について言わなかった。

アルマ31,24,アルマはこの様子を見てゾーラム人が悪いよこしまな民であって、金銀またはいろいろな華やかな品物に心を留め、

アルマ31,25,高慢であって非常に大言を吐く者になったことを知って真に憂い悲しんだ。

アルマ31,26,そこでアルマは声高らかに天に祈って言った“主よ、汝の僕である私たちにいつまで肉体のままこの呼に生き永らえ、人間の中に行われるこのような恐ろしい罪悪を見させたもうか。

アルマ31,27,神よ、見たまえ、このゾーラム人は汝に祈りを捧げるが、その心は高慢に満ちている。かれらは口を以て汝に祈るが、この世の無益な物で非常に誇りたかぶっている。

アルマ31,28,私の神よ、かれらの高価な衣、いろいろな環、腕環、金の飾り物、そのほか装飾に使うすべての高価な物を見たもうように、かれらはこのもろもろの物に執着しながら汝に声をあげて‘ほかの人々を亡びなくてはならぬ者であるのに、私たちだけは汝に選ばれた民である

アルマ31,28-1,私は汝に感謝をする”と言っている。

アルマ31,29,かれらはまた、キリストがこの世に降臨したまわぬことを汝に示されたと言っている。

アルマ31,30,主なる神よ、汝はいつまでこの民の間にこのような罪悪があることを許したもうか。主よ、私に力を与えて私の薄弱さを忍べるようになったまえ。私は薄弱であるから、この民の間にこのようなよこしまなことが行われるために心を痛めている。

アルマ31,31,主よ、私の心は非常に悲しんでいる。キリストによって私の身も霊も慰めたまえ。主よ、この民の罪悪のためにこの後私の身にふりかかる艱難を耐え忍べるように力を与えたまえ。

アルマ31,32,主よ、私の身も霊も慰め、私と私と一しょにいる同僚たちの働きを成功させたまえ。私同僚たちは、アンモン、アロン、オムネル、アミュレク、ゼーブロムおよび私の2人の息子である。かれらもみな慰めたまえ。キリストによってかれらの身も霊も慰めたまえ。

アルマ31,33,この民の罪惡のためにこの後かれらの身にふりかかる艱難を耐え忍べるようにかれらに力を与えたまえ。

アルマ31,34,主よ、私たちが再びこの民を感化して、キリストによってかれらを神の道に入らせる働きを成功させたまえ。

アルマ31,35,主よ、この人々の身も霊も貴く、民の中には私たちの同胞が多く居る故に、この同胞を再び神の道に入らせることができるよう能力と智恵とを私たちに与えたまえ”と。

アルマ31,36,アルマがこのように祈ってから一しょに居た人々に一々按手をしたところ、この人々はたちまち聖霊に満たされた。

アルマ31,37,このようにいしてから互いに分れたが、これらの人々は自分が何を食い何を飲み何を着ようかなどと自分の身のためを思うことは少しもなかった。

アルマ31,38,しかしながら、飢えたり渴いたりすることのないよう、主はこれらの人々に飲食を与えたまい、またキリストを思う喜びによって苦しみがなくなる艱難以外には、どのような艱難も受けないように力をこれらの人々に与えたもうた。これは本当にアルマが祈った通りにな

アルマ31,38-1,あつて、全くアルマが堅い信仰で祈ったのによることである。

アルマ32,,アルマ書 第32章

アルマ32,*-*,貧しい者たち、救いの道を開く。アルマの賞讃と説教。信仰は信じたいと思う心から生ずること。

アルマ32,1,アルマとその同僚たちは行つてゾーラム人の会堂かまたはその住家へ入り、神の道を宣べ始めたが、路傍に於てもまた説教をした。

アルマ32,2,そしてゾーラム人の中で力を尽して働いてから、貧しい人々の仲間の撃ちでやや成功を治めた。この貧しい人々は、その着物が粗末であるので会堂から追い出され、

アルマ32,3,不潔な者と思われていたので、神を礼拝するために会堂へ入ることを許されていなかった。この人々は貧乏で同胞に人の屑と思われていたので、この世の品物に鳥羽市句心が謙遜であつた。

アルマ32,4,さて、アルマがオナイダと言う小山の上で人々に説教と談話をしていた時に、この世の品物に乏しくて心が謙遜であると今話をした者たちが多く寄り集つて、

アルマ32,5,アルマの側近くへやってきた。そしてその仲間の頭がアルマに”私の兄弟であるこの人たちは、貧乏であるからすべての人に侮り嫌われている。どうしたらよろしいか。まことに、私たちはとりわけ祭司たちにいやしまれていて、祭司たちにいやしまれていて、祭司たち

アルマ32,5-1,ひどい貧乏だからと言って、私たちが自分らの手で大いに苦勞をして建てた私たちの会堂から追い出した。だから、私たちは自分の神を礼拝する場所がなくて困っている。どうしたらよろしいか”とたずねた。

アルマ32,6,アルマはこれを聞いて正面からこの男に顔を向けて、非常に喜びながらじつと見ていたが、この多勢の者たちが自分たちの受けた艱難のために、まことにへりくだって神の道に入る用意をしているのを認めたので、

アルマ32,7,これまで説教をしていた多くの人々に話すことを止め、本当に悔い改める心になっているこの貧民の群に向つて手をひろげ声をあげて、

アルマ32,8,”あなたたちの心はへりくだっていると見えるが、もしもそうならばあなたたちはさいわいである。

アルマ32,9,あなたたちの1人の同胞は今私に’どうしたらよろしいか。私たちは会堂から追い出されて神を礼拝することができない’と言つた。

アルマ32,10,ごらん、あなたたちは自分の会堂の中でなければ神を礼拝することができないと思つているか。

アルマ32,11,さらに、あなたたちは1週間に1度以上神を礼拝してはならないと思つているか。

アルマ32,12,あなたたちは自分の会堂から追い出されたので、謙遜になつていよいよ智恵を得ることができるから、このように追い出されるのはかえつてよろしいことである。あなたたちが智恵を得るのはきわめて大切である。あなたたちは追い出されたために同胞に嫌われ、きわめ

アルマ32,12-1,貧しいためにへりくだる。あなたたちはまことに境遇に迫られて謙遜になつている。

アルマ32,13,しかし、やむを得ずに謙遜になつているからあなたたちはさいわいである。なぜならば、人が境遇からやむを得ずに謙遜となると、人は悔い改めようとする。悔い改める者はみな必ず憐みを受ける。憐みを受けて終りまで忍ぶ者は必ず救われる。

アルマ32,14,私はあなたたちが境遇からやむを得ずへりくだつたからさいわいであると言つたが、神の道を聞いたから進んで真心からへりくだる者はなおさいわいであるとは思わないか。

アルマ32,15,まことに、真心からへりくだつて自分の罪を悔い改め、終りまで忍ぶ者は祝福を受ける。本当にこのような者は、きわめて貧しいためにやむを得ずへりくだる者よりも、ひときわ多くの祝福を受ける。

アルマ32,16,それであるから、へりくだることを強制されずに進んでへりくだる者はさいわいである。言葉をかえて入えば、心をかたくなにすることもなく、強いて神の道を説きすすめられなければこれを信じないと言うこともなく、進んで神の道を信じバプテスマを受ける者はさい

アルマ32,17,もし天からのしるしを自分に見せてくれるならば確に知って信じようと言う人は多くある。

アルマ32,18,しかし、このようなことは信仰であるか。いや、これは信仰と言うことではない。なぜならば、もし人が物事を知っているならばこれを信ずる必要のあるわけがない。すでにこれを知っているからである。

アルマ32,19,さて、神のみこころをよく知りながらこれを行わない人は、ただ神を信じてだけいる人、またはただ神を信じなくてはならない原因だけがある人で罪を犯す者にくらべていかにも多くのろわれるではないか。

アルマ32,20,あなたたちはこのことを自分で弁えなくてはならない。ごらん、私はあなたたちにはっきりと言うが、神の裁きは双方に同じであって、どれもみなその行いに応じて報いを受けるのである。

アルマ32,21,信仰については私がすでに話したように、信仰とは完全に物事を知ることではない。それであるから、あなたたちにもし信仰があるときには、まだ見ていない本当のことを待ち望む。

アルマ32,22,私はあなたたちにはっきりと言うが、神はその御名を信ずるすべての者たちに憐みをかけたもうから、あなたたちがまず神の言葉を信ずるように望たもう。ねがわくば、あなたたちがこれを記憶するように。

アルマ32,23,神は天使によって男ばかりでなく女にも御言葉を伝えたまい、そればかりでなく、またたびたび賢人や博学の人の知識も及ばない御言葉を子供に与えたもう。

アルマ32,24,私の愛する同胞よ。あなたたちは苦しめられ、追い出されたから、どうしたらよいかと私にたずねるけれども、ねがわくは、私が真実によらないであなたたちを裁くと思ってもらいたくない。

アルマ32,25,私が前に言ったのは、あなたたちがみな境遇からやむを得ずへりくだっていると言うのではない。私はあなたたちの中にどのような境遇にあっても進んでへりくだる人々のあることを確に信じている。

アルマ32,26,信仰と言うことについて私はすでに言った。信仰と言うことは、完全に物事を知ることではない。今私の言っている言葉についてもその通りである。すなわち、信仰が始めから完全に物事を知ることでないと同じように、私の言葉の確かなこともあなたたちは始めから完

アルマ32,26-1,知ることができない。

アルマ32,27,しかし、あなたたちがもし目をさましてふり立ち、その能力をつくして少しなりとも信じながら私の言葉を実際にためしてみるならば、たとえ信じようとする望を起すだけでもよい。しかし、私の言葉の1部分でも受け入れるほどの信仰ができるようになるまで、この

アルマ32,27-1,育ててゆけ。

アルマ32,28,今、神の御言葉を種子になぞらえて話すと、あなたたちが1つの種子を自分の心の中に蒔くとき、もしもその種子が真理の種子すなわち善い種子であって、あなたたちが不信仰の心でこの種子を抜きとったり、主の“みたま”に逆らったりすることがなければ種子は次第

アルマ32,28-1,次第に胸の中でふくれ始めるであろう。そこで、あなたたちは種子がふくれ始めることを感ずると、次のように思う。すなわち、これはまことに善い種子、善い言葉に違いなく、私の心を大きく開き、私の理解力を増し、私はようやく好い味を感ずると。

アルマ32,29,ふごらん、このようにしてあなたたちの信仰と言うものが増すではないか。さよう、増すけれどもまだ完全に知ると言うほどではない。

アルマ32,30,種子が大きくふくれて芽を出し、ようやく成長する時になると、あなたたちはこのように生えて出るから必ず善い種子であると認めるに違いない。

アルマ32,31,さて、あなたたちはここでこの種子が本当に善い種子であることを確に知っているか。その通り、確に知っている。それは、すべて種子は自分と同じ実を結ぶからである。

アルマ32,32,従ってもし種子が生えるならばこれは善い種子であるが、生えないならば善い種子ではないから捨てられる。

アルマ32,33,今、あなたたちは実際にためして種子を蒔き、その種子が大きくふくれて芽を出し生え始めたから、その種子が善いことを知るに違いない。

アルマ32,34,さてあなたたちがこのように知るのは完全な知識であるか。その通り、ただこのことのみに関しては完全であるから、このことに関するあなたたちの信仰と言うものは眠っている。これはあなたたちがすでに知識があるからである。神の言葉がすでにあなたたちの心を大

アルマ32,34-1,種子のように芽を吹き出したのであるから、あなたたちは自分の理解力が増し、自分の頭が開けてくることを感じて知っている。

アルマ32,35,それならば、知識はすなわち真実なことではないか。その通り、明らかな光であるから真実である。およそ光は明らかに悟ることができるものであるから善であって、その善であると言うことはあなたたちが知らねばならぬことである。今、あなたたちはすでにこの光を

アルマ32,35-1,経験したのであるから、あなたたちの知識は完全であるか。

アルマ32,36,いやそうではない。あなたたちは、ただ種子の善し悪しを試みるために、種子を蒔いてみることにだけ信仰を用いたのであるから、その信仰をすててはならない。

アルマ32,37,種子から生える木が生え始めると、あなたたちは‘さあ、この木が十分に根を下ろして生え、私たちのために実を結ぶようによく注意して養い育てよう’と言うが、今あなたたちがよく注意してこの木を養い育てるならば、根を下ろして生え実を結ぶであろう。

アルマ32,38,これに反して、もしもあなたたちが木をほっておいてこれを養い育てることに心を配らなかったならば、根がつくことなく、太陽が出てこれを照らしこれを熟するならば、根がないから枯れてしまうであろう。このときあなたたちはその木を抜いて捨てるのである。

アルマ32,39,しかし、木がこのように枯れるのは種子が悪かったためでもなく、また実がなったときその実が悪いためでもない、その土地が荒地であってしかもあなたたちが木を養い育てないためである。それであるから、その実をとることができない。

アルマ32,40,これと同じわけで、あなたたちがもしも信仰を以て実るときを待ち設けながら、言葉を養わなかったならば、決して生命の木の実をとることはできない。

アルマ32,41,しかし神の御言葉である木が生え始める時からその実の生る時を待ち設けながら勉めはげんで、気長によく信仰を以てこれを養うならば、その木は根を下ろして永遠の生命を生ずる木になるであろう。

アルマ32,42,このように、あなたたちが心の中に神の御言葉の根がつくように勉めはげみ、厚い信仰を以て気長に御言葉を養い育てるならば、やがてその言葉の実をとって腹に満ちるまでそれを食べ、もう植えることもなく渴くこともないであろう。この言葉の実は最も貴重であって

アルマ32,42-1,甘いものよりも甘く、あらゆる白いものよりも白く、あらゆる清いものよりも清い。

アルマ32,43,私の兄弟たちよ、その時になったあなたたちは、自分のために木が実を結ぶのを待ちながら尽した信仰と勤勉と忍耐に対する報いを受けるであろう”と。

アルマ33,,アルマ書 第33章

アルマ33,*-*,アルマの説教つづく。真の礼拝は聖堂に限らない。予言者ゼノスとゼノクらのことを再び引いて言う。

アルマ33,1,アルマがこのように話をした後、多勢の民は使をアルマのところへやって、アルマの話したあの実を得るためには唯ひとつの神を信じなくてはならないかどうか。またアルマが自分の心に蒔かなくてはならぬと言ったあの種子であるところの言葉はどのように蒔かなくて

アルマ33,1-1,ならぬか、またどのように信じ始めてよいかと問いたずねた。

アルマ33,2,するとアルマはこれに答えて”あなたたちは自分の会堂から追い出されたので、自分らの神を礼拝することができないと言っている。しかし、はっきりと言うが、あなたたちがこれでは神を礼拝することができないと本当に考えているならば大へんな間違いである。あな

アルマ33,2-1,聖文をよく言及しなくてはならない。あなたたちが、もしも会堂以外では礼拝ができないと聖文で教わったと思っているなら、これは誤解をしているのである。

アルマ33,3,あなたたちは昔の予言者ゼノスが祈りまたは礼拝について宣べたことを読んで覚えがあるか。

アルマ33,4,ゼノスは‘神よ、汝は憐み深くましまして、私が荒野で祈ったときに私の祈りを聞きとどけたもうた。また私が敵について祈ったときも、汝は憐み深くましまして、敵を私に和がせたもうた。

アルマ33,5,神よ、私が畑で汝に祈ったとき汝は私を憐みたまひ、また汝に祈り求めたとき私の祈りを聞きとどけたもうた。

アルマ33,6,神よ、汝は私が家へ帰ったとき、再び私の祈りを聞きとどけたもうた。

アルマ33,7,主よ、私がひとりで室に入って祈りを捧げた時、汝はこれを聞きとどけたもうた。

アルマ33,8,まことに汝は憐み深くましまして、汝の子である世の人が、ほかの人に聞かれるためではなくただ汝に聞いてもらうためにだけ祈るとき、汝はその願いを聞きとどけたもう。

アルマ33,9,神よ、汝は私を憐んで、汝の民の集会で私の捧げた祈りを聞きたもうた。

アルマ33,10,また私が敵に追い出され、いやしめられたとき、汝は私の嘆願を聞いて私の敵に怒り速にこれをうち破りたもうた。

アルマ33,11,私が苦難に逢ったため、また私に真心があったため、汝は私の祈りを聞きとどけたもうたが汝がこのように私を憐みたまうたのは御子(イエス・キリスト)によるのである。汝は御子のために私から裁きを遠ざけたもうたから、私の喜びはみな汝から受けるのである。そ

アルマ33,11-1,それであるから、私は悲しんだり苦しんだりする度毎にいつも汝に祈りをする’と言い、

アルマ33,12,なおアルマはつづけて__あなたたちは昔の人々が書いた聖文を信じているか。

アルマ33,13,もし聖文を信ずるならば、ゼノスの言ったことも信ずるにちがいない。ゼノスは‘神世、汝は御子のために裁きを遠ざけたもうた’と言った。

アルマ33,14,私の兄弟たちよ、あなたたちは聖文を読んだことがあるか。もし聖文を読んだことがあるならば、どうして神の御子を信じないのか。

アルマ33,15,ごらん、ゼノスのほかにこのようなことを話した者があんまりとはどこにも書いてない。ゼノクもまたこのことを言っている。

アルマ33,16,ゼノクの言葉には‘主よ、この民は汝が御子(イエス・キリスト)のために自分らに与えたもうた恵みを否定してこれを悟らないから、汝はこの民を怒りたもう’と言ってある。

アルマ33,17,私の同胞よ、これによって見ると、ゼノスのほかにもう1人昔の予言者が御子について証を立てたことが明らである。その時の人々はゼノクの言葉を悟ろうと思わず石でこれを打ち殺した。

アルマ33,18,神の御子のことを言ったのはゼノスとゼノクだけではない。

アルマ33,19,モーセもまた神の御子についた宣べ、荒野の中で予め神の御子を指し示すものを立てた。その時誰でも進んでこのものを見る人は命が助かるのであったから、これを見て命の助かった者が少なくなかった。

アルマ33,20,しかしその時の人々はその心がたくなでであったから、そのものの意味を悟ったもんは僅であった。そして見たくないと思うほどにかたくな者が多かったがその人々は皆死んだ。この人々が見なかったのは、これを見るだけで癒えるとは思じなかったからである。

アルマ33,21,私の兄弟らよ、癒されたいと思うとき目を1方に向けるだけですぐ癒されるならば、あなたたちはすぐとその方を見るだろうか。または、不信仰でこころをかたくなにし怠けて目をふり向けず、そのために死んで亡びる方がよいと思うだろうか。

アルマ33,22,もしも、あとの方を選ぶならばあなたたちの身に災がかかるであろう。もしそうなるように選ばないとすれば、すぐとあなたたちの目をふり向けて神の御子(イエス・キリスト)を信じ、御子とその民を贖い救うために将来降臨したもうことと、御子とその民の罪を贖う

アルマ33,22-1,苦痛を受けて死にたもうことと、御子が死者の中からよみがえって死者の復活を来したもうことと、終りの日すなわち裁判の日にすべての人がそれぞれの行いに応じて裁判されるために、神の御子の前に立たなくてはならぬこととを信ぜよ。

アルマ33,23,私の同胞よ、願わくは、あなたたちがこの言葉を心に蒔き、それがふくれ始めるときに自分の信仰で養い育ててもらいたい。そうすれば、この言葉はあなたたちの心の中で必ず永遠の生命を生ずる木となる。願わくはその時になって、あなたたちが神の御子を信仰するか

アルマ33,23-1,生ずる喜びによって、神があなたたちの苦難を軽くなしたまわんことを。今話した一切のことは、もしもあなたたちにこれを実行する志さえあれば、容易に実行することができるのである。アーメン”と。

アルマ34,,アルマ書 第34章

アルマ34,*-*,アミュレクの証詞。最大にして最後のいけにえ。憐みは正義を満足すること。悔改めを延引してはならない。

アルマ34,1,アルマはこのように教えを説いてから地面に腰を降ろしてたが、アミュレクはこれについて立ち上がり群衆に教えを伝えて次のように言った。

アルマ34,2,“私の兄弟たちよ。私たちの神の御子であると教えられたそのキリストの降臨について今話しがあつたことを、あなたたちが知らないと言うことはないはずであると思う。あなたたちが私たちから背いて去った前に、これらのことは十分に教えてあつたことを私はよく知

アルマ34,3,しかし、あなたたちは艱難に逢ったから、どうしたらよいか教えてくれとわが愛する兄弟に言ったとき、その兄弟はあなたたちに心がまえをさせるためにいくらかのことを話し、また信仰をすることと、忍耐することとをあなたたちにすすめ、

アルマ34,4,神の御言葉を心に蒔きつけるほどの信仰を起して、その御言葉の善し悪しを実際に験すようにあなたたちにすすめたが、

アルマ34,5,私はあなたたちの胸の中には、神の道がはたしてその御子(イエス・キリスト)にあるか、またはキリストが本当に降臨したもうかと言う大きな疑問があることを知っている。

アルマ34,6,私の兄弟がすでに多くの実例を引いて救いが得られる神の道はキリストにあることを証明したのは、あなたたちがよく知っている。

アルマ34,7,私の兄弟は神の御子を通して贖いと救いが得られることを証明するために、ゼノスの言葉とゼノクの言葉とを引き、またモーセの言葉にも照らしてその確であることを証明した。

アルマ34,8,今、私は自分でこれが真実であることを証する。ごらん、私ははっきりと言うが、キリストはその民の罪を贖うために世の人の中へ降り、また善の人の罪も贖いたもう。主なる神がそう仰せになったから、私はそれが確であることを知っている。

アルマ34,9,そもそも罪を代って贖うことは必要なことである。永遠の神が定めたもうた大計画によれば、罪とがは必ず代って贖われなくてはならない。そうでなければすべての人類は滅亡をまぬかれない。まことに、一切の人はか

たくなになり墮落して神の御前から断ち切られてい

アルマ34,9-1,なくてはならない身代りの罪の贖いがなかったならば必ずみな亡びてしまう。

アルマ34,10,なぜならば、最大にして最後のいけにえを捧げる必要があるからである。このいけにえは人のいけにえでもなく、また鳥の獣のいけにえでなく、およそ人の備えるようないけにえでなくて無限無窮のいけにえでなくてはならない。

アルマ34,11,誰であっても自分の血をぎせいに供えて他人の罪を贖うことはできない。たとえば人を殺す者があったときに、わが正義の国法は、人を殺したその者の兄弟を死刑に処するか。いや、そうではない。

アルマ34,12,国法は人を殺した当人を殺すにちがいない。これから考えると、無限の身代りの贖罪でなくては世の人の罪を贖うに足るはずはない。

アルマ34,13,それであるから偉大な最後のいけにえを供えるのは必要なことである。このいけにえを供えたなら、いけにえの血を流すことは止まる。言葉を換えて言えば、その時になっては血を流す一切のいけにえを止める必要がある。そうすれば、ここでモーセの律法はことごとく

アルマ34,13-1,達してもはや効用のないものとなる。その中に目的を達しないで空しくなるものは1点1かくもない。

アルマ34,14,モーセの律法は1言1句みなこの偉大な最後のいけにえを指し示している。このように指し示すのが全くこの律法の目的である。この偉大な最後のいけにえとなるべき方は、すなわち神の御子(イエス・キリスト)であるから、これは無限無窮のいけにえである。

アルマ34,15,神の御子はこのようないけにえとなって、自分の名を信ずる者たちをみな救いたもう。この最後のいけにえの目的は憐みを与えるのであって、この憐みは正義の要求する罰に勝ち、また悔改めを生ずる信仰を人に与えるためにその道を設けるのである。

アルマ34,16,もしも人が信じて悔い改めるならば、道がすでにできているから憐みは正義の要求を満足して、悔い改めた者たちを安全に保護することができるが、悔い改めを生ずるような信仰を起こさない者たちは、正義の法の要求する裁判を十分に受けるのである。それであるから

アルマ34,16-1,永遠にして偉大な贖いの計画は、ただ悔改めを生ずるような信仰を起す者にだけ与えられる。

アルマ34,17,それであるから私の兄弟らよ、ねがわくはあなたたちが悔改めを生ずる信仰を起し、神が自分たちを憐みたまうよう、神の御名によって祈り始めることを神が許したまわんことを。

アルマ34,18,神は人を救う大能を供えたもうから、神に憐みを求めよ。

アルマ34,19,へりくだってたえず神に祈れ。

アルマ34,20,牧場に居る時は、あなたたちの家畜の群について神に祈れ。

アルマ34,21,家に居る時はあなたたちの家族全体について朝も昼も晩も神に祈れ。

アルマ34,22,あなたたちの敵の力を防ぐことができるように神に祈れ。

アルマ34,23,一切の義しいことに敵対する悪魔を防ぐことができるように神に祈れ。

アルマ34,24,あなたたちの田畑の収穫が豊であるよう、その作物について神に祈れ。

アルマ34,25,牧場にあるあなたたちの家畜がふえるように神に祈れ。

アルマ34,26,こればかりではない、あなたたちが1人で部屋に居るときも、秘密の所に居るときも、また野に居るときも心にあることをうち明けて祈れ。

アルマ34,27,声をあげて主に祈らない時でも、自分の為また自分のまわりの人々の為を思ってたえず心の中で主に祈れ。

アルマ34,28,私の愛する同胞よ。これで満足だと思っはいけない。たとえこれらのことをみな行っても、もしも貧しい者や着る物のない者の願いをことわり、病んでいる者、あるいは悩んでいる者を見舞わず、持物がありながらその幾分を貧しい者に施さないならば、あなたたちの

アルマ34,28-1,空しくなってその効果はなく、またあなたたちは神の言葉を否定する偽善者のようになるであろう。

アルマ34,29,それであるから、もし忘れずに慈善をおこなわないならば、あなたたちは金銀を精製する人たちに(価がないから)棄てられて、人の足で踏まれる鉄かすのような者である。

アルマ34,30,私のはらからよ。あなたたちはすでにこのように多くの証拠を得手、聖文にもこれらのことを証拠立てている所があると認めたから、道を踏んで悔改めの実を結んでもらいたい。

アルマ34,31,また、あなたたちが道を分でこの上心をかたくなにしないで欲しい。ごらん、今こそあなたたちの救われる時であって、しかもまたその救いの日である。それであるから、もし悔改めて心をかたくなにしないで、偉大な贖いの計画はすぐにあなたたちにその効果を及

アルマ34,31-1,及ぼすであろう。

アルマ34,32,現世は、人間が神に逢う用意をしなくてはならぬ時期である。現世の生涯は、人間が各々働きを遂行せねばならぬ時期である。

アルマ34,33,私が前にあなたたちに話したように、あなたたちに証を立てた人々は非常に多いので、私はあなたた

ちがこの世を猿時まで悔改めを引き伸ばさないようにねんごろにすすめる。永遠の来世に行く準備ができるように私たちに与えられている現世の境涯の光陰を有益に用い

アルマ34,33-1,用いなかったならば、後から夜のような暗やみの生涯がやってきてそこへ入ったら何の働きもできるはずがない。

アルマ34,34,あなたたちは、このおそろしい危機に陥ってから‘私は悔い改めて私の神に立ち帰る’と言うことはできない。あなたたちは本当にこう言うことはできない。なぜならば、あなたたちがこの世を去る時あなたたちの肉体を離れる霊は、永遠の来世に於て再びあなたたちの

アルマ34,34-1,身体に宿る力を持っているからである。

アルマ34,35,あなたたちが、もしも悔改めを引き伸ばして死んでしまうならば、すでに悪魔に従ったのであるから、悪魔はあなたたちに自分の部下と言う刻印をおす。従って主の“みたま”はもはやあなたたちから離れて再びあなたたちに宿らず、ここに於て悪魔は全くあなたたちを

アルマ34,35-1,権能を得る。これはすなわち悪人の最後の境涯である。

アルマ34,36,私は確にこのことを知っている。それは主が自分は不浄な宮に宿らない、義人の心に宿ると仰せになり、また義人は主の王国に隻を得て再びその国を出て行くことなく、その衣服は子羊(キリスト)の血によって潔白にされとも仰せになっているからである。

アルマ34,37,私の愛する兄弟らよ。あなたたちはこのことを忘れずに、神をおそれながら善い行いを持って自分の救いを全うし、再びキリストの降臨を否定せず、

アルマ34,38,この上聖霊に逆らわずに聖霊を受け、喜んでキリストの御名を受け、低くへりくだってどこに居ても精神を米真心を以て神を礼拝し、神が自分たちにたもうた豊かな恵を毎日感謝してもらいたい。

アルマ34,39,私の兄弟たちよ。私はあなたたちが悪魔の誘惑になびかないよう、悪魔にうち勝たれないよう、終りの日に悪魔の部下にならないよう、注意してたえず祈るようにすすめる。ごらん、悪魔はあなたたちに善い報いは与えない。

アルマ34,40,私の愛する兄弟らよ。あなたたちが忍耐強くいろいろな艱難に堪えること、あなたたちがひどい貧乏であるからと言ってあなたたちを追い出す者のような罪人とならないためにこのような者をのしらないこと、いつかはあらゆる艱難辛苦を免れて安息に就くことができ

アルマ34,40-1,確な望みを抱いてこの艱難に耐え忍ぶこと、以上を私はあなたたちにすすめる者である”と。

アルマ35,,アルマ書 第35章

アルマ35,*-*,ニーファイ人の宣教師たちジェルシヨンの地へ帰る。故国から追放されたゾーラム人の改宗者たち再びかれらに加わる。戦争準備。

アルマ35,1,アミュレクはこのように話してから、アルマと一しょに大勢の民の許を去りジェルシヨンの地へ行った。

アルマ35,2,そのほかの伝道者たちもまたゾーラム人に神の道を伝えてからジェルシヨンの地へ行った。

アルマ35,3,ゾーラム人の中で身分のある人たちは、自分らに宣べ伝えられた道について相談をしたが、結局自分らの守る邪教を敗るものであることを認めてこれを怒り、道の言葉に聞き従わなかった。

アルマ35,4,かれらは使を出してその地のいたる所に人民をことごとく集め、宣べ伝えられた道について相談をした。

アルマ35,5,しかしゾーラム人の支配者たちも祭司たちも教師たちも自分らの目的を人民に知らせず、ひそかに人民の心の中をうかがった。

アルマ35,6,このようにしてすべての人民の意向を知ったので、かれらはアルマとその兄弟らが宣べた教えが善いと言う者たちをその地方から追い出したが、その人たちの数は少なくなかった。そしてこの人たちもまたジェルシヨンの地へ行ったが、

アルマ35,7,アルマと教会員たちはこれを迎えて慰めた。

アルマ35,8,ゾーラム人はジェルシヨンに居るアンモンの民を怒ったが、ゾーラム人の支配者は非常に悪い男で使をアンモンの民に送り、ゾーラム人の所から追い出されてアンモンの民の国に移ったすべての人をその地から追い払ってくれと言い、

アルマ35,9,いろいろ脅迫する言葉を吐いたが、アンモンの民はその言葉を恐れなかったので、自分の国へきた人々を追い払わず、かえって移ってきたすべての貧しいゾーラム人を迎えて養い、この人たちに着物を着せ住むための地を譲り与えたが、まことにそれぞれの欠乏に応じて

アルマ35,10,ゾーラム人はこれがためにアンモンの民を怒りレーマン人と交り始め、レーマン人がアンモンの民に対して怒るようにした。

アルマ35,11,このようにしてゾーラム人とレーマン人とは、アンモンの民およびニーファイ人と戦う準備にとりかかった。

アルマ35,12,ニーファイの民を治める判事治世の17年目はこのようにして過ぎて行った

アルマ35,13,アンモンの民はニーファイ人の軍がジェルシヨンの地でレーマン人の軍およびゾーラム人の軍と戦えるように、ジェルシヨンの地を去ってミレクお地に移り、ジェルシヨンの地をニーファイ人の軍にゆずった。このようにして判事治世の18年目にレーマン人とニーファ

アルマ35,13-1,ニーファイ人との間に戦が始まったが、この戦のことはあとで誌す。

アルマ35,14,さてアルマとアンモンとこの2人の同僚らとアルマの2人の息子とは、みな神の御手に使われて多くのゾーラム人を悔い改めさせてからゼラヘムラの地へ帰ったが、この時悔い改めたゾーラム人は皆その国から追放されたけれども、ジェルシヨンの地で住む所を得たので

アルマ35,14-1,妻子と所有する土地とを護るためにすでに武器を手執った。

アルマ35,15,アルマは、その国民の罪惡と国の中で行われる戦争、流血、ならびに不和の有様を見て悲しんで居たが、自分で行ったり使を送ったりして、これまであらゆる都会に於て神の道を民に宣べ伝えて居った。ところが民の心がよいよかたくなとなり、神の道がきびしいため

アルマ35,15-1,起るようになったので、アルマはこの様子を見て心の中で非常に悲しく思った。

アルマ35,16,それでアルマは義しいことに関する教訓を、自分の息子たちにみな1人1人伝えようとして息子たちを集めた。私たちはアルマがその息子たちに伝えた誠命の記録を持っているが、その記録はアルマ自身が作ったものである。

アルマ36,*-*,アルマがその息子のヒラマンに伝えた誠命。第36章から第37章に至る。

アルマ36,,アルマ書 第36章

アルマ36,*-*,アルマは、自分の罪深い過去と奇跡的に改心して神の道に入ったことと、これにつづいて熱心に伝道したこととを語る。

アルマ36,1,"わが子よ、私の言葉を聞け。私は、もしもお前が神の命令に従うならば地に於て栄えるであろうここに誓う。

アルマ36,2,私は、先祖が束縛されていたことを覚えている。お前もまたこれになたって覚えていて欲しい。先祖は奴隸の境涯に居たが、アブラハム、ヤコブ、イサクの神のほか、これを解き放てる者がなかった。ところが見よ、神はまことに先祖をその苦難から救いたもうた。

アルマ36,3,わが子ヒラマンよ。汝はまだ青年であるから、汝が私の言葉を聞いて私に学ぶよう、ひたすらこれを汝にすすめる。すべて神に頼る者は、苦しみ悩み禍に逢う時に助けられてこれらを忍ぶことができ、また終りの日に高く上げられる。これを私は確に知っている。

アルマ36,4,しかし、私は肉体上の力で自分でこれを知るのではない。私の霊の力でこれを知るのである。肉欲の心でこれを知るのではない、神によってこれを知るのである。私は汝にこれをよく解って欲しい。

アルマ36,5,よく言うておく、私がもしも神によって生れなかったならば、以上のことを知らなかったであろう。神は、神の聖い使の口を借りてこれを私に教えたもうた。これは元来私にその資格があったためではない。

アルマ36,6,私は前、モーサヤの息子たちと一しょに歩きまわって神の教会を亡ぼそうとした。ところが神は、神の聖い使を送って途中で私たちを止めたもうた。

アルマ36,7,その使は、さながら雷のような声で私たちに物を言ったので、地が私たちの足下でふるえ、私たちは主をおそれる心を生じて皆地に倒れた。

アルマ36,8,その時、声があつて起てと私に命令されたので、私は立ち上がってその使を見た。

アルマ36,9,すると、使は私を戒めて'汝たとえ自分で亡びようと思うとも、この後再び神の教会を亡ぼそうとしてはならぬ'と言われた

アルマ36,10,それから私は地に倒れて3日3晩口を開くことができず、手足を動かすこともできなかった。

アルマ36,11,この使はなおほかのことを私に言われたが、私のつれの人々にだけ聞こえて私には聞こえなかった。それは私が'汝がたとえ自分で亡びようと思うとも、この後再び神の教会を亡ぼそうとしてはならぬ'と言う言葉を聞いたときに、これは自分が亡びるかと思うほど恐れ

アルマ36,11-1,地に倒れ、もはや何にも聞こえなかったからである。

アルマ36,12,それから私は自分が犯した一切の罪のために非常に良心のたがめを受け、永遠の責苦を感じた。

アルマ36,13,私は本当に自分のあらゆる罪と惡事とを思い起して、そのために地獄の苦痛を感じ、また神に逆らつてその聖い命令を守らなかったことを認めるようになった。

アルマ36,14,私は神の子らを多く殺した。殺したと言うよりもむしろかれらを誘って亡ぼしたのである。要するに、私は自分の犯した罪が非常に重かったから、自分の神の前に出なくてはならぬと思うだけで言いようのない恐怖で身も霊も引き裂けるように苦しんだ。

アルマ36,15,その時私は、自分の神の前に立って自分の行為によって裁判を受けないように、霊も肉体も一しょにみな消えてなくなってしまうばよいと思った。

アルマ36,16,そしてこのように3日3晩私は永遠の責苦を受ける者の苦痛を感じた。

アルマ36,17,しかし私がこのように責め苦しめられ、すでに犯した多くの罪を思い起して非常に良心に責められていたとき、神の子であるイエス・キリストと言うお方が、善の人の罪を贖うためにこの善へ来りたもうと言うことを、私の父が前に人民に予言をしたことを思い出した。

アルマ36,18,そしてこれを思い出したとき、和対は心の中で‘神の御子イエスよ、永遠の死の鎖にしばられて今苦汁を飲まされている私を憐みたまえ’と嘆願をした。

アルマ36,19,このように心の中で願うと、ごらん、私はもう少しも苦痛を覚え、再び自分の罪を思い出して苦しむこともなかった。

アルマ36,20,ああ、この時私の感じた喜びと、私が見た驚くべき光とはいかにも大きかった。まことに、私はこの時前に感じた苦痛にひとしいほどの喜びに満ちたのである。

アルマ36,21,わが子よ、お前に言うが、私がある時に感じたほどの激烈な苦痛がこの世にまたあろうか。またその時に感じたほどの甚しく美しい喜びがこの世にまたあろうか。

アルマ36,22,まことに、私は先祖のリーハイが見たように御座にまします神を見た思いをしたが、神のまわりには無数の群の天がいて、歌を唱ってその神を讃美していた。私は身も霊もそこへ行って一しよに居たいと切に望んだ。

アルマ36,23,とうとう私の手足が具多々びその力を回復したから私は立ち上がって、私がすでに神によって生れたことを人民に証した。

アルマ36,24,まことにその時から今になるまで、私は人々を悔い改めさせ、私と同じ喜びを感じさせるために、またこれらの人も神によって生れ聖霊に満たされるようにたえずはげんで働いた。

アルマ36,25,さてわが子よ、主は私の働きから生じた結果によって私を非常に喜ばせたもう。

アルマ36,26,主が私に下したもうた御言葉のために多くの人々は神によって生れ、私の味わったように味わい、私が目のあたりに見たように見た。それであるから、これらの人は私が知っていると同じ通りに今私の話したことを知っている。私のもっているこの知識はすなわち神から

アルマ36,26-1,与えられたものである。

アルマ36,27,私はあらゆる試み苦しみ悩みに迫られたときに助けを得手これを忍ぶことができた。神は牢屋、縄目または死から私を救いたもうた。それであるから、私は今も神を信じて頼っている。神はこれからも私を救って下さるにちがいない。

アルマ36,28,そればかりでなく、神は私を終りの日になって高く挙げ、自分と一しよに栄光の中に住まわせて下さる。これをわたしは確に知っている。神は先祖をエジプトから導き紅海の中にエジプト人を溺れさせ、御力を以て先祖を約束の地へ導き、たびたび先祖を奴隷と束縛の境

アルマ36,28-1,救い出したもうた。

アルマ36,29,そればかりでなく、神は先祖をエルサレムの地から導いて、今になるまでその栄光につきぬ力を以て、たびたび先祖を奴隷と束縛の境涯から救い出したもうた。それであるから、私はとこしえに神を讃めたたえよう。今まで私は先祖の束縛されていた言をいつも覚えてい

アルマ36,29-1,お前もまた私のようにこれを記憶しなくてはならない。

アルマ36,30,見よ、わが子よ。またこればかりではない。お前がもし神の命令に従うなら地に於て必ず栄えることと、もし神の命令に従わないならば神の前から追い払われることを私は知っている。お前もまたこれらのことをよく知っていないなくてはならない。これは神が仰せになった

アルマ36,30-1,ことであるからである”。

アルマ37,,アルマ書 第37章

アルマ37,*-*,ヒラマン、神聖な記録と神聖な宝物とを託される。ゲゼレム。リアホナはまたキリストの言葉を示すもの。

アルマ37,1,“さて、わが子ヒラマンよ。私はお前が私に託されたいろいろの歴史を預り、

アルマ37,2,私が今までして来たように今後この民の記録をニーフアイ版に刻んで書けと言う。また私が保存したこのいろいろの歴史ひや、私がこれを神聖に守ったようにお前もまたこれを神聖に守って保存せよ。これを書きつくいで保存するのは賢明な目的があるからである。

アルマ37,3,そして刻んだ記録と聖文としかも世の始めからの先祖の系図がのっているこの真鍮版は、お前がこれを保存せよ。

アルマ37,4,先祖はあらゆる国民、あらゆる血族、あらゆる国語の民、またあらゆる人々がこの真鍮版に誌してある奥義を知ることができるように、この版画かれらに伝わるまで保存されて代々伝えられ、また主の御手によって護られることを予言した。

アルマ37,5,ごらん、もしこの真鍮版が保存されるならばその光輝は必ずなくなるまいであろう。その通り、必ずその光輝はなくなるまい。この真鍮版だけでなく、聖文がのっている一切の版もその通りである。

アルマ37,6,今お前はこのことを聞いて、私の信じているのを愚であると思うかも知れぬ。しかし見よ、お前に言うが、

小さくてやさしい事から大きな事がでてる。また小さな手段で賢い人をうち破ることがたびたびある。

アルマ37,7,主なる神はその偉大な永遠のみこころを成就するために手段を用いたもうて、非常に小さな手段で賢い人をうち破り、また多くの人々を救いたもう。

アルマ37,8,今までこのいろいろな版が保存されて伝わったのは神のみこころにかなっている。なぜならば、このいろいろな版によってこの国民の記憶の力が強くなり、多くの人々は自分の歩いている道が間違っていることを認め、その神を知るようになってその身も霊も救いを得る

アルマ37,9,このいろいろの版にのっている歴史の中の記事がなかったならば、アンモンとその兄弟たちは何千人ものレーマン人にその先祖から伝わった言伝えが義しくないことを説いて認めさせることができなかったであろう。レーマン人に悔改めをさせたもの、すなわちレーマン

アルマ37,9-1,その神である主を知らせ、その贖い主イエス・キリストによって喜ばせたものは、まことにこの歴史とアンモンおよびその兄弟たちの言葉である。

アルマ37,10,思うにこれから後にも、この歴史のためにさらに何千人と言うレーマン人、ならびにわれわれのかたくなな兄弟であって、今現に罪惡でその心をかたくなにしている何千人ものニーファイ人が、その贖い主を知るようにならないとは誰も言えないことである。

アルマ37,11,この奥義はまだ充分に私に示されていないから、これについて言うことはひかえよう。

アルマ37,12,しかし神は智慧を以てその一切の御業を賢く行わせたまい、また神の履みたもう道は真すぐで永遠に同じであるから、このいろいろの版は神の知たもう賢明な目的のために保存される。これだけ言えば充分であろう。

アルマ37,13,わが子ヒラマンよ。神の命令のきびしいことを記憶せよ。これを忘れるな。神は仰せになった'わが命令に従えば必ず地に栄える'と。しかし、神の命令に従わなければ、神の御前から追い払われるのである。

アルマ37,14,それであるからわが子よ。今まで神が神聖に保ち、またその能力を将来の人々に現わすために自ら知たもう賢明な目的で今後も保存したもうこのいろいろな神聖な版は、神がこれを御前に託したもうた。これを忘れるな。

アルマ37,15,私は予言の"みたま"によってお前に言う。もしお前が神の命令に背くならば、この神聖なものは神の能力によってお前から取り去られ、お前はサタンにわたされ、ちょうど風に吹かれるもみがらのようにサタンのまにまにここかしこへ追いやられるであろう。

アルマ37,16,しかし、もしもお前が神に命令を守り、主がお前に命令なさる通りにこの神聖な物を扱うならば(お前はこのものを以て何をしたらよいかと常々主に教えを願わなくてはならない)この世のどのような力もまた地獄のどのような力も、この神聖な物をお前から奪うことは

アルマ37,16-1,なぜならば、神はその誓約をことごとく守ってこれを成就するに必要な力を持ちたまい、

アルマ37,17,先祖に立てた誓いをみな成就したもうたから、お前に誓いたもう一切の約束もまたことごとく履行したもうからである。

アルマ37,18,神が先祖に立てたもうた誓約の中には、神の力を将来の人々に現せるように、自ら知たもう賢明な目的のためにこのいろいろな版を保存したもうと言うことがある。

アルマ37,19,ごらん、神はすでに1つの目的を遂げたもうた。すなわちこの神聖な物で何千人と言うレーマン人に元の通り真理を知らせ、そしてその能力を現わしたもうた。これからもまたこの神聖な物を以てその能力を将来の人々に現わしたもうであろう。それであるから、この物

アルマ37,19-1,保存しなくてはならない。

アルマ37,20,従って、わが子ヒラマンよ。私はお前に勉めはげんで私の言った一切の言葉を守り、また勉めはげんで神の命令を文字通りに守れと戒めを与える。

アルマ37,21,それから私はこれら24枚の版について話そう。すでに亡びてしまったあの国民の秘密と惡事と隠れた行い、すなわちそのあらゆる人殺し、強盜、掠奪、罪惡および憎むべき行いをこの民に証明することができるように、お前はこの版を保存し、またこの演◆◆◆織り存・

アルマ37,22,見よ、主はあの国民がその為す業をかくして暗殺と憎むべき行いとをするようになったことを見てもしこの民悔い改めずば、必ず世界の面より亡ぼさる'と仰せになり、

アルマ37,23,また'わが僕のゲゼレムに1つの石を用意すべし。この石は暗やみの中に光を放ちて物事を明らかにす。こは、われに事うる人々にそのはらからの秘密の行い、すなわち隠れてする悪しき行いと罪惡と憎むべき行いとを明らかに現して示さんとするためなり'と仰せにな

アルマ37,24,わが子よ、この解釈器が備えてあるのは'われはこの民のあらゆる秘密の仕業と憎むべき行いとを暗やみの中より現わして世界に知らせ、かれら悔い改めずば地上より亡ぼし去りて、その秘密と憎むべき行いとを今後この地に住むあらゆる国民に示さん'と言う神の言葉

アルマ37,24-1,成就されるためである。

アルマ37,25,

アルマ37,26,しかしわが子よ、われわれはあの国民が悔い改めなかったのですでに亡びてしまったことを知っている。神の言葉はこれほどまでに成就し、あの国民の隠れた憎むべき行いは暗やみの中から現されて明らかにわれらに示された。

アルマ37,27,わが子よ、私はお前にあの国民が秘密に憎むべき行いをする時に使ったあらゆる誓いの言葉と誓約の方法、およびそのほか一切の合図と不思議なことがこの民に知れないよう、これをこの国民に知らせてはならないと言う。もしもこれを示したならば、kno民もまた

アルマ37,27-1,中をさまよって亡びるといけないからである。

アルマ37,28,およそ悪事を行う者の罪惡が極まる時がくと、神の力によって亡ばされると言うのろいはこの全地の上にある。それであるから、私はこの民の亡びるのを欲しない。

アルマ37,29,従ってお前はあの国民の秘密にしていた誓いの言葉と、誓約をする秘密とをこの民に示してはならない。ただその罪惡と人殺しと憎むべき行いだけをこの民に示して、このような罪惡と憎むべき行いと人殺しとを嫌わせ、またあの国民が罪惡と憎むべき行ったから亡びた

アルマ37,29-1,この民に教えよ。

アルマ37,30,見よ、あの国民は自分らの中へ来てその罪惡を戒めた主の予言者らをみな殺したが、このように殺された人々の血は裂けんで自分らを殺した者たちに讐を帰して下さるよう自分の神である主に願った。このようにして神の裁きは悪い行いをして秘密の結社を作ったあの国

アルマ37,31,悪い行いをし秘密の結社を作った者に対してこの地は永遠にのろわれる。その悪事が絶望が絶頂に達しない撃ちに悔い改めなかったら、ひどいのろいを受けてかれらは亡びるであろう。

アルマ37,32,今わが子よ。私がお前に誡めたこのすべてのことを忘れず、あの国民の秘密の計ごとをこの民に示してはならない、常に罪惡を憎むことを教えよ。

アルマ37,33,また悔い改めねばならぬこと、主イエス・キリストを信ずること、へりくだって柔和な心を保こと、主イエス・キリストを信ずる信仰を以て悪魔の誘惑をことごとくうち破ることなどを教えよ。

アルマ37,34,また善を行って決して飽かず、謙遜で柔和な心を抱けとこの民に教えよ。これらのことをする者はその身も霊も安息を得るからである。

アルマ37,35,わが子よ、忘れずに青年の時智慧を得よ。青年の時から神の命令を守ことを習慣とせよ。

アルマ37,36,汝の要する一切の助けを神に祈り求めよ。何事でもすべて主のために為せ。どこへ行くにも主のために行け。常に主を念頭に置いて心の愛情をとこしえに主へ向けよ。

アルマ37,37,汝のする一切の働きについて主のみこころを伺え。そうすれば主は汝の為になる善い誠めを与えたもう。眠っている間も主が見守りたもうよう夜寝よ。そして朝起きる時には神に感謝する念を胸に満せ。このようにすれば終りの日に高く挙げられる。

アルマ37,38,今わが子よ。私は先祖が球または道しるべと名づけた物について話すことがある。先祖はこれをリアホナとも言ったが、リアホナとは羅針盤と言うことであつて主がこれを用意したもうた。

アルマ37,39,このリアホナのようなめずらしい細工は誰にもできるはずがない。この道しるばは先祖が荒野に居たとき、旅をする道を指し示すために用意されたが、

アルマ37,40,先祖が神を信ずる信仰の強い弱いに応じて働きを現わした。それであるから、もし神がこの羅針盤の指針を動かして自分らの行くべき道を指示して下さることができると確く信じたときにはそのようになった。それであるから、先祖は日々神の御力で行われるこの奇跡や

アルマ37,40-1,多くの奇跡を見た。

アルマ37,41,そのもろもろの奇跡はたとえ小さな手段方法で行われたとは言え、これによって先祖に不思議なことが示された。しかし、先祖は怠けもので信仰をすることと熱心に行うことを忘れて怠ったから、そこでこの不思議が止まって先祖は旅を進めることができなかった。

アルマ37,42,それであるから先祖は荒野の中に留まった。言い換えると真すぐな道を失ってその罪のために飢えや渇きに苦しんだ。

アルマ37,43,わが子よ、このようなことは意味のないことではないことを知って欲しい。先祖はこの羅針盤が指示することになかなか従わなかったのは、はかばかしく進まなかった。これはただ肉体の上のことであるが、霊に関わることに就いても同様である。

アルマ37,44,たとえば、永遠に尽きぬ幸福へ行く真すぐな道を示すキリストの言葉を守ることが容易であるのは、先祖が約束の地へ行く真すぐな道を自分らに示すこの羅針盤に従うことが容易であつたと同じである。

アルマ37,45,これは全くよく似ていることではないか。先祖がこの道しるばに従って約束の地へ行ったように、私たちがもしもキリストの御言葉が示す道を歩いて行くならば、確にその御言葉によって憂き世を越えてはるかに善い約束の世へ行くことができる。

アルマ37,46,しかしわが子よ、われわれはこの道が踏み易いために怠りとならないように注意しなくてはならない。先祖の時代にもこれと同じことがあった。すなわちただ墓で見れば命が助かると言う道の備えがあった。今のわれわれもその通りである。道は備わっているから、われ

アルマ37,46-1,もし仰ぎ見て従うならばすなわちとこしえに生きるのである。

アルマ37,47,それであるからわが子よ。注意してみなこれらの神聖な物を保護せよ。神の命に従って生きよ。この民に神の道を宣べ伝えよ。そして真面目であれ。さらば、わが子よ”。

アルマ38,*-*,アルマがその息子シブロンに与えた誠命。

アルマ38,,アルマ書 第38章

アルマ38,*-*,忠実なことを賞め、柔和にして自らの欲を抑えると言う戒めを守れとすすめる。

アルマ38,1,”わが子よ。私の言葉を聞け。私はヒラマンに言ったようにお前にも言おう。お前がもし神の命令に従うならば地に於て栄えるであろう。しかし、神の命令に従わないならば、神の御前から追い払われると。

アルマ38,2,わが子よ、私はお前が確乎として動かずまた神に忠実であるために、お前によって大きな喜びを受けることができている。お前は青年の時からお前の神である主にたより始めたが、私はこれからもお前がやはりひきつずいて神の命令に服従することを望んでいる

アルマ38,2-1,忍ぶ者はさいわいであるからである。

アルマ38,3,わが子よ、汝に言うが、汝はゾーラム人の中に居たとき忠実、勤勉、忍耐、寛容であったから、私は汝によってすでに大そう喜んでいる。

アルマ38,4,その時に汝は捕らえられて縛られ、また神の道のために石で撃たれたが、主が汝と共にましましたから、汝が気長に苦難を耐え忍んだことを私は知っている。今汝もまた主が自分を救いたもうたことを認めている。

アルマ38,5,わが子シブロンよ、お前が神にたよればたよるだけ、それだけ多くお前は自分の身に受ける試煉と苦しみと悩みから救われ、終りの日になって高くあげられる。これを覚えていて欲しい。

アルマ38,6,わが子よ、お前は私が自分一人でこれらのことを知ったと思ってもらいたくない。私に宿っている神の”みたま”がこれらのことを私に示すのである。もしも私が神によって生まれなかったならば、これらのことを悟れなかったであろう。

アルマ38,7,ごらん、主は憐み深くましましてその使を私につかわしたまい、私がこの民の中で行わせた破壊を止めなくてはならぬと仰せになった。私は本当に目のあたり天使を見たことがあるが、その天使が私に物をお言いになったとき、その声の大きいことはまるで雷のようであ

アルマ38,7-1,そのために全地が震えた。

アルマ38,8,私はそれから3日3晩、身も霊も激烈な苦痛を感じ、主イエス・キリストに憐みを願い求めるまでは少しも罪の赦しを受けなかったが、イエス・キリストに祈り求めたら私の身も霊も安らかになって慰めを得た。

アルマ38,9,わが子よ、私がこれを話すのは、お前が智慧を得て、ただキリストによらなければ全く人を救う道も手段もないことを私から学んで知るようにするためである。見よ、キリストは世の生命であってまた世の光である。見よまた真理と義の言葉である。

アルマ38,10,お前はすでに神の道を教え始めた。私はこれからもやはりお前がひきつずき神の道を教え伝え、また万事に中庸を得て熱心であるように希望する。

アルマ38,11,高慢にならないように注意せよ。心して自分の智慧を誇らず、また自分に力があると自慢してはならない。

アルマ38,12,勇気をふるえ、それと同時に不正に威をふるってはならない。一切の欲を抑えて愛に満ちよ。心して怠惰にならないようにせよ。

アルマ38,13,ゾーラム人のように祈ってはならない。ゾーラム人は人に聞かれて自分の智慧が賞められるように祈ることはお前の見て知っている通りである。

アルマ38,14,’神よ、私たちは同胞兄弟たちよりもすぐれているから感謝をする’と祈ってはならない。むしろ’主よ、私の足りないところを許したまえ。わが同胞兄弟らのことを思ってこれを憐みたまえ’と祈れ。まことに、自分の足りないことをいつも神の前で告白せよ。

アルマ38,15,ねがわくは、主がお前を祝福して終りの日に当ってお前を主の王国に迎え入れ、平安に席に就くことをお許しになるように。さあ、わが子よ、行ってこの民に神の道を宣べ伝えよ。真面目であれ。さらば、わが子よ”。

アルマ39,*-*,アルマがその息子コリアントンに与えた誠命。第39章より第42章に至る。

アルマ39,,アルマ書 第39章

アルマ39,*-*,コリアントン、浮れ女に迷ったことを叱斥される。その罪深い行いがゾーラム人の信仰に悪い影響を与えたこと。キリストの贖いはその降臨以前の人々にも及ぶこと。

アルマ39,1,”わが子よ。私は汝の兄弟に話したよりも、もっと多くのことを汝に話したい。ごらん、汝は自分の兄弟が神の命令を守るに当って堅固で忠実で勤勉であったことを心に留めたではないか。かれは汝に善い模範を示した

ではないか。

アルマ39,2,汝はゾーラム人の中に居た時、汝の兄弟ほど善く私の言葉に従わなかった。今、私が汝をいさめるのは、その時に汝が自分の力と智恵とを自慢して大言を吐くようになったことである。

アルマ39,3,そればかりでなく、また汝は私を苦しめる行いをした。汝は神の道を教え導く務めをすてて、レーマン人の国境にあるサイロンの地まで浮れ女のイサベルをしたって行った。

アルマ39,4,この浮れ女は多くの人の心をまどわした。しかし、これは汝の言いわけにならない。汝は自分に委された神の道を教え導く務めをはげまなくてはならなかったのである。

アルマ39,5,わが子よ。罪のない者の血を流すことと、聖霊に逆らうことを除いて、このような行いはあらゆるほかの罪以上に、主の目から見て憎むべき行いであることを知らないか。

アルマ39,6,ごらん、聖霊がひとたび自分の身に宿ってから、知りつつこれに逆らうのは赦すことのできない罪である。また神を知り、神の授けたもう光を受けながら人を殺す者は、容易に赦されることはできない。私はこのような者が罪の赦しを受けるのはむづかしいと言うことを

アルマ39,6-1,証する。

アルマ39,7,ああ、わが子よ、お前はあのような大きな罪を犯さなければよかったものを。私がこのようにお前の罪を宣べ立ててお前の心を責めるのはお前のためである。そうでなければこれを言ういわれがない。

アルマ39,8,ごらん、お前は自分の罪を神に隠すことができないから、悔い改めなければその罪は終りの日にお前を責める証となる。

アルマ39,9,わが子よ、お前は悔い改めて自分の罪をすて、これから肉欲をほしいままにせず、このようなよこしまな欲を慎んでもらいたい。そうでなくては決して神の王国に住むことはできない。これをよく覚えて実行をすると決心し、一切のよこしまな欲を慎め。

アルマ39,10,お前は自分の為そうとすることに就いては必ず兄たちと相談をしなければならない。汝はまだ年が和解から兄たちの勧告を必要とするからである。かれらの勧告を聞いてこれを守れ。

アルマ39,11,空しくて愚なことには何事であっても惑わされてはならない。悪魔に再びお前の心を欺かれて、あの極悪の浮れ女たちをしたわないように慎め。ああ、わが子よ。お前がゾーラム人に行わせた罪悪はいかに大きいではないか。かれらはお前の悪い行いを見て私の言うこ

アルマ39,11-1,信じなかった。

アルマ39,12,それであるから主の“みたま”は今‘汝の子らが多くの人の心を誘って亡ぼさぬように、善を行うことをかれらに命ぜよ’と私に告げたもう。それであるから私は神の畏れて次の命令をお前に与える。お前はその悪事をやめ、

アルマ39,13,心と勢いと力とを尽くして主に立ち帰れ。これから先、人の心をまどわして悪いことをさせてはならない。むしろすでにまどわした者たちの所へ帰り、自分の罪をかれらに自白してお前がこれまでに加えた害悪をとり除け。

アルマ39,14,富とこの世の空しいものごとを食ってはならない。お前はこのようなものを永久にもっていることはできないからである。

アルマ39,15,今わが子よ。私はキリストの降臨について多少話したいと思う。ごらん、はっきりと言うが、世の人の罪を贖うために必ず来りたもう御方はキリストである。キリストはまたその民に救いの喜ばしい音信を伝えるために来りたもう。

アルマ39,16,それであるから、お前が委ねられた神の道を導く務めと言うのは、この民にこの喜ばしい音信を宣べ伝え、その心がまえをさせることである。言葉を換えて言うと、お前が神の道を教え導く務めと言うのは、この民がまず救われて、それからその子孫にキリストが降臨し

アルマ39,16-1,前にその道の言葉に聞き従う心がまえをさせるよう、民にこの喜ばしい音信を述べることである。

アルマ39,17,わが子よ。私はキリストの降臨について少々お前の心に起る疑いを解こう。お前はこれらのことがこのように前以て知れているのを怪しんでいる。ごらん、お前に言うが、神から見たら現在の人の値はキリストが降臨なさる時の人の値と同じ様に貴いではないか。

アルマ39,18,この民に贖われる道を教える必要があるのは、またその子孫にこれを教える必要があると同じではないか。

アルマ39,19,主が今その使をつかわして私たちにこの喜ばしい音信を讃えたもうのは、また私たちの子孫にこれを伝え、または降臨の後にこれを伝えたもうと同様にたやすいことではないか”。

アルマ40,,アルマ書 第40章

アルマ40,*-*,アルマひきつづいてコリアントンに誠命を与える。万人の復活。死から復活に至るまでの間、義人と悪人が受ける別々の状態。文字通りの回復。

アルマ40,1,”わが子よ。私はなお汝に話そうと思うことがある。汝の心が死者の復活のことを思っで乱れていることは

明らかである。

アルマ40,2,ごらん、はっきりと言うが、キリストが降臨したもう後までは復活がない。その時まではこの死なくてはならぬ肉体は不死不滅の体とならず、この朽ちなくてはならぬ肉体は朽ちないものとはならない。

アルマ40,3,ごらん、キリストは死者の復活を来したもうが、その復活の時はまだ来ていない。私はお前に1つの奥義を示そう。神のほかに誰にも知られぬよう秘し隠してある多くの奥義があるが、私が知りたいと思って熱心に請い求めた1つのことがある。これをお前に伝えよう。

アルマ40,3-1,関わることである。

アルマ40,4,すべての人々が死からよみがえる時は定っているが、それがいつであるかは誰も知っていない。ただ神だけがその定っている時を知りたもう。

アルマ40,5,人が死からよみがえる時が、ただ1回だけあるかまたは2回、3回とあるか、それはどうでもよい、神はこれらのことを皆知りたもう。私は、ただ人々が1人のこらず死からよみがえる時の定っていることが確であると言うことだけを知って満足をし安心をする。

アルマ40,6,さて、死ぬ時とよみがえる時との間の時もあるにちがいない。

アルマ40,7,それであるから、私は死んだ時から復活と定っている時になる間、人の霊はどのようにになるかと言うことをたずねよう。

アルマ40,8,人のよみがえる時が、ただ1回と定っていてもそれはかまわない。すべての人は1度に死んでしまうのではないから、その復活が1回に限るかどうかこれは知らなくてもよい。神には時の計算がなくすべて1人と同じである。時を計るのはただ人のためだけである。

アルマ40,9,とにかくにも、人が死からよみがえる時は定っている。そして死んだ時から復活をする時までには間がある。この間に人の霊はどうなるか、これは私が知りたいと熱心に主にたずねたことであるが、今はもはや確にこれを悟っている。

アルマ40,10,一切の人々がみなよみがえる時になると、人はみな神が人に定めたもうた一々の時期をみな知りたもうことを認めるであろう。

アルマ40,11,さて死んでからよみがえる時までの霊の有様はどうであるかと言うに、ごらん、あらゆる人の霊はそれが善であつても悪であつても、この死なくてはならぬ肉体を離れるとその霊に生命を与えたもうた神の所へ帰るのである。これは天使が私にお示しになった。

アルマ40,12,それから義しい人の霊はパラダイスととなえる幸福な有様、すなわち安息と平和な有様に入り一切のわずらいと憂いと悲しみとを離れて息む。

アルマ40,13,次に、悪人の霊は少しも主の“みたま”とかかわりがなく善いことよりも悪いことを好んだので悪魔が入ってそれらの者を支配していた。それであるから、これらの者の霊はそとの暗やみの有様に追い出され、泣き悲しんで歯がみをするのである。これはかれらが自分で

アルマ40,13-1,犯し、悪魔の意志に負けてその奴隷になった結果である。

アルマ40,14,これがすなわち悪魔の霊の有様で、かれらは暗やみの中で大そう恐れおののきながら自分たちに下る火のような神の怒りを待っている。かれらは復活の時までこのような境涯に止まらなくてはならない。しかしこれと同時に義人はパラダイスに在る。

アルマ40,15,復活する前に、霊がこのような有様または不幸な有様に在ることを1つの第1の復活であると思う人がある。その通り、すでに話したように霊を起してこれを幸福な有様、または不幸な有様に置くのを復活と言ってもさしつかえのないことを私は認める。

アルマ40,16,しかし定っていることが証明されている第1の復活とは今より過去に居った一切の人々と、現在居る一切の人々と、今後キリストが死者の中から復活なさる時までに居る一切の将来の人々の復活である。

アルマ40,17,それでこのように言うてある第1の復活は、霊を起して幸福または不幸を言いわたすことであると思うべきではない。第1の復活がこう言うことであると推しはかることはできない。

アルマ40,18,ごらん、私ははっきりと言う。第1の復活とはアダムの時からキリストの復活の時までの人々の霊と体とが再び相合することを言う。

アルマ40,19,さて、これらの人々が悪人であつても義人であつても、皆同時にその霊と体とが相合するかどうかはこれを言わない。ただこれらの者の復活は、キリストの復活の後に死ぬ者の復活に先立つことだけ言えば充分である。

アルマ40,20,わが子よ、私はこれらの者がキリストの復活と同時に復活するとは岩内。しかし私1人の考えを言えば、義人の霊と体とはキリストの復活の時または商店の時に再び相合するのである。

アルマ40,21,しかしそれがちょうどキリストの復活の時であるか、またはその後であるかは確に癒えない。しかし肉体の死からその復活までには間があつて霊の受ける幸不幸の有様があり、そしてその有様は死者がよみがえつてその体と霊とが再び相合し、それぞれの行いに従つて裁

アルマ40,21-1,裁判をされるために、神の前に引出されると神が定めたもうた時までつづくことだけは私が確に言うことができる。

アルマ40,22,これによって予言者たちの言った回復が起る。

アルマ40,23,霊は再び体にかえり、体は再び霊にかえり、手足も骨の関節もみな元の自然の完全な身体のものにかえり、髪の毛1筋もなくならず、身体の中の部分もみな元の自然の完全な形に復るのである。

アルマ40,24,これがすなわち予言者たちの言った回復である。

アルマ40,25,この回復の時が来ると義人は神の王国で栄光を得て光輝を放つ。

アルマ40,26,しかし、これは反して悪人には恐ろしい死滅が来る。すなわち、このような悪人は聖くないから義しいことと全く離れた境涯に置かれる。清くない者は神の王国に入ることができないから、このような者はそこに追い出されその悪い行いの報いを受けると定められて苦い

アルマ40,26-1,飲むのである”。

アルマ41,,アルマ書 第41章

アルマ41,*-*,アルマひきつずきコリアントンに誠めを与える。回復の意義。人間はその行為と欲望に従って裁判を受ける。残悪は自己の判断で選ぶ。

アルマ41,1,”さて、わが子よ。今話した回復と言うことについて私はもっと言いたいことがある。ごらん、ある人はこの事につき聖文の意味を曲げて大いに迷っている。汝もまたこの事について思いが乱れていると見えるから、私はこの事を汝に説き明そう。

アルマ41,2,回復の計画は神の正義から見て必要である。それはすべての事物がそれぞれ元の自然の状態に復ることは必要であるからである。キリストの権力と復活とから言うと、人間の霊をその体に復し、身体の中の部分もみなその元の自然の形に復すは必要で正当なことである。

アルマ41,3,また神の正義から言うと、世の人々がそれぞれの行いに従い裁判を受けることもまた必要であって、現世に於ける行いが善くまたその心の望みも善かったならば、終りの日にその人を善い状態へ復すことも必要である。

アルマ41,4,しかし、かれらの行いがもし悪かったならば、その悪い行いの報いはそのままかれらに復って来る。それであるから一切のものはその相当する所、元の自然の形に回復せられ、死ななくてはならぬ身体は不死不滅の体となり、朽ちねばならぬ肉体は朽ちないものとなり、

アルマ41,4-1,人はあるいは神の王国に入って永遠の幸福を得るためによみがえり、あるいは悪魔の国に入って永遠の不幸に逢うためによみがえる。すなわち、一方には一種の者があり、他方には他種の者がある。

アルマ41,5,この中の前者は幸福の望に従い回復せられて幸福を得、善の望に従い回復せられて善を得る。また後の者は悪の望に従い回復せられて悪を得、また生涯悪を行いたいと思ったからその報いとして来世に悪を受け

るのである。

アルマ41,6,しかしながら、これに反して人がもしその悪を悔い改めて生涯の終りまで義を求めるならば、その報いとして義と認められるのである。

アルマ41,7,このような人々は種に贖い救われて、あの永遠に明けない夜のような暗やみの境涯から救われるのである。それであるから、世の中の人々は善を行うのも悪を行うのも自分で選ぶままであるから、その選ぶところに従ってあるいは救われあるいは墮落する。

アルマ41,8,そもそも神の定めたもうたことは変えることができない。それであるから、道はもはや確に用意してあるので誰でも歩きたいと思うものはこの道を歩いて救われることができる。

アルマ41,9,わが子よ。今まであやうくもお前は教義のある点について罪を犯して来たが、これからはもうその点について神に体する罪を犯すような危険をしないでくれ。

アルマ41,10,お前は、もはや回復に関することを教わっているから、このまま自分の罪深い境涯から幸福な境涯に回復されると思ってはならない。罪悪は決して幸福を生じたことはない。

アルマ41,11,すべて自然のままの有様、すなわち肉欲の有様にある者たちは、罪の縄目に縛られ苦渋を飲まされている有様に居る。また神を信ぜずに世を渡り、神の本聖に背くから幸福と言う性質に反する有様に居るのである。

アルマ41,12,ごらん、回復とは物を自然の有様から不自然の有様に起き、または物をその性質に反する状態に奥と言うことであるか。

アルマ41,13,いや、そうではない、回復とは悪を悪に、肉欲を肉欲に、善を善に、義を義に、正義を正義に、憐みに元通りに復すことである。

アルマ41,14,それであるから、わが子よ。慎んで同胞に対して憐みの心を深くし、正義を以て行い、正しく人のことを考えたえず善を為せ。お前がこれらの事を行えばその報いを受ける、すなわち憐みと正義と義しい裁きと善とはお前に元通り回復されるのである。

アルマ41,15,お前から出るものはお前にかえる。それであるから回復と言う言葉はかえって在任をますます罪があるとして少しもこれに寛く当ることはない”。

アルマ42,,アルマ書 第42章

アルマ42,*-*,アルマひきつずきコリアントンに誠命を与える。正義と憐みとを説き明す。生命の木。現世は試みの世。霊の死と肉体の死。悔い改めと贖いと律法と罰と、これらはみな必要である。

アルマ42,1,”わが子よ、私はこのほかにまだお前の心が乱れて解らないことがあるのを認める。それは罪人を罰する神の正義についてである。お前は罪人が不幸な境涯に置かれることを義しくないと思っている。

アルマ42,2,しかしわが子よ、私はこのことを汝に説き明そうと思う。主なる神は私たちの始祖をエデンのそのから放逐して、その肉体の出で来た土をたがやさせたもうた後、生命の木を守るためにケルビムと四方八方に動いて焰を吐く剣とをエデンの園の東の端に置きたもうた。

アルマ42,3,人がもはや神のように善悪を弁えるようになったから、手を出して生命の木の實も食い、永遠に生きることにないように、主なる神はケルビムと焰を吐く剣とを置いて実を食べることをお許しにならなかった。

アルマ42,4,これから見ると、悔い改めるための時期、すなわち試しの時期が人に与えられたことは明らかなである。この試しの時期は人が悔い改めて神に事えるべき時期である。

アルマ42,5,アダムが、もしもすぐに手を出して生命の木の實をとってこれを食ったならば、悔改めの時期はなくなって神の御言葉のように永遠に生きながらえ、そのために神の御言葉は空しくなり、偉大な救いの計画は無効になったであろう。

アルマ42,6,しかし見よ、人は死ななくてはならぬと定ったから、生命の木から切りはなされて地上から死んで行かなくたはならぬものとなり、永遠に神のもとからさまゆおって墮落した者となった。

アルマ42,7,それであるから私たちの始祖が、肉体の上から霊の上からも主の御前から切り離され、自分の思うままをする者になったことが明らかなである。

アルマ42,8,その時すぐに人を肉体の死から救うのは、人に幸福を与える偉大な計画を破壊してこれを無効にするのであるからその必要がなかった。

アルマ42,9,霊はいつまでも決して消え失せることのできないものであったから、始祖の墮落は肉体の死ばかりでなく霊の死までもあらゆる人類に及ぼした。霊の死とは人が主の御前から断ち切られることである。それであるから、霊の死からあらゆる人類を救うことは必要であつ

アルマ42,10,しかし、世の人は生れながら肉の欲とみだらな欲とに満ち、また悪心のある者となったから、この試しの時期は世の人が用意をする時、すなわち準備の時期となった。

アルマ42,11,わが子よ、忘れるな。もしも贖い救う計画がないならば(これを棄てるならば)人の肉体が死ぬとその霊は主の御前から断ち切られるので、すぐに不幸となるのである。

アルマ42,12,人が自分の不従順によって自らに真似いた墮落の状態からこれを救い出す方法はなかった。

アルマ42,13,従って、正義から言えば、人がこの試しの時期すなわち準備の時期に悔い改めると言う条件がなければ贖い救う計画を成就することはできない。この条件なしには、正義の働きを捨てずに憐みを施すことはできない。もしも正義の働きが棄てられるならば、神は神たる資

アルマ42,13-1,資格がなくなるのであるから、正義の働きを棄てることはできないのである。

アルマ42,14,それであるから、あらゆる人類は墮落して正義の手の中にあったことが明らかなである。まことに、その正義は神の正義であって、人類を神の御前から永久に断ち切ったものである。

アルマ42,15,憐みの計画は、身代りによる罪の贖いが行われぬ中は成就すべきものではなかった。それであるから、神は憐みの計画を成就させるためと正義の要求に応ずるためと、また自らが完全で正義の憐み深い神であるために、自分が代って世の人の罪を贖いたもうのである。

アルマ42,16,さて霊の生命のように永遠の幸福の計画の反対に、霊の生命のように永遠の罰が定めてなかったならば、人は悔改めをすることができなかった。

アルマ42,17,なぜならば、人が罪を犯さなかったならば、どうして悔い改めることができようか。律法がなかったならばどうして罪を犯すことができようか。罰を定めなかったならば、どうして律法があり得ようか。

アルマ42,18,始めに罰が定められ、正しい律法が立てられたから、この律法があるために人は良心にとがめられて悔いするようになった。

アルマ42,19,もしも律法がなく、人殺しをする者を死刑に処すべしと言う律法がなかったならば、人は人殺しをしたとて死刑にされることを恐れないうであらう。

アルマ42,20,もしも罪を禁ずる法律がないならば、人は罪を犯すことを恐れないうであらう。

アルマ42,21,それであるから、もしも律法がないならば、罪を犯す者があっても正義も憐みも共にその者に力が及ばない。その者に力が及ばなければ正義も憐みも共に何のためになるであらうか。

アルマ42,22,しかし、律法があるから、これにつけて罰が定めてあるばかりでなく悔改めもまた許されている。憐み

は悔改めを要求する。そうでなければ、正義は人に要求して律法をきびしく行い、律法はこの者に罰を与える。もしそうでなければ正義の働きは空しくなり、神は神た

アルマ42,22-1,資格がなくなるのである。

アルマ42,23,しかし神は神たる資格を失いたまわずに憐みは悔改めをする人々に及ぶ、このような憐みは身代りの贖罪が生ずるものであって、身代りの贖罪によって死者の復活が起り、死者の復活によって人は神の御前に復ることができる。このようにして、人は律法と正義とにより

アルマ42,23-1,それぞれの行いに従って裁判されるために、元の通りに復されて神の御前に行くのである。

アルマ42,24,ごらん、これによって正義はその一切の要求を満たすことができ、憐みを受けるに足る一切の人々に憐みが及ぶ。それであるから、真心から悔い改める者のほかには誰も救われることができない。

アルマ42,25,お前は憐みが正義の働きを奪うことができると思うか。私は自分で答えよう。いや、少しも奪うことができない。もしそうでないならば神は神たる資格がなくなるのである。

アルマ42,26,このようにして、神は創世の前から定めた永遠の大みこころを成就したもう。このようにして、人の贖い救われることと亡びと不幸とは生ずるのである。

アルマ42,27,それであるからわが子よ。来たいと思う者は誰でも来て生命の水を自由に無料で飲んでよろしい。また来たいと思わない者は誰でも来ることを強制されない。しかしこの者は終りの日にその行いによって報いを受ける。

アルマ42,28,この者がもしも悪を行おうとし、生涯の内に悔い改めないならば、神が定めたもうた回復の法に従って罰を受ける。

アルマ42,29,今わが子よ。私はこれからお前がこれらのことについて心を悩まさず、ただ自分に悔改めをさせるような心配を以て自分の罪について心を悩まして欲しい。

アルマ42,30,わが子よ。私はお前がまた神の正義にそむかないように切に望む。どのようなささいなことでも、神の正義にさからって、自分の罪を弁解しようとしてはならない。むしろ、神の正義と憐みと寛容とを自由にお前の胸の中に往き来させて、自分の心を地にひれ伏すばかり

アルマ42,30-1,へりくだらせよ。

アルマ42,31,今わが子よ。お前はこの国の民に神の道を宣べ伝える務めを神から任ぜられている。さあ行って、この偉大な憐みの計画がこの国の民にも及ぶように民が悔改めをするため、誠実に真面目に宣べ伝えよ。ねがわくは、私が言った通りに神がお前に恵を下したまわんことを

アルマ42,31-1,アーメン”。

アルマ43,,アルマ書 第43章

アルマ43,*-*、再びレーマン任が侵入する。モロナイとリーハイの軍、敵軍を包囲してこれを破る。

アルマ43,1,さて、アルマの息子たちは神の道を宣べるために出立したが、アルマもまた休むことができないから道を宣べるために出かけて行った。

アルマ43,2,私はこれらの者が予言と啓示の”みたま”により、また自分らが任ぜられた神権の職に従って神の道と真理とを宣べ弘めたことを誌すだけで、これ以上これらの者の伝道については何も誌さないことにする。

アルマ43,3,さて私は判事治世の18年目に行われたニーファイ人とレーマン人との戦いの記事にかえろう。

アルマ43,4,ゾーラム人はレーマン人と成った。それであるから、18年目の始めのころニーファイ人が自分たちを攻めるために出てくるのを見て、戦いの準備をしてジェルシヨンの地にその軍勢を集めた。

アルマ43,5,レーマン人は数千の兵を以てゾーラム人の住むアンテオーヌムと言う所へ入ってきたが、その司令長官の名をゼラヘムナと言った。

アルマ43,6,アマレカイ人は、元来性質が正統のレーマン人よりも悪事と殺伐なことを好んだので、ゼラヘムナがレーマン人の軍を指揮する大士官に任命した者たちはみなアマレカイ人かゾーラム人であった。

アルマ43,7,ゼラヘムナがこのようにしたのは、レーマン人を煽動してひきつずきニーファイ人を憎ませ、またレーマン人を従わせて自分の志を成就するためであった。

アルマ43,8,ゼラヘムナの志はレーマン人を煽動してニーファイ人に対して怒らせ、そしてレーマン人を支配する大きな権力を奪い、またニーファイ人を奴隷にしてこれもまた支配する権力を得ることであった。

アルマ43,9,ニーファイ人の志すところは、自分らの所有する土地、家屋および祭司たちが敵の手に落ちないようにこれらを保護することであって、また自分らの権利と特権とを護り、思うままに神を礼拝できるように自分らの自由を護ることであった。かれらはそのために戦った。

アルマ43,10,それは、もしもレーマン人の手に落ちたならば、精神をこめ真心を以て、真心の生ける神を礼拝する者がみなレーマン人に殺されることを知っていたからである。

アルマ43,11,また、レーマン人がその同胞であってアンモンの民と言われているアンタイ・ニーファイ・リーハイ人を極度にうらんでいることと、またアンモンが誓約を結び確くこれを守って武器をとることをどうしても聞かなかつ

たから、かれらがもしもレーマン人の手の中に

アルマ43,11-1,必ず亡びてしまうことをニーファイ人は知っていたからである。

アルマ43,12,ニーファイ人はアンモンの民を亡ぼさないで、その住むべき土地をかれらに譲り与えていたが、

アルマ43,13,その代りにアンモンの民は自分たちの財産の大部分をニーファイ人に納め、これでニーファイ人の軍の給養を助けていた。このようなわけでニーファイ人は、レーマンの子孫とイシメルの息子たちの子孫とニーファイ人から分離してアマレカイ人またはゾーラム人と成つ

アルマ43,13-1,ノアの祭司の子孫、以上から成るレーマン人と対抗して独りで戦わねばならなくなった。

アルマ43,14,ノアの祭司らの子孫の数はニーファイ人の数とほとんど同じであったから、ニーファイ人はその同胞と地を流すほどの戦をするほかはなかった。

アルマ43,15,レーマン人の軍はアンテオースムの地に集ったが、これと共にニーファイ人の軍はジェルシヨンの地に戦の準備をしてレーマン人の軍を待った。

アルマ43,16,ニーファイ人の全軍の総督すなわち司令長官に選ばれた人をモロナイと言った。ニーファイの軍では司令長官が全軍を指揮する組織であった。

アルマ43,17,それでモロナイは全軍を指揮して戦争のことをすべて司どったが、ニーファイ人の軍の司令長官に選ばれた時には、その年僅か25才であった。

アルマ43,18,さてモロナイとそのひきいる兵はジェルシヨンの地の境でレーマン人と出逢ったが、その兵は剣、太刀、そのほかあらゆる武器を携えていた。

アルマ43,19,レーマン人の軍は、モロナイがニーファイの民に胸当と腕盾とを付けさせ、かぶとをかぶらせ、またかれらに皆厚い衣服を着けさせているのを見たので、

アルマ43,20,ゼラヘムナの軍はニーファイ人のように戦いの装いをせず、胸当も楯も着けず、ただ剣、太刀、弓矢、投石器などだけを持ち、ゾーラム人とアマレカイ人のほかはみな腰にまとった皮のほか全くはだかであって、

アルマ43,21,胸当も腕楯も使って武装して居なかったから、自分の軍がニーファイの軍よりもはるかに多かったのに、二一衆の戦の装いを見て非常に恐れをなした。

アルマ43,22,これによって、ゼラヘムラの軍はジェルシヨンの地の境でニーファイ人と戦をする勇気を失い、アンテオースムの地を立ち去って荒野へ退いた。そしてもはやモロナイの軍はその行方を知るまいと思い、マンタイの地へ行ってこれを占領するために荒野の道を廻ってサイ

アルマ43,22-1,源の近くに進軍をした。

アルマ43,23,しかしモロナイは、レーマン人が荒野へ退くとすぐに間者を荒野へ出してレーマン人の陣営をうかがわせた。モロナイはまたアルマの予言の評判を知っていたから、使者をアルマの所にやってニーファイ人の軍はレーマン人を防ぐためにどこへ行ったらよいか主に伺って

アルマ43,23-1,と言わせた。

アルマ43,24,アルマは主に伺ってその答えを受け、レーマン人の軍はマンタイの地へ行って人民の防禦の足りない所を攻めるために、いまちようど荒野の道を廻って進んでいることをモロナイの使者に教えたので、使者たちは帰ってアルマの伝言をモロナイに聞せた。

アルマ43,25,ここに於てモロナイは、レーマン人が何らかの方法で自分が今居るジェルシヨンの地へ侵入してきて都市を占領するといけないと思ひ、軍の一部をその所に留め、のこりの兵を率いてマンタイの地へ行った。

アルマ43,26,マンタイの地に着くと、モロナイはその近くに住む一切の人々にレーマン人と戦って自分たちが所有する土地と国と権利とを護るために集合させた。それであるから、かれらはレーマン人が来るまでに充分戦備をととのえて待っていた。

アルマ43,27,モロナイは荒野にあるサイドン川の西に当る川岸の近くにある谷間にその軍を隠し、

アルマ43,28,レーマン人の軍勢の来ることが知れるように、ところどころに間者を置いた。

アルマ43,29,モロナイは、レーマン人がニーファイ人をあるいは亡ぼしあるいは服従させてこれを奴隷とし、全地を征服して自分らが司どる一国にするつもりで戦うことを知っていた。

アルマ43,30,モロナイはまたニーファイがその所有する土地と自由と教会を護るためにだけ戦うことも知っていたから、ニーファイ人を守るために謀ごとを用いても罪ではないと考え、間者を使ってレーマン人のとるべき方向を探り知った。

アルマ43,31,それでモロナイは兵を分けてその一部を谷へ率いて行き、この兵を東の方リツプラ山の南に隠し、

アルマ43,32,サイドン川の西に当る西の谷に於て、マンタイの地の境に至るまでここかしこに残りの兵をかくしておいた。

アルマ43,33,このようにモロナイは自分の思うように軍を配置し、レーマン人と戦う備えをしてその来るのを待っていた。

アルマ43,34,とうとうレーマン人はモロナイの軍の一部が隠れているリツプラ山の来たの方へ進んで来たが、

アルマ43,35,リツプラ山を過ぎて谷に入り、サイドン川をわたり始めた時に、リツプラ山の南に隠れていた軍はリーハイと言う人に率いられて来て東の方からレーマン人の背面をとり巻いた。

アルマ43,36,しかし、レーマン人はニーファイ人の軍が後ろからせめてくるのを見ると、身を転じてリーハイの軍と戦を開いた。

アルマ43,37,そして、両軍ともようやく死者を出したが、レーマン人の方がずっと多くの死者を出した。なぜならばニーファイ人が、触れると人を殺す剣と太刀とで烈しく撃ってくるところを、レーマン人ははだかでこれを受けたからである。

アルマ43,38,それに反してニーファイ人は、レーマン人に急所を打たれないように胸当と腕楯とかぶとでこれを覆っていたから、稀に敵の刃にかかり血を失って倒れたばかりであった。このようにニーファイ人は大いにレーマン人の兵を殺した。

アルマ43,39,そこでレーマン人はその死傷者が多いのを見て、怖れてサイドン川の方へ逃げ始めた。

アルマ43,40,しかし、かれらはれ一敗とその兵とに追撃せられ、とうとうサイドン川の水の中に追いこめられたので、サイドン川を仕方なく渡った。しかし、リーハイは川の岸に自分の兵を止めてこれに渡ることを許さなかった。

アルマ43,41,一方、モロナイとその兵とはサイドン川の向うの谷間でレーマン人の軍を迎え、これを攻めて殺し始めたので、

アルマ43,42,レーマン人の軍はまた逃げ出してマンタイの地方へ行こうとしたが、またまたモロナイの軍と出逢った。

アルマ43,43,それで、このたびはレーマン人の兵も必死に戦った。まことにレーマン人はいまだかつてこのように力をふるい勇気を出して戦ったことはなかった。

アルマ43,44,レーマン人は、その朝刊たちまたは上級士官たちであるゾーラム人とアマレカイ人と、その総督でまた司令朝刊であるゼラヘムナとにはげまされ、龍のように烈しく戦ったので多くのニーファイ人がその手に殺された。

まことにレーマン人の兵はニーファイ人のかぶとを

アルマ43,44-1,割り、多くの胸当を突き抜き、多くの腕を切り落とし、烈しく怒って戦った。

アルマ43,45,しかし、ニーファイ人が戦ったのはレーマン人よりも善い動機にはげまされたのであって、王政を立てるためでもなく、また権力を得るためでもなく、実に自分の家と自由と祭司、持物、礼拝の儀式および教会を護るためであった。

アルマ43,46,また神に尽す義務であると思ったことをしたのであった。それは主が“汝らはたとえ自分より害を加えず、また1度害を加えらるるときに戦をいどまざるに、2度まで敵に害を加えらるるときには、身を敵にゆだねて甘んじて殺さるごときことあるべからず”とかれら

アルマ43,46-1,先祖に命じたまい、

アルマ43,47,また“汝らその家族を守るためにやむを得ざる場合には、よろしく血を流しても家族を守れ”と命じたもうたから、自分の家族、所有の血、国、権利、宗教を護るためにレーマン人と戦ったのである。

アルマ43,48,モロナイの兵はレーマン人が猛烈であってひどく怒っているのを見ると、しりごみをして逃げ出そうとしたが、モロナイはその心を見抜き、かれらにその所有の血と自由と奴隷の境涯から救われた有様とを思い出させるために使者を送ってこれを勇み立たせた。

アルマ43,49,その時、ニーファイ人の軍はレーマン人の軍の方に向い、声を合わせて自分らの自由を守り奴隷の境涯をまぬかれさせて下さるよう、その神である主に祈った。

アルマ43,50,するとかれらはたちまち大いに勇気を得てまたレーマン人に対抗し、同時に自由を守りたもうよう主に願い始めたので、この頃レーマン人はニーファイ人から逃げ出し始め、サイドン川の岸まで退いた。

アルマ43,51,さて、レーマン人の兵はニーファイ人の兵よりも倍以上あったけれども、手ひどく追いせまられたのでついにこの谷でサイドン川の岸に集り、聯合して一体となった。

アルマ43,52,こう言うわけで、リーハイの兵が川の東に居たからモロナイの軍は川の両岸でレーマン人の軍をとり囲んだ。

アルマ43,53,ゼラヘムナの軍は、リーハイの軍が川野東に居って、モロナイの軍が川の西に居るのを見て、自分の軍がニーファイ人にとり囲まれたのを知り、ふるえおののいた。

アルマ43,54,モロナイは敵軍がおそれおののいているのを知って敵を殺すのを止めようと自分の軍に命を下した。

アルマ44,,アルマ書 第44章

アルマ44,*-*,モロナイの雅量。ゼラヘムナ、はじめ平和の申出をことわるが、ついに止むを得ず条件を受入る。レーマン人、平和の誓約を結ぶ。アルマの記録終る。

アルマ44,1,そこでかれらは戦を休んで数歩退いたが、モロナイはゼラヘムナに向って言った“見よ、ゼラヘムナよ。われらが人の地を流すことを好まない者であることを知れ。汝らはもはやわが手に落ちているけれども、われらが汝らを殺すことを好まないことを汝は明らかに知る

アルマ44,2,見よ、われらが汝らと戦ったのは汝らの地を流して権力を奪うためではない。また誰にも奴隷のくびきをかけようと思うのでもない。汝らこそこの目的でわれらに敵対して来た。汝らが怒るのはわれらの宗教がもとである。アルマ44,3,しかし、今は主がわれらと共にましまして、汝らをわが手に私たもうたことを汝らは明らかに認めている。汝らは、これがみなわれらの宗教とキリストを信ずるわれらの信仰とのために主がわれらになしたもうたことであるのを認めよ。今やこのわれらの信仰を敗ること

アルマ44,3-1,できないのを汝らは明らかに認めている。

アルマ44,4,われらの信仰が神を信ずる真の信仰であること、真にわれらが自分らの神に忠義をつくし信仰を堅くして忠実に宗教を守る間は、神がわれらを支え助けて護りたもうことと、われらが罪惡に耽らず信仰をすてない間は主がわれらの亡びるのを許したまわないこととは、汝

アルマ44,4-1,解っているであろう。

アルマ44,5,今ゼラヘムナよ。われは今やわれらの信仰と宗教と礼拝の儀式と教会とを護ることと、またわれらの祭司を扶助してこれを守る神聖な義務と、われらにその所有する土地と国とを深く愛させる自由と、われらのあらゆる幸福の源である神の聖い道を守る義務と、またわれ

アルマ44,5-1,重んずるすべてのものを護る義務とを遂げさせるため、われらの武器に力を加えたまい汝らに勝たせたもうた全能の御名により汝らがその武器をわれらに引きわたすことを命ずる。

アルマ44,6,これだけではない、汝らはその命を守ろうとする望があるであろう。その望を遂げさせるために、われは汝らがその武器をわれらに引きわたすことを命ずる。武器を引きわたすならばわれらは汝らの血を流さない。汝らがもし国へ帰って再びわれらの国へ兵を向けない

アルマ44,6-1,今汝らの命を助けてやる。

アルマ44,7,しかし、汝らがもしこのように誓約しないならば、汝らはもはやわれらの手に落ちているから、われはわが兵に命じて汝らを撃ち、全滅するまで汝らの身に致命傷を負わせるであろう。もしそうならば、その時われらのうちどちらがこの民を治める権力を得、どちらが奴

アルマ44,7-1,奴隷にされるか明らかであろう”と。

アルマ44,8,ゼラヘムナはこの言葉を聞き進み出てその剣と太刀と弓とをモロナイの手にわたして言った”これはわれらの武器だ。われらはこれをお前に引きわたす。しかしわれらとわれらの子孫が将来かならず破ると知れた誓約をお前とは結ぶまい。どうか、われらの武器を受け取

アルマ44,8-1,われを野へ帰してくれ。そうでなければわれらは剣をわたさず、死ねか勝つまで戦を続けよう。

アルマ44,9,われらはお前らと同じ宗教を信じていない。われらをお前らの手に落としたものは神であるとは思わない。お前らはその巧みな計ごとでわれらの刃を裂けたのだと思う。見よ、お前らを護ったのは実にその胸当てと楯とである”と。

アルマ44,10,ゼラヘムナがこう言い終ると、モロナイは自分が受け取ったゼラヘムナの剣やそのほかの武器をかれに帰して言った”見よ、われらは最後まで戦つづけよう。

アルマ44,11,われはもう言った言葉を取り消せないから、汝らがもし2度とわれらに向って戦に来ないと言う誓約を立ててこの場を去るのでなければ帰さない。このことは主のまします通りに確である。汝らがもはやわれらの手の中に落ちた以上、わが示した条件に従わなければ、汝

アルマ44,11-1,汝らの血を地に流してやる”と。

アルマ44,12,モロナイがこう言ったので、ゼラヘムナはその剣を手を持ちモロナイを怒って殺そうとして突き進んだが、かれがふりあげた剣はモロナイの1人の兵に叩き落とされ、つかの所で折れてしまった。そして兵はまたゼラヘムナを打ってその頭の川を剥ぎこれを地に落した。

アルマ44,12-1,ゼラヘムナは逃げて自分の軍中に入った。

アルマ44,13,かたわらに立ってゼラヘムナの頭の皮を剥ぎとった兵はその髪の毛をつかんでこれを地面から拾い上げ、頭の皮を自分の剣の先にひっかけてレーマン人の軍勢に示し大きな声を出して、

アルマ44,14,”汝ら武器を引きわたし平和の誓約を結んでその国に帰らなければ、汝らの司令朝刊のこの頭の皮のように汝らも皆地にうち倒されるぞ”と言った。

アルマ44,15,レーマン人はこの言葉を聞きまた剣の先にかかっている頭の皮をみておそれおののいた者が少くない。多くの者が出てきてモロナイの足下に武器を投げ平和の誓約を結んだが、このように誓約した者たちは野へ行くことを許された。

アルマ44,16,しかしゼラヘムナは非常に起って残りの兵をはげまし怒らせ、前よりもさらに勇ましくニーファイ人の兵と戦わせた。

アルマ44,17,レーマン人の強情なためにモロナイは怒ってこれを攻め殺せと兵に命じた。そこでモロナイの兵は再びゼラヘムナの兵を殺し始め、レーマン人も勢力をつくし剣をふるって激しく戦った。

アルマ44,18,しかし、レーマン人は裸の皮膚と覆物のない頭とをニーファイ人の鋭い刃にさらし、あるいは突かれあ

るいは撃たれてみるみるうちにニーファイ人の剣に倒れ、まことにかれらはモロナイの1人の兵が予言をしたようになぎ倒れ、まことにかれらはモロナイの1人の兵士

アルマ44,18-1, 予言をしたようになぎ倒されたのであった。

アルマ44,19, ゼラヘムナはその兵が今やみな殺されようとするを見て切にモロナイに嘆願し、モロナイがもし残りの兵の命を助けてくれるならば、自分もまたほかのレーマン人も2度とニーファイ人に戦をいどまないと言う誓約を結ぶと約束した。

アルマ44,20, そこでモロナイは再びその兵に殺戮することを止めさせ、レーマン人から武器を剥ぎとり、レーマン人が平和の誓約を結んでから、かれらを野へ行かせてやった。

アルマ44,21, この時の両軍の死者はその数が大きくて数えなかったが、ニーファイ人もレーマン人もまことに多くの死者を出した。

アルマ44,22, かれらはその死者をサイドン川の中へ投げこんだが、そのしかばねは水のまにまに流れ去って海の深みに葬られた。

アルマ44,23, 戦がすんでから、ニーファイ人の兵士すなわちモロナイの軍は、その家と所有の地へ帰ってきた。

アルマ44,24, このようにしてニーファイの民を治める判事治世の18年目は過ぎ去った。これでニーファイ版にのせたアルマの記録は終る。

アルマ45,*-*、ヒラマンの時代のニーファイ人とその戦争ならびに謀叛の記事。この記事は億万がその生涯のうちに書いた記録による。第45章から第62章に至る。

アルマ45,, アルマ書 第45章

アルマ45,*-*、ニーファイ人の消滅することが再び予言される。モーセに比べることのできるアルマの最后。教会内部の不和。

アルマ45,1, 主はこのたびもニーファイの民を敵の手から救いたもうたため、かれらは大いに喜び自分らの主なる神に感謝して大いに断食と祈りとをし、まことに大きな喜びを以て神を礼拝した。

アルマ45,2, ニーファイの民を治める判事治世の19年目にアルマはその息子ヒラマンの所へきて“これまで保存されてきたあのいろいろな歴史について私が汝に言ったことを信ずるか”と言ったので、

アルマ45,3, ヒラマンはその通り信ずると答えた。

アルマ45,4, するとアルマはまた“将来降臨したもうはずのイエス・キリストを信ずるか”と聞いたので、

アルマ45,5, ヒラマンは、はい、あなたの言った一切の言葉を信ずると答えた。

アルマ45,6, するとアルマは重ねて“汝は私の誠めを守るか”と言ったので、

アルマ45,7, ヒラマンは、はい、心をこめてあなたの誠めを守ると返事をした。

アルマ45,8, その時アルマはヒラマンに向って“汝はさいわいである。主は汝をこの地で榮えさせたもう。

アルマ45,9, 見よ、私が汝に予言をすることがある。しかし、その予言が成就するまではこれを公にしてはならない。それであるから、これから私の言うことを書き誌せ。

アルマ45,10, 私の予言は次の通りである。私は私に宿る啓示の“みたま”により、ニーファイ人であるこの民が、イエス・キリストがこの民に現われたもうてから400年後、信仰のない有様に墮落することを予め知っている。

アルマ45,11, それから、ニーファイの民はこの世から消滅してしまうまで戦争と疫病と飢饉と殺戮とに逢う。

アルマ45,12, なぜならば、かれらはますます無信仰に墮落して悪い行い、みだらな行いそのほかあらゆるよこしまな行いに陥るからである。はっきり言うと、あの大きな光と知識とを受けながらこれに対して罪を犯すからである。この大きな悪事はキリストが降臨したもうてから第4

アルマ45,12-1, みな死んでしまわない中に起るのである。

アルマ45,13, この大きな時期が来ると、今ニーファイの民の中に数えられている者たちの子孫が、もはやニーファイの民の中に数えられない日もじきにくる。

アルマ45,14, この大きな恐ろしい日に亡びないで残る者たちは、主の弟子と言われる僅かな人々を除き、みなレーマン人の中に数えられレーマン人のような者となる。しかも主の弟子と言われる者もみな亡びてしまうまでレーマン人に追われる。罪惡が起ってくるからこの予言は必ず

アルマ45,14-1, と言った。

アルマ45,15, アルマはこのようなことをヒラマンに述べてから、ヒラマンとほかの息子たちを祝福し、また義しい人々のために地もまた祝福をした。

アルマ45,16, そしてアルマは言った“主なる神は‘この地に居りて惡をなすあらゆる国民、あらゆる血族、あらゆる国言葉の民、あらゆる人々の罪惡その極に達する時来らば、かれらの滅亡を招くのろいこの地の上にあるべし’と仰せになった。私が今予言をしたことは必ず文字通に

アルマ45,16-1, これはすなわち神がこの地に下したもうのろいと祝福である。主はいささかも罪を見逃したまわらない”と。

アルマ45,17,アルマはこう言ってから教会を祝福し、またその時から後信仰を堅固に保つ教会員をも祝福した。
アルマ45,18,これらのことを終ってアルマはゼラヘムラの地を去り、あたかもミレク地方へ行くこうとする様子であったが、その時以来アルマを見た者もアルマの言を聞いた者も絶えてなくその死その葬りについてわれわれは少しも知っていない。

アルマ45,19,しかし、われらはアルマが義人であったことをよく知っている。また“みたま”によって昇天したと言う説、またはモーセのように主の御手で葬られたと言う説が教会に言い伝えられたが、聖文には主がモーセを御許に寄せたもうたとあるからわれらは主が“みたま”に

アルマ45,19-1,アルマも主の御許に寄せたもうたろうと思う。従って、このようなわけでわれらはアルマの死とその葬りについては何も知らないのである。

アルマ45,20,ニーファイの民を治める判事治世の19年目の始めころ、ヒラマンは神の道を宣べ伝えるために国中を廻ってあるいた。

アルマ45,21,それは、ニーファイ人とレーマン人との戦と国内にいろいろなささいな紛争と不和とがあったために、さらに国民に神の道を宣べ伝えることと、教会全体を規律義しくすることが必要であったからである。

アルマ45,22,そこで、ヒラマンとその兄弟たちは、ニーファイの民の住んでいる全国の市町村に教会の組織を規律義しく直すために出て行き、再び全国いたる所に各教会を司る祭司らと教師らとを任命した。

アルマ45,23,さてヒラマンとその兄弟らが、このように教会毎にこれを司る祭司らと教師らとを選んで任命した後、教会員の中に争いが起りヒラマンやその兄弟の誠めに聞き従わない者たちもあった。

アルマ45,24,そしてこれらの者は自分らが非常に富んでいるためにいよいよ高慢となり、ますます尊大となったから、ヒラマンとその兄弟たちとが神の前に正しく真すぐな行いをしなくてはならぬとすすめても、その言葉を少しも心にかけなかった。

アルマ46,,アルマ書 第46章

アルマ46,*-*,アメリカヤ、王になろうとして謀叛する。モロナイと自由の旗。時民、自由を維持することを誓約する。アメリカヤの逃亡。

アルマ46,1,ヒラマンとその兄弟たちのすすめに聞き従わなかった者たちは皆一団となってその同胞に敵対し、

アルマ46,2,甚しく怒って同胞を殺そうと決心した。

アルマ46,3,このようにその同胞を伊方者の頭はアメリカヤと言って強く大きな男であった。

アルマ46,4,アメリカヤは王になりたいと思い、怒りを抱いた者たちもまたアメリカヤが自分らの王になればよいと思った。これらの者は多くその国の位が低い判事であってどれもみな権力を貪っていた者たちである。

アルマ46,5,かれらはアメリカヤのいろいろなへつらいにいざない惑されたから、もしもアメリカヤに附いてかれを王に立てるならば、アメリカヤがその報いとして自分らを民の支配者にしてくれると信ずるようになった。

アルマ46,6,このようであったから、ヒラマンとその兄弟らが説教をし、また教会を監督する深い注意があったにもかかわらず多くの者どもはアメリカヤにだまされて謀叛を起した。その時ヒラマンとその兄弟らとは教会を司る大祭司であった。

アルマ46,7,教会員の中にはアメリカヤのへつらいを信じて教会を去った者が少なくなかった。それであるから、ニーファイの民はレーマン人に勝って得た大勝利と、主の御手に救われたために感じた大きな喜びがあるにもかかわらず、その状態は非常に不安で危険なものとなった。

アルマ46,8,これによって見ると、人間はまことに早くその神である書を忘れて悪事を行い、たやすく悪魔にいざなわれることが明らかである。

アルマ46,9,また非常に悪い1人の悪人が、世の中の人にまことに大きな悪事を行わせることが明かである。

アルマ46,10,またアメリカヤは狡猾な謀ごとをめぐらし、へつらいを巧みに言う者であったから、多くの人の心をまどわして悪いことをさせ、また神の教会をこわし、神が義人のために人民と国家とに与えたもうた自由の基をこわさせようとしたことも明かである。

アルマ46,11,ニーファイ人の軍の司令朝刊モロナイは、このような謀叛があることを聞いてアメリカヤを怒った。

アルマ46,12,それでモロナイは自分の衣服を咲いてその一片をとり、その上に“われらの神と宗教と自由と平和と祭司のために”と書いてこれを竿の先につけ、

アルマ46,13,かぶとと胸当てと楯とを身につけ、者の具を腰にまとい、裂いた衣服の一片を先端につけた竿を(これを自由の旗と言った)手に持って地面にひれ伏し、クリスチャンの仲間がのこってその地に住む間は、自分の兄弟である教会員らにひきつずき自由の祝福を下したまわる

アルマ46,13-1,ひとえにその神に祈り願った。

アルマ46,14,神の教会に属しているすべての真のキリスト信者は、教会に属していない者たちにクリスチャンと名づけられていたが、

アルマ46,15,教会に属して真心からキリストを信じた者たちはみな忠誠をつくし、降臨したもうはずのキリストを信じ

たから、与えられたキリストまたはクリスチャンと言う名を喜んで受けた。

アルマ46,16,それであるから、モロナイは祈りの時にクリスチャンの道と国の自由とのために、特に神の助けがあるように祈ったのである。

アルマ46,17,モロナイは、その心をうちあけて神に祈り願ってから、デソレションの地の南にある一帯の地と、デソレションの北にある一帯の地とを貴い自由の国と定めて次のように言った。

アルマ46,18,"キリストの御名を受けたために嫌われるわれらが、自分の罪悪で自ら亡びを招くようになるまでは、神は決してわれらが踏みつけられまたは破壊されることを許したまわない"と。

アルマ46,19,モロナイはこのように言うてから民の中に行き、衣の一片に書いた言葉がすべての人に見えるようにこれをふり上げ大声に叫んで言った。

アルマ46,20,"この地にこの旗を立ててこれを守ろうと思う者は、みな主の御力によって出て来い。そして、主なる神の祝福を得るために自分の権利と宗教とを護るという誓いを立てよ"と。

アルマ46,21,モロナイがこれを宣言した時、人民は腰に物の具をつけたまま早速集ってきて、その神である主を棄てないしるしとしてあるいは誓約として自分らの衣を裂いた。すなわち、自分らがもしも神の命令に背き罪の淵に沈んでキリストの御名えお受けることを恥じるならば、

アルマ46,21-1,衣を裂いたように主が自分らを裂きたもうであろうと言う意味である。

アルマ46,22,これがすなわちかれらの立てた誓約である。それから、かれらはモロナイの足下にその衣を投げて言った"われたがもしも罪の淵に沈むならば、北の地に住んだあの同胞のように亡びるであろう。またわれらが罪に耽けるならば、今われらが汝の足下にわが衣を投げたよ

アルマ46,22-1,神はわれらを敵の足下に投げ、敵の足下に踏まれるようになったもうと言うことを神に誓約する"と。

アルマ46,23,そこでモロナイはこれに答えて"見よわれらはヤコブの子孫の1部であってまた兄弟らに衣を裂き破られたヨセフの子孫の1部である。従って慎んで神の命令を守るべきではないか。そうでないとおそらくわれらの衣もまた兄弟らに引き裂かれ、われらは牢屋に入れられ

アルマ46,23-1,あるいは殺されるかもわからぬのである。

アルマ46,24,われらはヨセフの子孫であることを忘れずにわれらの自由を守り、ヤコブが死ぬ前に言った言葉を記憶すべきである。ヤコブはヨセフの衣の残っている部分が少しも腐らずに保存してあるのを見て言った'わが子の衣のこの1部だけ腐らずに保存してあるように、わが子

アルマ46,24-1,1部は神の御手によって保存され神の所へ入れられる。これにひきかえ、ヨセフの子孫のあとの者はこの衣のあとの部分のように腐り果てる。

アルマ46,25,それであるからわれは心に憂い悲しむ。しかし神の所へ入れられるわが子の子孫もある故に、われはわが子ヨセフのために心に喜ぶ"と。

アルマ46,26,これすなわちヤコブの言った言葉である。

アルマ46,27,さてあのヨセフの衣のように朽ち果てるはずのヨセフの子孫の1部とは、われらから分れたあの人々ではないか。誰がそうでないと言えるか。われらも、もしキリストを確く信じないで動かされるならば、同じように朽ち果てるであろう"と。

アルマ46,28,モロナイはこのように言うてから、国中で謀叛の行われる方々へ自分で行き、または使者を送り、そして自分らの自由を護りたいと思う一切の民に、アマリカヤと教会を去って謀叛人と一しょになりアマリカヤ人と呼ばれる者共と戦をさせるために集ませた。

アルマ46,29,さてアマリカヤは、モロナイに味方をした人数の方がアマリカヤ人よりも多いのを見、また自分の味方がその方針の正しいかどうかを危ぶんでいるのを認めたので、目的が達せられないのをおそれて、自分に従って行きたいと言う者たちを連れてニーファイの地を指して出

アルマ46,30,モロナイはレーマン人に勢力の加わることは、ニーファイ人のために不利益であると考え、またアマリカヤはその目的を達するため、に必ずレーマン人を扇動し、ニーファイ人に対して怒りを抱かせニーファイ人と戦わせることを知っていたから、アマリカヤ人をことごと

アルマ46,30-1,亡ぼすか、またはこれをとりこにして帰りアマリカヤを殺そうと考えた。

アルマ46,31,そこでモロナイは、すでに集って武装をし平和を守ると言う誓約を立てた自分の兵をくり出して早く行かなくてはならぬと認めたので、荒野の中でアマリカヤの軍の進路を断ち切ろうとしてすぐに軍を率いて進んで行った。

アルマ46,32,モロナイは自分の心のままに行って荒野へ行き、ついにアマリカヤの軍の進路を断った。

アルマ46,33,それで、アマリカヤは僅の兵をつれて逃げ、のこりの兵はモロナイに幸福してゼラヘムラの地へ引き返りつれて行かれた。

アルマ46,34,さてモロナイは高等判事らによりまた国民の投票によって選ばれた人であるから、思うままにニーファイの軍を組織し、これを召集しこれを指揮する権能をもっていった。

アルマ46,35,それであるから、アマリカヤ人の中で自由政体するために自由を用語する誓いを立てなかった者をみな殺させたが、自由の近いを立てないと言った者は僅であった。

アルマ46,36,モロナイは、ニーファイ人の所有となった地の全体にあることごとくの上の自由の旗をあげさせた。このようにモロナイはニーファイ国民の中に自由の旗をたてて置いた。

アルマ46,37,こうして平和は全国に復せられ、判事治世の19年目の終りころまで国中はおだやかであった。

アルマ46,38,さてヒラマンと大祭司たちも教会の平和を保ち、まことに4年の間教会は非常におだやかで喜びが絶えなかった。

アルマ46,39,多くの人は自分が主イエス・キリストに贖い救われたことを固く信じながら死んだので喜びながらこの世を去ったのである。

アルマ46,40,年毎に時季によって流行する熱病で死んだ者もあるが、気候の性質によって人がかかりやすい病気の原因を除くために、神が用意したもうた草根木皮の効能が著しかったので、熱病で死んだ者はさほど多くはなかった。

アルマ46,41,多くの人々は年をとって老衰で死んだ。われらはキリストを信じて死んだ者が、今キリストによって喜び楽しんでいると思わずには居られない。

アルマ47,,アルマ書 第47章

アルマ47,*-*,内容? アマリカヤ、叛逆によってレーマン人の王となる。アマリカヤのおそるべき罪惡。

アルマ47,1,さて、われらはアマリカヤおよびアマリカヤと一しょに荒野へ逃げて行った者たちの記事にかえろう。見よ、アマリカヤは自分に従ってきた者たちを導いてニーファイの地へ行きレーマン人と交ったが、ついにレーマン人を扇動しニーファイの民に対して怒らせたs。そ

アルマ47,1-1,それであるから、レーマン人の王は全国にふれをまわして、ニーファイと戦うために再び集まれと人民に命じた。

アルマ47,2,しかし、王のふれが廻ってきた時に、人民は非常にうろたえ恐れた。人民は王の意に逆らうことを恐れ、またもしニーファイ人と戦うために出て行ったら命を失うかも知れぬと恐れたのである。それで民の大部分は王の命令に従わなかった。

アルマ47,3,そこで王は民が従順でないのを怒り、軍の中で自分の命令を守る者たちを指揮することをアマリカヤに任せ、出て言って命令に従わない人民に武装を強制せよと言った。

アルマ47,4,これは正にアマリカヤの望んでいたことであった。アマリカヤは非常に巧みに悪事を行う男であったから、レーマン人の王の位を奪おうと心に企てた。

アルマ47,5,アマリカヤはすでに王の味方につく民を支配する権力を得たので、今度は王に従わない者たちの歎心を得ようとしてオナイダと言う所へ軍を進めた。これは王の命令に従わなかったレーマン人たちはアマリカヤの軍の来るのを知ると、自分らを亡ぼしにきたのだと思い、

アルマ47,5-1,逃げて行っていたからである。オナイダは武装するために集る所であった。

アルマ47,6,これらの者はどのように強いられてもニーファイとの戦に出て行かないと断然決心をして居たので、すでに1人の男を選んでその長官とした王として、

アルマ47,7,敵と戦う備えをしてアンテパスと言う山の上に集っていた。

アルマ47,8,ところが、アマリカヤは王の命じたようにこの軍と戦う心はなく、ただ自分が全軍の司令長官となり、王を位から落として自分が国を取ってしまうことができるようにレーマン人の兵士の歎心を得ようと思っていたのである。

アルマ47,9,それであるから、アマリカヤはアンテパスさんにほど近い平原に陣を張ったが、

アルマ47,10,夜になると秘密の使者を1人アンテパスさんに送り、山上の軍の司令長官であるリホンタイと談判をしたいから山のふもとへ下りて来てもらいたいと言わせた。

アルマ47,11,しかし、その使者が来た時リホンタイは山のふもとへ下りる勇気がなかった。そこでアマリカヤは再び使者を送ってリホンタイに山のふもとへ下ってほしいと言わせたが、リホンタイはまたまた下ろうとしなかったから3度まで使者を送った。

アルマ47,12,しかし、アマリカヤはリホンタイを誘って山を下らせることはできないことを悟り、このたびは自分で山のぼってリホンタイの陣の近くまで進み、そこから4度目の使者をリホンタイの所へやって、護衛の兵をつれて下ってもらいたいと言わせた。

アルマ47,13,すると今度はリホンタイが下って来たが、その護衛の兵と一しょにアマリカヤの所へ着いたとき、アマリカヤはリホンタイに夜その軍を率いて山を下り、レーマン人の王が自分に指揮をとらせた軍がその陣営にあるままにこれを方位してくれと言ひ、またリホンタイがも

アルマ47,13-1,アマリカヤを全軍の副司令長官にする誓約を結ぶならば、リホンタイがアマリカヤの軍を囲むときにアマリカヤはその軍をリホンタイに降参させると約束をした。

アルマ47,14,そこでリホンタイはその兵を率いて山を下り、アマリカヤの軍をとりかこんだ。アマリカヤの兵が翌日の

夜明けに目を覚ましてみると、そのときはもうリホンタイの軍にとり囲まれていた。

アルマ47,15,アメリカヤの兵は包囲されたことを知ると、自分らが亡ぼされないように同じ国の民である敵軍と合体させてくれてと切にアメリカヤに歎願をした。これは正にアメリカヤの望むところであった。

アルマ47,16,それであるから、アメリカヤは王の命令にそむくことを知りながらその兵をリホンタイに引きわたした。このようにするのは、アメリカヤが王の位を奪おうと目的を達するために1番望んでいたことであった。

アルマ47,17,さて、レーマン人は軍の司令長官がもし殺されると副司令長官を以てこれに代える習わしであった。

アルマ47,18,アメリカヤは1人の家来を使い、少しづつ毒をリホンタイに与えさせたからついにリホンタイは死んだ。

アルマ47,19,それでレーマン人はアメリカヤをその総督とし、司令長官とした。

アルマ47,20,ここに於てアメリカヤは(その望をすでに遂げ)その軍を率いてニーファイの地の都であるニーファイ市へ行った。

アルマ47,21,すると王はアメリカヤが自分の命令を守って、ニーファイ人と戦うためにかほどの大軍を集めてきたと思い、護衛の兵をつれてアメリカヤを迎えるために出て行った。

アルマ47,22,アメリカヤはこの時王を迎えるためにまず家来たちをつかわしたが、かれらは進んで行って王の威光が大きいために王を敬って拝するようふりをして王の前にひれ伏した。

アルマ47,23,王はレーマン人がニーファイ人から学んだ習わしに従い、友情のしるしとしてその手をさし出しこの家来たちを起そうとした。

アルマ47,24,ところが、王が自分の近くに寄った家来を起したたき、その家来はやにわに王の胸を刺したので王は地に倒れた。

アルマ47,25,これを見て王の臣下たちは逃げ始めたから、アメリカヤの家来たちは大声をあげて、

アルマ47,26,"見よ、王の臣下たちが王の胸を刺して逃げた。王は倒れておられる、早く来て見よ"とよばった。

アルマ47,27,アメリカヤはこのことを聞いて、すぐに信軍して王の身の上に起ったことをしらべよと命じたが、その場へきたときに王が血に塗れて倒れている様を見、起った真似をして"すべて王を愛する者たちはみな王の臣下を追いかけて殺せ"と言った。

アルマ47,28,そこで王を敬愛している者はみな出て王の臣下のあとを追いかけた。

アルマ47,29,ところが王の臣下は兵士らが追いかけてくるのを見ていよいよ恐れ、荒野の中へ逃げこんでとうとうゼラヘムラの地へ入りアンモンの民に加わった。

アルマ47,30,そこで王の臣下を追いかけた兵は何にもならず帰ってきらが、このようにしてアメリカヤはその悪賢い企てによって民の歓心を得た。

アルマ47,31,そしてその翌日、アメリカヤは軍を率いてニーファイ市へ背離これを占領した。

アルマ47,32,アメリカヤはすでに使者を王の後のところへつかわし、王がその臣下たちのために殺されたことと、アメリカヤが自分の兵を出して臣下を追わせたがその甲斐もなく取り逃したことを知らせておいた。

アルマ47,33,それであるから、王の後は使の者から王が暗殺されたことを聞き、アメリカヤに使者を出して市民の命を許してくれと願い、また王の暗殺を証明する人たちをつれて自分の所へ来てほしいと言った。

アルマ47,34,そこでアメリカヤは王を殺した家来と、この家来と一しょに居たほかの家来たちをみな引きつれて後の居所へ入って来たが皆王がその臣下に殺されたことを証明して、その臣下は逃げてしまったこれが何よりの証拠であると言った。そして王の暗殺されたことについて

アルマ47,34-1,晴した。

アルマ47,35,それからアメリカヤは王の後の歓心を買ひ、とうとうこれを自分の妻とした。アメリカヤはこのようにその悪賢い企てと巧な家来たちの助けを借りて王の位を得、すべてのレーマン人に全国の王と認められた。レーマン人と言う国民は、レーマンの家の者たちとレミュエ

アルマ47,35-1,者たちとイシメルの家の者たちと、ニーファイの時代からこの時代までにニーファイ人から別れたすべての者たちから成っていた。

アルマ47,36,の一ふあい人から別れた者たちは、ニーファイ人と同じ教訓と教育を受け、ニーファイ人と同じく主に関わる教えを知る機械があった。それにもかかわらず、不思議なことにニーファイ人から別れて以後まもなくレーマン人よりも一層かたくなとなり、悔改めをせず

アルマ47,36-1,野蛮にしてよこしま、猛悪な民となり、喜んでレーマン人の伝説を心に受け、怠け者であらゆるみだらな行いに耽り、その神である主を全く忘れてしまったのである。

アルマ48,,アルマ書 第48章

アルマ48,*-*,アメリカヤ、レーマン人を扇動してニーファイ人に反対させる。モロナイ、戦備える。真の愛国者と神のみこころに適った大いなる人。

アルマ48,1,アメリカヤは王の位を奪うやレーマン人を先導してニーファイの民に対して怒らせることにとりかかり、幾人かの人を任命して国中の当の1つ1つに昇りニーファイ人に反対する演説をレーマン人に聞せた。

アルマ48,2,このようにしてアマリカヤはレーマン人を先導し、かれらにニーファイ人を怒らせる目的を達した。それでアマリカヤはこれまではその志を遂げてレーマン人の王となったが、判事治世の19年目の終りになって、全地と全地に住む一切の民すなわちレーマン人とニーフ

アルマ48,2-1,両方ともにこれを支配しようとする欲望を起した。

アルマ48,3,アマリカヤはすでにレーマン人の性をかたくなにし、その心を暗くし怒りを抱かせたので、ニーファイ人を攻めるために大軍を募った。これでかれらはその1つの計画を遂げたのである。

アルマ48,4,アマリカヤはその民の数が多いので、ニーファイ人に勝ってこれを奴隷とすることを堅く決心した。

アルマ48,5,かれはゾーラム人の中から人を選んで軍の大士官とした。これはゾーラム人がニーファイ人の戦闘力、集合地およびそのいろいろの都会の防禦の最も弱い所を一番よく知っていたからである。

アルマ48,6,さてアマリカヤの軍は陣を払ってゼラヘムラの地を指して荒野へ出陣した。

アルマ48,7,アマリカヤがこのように悪賢い企てと偽りを以て権力を得ると同時に、一方モロナイは自分の国の住民にその神である主に忠誠をつくす心がまえをさせ、

アルマ48,8,またニーファイ人の軍を強化し、小さなとりで、すなわちたてこもる場所を築き、その軍を護り固めるためにいろいろの都会の周囲と全国の境一帯に土手または石垣を築きめぐらし、

アルマ48,9,防禦の1番弱い所に1番多く兵を置いて、ニーファイ人の所有する土地を固めた。

アルマ48,10,モロナイは人民がその神である主に従って暮すことができるよう、また敵にクリスチャンと呼ばれた道を守ることができるよう、このような方法で民の自由と所有する土地と妻子と安全な境涯とを護る備えをした。

アルマ48,11,モロナイは強くて衆にすぐれた人であって完全な智恵分別を備え、殺伐なことを嫌い、その国が自由独立であること、また同胞が束縛と奴隷の有様から救われたことを全身をあげて喜んだ。

アルマ48,12,また神が多くの特権と祝福とをその民に与えたもうたため、その神に感謝する念が心に満ち溢れ、国民の福利と安全とをはかるために力をつくし、

アルマ48,13,キリストを信ずる確乎とした信仰を有ち、死んでもその国の住民と自分の権利と自分の国家と自分の宗教とを護ると誓った。

アルマ48,14,さてニーファイ人は、事情やむを得ないならば敵の血を流しても自分の身を守れと言うことと、いつ何時でも自分から害をしかけないと言うことと、敵に向かうときまたは自分の命を守ろうとする時でなければ、決して剣をふるってはならないと言うことを教えられ、

アルマ48,15,この教えを実行するならば、神が自分らを地に於て栄えさせたもうと信じていた。言葉をかえて言うと、忠実に神の命令を守るならば、神は地に於て自分らを栄えさせたまい、またその危険の大小に応じてあるいは逃げよ、あるいは戦の備えをせよと告げたもうと信じて

アルマ48,16,これだけではなく、敵を防ぎ守るためにどこへ行けと神がお示しになること、もし自分らが神の示しの通りにするならば、主は自分らを救いたもうことも信じていた。モロナイはこのような信仰を有ち、心にこれを誇りとしていた。しかし血を流すことを以て誇りとは思

アルマ48,16-1,善を行うこと、民を護ること、神の命令を護ること、また罪惡を防ぐことに誇りを感じていた。

アルマ48,17,私はまことに、まことにはっきり言う。もしも過去の人、現在の人、将来の人がみなモロナイのような人であるならば、地獄の力でさえも永遠に挫かれ、悪魔はいつまでも世の人の心を支配することができぬであろう。

アルマ48,18,見よ、モロナイはモーサヤの子アンモンのような人、またモーサヤのほかの息子たち、またはアルマやアルマの息子たちのような人であったが、これらの人はみな神のみこころにかなった人たちであった。

アルマ48,19,さて見よ、ヒラマンとその兄弟たちは国民のためにモロナイに劣らない功勞をつくした。かれらは神の道を宣べ伝え、自分たちの言葉に耳を傾けたすべての人にかれらがすでに悔い改めた証拠としてバプテスマを施した。

アルマ48,20,かれらは経めぐってこのように努力をしたから、人民はその言葉のために謙遜となり、豊に主のめぐみを受け、それがために4年の間も戦争不和が国の内に起らなかった。

アルマ48,21,しかしすでに話したように19年目の終りころ、国内はおだやかであったが、ニーファイ人は心ならずも仕方なく同胞であるレーマン人と戦った。

アルマ48,22,まことにニーファイ人には甚だ不本意なことであったが、レーマン人との戦は長居年月にわたって止まなかった。

アルマ48,23,ニーファイ人は少しも人の血を流すことを喜ばず、特に同胞がまだその神に逢い用意をしない中に、これを殺して永遠の来世へ送ることを非常に悲しいと思っていたから、レーマン人に向って武器をとることを悲しく思った。

アルマ48,24,しかしもし自分らが命を捨てるならば、かつては同じ教会の会員であったがその後教会を去り国を離れ、レーマン人に加わって今現にニーファイ人を亡ぼそうとしている者共の野蛮残酷な心のままに自分らの妻子が殺戮されるから、ニーファイ人らはその命をむだに捨て

アルマ48,24-1,捨てることはできなかった。

アルマ48,25,また主が“汝らもしわが命令に従わば地に栄ゆべし”と約束したもうたから、いやしくも神の命令を守る者がこのこっている間は、同胞であるレーマン人がニーファイ人の血を流して喜ぶ所を見るに忍びなかった。

アルマ49,,アルマ書 第49章

アルマ49,*-*,侵入してきたレーマン人、阻まれて撃退せられる。アマリカヤ、失敗を怒る。教会の繁栄。

アルマ49,1,19年目の11月10日、レーマン人の軍がアモナイハの地方へ近づいてくる様が見えた。

アルマ49,2,アモナイハ市はすでに再び建てられて、モロナイはもはや軍勢を市の境に置いたが、その兵はすでにレーマン人の矢と投げいいしとを避けるために市のまわりに土手を築いていた。レーマン人は投石と矢で戦ったからである。

アルマ49,3,見よ、アモナイハ市がすでに建てられたと言ったが、実はその1部だけが再び建てられたのである。そしてレーマン人はかつて1度この市の住民が罪悪を犯したのでこれを破壊したことがあるので今度も容易にこれを占領することができると思った。

アルマ49,4,ところが、かれらは大いにその望みを失った。見よ、ニーファイ人はすでにそのまわりに土手を築いていた。その土手はレーマン人が石を投げても矢を射てもその効がなく、また入口からでないとニーファイ人の近づけないほど高かったからである。

アルマ49,5,ここに於てレーマン人の軍の大士官たちは、ニーファイ人がとりでを築く巧みな智恵を知って非常に驚いた。

アルマ49,6,レーマン人の軍の指揮官らはその兵数が大井ので以前のようにしてニーファイ人を攻めることができると思い、またこのたびはその兵士に楯と胸当とを用意させ、はだかを覆うために非常に厚い皮の衣を着せたので、アルマ49,7,このように用意をしたから、たやすく同胞であるニーファイ人に勝ち、あるいはこれに奴隷のくびきをかけ、あるいは心のままにこれを殺すことができると思った。

アルマ49,8,しかし見よ、思いもよらずニーファイ人はまだこれまでリーハイの子孫の中に知れていなかった方法を以て、すでにレーマン人と戦う備えをして待っていた。このような備えはモロナイの教えた流儀に従って行っただけである。

アルマ49,9,レーマン人、すなわちアマリカイ人はこのモロナイ流の戦備を見て非常に驚いた。

アルマ49,10,さてアマリカヤ王はその民の命を重んじなかったのも、もし自分でその軍勢を率いてニーファイの地からきたならば、レーマン人の兵にアモナイハ市でニーファイ人を攻めさせたであろう。

アルマ49,11,しかし、アマリカヤ王は親しく戦に臨まなかった。そしてモロナイがニーファイ人の中にある万事を処置する方法を非常に変えたから、大士官たちは思い切ってアモナイハ市でニーファイ人を攻めなかった。従ってレーマン人の軍勢はニーファイ人の隠れ場所が変わって非

アルマ49,11-1,失望し、ニーファイ人を攻めることができなかった。

アルマ49,12,こう射う次第でレーマン人の軍勢は荒野へ退いたが、アモナイハ市の次に1番ニーファイ人を攻め易い所はノアの地方であろうと思い、陣を引き払ってノアの地方へ進んだ。

アルマ49,13,かれらはモロナイが、全国の都会毎にその防禦のとりでを築いたことを知らなかったのも、レーマン人の軍の大士官らはノア市の住民を亡ぼすと言う誓いを立て断然決心をしてノア市の方し進軍した。

アルマ49,14,ところがノア市はこれまでは弱い所であったのに引きかえ、今ははからずもモロナイのためにアモナイハ市よりも堅固になっていた。

アルマ49,15,見よ、これはモロナイが賢明であつたからである。モロナイはレーマン人の軍がアモナイハ市を見て怖れるであろうと推測し、これまでノア市が全国中1番弱い所であつたからレーマン人は必ずそこへ進んで戦うであろうと思っていた。それであるからレーマン人がノア

アルマ49,15-1,進んできたのはモロナイの思うつぼであつた。

アルマ49,16,モロナイはかねてリーハイをノア市に置いた軍の司令官に任じておいたが、このリーハイはすなわちサイドン川の東にある谷でレーマン人と戦った。

アルマ49,17,さて進んできたレーマン人が、ノア市の司令官はリーハイであることを知るや、かれらは大いにリーハイを恐れてますます望を失った。しかし大士官たちは1度ノア市を攻めると誓ったのであるから、その軍に前進を命じた。

アルマ49,18,ところが、ノア市は入口を除くほか、周り一帯に築いた土手が高く、また市のまわりに廻らした堀が深かったのも、レーマン人は入口からでないとこの堅固なとりでに入ることはできなかった。

アルマ49,19,ニーファイ人はこのような備えをして、入口以外のところからのぼってとりでの中へ入ろうとするすべての者共に石を投げつけ矢を射って殺そうとかまえていた。

アルマ49,20,またニーファイ人の軍の中で1番強い1隊は、入口からとりでの中へ入ろうとするすべての者共を剣と投石器で打ち倒そうとかまえていた。このようにレーマン人を防ぐ備えは整っていた。

アルマ49,21,さてレーマン人の軍の士官たちは市の入口まで進んできて、とりでの中へ入ろうとしてニーファイ人と戦い始めたが、たびたび撃退されて多数の者が死んだ。

アルマ49,22,レーマン人は入口でニーファイ人に勝つことができないのを見て、土手を堀りくずしてニーファイ人に近づく道を開き同等の地勢を得て戦おうとしたが、このようにしようとする度毎に石と矢でねらい打ちにされて倒れた。それであるから、レーマン人は土手を堀りくず

アルマ49,22-1,土で堀を埋めることはできずに、かえって自分の軍の死傷者が堀に落ちこんでそのために堀が多少埋まった。

アルマ49,23,このようにニーファイ人は全くその敵に勝った。レーマン人は自軍の大士官が全滅するまで戦ってニーファイ人を亡ぼそうと努めたが、レーマン人の死者が実に1,000人を超えるに反してニーファイ人は1人も殺されなかった。

アルマ49,24,しかしおよそ50人のニーファイ人は負傷した。これらの者は入口の所でレーマン人の矢を受けたが、楯、胸当、かぶとを以て身を固めていたので、脚に傷を受けて痛みの甚しいものが少なかった。

アルマ49,25,さてレーマン人の軍はその大士官たちが皆殺されたのに気付き、荒野の中へ逃げこみニーファイ人の後裔であるアマリカヤ王にその大損害を知らせるためにニーファイの地へ帰った。

アルマ49,26,アマリカヤはこれを聞き、ニーファイ人に勝ってこれに奴隷のくびきをかける望を遂げることができなかったのもので激しくその民を怒った。

アルマ49,27,アマリカヤは非常に怒って神を汚しモロナイをののしり、誓ってモロナイの血を飲むと意を決した。これはモロナイが神の命令を守ってその国の住民を保護する備えをしたからである。

アルマ49,28,アマリカヤにひきかえ、ニーファイの民は自分らを敵の手から救いたもうた自分らの神なる主のたぐい

アルマ49,29,ニーファイの民を治める判事治世の19年目はこの有様で過ぎ去り、

アルマ49,30,平和が民の間にきずいた。教会ではヒラマン、シブロン、コリアントン、アンモン、アンモンの兄弟ら、およびすでに悔い改めたしるしにバプテスマを受け、神の神権に定る按手礼により聖任せられ、人民に道を宣べ伝えるためにつかわされたすべての人々の宣べ伝えた

アルマ49,30-1,会員らが熱心に従ったから、教会はいよいよ盛んに栄えた。

アルマ50,,アルマ書 第50章

アルマ50,*-*,モロナイ、ゼラヘムラの地とニーファイの地との間の線を固める。モリアントン、北方の国を占領せんとする。モリアントン、テアンクムに殺される。ペホーラン、ニーファイハの後をつぐ。

アルマ50,1,モロナイは戦の備えをし、その国の民をレーマン人から護る用意を怠らず、判事治世の20年目の始めのころ、自分の兵に命じてニーファイ人の所有となった全国のあらゆる都会の周りに土手を築かせ始めた。

アルマ50,2,どの都市の周りにもこの土手の上に人のたけばかりある材木の工事を起し、

アルマ50,3,この工事の上にさくを都市の周りに結んだがこのさくは強くたけが高かった。

アルマ50,4,モロナイはこのさくを見越すくらい高いやぐらを建てさせ、またそのやぐらの上に居る者にレーマン人の石と矢が当たらないよう、やぐらの上にこれを避ける所を造らせ、

アルマ50,5,ニーファイ人の力の及ぶ限り思うままにやぐらの上から石を投げ、都市の石垣に近づく者共を殺すことができるように備えをした。

アルマ50,6,このようにしてモロナイは敵の攻めてくる前に、全国のあらゆる都市のまわりにとりでを設けた。

アルマ50,7,さてモロナイは自軍を東の野へ出したが、その軍は東の野に居たレーマン人を、ことごとくゼラヘムラの地の南に当るレーマン人の国へ追いはらった。

アルマ50,8,ニーファイの地は東の海から真一文字に西の海へ及んでいた。

アルマ50,9,モロナイはレーマン人の本国の来たに当る東の野からことごとくレーマン人を追い出してから、ゼラヘムラの地とその附近の地の住民に、東の野へ移り海岸に至る一帯の地を占めて住ませ、

アルマ50,10,また東の野へ移って住んだニーファイ人の所有と成った地の南の境に軍を配置し、軍と民とをその敵の手から守るために兵に命じて堅固なとりでを築かせた。

アルマ50,11,このようにして、東の野に於けるレーマン人の要害の地をことごとく断ち切り、西の方に於てもニーファイ人の国とレーマン人の国との境涯を防禦した。この防禦線はゼラヘムラの地とニーファイの地との間にはさまり、西の海からサイドン川の源を経て東の海に達して

アルマ50,11-1,ニーファイ人はこの境界から北と、バウンテフルの北にある地とを思い通りに自分のものとして持った

アルマ50,12,さてモロナイの起した国の防禦のために確な保護が得られると人民が認めたから、モロナイの軍は日増しに大きくなったが、この軍勢はレーマン人がニーファイ人のもっている土地で威勢をふるわないよう、レーマン人の主権と勢力とを自分たちが持っている土地から断

アルマ50,12-1,断ち切ってしまうおうとした。

アルマ50,13,ニーファイ人は1つの都会を建て始め、これをモロナイ市と名づけた。この市は国の南の境にあってレーマン人の国に近く東の海に接近していた。

アルマ50,14,かれらはまたモロナイの地とアロンの地とを連ねる1つの都市をモロナイ市とアロン市との間に建て始め、その地方もその都市もニーファイハと名をつけた。

アルマ50,15,また同じ年の内に北の方にも多くの都市を建て始めたが、北の方で海に近い所には特にリーハイと言う都会を設けた。

アルマ50,16,このようにして20年目は過ぎて行った。

アルマ50,17,ニーファイの民を治める判事治世の21年目の始めにニーファイの民はこのように盛んな有様であった。

アルマ50,18,ニーファイの民は大いに栄え、大いに富み、人の数がふえてこの地で1番強い民となった。

アルマ50,19,これによって見ると、主が世の人に誓いたもうた御言葉を成就するために行いたもう御業は憐み深く正義にかなっていることが明らかである。また主がリーハイに次のように仰せになった言葉が現在成就していることも明らかである。

アルマ50,20,主はリーハイに“汝と汝の子孫とはさいわいなり。かれらは祝福を受くべし。すなわちわが命令に従わば地に於て栄ゆべし。されど記憶せよ。かれらもしわが命令を守らずば主の前より断ち切らるべし”と仰せになった。

アルマ50,21,われらは右の誓約がすでにニーファイの民の中に成就したことを見る。それはかれらが逢った戦争と破壊とは、自分らの中で行われた争闘、不和、人殺し掠奪の礼拝、みだらな行いおよび憎むべき行いで民がその身に招いたことであるからである。

アルマ50,22,しかし、忠実に主の命令を守った人々はどのような時にも助けを得た。これに反して、悪人であるその同胞は何千人も奴隷となり、あるいは剣のために倒れ、あるいは無信仰に陥ってレーマン人と雑る境涯に置かれた。

アルマ50,23,見よ、ニーファイの多岐からこのかた、ニーファイ人にとつていまだかつてモロナイの時代すなわち判事治世の21年目当時よりもたのしい時はなかった。

アルマ50,24,さて判事治世の22年目も23年目もおだやかに過ぎ、

アルマ50,25,判事治世の24年目の始めも、ニーファイの民の中にリーハイの地とそれに隣り合っているモリアントンの地とにかかある争いがなかったなら、この年もまた全国がおだやかであったであろう。この2つの地は国境にあって海に近かった。

アルマ50,26,モリアントンの地に住む者たちは、リーハイの地の1部を自分の所有であると主張し、両方の間に激しい争いを生じたが、それはモリアントンの住民がリーハイの住民に対して武装をし、剣をとってこれを殺すと決心をするほどの争いであった。

アルマ50,27,ところが、リーハイの地の住民は不正な者ではなかったから、モロナイの陣へ逃げてきて助けを乞うた。

アルマ50,28,モリアントンの住民は、モリアントンと言う人に司られていたが、リーハイの住民がモロナイの陣へ逃げて行ったことを知り、モロナイの軍が攻めてきて自分らを亡ぼしはしないかと思って非常に恐ろしがった。

アルマ50,29,そこでモリアントンは大きな湖が多くある北の地へ逃げて行って、これを占領しようとする気をその地の民に起させた。

アルマ50,30,この作は首尾よく効を奏するはずであったが(もし旨く行ったら後に憂いを生じたであろう)、モリアントンは気の短い男であったから、1人の下女を怒って手ひどくこれを打ち叩いた。

アルマ50,31,そこでこの下女は逃げ出してモロナイの陣屋へやってきてことの次第をくわしく話し、またモリアントンとその地の人々が北の方の地へ逃げて行く意向のあることを話した。

アルマ50,32,その時モロナイはバウンテフルの地の人々がモリアントンの言葉を信じてそのともがらに加わり、これによってモリアントンがその地を占領し、将来ニーファイの民の自由を亡ぼすような恐ろしい結果を生ずることを恐れたから、

アルマ50,33,モリアントンの地の人々が進む道をおさえて北の方へ逃げるのを止めるために、一軍隊とその陣屋とを送った。

アルマ50,34,しかし、その軍隊はデソレションの地の境に達しない中は敵の進路を断つことができなかったが、東の海と西の海との間にはさまって北の地へ通ずるせまい地峡へ行ってはじめて進路を断つことができた。

アルマ50,35,モロナイが出した軍隊はテアンクルと言う人が率いていた。これがモリアントンの1行に出逢った時、その1行は(モリアントンの悪事とへつらいにはげまされて)かたくなであったから双方の間に戦が始まった。ところがこの戦でテアンクルはモリアントンを殺してそ

アルマ50,35-1,勝ち、これをとりこにしてモロナイの陣営へ帰ってきた。このようにしてニーファイの民を治める判事治世24年目は過ぎ去った。

アルマ50,36,モリアントンの地の民はこのようにして引き返されたが、平和にクラスと言う誓約を立てる条件の元にモリアントンの地方へ返された。そこでかれらはリーハイの住民と仲よくなったので、ついに各々と以っていた土地を返してもらった。

アルマ50,37,ニーファイの民が平和をかい復した年、第2代の大判事ニーファイは神の前にまことに正しく真すぐに裁判の職を勤め終ってこの世を去った。

アルマ50,38,ニーファイはアルマとその先祖が最も神聖なものとして重んじたあのもろもろの歴史およびそのほかの者を預ってくれとアルマから胃あれたがこれをことわった。それであるから、アルマはこれらの者を自分の子のヒラマンへ伝えた。

アルマ50,39,見よ、ニーファイハの息子は父のあとを受けて裁判の職に任ぜられた。すなわち、正しく裁判をすることと、国家の平和と自由とを守ることと、国民にその神である主を礼拝する聖い特権を与えることと、生涯神の道を守ってこれを意地することと、罪人を各々罪に罰す

アルマ50,39-1,神聖な式で宣誓をし、全国の大判事兼統治者となった。

アルマ50,40,この人はペホーランと言い、その父の位をついで24年目の終りからニーファイの民を治め始めた。

アルマ51,,アルマ書 第51章

アルマ51,*-*,王政党と自由とう。大判事ペホーラン、自由党から指示w受ける王政党抑圧される。アメリカヤの侵入と敗北とその死。

アルマ51,1,ニーファイの民を治める判事治世の25年目の始めころ、リーハイの住民とモリアントンの住民の間に起った国境の問題がすでにおさまって双方和ぎ合ったので、25年目はおだやかに始まった。

アルマ51,2,しかし、国中に完全な平和は長つずきしなかった。これは大判事ペホーランについて国民の中に争論が起ったからであって、1部の民は国法の中少しばかり重大な箇条を変更したいと言った。

アルマ51,3,ところがペホーランはこれを蛙ことを欲せず、また変更を他人にさせたくないと思ったので、国法を変更する洗顔を聞き入れずまたこれに賛成した者どもの言うことも聞き入れなかった。

アルマ51,4,それであるから、国法を変更したいと思った者たちはペホーランを怒って、かれがひきつずき国の大判事をしていることを望まず、かれに反対してこの事件につき烈しい論争が起った血を流すには至らなかった。

アルマ51,5,ペホーランの裁判職を剥ぎ取ろうとした者たちは、自由政体を覆して国を治める王を立てる目的で国法を変えようとしたからこれを王政党と呼んだ。

アルマ51,6,またペホーランにひきつずき全国の大判事で居てもらいたいと思った者たちは自分から自由党と呼んだ。自由党は自由政体を護り、そして自分の権利と宗教の特権とを維持すると言う誓いを立て、このようにして人民は分裂した。

アルマ51,7,しかし、民の争うこの事件は国民の投票によって決したから、国民の大半は自由党の主義に賛成してペホーランは裁判の職をつづけ、これがためにペホーランの間にも自由を求める多くの人々も一方ならず喜んだ。また自由党がこのようにして王政党を沈黙させたから、

アルマ51,7-1,王政党は思い切って反対もせずやむを得ず自由の主義を守った。

アルマ51,8,王を立てる方がよいと言った者たちは、上流の生れの一たちであって自分が王になろうと思ったのであったが、これもまた民を支配する権力を貪るともがらに支持されていた。

アルマ51,9,見よ、この時はまことに危い時であって、この時このような論争がニーファイの民の中に起ったのは真に憂うべきことであった。それは、アメリカヤはすでにモロナイの血を飲むと誓ったからまたレーマン人を煽動してこれにニーファイ人を怒らせ、自分の全国から兵を

アルマ51,9-1,急いでこの兵に武装をさせて戦争n準備をしていたからである。

アルマ51,10,しかしアメリカヤがモロナイの血を飲むと言ったのは、向う見ずな誓いであつたことがやがて明らかになる。それはともかくアメリカヤは、ニーファイ人と戦うために陣びをし軍は戦備を整えた。

アルマ51,11,さて、この軍隊はさきにニーファイ人に殺されて何千人も失っているから、その兵数は前ほど多くはなかった。しかしそれはど大損害を受けたにもかかわらずアメリカヤは驚くほどの大軍を集めたから、ゼラヘムラへ真軍することを少しも恐れなかった。

アルマ51,12,このたびアメリカヤは、親しくレーマン人の軍を率いて来た。これは判事治世の25年目で、ちょうどニーファイ人が大判事ペホーランにかかわる争いをおさめるいとぐちについて時であった。

アルマ51,13,さて王政党に属する人々は、レーマン人が攻めてくると言う噂を耳にした時、心の中で喜んで武器を手にするのを拒んだ。それは、このともがらは自分の国を守るために武器を執ることを拒むくらい、大判事と自由党とをひどく怒っていたからである。

アルマ51,14,モロナイはこの有様を見、またレーマン人が国境へ侵入してきているのを見たから、自分がこれまで

力をはげまして護った国民である王政党のかたくなことを非常に憤った。まことにモロナイはこれらの者のことを憤慨して全身憤りに満たされた。

アルマ51,15,モロナイは人民が賛成した請願を国の統治者に出してこれを読むことを求め、また政府に反対する者たちを強制して国を守らせる権力と、この者たちがもし国を守る義務を拒むならばこれを殺す権力とを自分、すなわちモロナイに与えることを願った。

アルマ51,16,これまでニーファイ人が受けた破壊はみなこのような不和と謀叛のためであったから、モロナイは国内の不和と謀叛とを止めることを第1着の事業とときめた。モロナイはついに願い求めた権力を国民の賛成によって与えられた。

アルマ51,17,そこでモロナイは軍隊をだして、王政党の者たちがもしも武器をとって自由政体を守らないならば、武力でその慢心をくじきその身分を剥ぎ取りかつこれを地に打ち倒せと軍に命令した。

アルマ51,18,そこで軍は進んで行って王政党を征伐してその慢心をくじきその身分を剥ぎとったが、王政党のともがらが武器をふるってモロナイの兵と戦おうとするとかれらは地面になぎ倒された。

アルマ51,19,このようにして、剣のために切り倒された謀叛人は4,000人あったが、謀叛党の頭に立って戦ったが死ななかった者たちは、その時これを裁判するひまがなかったので捕えて牢屋の中へ投げこんだ。

アルマ51,20,そのほかの謀叛人たちは、刃にかかって地に倒れるよりはむしろ自由の旗に降服し、また強制されて自分たちの塔の上にも自分たちの住んでいる都市にも自由の旗をかかげ、国を守るために武器をとった。

アルマ51,21,モロナイはこのようにしてことごとく王政党を亡ぼしてしまったから、王政党と言われる者は1人もなくなり、また自分から門閥の決闘であるとなえる者たちの強情と傲慢とをくじいたから、かれらは同胞のようにへりくだり奴隷とならないために勇ましく戦った。

アルマ51,22,モロナイがその民にある争いとは平和とをしずめ、民を平和と文明との道に従わせ、レーマン人との戦の準備に関する規則を作っている間に、レーマン人はモロナイの地で海岸に近い国境へ侵入してきた。

アルマ51,23,モロナイ市にあるニーファイ人はその強さが足らなかったのもので、アメリカヤはこれを追撃して多くの者を殺し、モロナイ市とそのあらゆるとりでとを占領した。

アルマ51,24,この時モロナイ市から逃げた者たちはニーファイハ市へ行った。またリーハイ市の人々は集って戦の備えをし、レーマン人との戦を今か今かと待っていた。

アルマ51,25,アメリカヤはまだニーファイハ市を攻めることをレーマン人に許さず、海岸近くで戦わせてその占領する各市を守るために各市に兵を置いた。

アルマ51,26,このようにしてアメリカヤは軍を勧め多くの都市を占領したが、その占領したのはニーファイハ市、リーハイ市、モリアントン市、オムネル市、ギド市、ミュレク市であって、これらはみな国の東の境にあつて海岸に近かった。

アルマ51,27,このように、レーマン人はアメリカヤの巧な謀ごとと無数の兵力とによって、モロナイ流に堅い防禦を施した多くの都市を占領し、みなレーマン人のとりでとした。

アルマ51,28,かれらはバウンテフルの地の境まで進軍し、その途中ニーファイ人を追い立ててこれを多く殺した。

アルマ51,29,しかし、かつて前にモリアントンを殺し、またモリアントンの民の逃げ道を断ったテアंकムの軍に抵抗をさせた。

アルマ51,30,アメリカヤはバウンテフルの地とその北方の地を占領するために大軍を率いて北の方へ進んだが、手按繰はその道をふさいだ。

アルマ51,31,テアंकムもその兵も1人のこらず強い武士で、力と戦術とに於てみなはるかにレーマン人に勝っていたからついにアメリカヤハテアंकムとその軍に撃退されてその望みを遂げることができなかった。

アルマ51,32,テアंकムの軍はアメリカヤの軍を攻め、夜暗くなるまでもこれを殺した。それからテアंकムとその兵とはバウンテフルの地の境に陣を張り、アメリカヤは海岸の近くに陣を取った。アメリカヤの軍はここまで追撃されたのである。

アルマ51,33,夜に入ってテアंकムは1人の僕をつれ、ひそかに出てアメリカヤの陣営へ忍びこんだが、見よ、敵はみな昼の熱さと骨折りに疲れてぐっすり眠りこんでいた。

アルマ51,34,そこで、テアंकムは王の天幕に忍びこみ、投槍を王の心臓に突き刺して即死させたので、王は營兵を呼び覚ますことさえできなかった。

アルマ51,35,それからテアंकムはひそかに自分の陣営へ帰ったが、見ると兵士たちは眠っていたので、これを覚して自分がして来たことをくわしく話して聞せた。

アルマ51,36,さて、テアंकムはレーマン人がもはや目を覚ましてすぐに攻め寄せるかも知れぬと思ったので、兵士に戦の用意をさせて待ち受けた。

アルマ51,37,ニーファイの民を治める判事治世の25年目は暮れて、アメリカヤの生涯もまた終りを告げた。

アルマ52,,アルマ書 第52章

アルマ52,*-*,アマロン、アマリカヤの後をつぐ。モロナイ、テアंकムとリーハイの助けを得てミュレクの市を取り返し大勝利を収める。レーマン人の将軍ヤコブの死。

アルマ52,1,ニーファイの民を治める判事治世の26年目のこと、レーマン人は1月1日の朝起きたところ、アマリカヤがその天幕の中で死んでいるのを見、またこの日テアंकムがすでに戦の用意をしているのを見た。

アルマ52,2,レーマン人はこれを見て怖れおののき、来たの国へ進軍する企をすてて、善軍のままニュレク市へ退きそのとりでにたてこもった。

アルマ52,3,アマリカヤの兄弟アモロンはレーマン人の王に立てられたから、アマリカヤのあとをうけて民を治めること委せられた。

アルマ52,4,アモロンは多くの血を流して占領した都市をみな固く守れと命を下した。まことにレーマン人は多大な損害を受けずにはどの都市も占領することができなかったのである。

アルマ52,5,テアंकムはレーマン人がその占領した都市と土地とを確く守りつづけようと決心している様子を見、またその兵の数が多いのを見て、レーマン人がとりでにこもっているまを攻めるのは不利益であると考えた。

アルマ52,6,しかしかれは攻める準備をするように見せかけてその兵を敵のとりでの近くに置き、本当にここかしこに土手を築きたてこもる場所を建て、そしてレーマン人を防ぎ自らを守った。

アルマ52,7,モロナイがテアंकムの軍を強くするために多くの兵を送って助けるまで、テアंकムはこうして戦の準備をつづけた。

アルマ52,8,モロナイはテアंकムに命令を下して、捕えたとりこはみな釈放してはならぬと言った。それはレーマン人も味方を多くとりこにしたので、これと交換をするためにレーマン人のとりこをみな有っていなくてはならなかったからである。

アルマ52,9,モロナイはまたレーマン人が北の地へ通ずる狭い地峡を4方からニーファイ人を攻めることができないように、バウンテフルの地を防ぎ固めてその狭い地峡を固く守れとテアंकムに命じた。

アルマ52,10,またモロナイは、テアंकムが忠誠をつくしてその地方を守り、また占領された都市を軍力その他の方法で取り返すことができるかも知れないから、できるだけその地方でレーマン人を悩ます機会を求め、それからまだレーマン人の手に落ちていないこの地方の都市を確

アルマ52,10-1,もらいといと言ってやった。

アルマ52,11,それからまたモロナイはテアंकムに“われは汝の所へ行きたいと思うが、レーマン人が西の海に近い国境にせめてきているので、そこへ行って戦うから汝の所へ今は行けない”と言った。

アルマ52,12,さて、アモロン王はすでにゼラヘムラ国を去ってその兄弟の死をその後に知らせ、また大軍を集めてニーファイ人と戦うために西の海の附近へ進めた。

アルマ52,13,アモロンはこのような策を以てニーファイ人を悩し、ニーファイ人の軍の1部を西の方へ誘って行こうとし、1方また東の海に近い国境附近で占領した都市を固めるために残した軍に命を下して、その方面からニーファイ人を攻め悩まして兵力の及ぶかぎりなるべくほかの

アルマ52,13-1,占領せよと言った。

アルマ52,14,ニーファイの民を治める判事治世の26年目の末のころ、ニーファイ人はこのように危い有様であった。

アルマ52,15,判事治世の27年目に、モロナイはすでに国の南の境と西の境とを守る軍を組織しておいたから、このたびはテアंकムの軍が前に失った都市を取り返すところを助けようとしてバウンテフルの地へ進む途中であった。

アルマ52,16,テアंकムはミュレク市を攻めて、できるならこれを取り返せと言う命令を受けたので、

アルマ52,17,レーマン人に向って進軍しミュレク市を攻撃する準備をしたが、レーマン人がそのとりでに立てこもっている間は勝つことができないと見て攻めることを止め、自分の軍に仮性をするモロナイの来るのを待とうとバウンテフル市に帰った。

アルマ52,18,ニーファイの民を治める判事治世の27年目の末、モロナイはその軍を率いてバウンテフルの地へ到着した。

アルマ52,19,そして28年目の始め、モロナイとテアंकムと多くの大士官とは戦の会議を開き、どうすればレーマン人を誘い出してとりでの外で戦わせることができるか、またどうすればこれをとりでから釣り出して破りそしてニュレク市を取り返すことができるかと言うことを相

アルマ52,20,ミュレク市を固めて守っているレーマン人の軍の司令官ヤコブに使者を送り、ヤコブがその軍を率いて出て2つの都市の間にある平原でニーファイ人と戦われたいと言ってやった。ところが、ヤコブはゾーラム人であって、平原でニーファイ人と戦うためにその軍を率い

アルマ52,20-1,出てようとはしなかった。

アルマ52,21,そこで、モロナイは同等の地勢でレーマン人と戦う望を失ったから、レーマン人をとりでからおとりで誘い出す策を行うこととした。

アルマ52,22,すなわち、テアנקムに命じて少しの兵をつれて海の近くに行かせ、モロナイ自身は自分の軍と共に夜の中にミュレク市の西にある野へ進んで行った。翌日レーマン人の見張りの兵はテアנקムを見つけ、走って行ってこのことを司令官ヤコブに知らせた。

アルマ52,23,そこでレーマン人の軍は、テアנקムの兵数が少いから自分の数多い軍でテアנקムに勝てると思い、テアנקムの向って進んで行った。テアנקムはレーマン人の軍が向ってくるのを見て、海岸に沿って北の方へ逃げ始めた。

アルマ52,24,レーマン人はテアנקムが逃げるのを見て、勇気を出し全力をあげてこれを追った。しかし、テアנקムが空しく追ってくるレーマン人を遠くまで誘い出しているひまに、モロナイは部下の軍の1部にミュレク市に行つてこれを占領せよと命令した。

アルマ52,25,軍の1部は直ちに命令に従って行き、ミュレク市を守るためにのこっていたレーマン人の兵の中で武器を引き渡さない者どもをことごとく殺した。

アルマ52,26,このようにしてモロナイはその軍の1部分を以てミュレク市を占領させ、のこりの兵に命じてレーマン人がテアנקムを追い疲れて引き返すところを戦うために進軍させた。

アルマ52,27,レーマン人の兵はバウンテフル市の近くテアנקムを追って行ったとき、レーマンの指揮する小さな軍隊の抵抗を受けた。リーハイの指揮する軍隊はバウンテフル市を守るためにのこっていたのである。

アルマ52,28,しかし、レーマン人の大士官らは、リーハイが軍隊を率いて向ってくるのを見ると、自分らはすでに遠くまで追撃して来て疲れているに引きかえリーハイの兵は新手であったから、自分らがまだミュレク市へ行き着かない中にリーハイの軍に追いつかれはせぬかと畏れて

アルマ52,28-1,非常にあわてふためいて逃げて行った。

アルマ52,29,レーマン人はモロナイが軍を率いて背面から来るのを知らずに、ただリーハイとその兵とだけを恐れて逃げたのであるが、

アルマ52,30,リーハイはレーマン人がモロナイの軍に出逢うまではこれに迫り着こうとはしなかった。

アルマ52,31,レーマン人は遠くまで逃げて行かない中に早くもニーファイ人にとりかこまれたが、こちらにはモロナイの兵が居り、あちらにはリーハイの兵が居って、どちらも皆新手であつて体力が強いのにひきかえレーマン人の兵は遠くまで追撃をして来て疲れて居った。

アルマ52,32,ここに於てモロナイは部下の兵に命令を下し、レーマン人を襲つてその武器を引きわたされるまでこれを殺せと言った。

アルマ52,33,レーマン人の軍の司令官ヤコブはゾーラム人であつてその心が強情であつたから、猛烈にモロナイと戦おうとして兵を率いて向ってきた。

アルマ52,34,そしてモロナイの兵がレーマン人の進路に立ちふさがつて居たから、ヤコブはこれを殺して切り抜けミュレク市へ行こうと決心をしたが、モロナイとその兵とは敵よりもはるかに強く1歩も退かなかつた。

アルマ52,35,両軍は非常に烈しく戦つてどちらも多くの死者を出し、モロナイは負傷を受けヤコブは死んだ。

アルマ52,36,この時リーハイは部下の強い兵を烈しくしろから敵を攻撃したが、この攻撃があまり烈しいためにレーマン人の行列はついに武器を引きわたした。のこつたレーマン人は非常にうろたえて逃げたらよいか攻めたらよいかを知らず進退ここにきまつた。

アルマ52,37,そこでモロナイは敵がうろたえているのを見て“汝らがもし武器を引きわたすならば、われらは汝らの血を流すを止める”と言った。

アルマ52,38,レーマン人はこの言葉を耳にすると、まだ殺されない大士官たちはみな進み出てその武器をモロナイの足もとにして、またその部下にも自分たちにならえと命じた。

アルマ52,39,しかし武器の引きわたしを拒んだ者も多かつたが、これらのものはみな捕えられてしばられ、武器をとりあげられて、降参した同胞と一しょにバウンテフルの地へ送られた。

アルマ52,40,このとりこの数は、実際その軍の死者よりも多かつたばかりでなく両軍の死者の数を合せたよりも多かつた。

アルマ53,,アルマ書 第53章

アルマ53,*-*,バウンテフル市を堅固なとりでとする。ニーファイ人の争い、敵に利益を与える。ヒラマンとかれが率いる2,000人の若い強者たち。

アルマ53,1,ニーファイ人はとりこになったレーマン人を見張る兵を置き、そのとりこにレーマン人の死者もニーファイ人の死者も葬せたが、モロナイはとりこが働いている間これを見張りする兵を置いた。

アルマ53,2,この後、モロナイはリーハイと一しょにミュレク市へ行つてこれを統治しその守りをリーハイに任せた。見よ、リーハイはモロナイが戦をする度毎に大いモロナイと共に居り、モロナイに似た人物であつたから、2人は互いにその安全を喜んで愛し合つたが、ニーファ

アルマ53,2-1,みなこの2人を敬愛した。

アルマ53,3,さてとりこになったレーマン人は、自分の同胞の死者とニーファイ人の死者とを葬ってからバウンテフルの地へ送り返された。テアンクムはモロナイの命によって、このとりこに命じてバウンテフル市のまわりに堀をほり、

アルマ53,4,堀の内側の岸に材木で胸壁を作り、堀の中の土をほって胸壁に盛りつけさせた。すなわちこのようにとりこを追い使って、ついにこの市のまわりに非常に高くで強固な材木と土とから成る堀を設けた。

アルマ53,5,それでこの時からバウンテフル市は非常に堅固なとりでとなり、かれらは市内に於てレーマン人のとりこを置いてこれを見張ったのである。レーマン人が労役をする間これを見張るのは容易であるため、またレーマン人を攻める時には全軍を要したから、モロナイはレー

アルマ53,5-1,働かせるほかはなかった。

アルマ53,6,モロナイはこのようにレーマン人の最も強い軍の1つに勝ち、ニーファイの地に於けるレーマン人の最も堅固なとりでの1つである。ミュレク市を占領し、また前に言った通りとりこを収容なとりでを設けた。

アルマ53,7,この年モロナイは再びレーマン人と戦をせず、部下の兵士を使って戦の備えとレーマン人に対する防禦とし、兵士の女子供たちを飢饉と艱難から救い、また兵糧を蓄えた。

アルマ53,8,モロナイが留守をしていた間に西の海に近い南に当る地方に居たレーマン人の軍は、ニーファイ人の中に謀叛を起させた陰謀が行われるに乗じて戦に勝ち、その地方に何ほどかの都市を占領した。

アルマ53,9,このようにして、ニーファイ人は自分らの中に行われる悪事と紛争とのために最も危い状況に陥った。

アルマ53,10,見よ、われはアンモンの民についてここに誌したいと思うことがある。かれらは始めレーマン人であったがアンモンとその兄弟らの勢力、いやむしろ神の勢力と御言葉とによって改心してしよを信ずるようになった。そして後にゼラヘムラの地へ連れてこられてこれまで

アルマ53,10-1,ニーファイ人に保護されている。

アルマ53,11,アンモンはかれらが立てた誓約のために同胞に対して武器をとることを許されなかった。かれらは2度と人の血を流さないと言う誓約を立てたから、もしもアンモンとその兄弟たちがかれらにあらわした憐みと深い愛情とがなかったならば、この誓約があるために甘

アルマ53,11-1,亡ぼされたであろう、すなわち甘んじて同胞であるレーマン人の手の中に自分らの身を落としたであろう。

アルマ53,12,こう言うわけでかれらはゼラヘムラの地へつれてこられてからこのかた、ニーファイ人に保護されていたのである。

アルマ53,13,しかし、かれらは自分たちを守るためにニーファイ人が危険に逢い多くの艱難辛苦をなめるのを見ると、同情にたえずその国を守るために武器を執ろうとしたが、

アルマ53,14,まさに武器を執ろうとしたときに、ヒラマンやその兄弟らの勧めに感じてその心をひるがえした。なぜならば、かれらがまさにその立てた誓約を破ろうとするのをヒラマンが見て、

アルマ53,15,もしも誓約を破るならば永遠にかれらは亡びるかも知れないと垂逸れたからである。それであるから、この誓約を結んだ一切の人々は、その兄弟らが当時危い有様で艱難に逢うのを見ているほかにどうにもしようがなかった。

アルマ53,16,しかし、かれらには敵から自分の身を防禦するために武装をしないと言う誓約をこれまでに立てていない息子があつたから、この息子らの中で武器を執るに足る体力のある者はみなそのころ集って自らニーファイ人と呼び、

アルマ53,17,ニーファイ人の自由のために戦うこと、命を惜まずに国を守ること、またいつまでも自分らの自由を捨てずニーファイ人と自分らが奴隷にならないようにどのような時でも戦うと言うことを誓った。

アルマ53,18,このように誓いを立てて国を守るために武器を執った青年が2,000人ばかり居たが、

アルマ53,19,この青年たちはいまだかつてニーファイ人の不利益になったことはなく、今この危い時になってかえって大きな助けとなった、すなわち、かれらは武装をしてヒラマンにその司令官となってもらいたいと言った。

アルマ53,20,かれらはみな青年であつて筋骨たくましく活潑な勇士であつたばかりでなく、いついかなる時でも委ねられたことを忠実に行った。

アルマ53,21,かれらはみな神の命令に服従することと、神の前に義しく真すぐに暮すこととを教えられ、真実な心を持つ真面目な青年であつた。

アルマ53,22,ヒラマンは、国の南の境であつて西の海に近い地方の民を助けようと、その2,000人の若い兵士を率いて出陣した。

アルマ53,23,これでニーファイの民を治める判事治世の28年目は過ぎて行った。

アルマ54,,アルマ書 第54章

アルマ54,*-*,アモロン、とりこの交換を要求する。モロナイ、条件によって要求に応ずる。レーマン人の王、怒って返答をする。

アルマ54,1,判事治世の29年目、アモロンは使者をモロナイに送ってとりこを交換したいと言わせたところ、

アルマ54,2,モロナイはとりこのレーマン人に食わせている食料を自分の民を養うのに使いたいと思い、またとりこになっている自分の民を返してもたて自分の軍隊を強化したいと思ったので、アモロンの願いを聞いて非常に喜んだ。

アルマ54,3,さてレーマン人は多くの女子供も捕えてとりこにしたが、モロナイのとりこの中には1人の女子供もなかった。それでなるべく多くのニーファイ人のとりこをレーマン人から取り返すために1つの策をめぐらしてから、

アルマ54,4,手紙を書いて、今アモロンの手紙を持ってきた使の者に持ち帰らせた。モロナイがアモロンのところへ書いてやった手紙は次のようである。

アルマ54,5,"アモロンよ、見よ、汝がわが民と戦うこの戦、すなわち汝の兄弟がわが民に向って平木、兄弟の死後もなお汝がつづけよう決心をしているこの戦について、われはこの前汝に書き送ったことがある。

アルマ54,6,汝がもし悔い改めて汝の軍を所有の地であるニーファイの地へ引き上げないならば、神の正義と汝に下る神の全能である激しい怒りの剣に関することを汝に告げたい。

アルマ54,7,もしも汝が聞き従うことができるならば、われは本当にこれを汝に告げたい。汝がもし悔い改めてその殺害する心をすて自分の国へ軍を引き上げないならば、汝と汝の兄弟のような人殺しを引き込もうと待ちかまえている恐ろしい地獄についても汝に告げたいと思う。

アルマ54,8,しかし汝はすでにこのことを否定して主の民に敵対をしたから、われは汝がまたもそうするであろうと思うほかはない。

アルマ54,9,見よ、われらは汝の軍と戦う準備を終った。汝らがもしその目的をすてないならば、汝らは否定した神の怒りを自分の身に招いてことごとく亡びるであろう。

アルマ54,10,われらは必ずわれらの持つすべての都市、すべての所有地、宗教および神の道を守るから、汝らが自国に退かないならばわが軍は速に攻めて汝らを亡ぼすことは主のましますように確である。

アルマ54,11,われは汝を地獄の子であると思う。それであるから、われはこのようなことを言ってもむだであろう。よて、われはこの手紙を書き終るに当って汝がもそもレーマン人であるとりこの1人に対して、1人のニーファイ人の男とその妻子とを引きわたすと言う条件に同意し

アルマ54,11-1,ならば、われはとりこを交換しない。しかし、この条件を承諾するならばすぐに交換をする。

アルマ54,12,見よ、汝がこのように交換をしないならばわれは軍隊を以て汝らを攻め、わが国の女子供にも武器を持たせて汝に攻め向い、最初にわれらが住み今は汝らが占めてその国とする土地の真中までも汝らを追撃し血を血に換え命に換えるであろう。われは汝らが全滅してこと

アルマ54,12-1,地の面より亡びしつくされるまで汝らと戦おう。

アルマ54,13,汝らはわれらを殺そうとしているが、われらはただ守ろうとしているだけである。よって、われもわが民も共に憤っている。もりも汝らがなおもわれらを亡ぼそうとするならば、われらもまた汝らを亡ぼそうとし、またわれらが最初住んでいた国を再び統治しようとする

アルマ54,14,これで、この手紙を終る。われはモロナイであって、ニーファイ人の支配者の1人である。"

アルマ54,15,アモロンはこの手紙を受け取って非常に怒り、再びモロナイに手紙を送った。そしてその手紙で、

アルマ54,16,"われはレーマン人の王アモロンであって、汝らが暗殺をしたアマリカヤの兄弟である。見よ、われは殺された兄弟の仇を汝らに返し、汝らのおどしを恐れずわが軍を率いて汝らを攻めるであろう。

アルマ54,17,見よ、汝らの先祖はその兄弟らが正当に保つはずの政権を奪いとり、不正にかれらを扱った。

アルマ54,18,しかし、汝らがもし武器を引きわたし、正当に政権を保つはずの者に服従してその支配を受けるならば、われはわが兵にその武器を捨てさせてもはや戦をしないであろう。

アルマ54,19,汝らは、われとわが国民に対していろいろおどしを吐くが、われらはそのようなおどしを恐れない。

アルマ54,20,さりながら、われは汝の要求する通り喜んでとりこを交換しよう。今とりこに食わせている食料をわが軍人の用に供したいためである。交換が終れば、われらはニーファイ人をわれらの主権に従わせるか、または永久にこれを全滅するまで戦をつづけるであろう。

アルマ54,21,われらが神を否定すると汝は言うが、われらはその神と言うものを知らない、汝らもまた知らない。しかし神と言うものがあるならば、その神は汝らばかりでなくまたわれらも造ったにちがいない。

アルマ54,22,またもしも悪魔と地獄があるならば、わが兄弟を殺した上にかれらは今地獄に居ると暗に言う汝らもまた、悪魔に地獄へ落されてわが兄弟と一しょに居ようにならないとは言えないではないか。しかし、これはどうでもよいことだ。

アルマ54,23,われはアモロンであって、汝の先祖が無理にエルサレムからつれ出したゾーラムの後裔である。

アルマ54,24,見よ、われは今勇ましいレーマン人である。この戦はレーマン人の受けた害を報い、レーマン人の受けるはずの政権を要求してこれを得るための戦である。これでモロナイへ宛てた手紙を終る"と言った。

アルマ55,,アルマ書 第55章

アルマ55,*-*,モロナイ、アモロンが偽りを主張するを知って立腹し、とりこの交換をことわる。策を施してニーファイ

人であるとりこを開放することを得る。血を流さずにギド市を占領する。

アルマ55,1,モロナイは、アモロンの手紙を受け取って、アモロンが十分に自身の詐欺行為を知り、またアモロン自身がニーファイの民と戦う真の目的が正しい目的でないことも知っていることを認めたのですます憤り、

アルマ55,2,"見よ、アモロンがもしわれが手紙で要求をしたようにその目的を捨てないならば、われはとりこの交換をしない。われはアモロンに今の兵力よりも増加させない。

アルマ55,3,われはレーマン人がとりこにしたわが国民をどこに置いて見張っているか知っている。よって亜焔間がわが手紙で要求したことを聞かないから、われはわが言葉の通りに行い敵がきて平和を請うまでこれを殺すであろう"と言った。

アルマ55,4,このように言い終って、モロナイはレーマンの後裔が自分の軍中にいるかも知れぬと思ってこれを探らせた。

アルマ55,5,すると、レーマンと言う者が1人居た。これはアマリカヤに暗殺をされたあの王の臣下の1人であった。

アルマ55,6,そこでモロナイはこの男に少しの兵士をつけて、とりこのニーファイ人を見張っているレーマン人の番兵の居るところへつかわした。

アルマ55,7,とりこのニーファイ人はギド市に置かれたから、モロナイはレーマンに少しの兵をつけてギド市につかわしたのである。

アルマ55,8,日が暮れてから、かれらはとりこのニーファイ人を見張っている兵士の居るところを指して行った。すると番兵はレーマンとその味方がくるのを見て止れと言ったが、レーマンは"怪しむな。われはレーマン人だ。われらはニーファイ人のところから逃げてきた。今ニー

アルマ55,8-1,眠っているところに乗じてその葡萄酒を取ってきたのだ"と言った。

アルマ55,9,レーマン人はこれを聞いて非常に喜び、レーマンを迎えて"その葡萄酒をわれらにも飲ませよ。われらが疲れているところへ、お前らがこのように葡萄酒をもってきてくれて喜ばしい"と言った。

アルマ55,10,しかしレーマンが"これはニーファイ人に向って戦に出るまでとっておこうではないか"とすすめたので、レーマン人はこれを聞いていよいよ飲みたくなるばかりで、

アルマ55,11,われらは今疲れているからこの葡萄酒を飲もう。やがてわれらは糧食としてほかに葡萄酒がもらえるから、それを飲んでニーファイ人との戦いに出る力をつけよう"と言った。

アルマ55,12,そこでレーマンは"それなら欲しいだけ飲むがよい"と言ったので、

アルマ55,13,番兵たちは遠慮なくその葡萄酒を飲み始めたが、その味がまことに好かったので控え目もなく飲んだ。ところが、この葡萄酒はとくべつに濃く造ってあったのでまことに強かった。

アルマ55,14,そこで番兵たちは葡萄酒を飲んで浮かれ、みなようやく酔っぱらった。

アルマ55,15,レーマンとその兵とは番兵がみな酔ってぐっすりと眠るのを見て、すぐにモロナイのところへ帰ってきて事の次第をくわしく話した。

アルマ55,16,これはモロナイの思うつぼであったから、前から兵士に多くの武器を持たせてあったがこれを番兵が酔ってぐっすり眠っている中にギド市へつかわし、市内のとりこに武器をわたした。それでとりこはみなことごとく武装をした。

アルマ55,17,まことに女子供にいたるまで、武器を使う力のあるものはみなモロナイが武器をわたしてくれたから武装をした。そしてこれらのことはみなきわめて静かに行われた。

アルマ55,18,かれらはレーマン人を起したならば、みな酔っているから殺そうと思えば殺すことができたのであった。

アルマ55,19,しかしレーマン人を殺すのはモロナイの望ではなかった。モロナイは人を殺した血を流すのをたのしみとせず、自分の民の亡びるのを救うことを楽しみとした。それであるから不正が行われないう、レーマン人が酔っているのに乗じてこれを殺すことを許さなかった

アルマ55,20,しかし、モロナイの望みは遂げられた。それは、もはや都市の塙の中にいるとりこのニーファイ人には武器を持たせて塙の内部を占領する力を与え、

アルマ55,21,それから自分の部下の兵たちに命じて、とりこから少しはなれてレーマン人の軍を包囲させることができたからである。

アルマ55,22,これらのことを夜の間にしてしまったから、翌日の朝レーマン人が目を覚すと市外はニーファイ人に囲まれ市内はとりこが武装しているのを見て、

アルマ55,23,ニーファイ人にはもはや勝てないことを知り、これと戦うことが不利益であることを認めたので、大士官たちはレーマン人の軍に武器の引きわたしを命じ、これを持ってきてニーファイ人の足下に投げながら命を助けてくれと願った。

アルマ55,24,これは正にモロナイが願うところであったから、モロナイは敵をとりこにし都市を統治しとりこになっていたニーファイ人を全部解放した。そしてこのように解放されたニーファイ人はすぐにモロナイの軍に加わり、その勢

力を大いに増加した。

アルマ55,25,さてモロナイはこのたびとりこにしたレーマン人を使って、ギド市の周りのとりこをいよいよ堅固にする労働に従事させ、

アルマ55,26,ギド市を思った通り固めてしまうと、とりこをバウンテフル市へ送り大軍を以てそこを守らせた。

アルマ55,27,ニーファイ人はレーマン人の陰謀があったにもかかわらずよくすべてのとりこを見張り、すでに取り返した土地を優位とをいつまでも皆よく守り固めた。

アルマ55,28,このようにニーファイ人は再び勝利を得て、よくその権利と特権とをとり返して保護するようになった。

アルマ55,29,レーマン人はたびたび夜に乗じてニーファイ人をとりかこもうとしたが、そのたび毎に多くの者がとりこになった。

アルマ55,30,レーマン人はまたたびたびニーファイ人に葡萄酒を飲ませて、あるいは毒殺しあるいは酔わせて亡ぼそうとしたが、

アルマ55,31,ニーファイ人はこの艱難の時に逢ってその神である主を速に思い出したから、レーマン人のわなにはかからなかった。すなわち、とりこのレーマン人にまず葡萄酒を飲ませなければ自分たちも飲まず、

アルマ55,32,このように毒を飲まないように用心をした。その葡萄酒がレーマン人を毒で殺すならニーファイ人もまた毒で殺すから、どの酒もまずレーマン人に飲ませて毒があるかないかを試した。

アルマ55,33,レーマン人は骨を折ってモリアントン市を固めこれを非常に堅固な所にしたから、モロナイはモリアントン市を責める準備をする必要があった。

アルマ55,34,レーマン人は常に新しい兵力と新しい兵糧とをモリアントン市へ運び入れていた。

アルマ55,35,このような有様でニーファイの民を治める判事治世の29年目は暮れて行った。

アルマ56,,アルマ書 第56章

アルマ56,*-*,ヒラマンがモロナイへ送った手紙。アンモン人青年らの驚くべき信仰と勇気。再び大戦争。ニーファイ人の大勝利。

アルマ56,1,判事治世30年目の1月2日、モロナイはヒラマンから手紙を受け取ったが、それにはヒラマンのいる地方の人民の状況が書いてあった。

アルマ56,2,ヒラマンの書いた言葉は次の通りである。主に於けるわが愛する兄弟よ。また今の戦に於て艱難を同じくするわが深く愛する兄弟モロナイよ。この地方の戦について汝に知らせることがある。

アルマ56,3,それは、アンモンがニーファイの地から連れてきた人々の息子である2,000人の人々にかかわることである。汝は、すでにこれらの人々がわれらの先祖リーハイの長男レーマンの子孫であることを知っているから、

アルマ56,4,かれらの言伝えと不信仰とについて汝に語る必要はない。汝はこれらのことをみなよく知っているからである。

アルマ56,5,われはただかれらの子孫である2,000人の青年が武装をして、われにその司令官になってくれと言いい、われらが時刻を守るために出陣したということを言えば充分である。

アルマ56,6,汝はまたこの2,000人の青年の親たちが、同胞に向って再び武器を執り血を流すことをしないと誓ったことをよく知っている。

アルマ56,7,しかし判事治世の26年目、かれらは国民がかれらのために艱難に逢い非常に苦しむ有様を見たので、すでに立てた誓いを破り国家を守るために武器を執ろうとした。

アルマ56,8,しかし、かれらが立てた誓約を守るためにわれらが益々苦しむことのないように、神はとくに力を添えて下さると思ってわれはその誓約を破ることをかれらに許さなかった。

アルマ56,9,しかし、われらが非常に喜ぶ1つの事があった。すなわち、26年目にわれヒラマンはこの2,000人の青年を率いてユダヤ市へ行き、汝がその地の軍の司令官としたアンテプスを助けた。

アルマ56,10,その時われはわが2,000人の子(この2,000人の青年はわが子と呼ぶにふさわしい者である)をアンテプスの軍に加えたから、アンテプスは1方ならずこれを喜んだ。それはレーマン人がわが軍を大勢殺したから、アンテプスの軍はすでに減少していたからである。

アルマ56,10-1,われらはわが兵の多く殺されたことを悲しまずにはおられない。

アルマ56,11,それでも、またわれらはかれらが国の為、神の為に死んですでに幸福を受けていると思って心に慰めを得るのである。

アルマ56,12,レーマン人はまた多くのとりこを以ていたがこのとりこは皆大士官であった。そのほかにとりことなった者は、レーマン人がみな殺してしまったからである。思うにとりこになっている大士官らは今ニーファイの地に居るであろう。レーマン人がこれを殺さなかったなら

アルマ56,12-1,必ずニーファイの地に居るのである。

アルマ56,13,レーマン人がわが軍の多くの勇士の血を流すことによって占領した都市は次の通りである。

アルマ56,14,マンタイの地、すなわちマンタイ市、ゼーブルム市、クマナイ市、アンテパラ市がこれである。

アルマ56,15,これらはわれがユダヤ市に着いた時レーマン人がすでに占領していた都市であって、われはアンテプスとその軍とがユダヤ市の防禦に力をつくしているのを見た。

アルマ56,16,かれらはその都市を守るために、昼は勇ましく戦い夜は苦勞してあらゆる苦難に逢ったため肉体精神ともに疲れていた。

アルマ56,17,かれらはもしユダヤ市で敵に勝たなければ必ず死のうと覚悟をしていたから、われがつれてきたこの小さな軍、すなわちわが子である青年たちのために大きな望と喜びとを得たことは言うまでもない。

アルマ56,18,レーマン人はアンテプスの軍が遠兵を得たと知ると、アモロンの命令でユダヤ死またはわが軍を攻めることを禁ぜられた。

アルマ56,19,このようにしてわれらは主の助けを得た。もしレーマン人がわれらのまだ弱い内に攻めよせてきたならば、われらの小さな軍を亡ぼしたかわからない。しかしわれらはこのようにして守られたのである。

アルマ56,20,レーマン人はこれまでに占領している都市をみな固く守れと言う命令をアモロンから受けた。これで26年目は終った。27年目の始め、われらはすでに自身と自分らの都市とを守る備えを完成していたが、

アルマ56,21,われらはレーマン人をそのとりでにこもっているまま攻撃したいとは思わなかったから、レーマン人から攻めよせてくればよいと思っていた。

アルマ56,22,われらはいつも4方に間者をつかわし、レーマン人が夜にも昼にもわれらの所を過ぎて来たの方にあるわれらの他の都市を攻めることのないようにその動きをうかがっていた。

アルマ56,23,なぜならば、来たの方にある都市の民はレーマン人を防ぐに足る力がないことが解っていたからである。それであるからレーマン人がもしもどうかしてわれらの所を過ぎることができたなら、われらはわが軍を以て後ろからこれを襲い、かれらの正面から向うと共に後

アルマ56,23-1,攻めたいと思っていた。われらはこの策を以てレーマン人に勝つことができると思っていたところが、その望はずれた。

アルマ56,24,レーマン人は思い切って全軍でわれらの所を過ぎることができず、また軍の1部では充分強くないから亡びるかも知れぬと思って過ぎなかったからである。

アルマ56,25,かれらはまた思い切ってゼラヘムラ市を攻めるために軍を進めようとはせず、またサイドン川の源を越えてニーフアイハ市へ行くことも危いと思ってしなかった。

アルマ56,26,それでかれらは、それまでに占領している都市を軍勢で固く守ろうと決意をした。

アルマ56,27,この年の2月、わが子である2,000人の青年の親から多くの食糧をわが軍にとどけ、

アルマ56,28,またゼラヘムラの地から2,000人の援兵を送ってきたから、われらには10,000の兵とこれに必要な食糧と兵と兵の妻子に要する食糧とがあって準備が整った。

アルマ56,29,レーマン人はわが兵が日々増加しこれを養う食糧がくるのを見て恐ろしくなり、われらの所へ送ってくる援兵と食糧の道をふさごうと思ってたびたび出撃してくるようになった。

アルマ56,30,われらはレーマン人がこのようにいよいよ不安になるのを知り、1つの計略を施そうと思った。よってアンテプスはわれとわが年若い子らに命令を下して、隣りの都市へ食糧を運ぶふりをして一しょに行けと言った。

アルマ56,31,こうすると、わが兵はアンテパラ市の向うにあって海に近い都市に行くふりをしてアンテパラ市の近くを通らねばならなかった。

アルマ56,32,そこでわれらはあたかも食糧を運んでその市へ行くようなふりをして進軍して行った。

アルマ56,33,われは小さな軍を率いてアンテパラ市に近づくと、アンテプスはその軍の1部をくり出し、ユダヤ市の守りのためにほかの兵をのこして進んできた。

アルマ56,34,アンテパラ市にはレーマン人の1番強い軍が1番多く駐屯していた。

アルマ56,35,それであるから間者によってわが軍の行動を知ると、すぐに軍をくり出しわが軍に向って進んできた。

アルマ56,36,そこでわれらは北の方へ逃げてレーマン人の1番強い軍隊を遠くへ誘い出した。

アルマ56,37,かれらをずいぶん遠くへ誘い出したところ、レーマン人は後からアンテプスの軍が急いで追ってくるのを覚り、左へも右へも曲らず真すぐにわが兵を追ってきた。かれらはわが兵にとり囲まれぬよう、アンテプスの軍の追いつかぬ内にわが兵を殺すつもりであったらしい

アルマ56,38,アンテプスはわが兵が危ないのを見て急いで進んできたが、もう夜になってレーマン人がまだわれらに追いつかず、アンテプスの軍もまだレーマン人に追いつかなかったから、われらは天幕を張って夜を過した。

アルマ56,39,翌日、まだ夜の明けない中にレーマン人が再びわれらを追ってきたが、われらはこれと戦う力がなく、またわれはその若い息子らをレーマン人の手に落したくないと思ったから荒野へ進んで行った。

アルマ56,40,レーマン人はとり囲まれることを恐れて左へも右へも曲らず、われもまたレーマン人に追いつかれたならこれに抵抗ができずに殺され敵を取り逃すといけないうと思って左にも右にも曲らず、この日もまた暗くなるまで1日荒野へ逃げて行った。

アルマ56,41,夜が明けると、われらはレーマン人が今にも追いつこうとする様子を見てまた逃げた。

アルマ56,42,しかしこのたびレーマン人はわれらを遠く追わずに止まった。時は7月3日の午前であった。

アルマ56,43,われらはレーマン人がアンテプスに追いつかれたかどうかは知らなかったが、われはわが部下に問うて“敵はわれらに攻めさせよう兵を止めて、われらをわなにかくて捕えようとするのかも知れない。

アルマ56,44,しかしわが子らよ汝らはどう思うか。敵と戦うつもりか”と言った。

アルマ56,45,わが愛する兄弟モロナイよ。われはニーファイ人の中にさえも次に言うような偉大な勇気を見たことがない。

アルマ56,46,われが常にかれらを指して(みな非常に若かったから)わが子らと呼ぶように、かれらもまたわれを指して父と呼び“父よ、われらの神はわれらと共にましまして必ずわれらを倒れさせためわれないから、われらは行って戦おう。われらの同胞がもしも日頃われらに迫らな

アルマ56,46-1,ならばわれらはこれを殺さないであろう。かれらは迫ってきている。同胞であるこの敵がアンテプスの軍に勝たないようわれらは行って戦おう”と答えた。

アルマ56,47,わが子らはまだ戦ったことがなかったが死めことを恐れず、自分の命よりも親の自由を重んじ、また疑いを抱かないならば神が必ず自分らを救いたもうとその母から教えを受けていた。

アルマ56,48,かれらはその母の言葉をわれに話して“われらの母はわれらに教えたことを自分で確に知っている。われらはこれを疑わない”と言った。

アルマ56,49,さてわれは、われらを追いかけたレーマン人を攻めるためにこの2,000人の兵を率いて言ったが、見よ、アンテプスの軍はすでにレーマン人に追いついて烈しい戦が始まっていた。

アルマ56,50,しかし、アンテプスの軍は僅の間に遠い道のりを進んだため、疲れてまさにレーマン人に負けようとしていた。もしもわれがその2,000人の兵をつれて帰ってこなかったならば、レーマン人はその目的を遂げたことであろう。

アルマ56,51,アンテプスとその軍の重な士官たちの多くは急いで進軍したために疲れて早くも剣に倒れたから、その兵は重な士官らが死んだのを見てうろたえ騒ぎレーマン人から退却し始めた。

アルマ56,52,レーマン人はこれを見て勇気づき全力をあげてアンテプスの軍を追撃する。レーマン人がアンテプスの軍を追撃する内に、ヒラマンはその2,000人の兵を以てレーマン人の背後から攻撃して大いに敵を殺し始めたから、レーマン人の軍は止まって今度はヒラマンの軍

アルマ56,52-1,向ってきた。

アルマ56,53,そこでアンテプスの軍は、レーマン人が転じて今その背面に向っているのを見て、残りの兵を集めて再び敵の後方を襲った。

アルマ56,54,よってニーファイの民であるわれら、すなわちアンテプスの兵とわれとわが2,000人の兵とはレーマン人をとりかこんでこれを殺したから、敵はやむを得ず武器をひきわたして自らとりことなった。

アルマ56,55,敵が降服してから、われはわが部下の青年が多く死んで居わしないかと思って数をしらべたところ、

アルマ56,56,嬉しいことに1人も失わなかった。まことにかれらは神の限りない力を得たかのように戦った。人がこのように不思議な力で戦ったことはいまだかつて例のないことであった。かれらはレーマン人も驚くばかりの大きな力で攻撃したから、レーマン人は降服してとりこに

アルマ56,56-1,とりこになったのである。

アルマ56,57,その地にはとりこを見張ってレーマン人の軍に取り返されないようにしておく所がなかったので、われは殺されなかったアンテプスの兵の1部をつけてこれをゼラヘムラの地に送らせ、アンテプスの残りの兵をわが若い子であるアンモン人に加えてユダヤ市に帰った。

アルマ57,,アルマ書 第57章

アルマ57,*-*,ヒラマンの手紙(ツズキ)。アンテパラ市をとり返す。クメナイ市降服する。レーマン人、マンタイ市へ追い返される。奇跡的の護り。レーマン人のとりこ逃げる。

アルマ57,1,われはアモロン王から手紙をもらったが、その中にわれらが捕えたとりこを返したならばかれもまたアンテパラ市をわれにゆずりわたすと書いてあった。

アルマ57,2,しかしわれは手紙を王に送って、わが軍隊はアンテパラ市を占領するに足る力をもっているから、アンテパラ市ととりこを交換するのは愚なことであると思う。従って相互にとりこを交換するのではなければとりこを返さないとやってやった。

アルマ57,3,ところがアモロンはとりこを交換したくないのでわが手紙に言ってあることを拒んだ。それであるから、われらはアンテパラ市を攻める準備をした。

アルマ57,4,しかしその時アンテパラ市の人々は同市を立ち退き、その所有しているほかの都市へ逃げて行ってこれを固めた。こうしてアンテパラ市はわれらの手に落ちた。

アルマ57,5,このような有様で判事治世の28年目は過ぎ去った。

アルマ57,6,29年目の始め、ゼラヘムラの地とその近所の地から食料と6,000人の援兵とを送って来、またアンモ

ンの子である60人の者たちがきて、その兄弟であるが2,000人の隊に加わった。今やわれらは実に強くなり、また充分の食料を送ってもらった。

アルマ57,7,それで、われらはクメナイ市を守るために置いてあった敵軍と戦いたいと思ったが、

アルマ57,8,やがてこの望を遂げたことをこれから汝に話そう。敵が食糧を受け取るようになっていた少し前から、われらは強い軍隊の1部を以て夜クメナイ市を包囲し、

アルマ57,9,そしてこのまま数夜を過したが、レーマン人が遣る襲って来てわれらを殺さないように剣を着けたまま眠りまた番兵を置いた。レーマン人はたびたび夜われらを襲って来て殺そうとしたがその度毎にかれらは損害を受けた。

アルマ57,10,その中、ついに敵の食糧が到着した。そしてこれを運ぶ者たちが夜市内に入ろうとするときに、われらはレーマン人でなくてニーファイ人であったからかれらを捕えてその食糧を奪った。

アルマ57,11,レーマン人はこのように食糧を運ぶ道を断ち切られながらも、なおこの市を意地しようと決心した。そこでわれらは奪い取った食糧をユダヤ市へ送り、またとりこをゼラヘムラの地へ送る必要があった。

アルマ57,12,そして多くの日がたたない中に敵は救いを得る望を全く失い、われらはクメナイ市を明けわたした。

われらはこのようにしてクメナイ市を手に入れる企をなし遂げた。

アルマ57,13,しかしこのときわれらの捕えたとりこはその数を非常に多かったので、これを殺さなければ見張りのためにわが全軍を用いねばならなかった。

アルマ57,14,そしてそのとりこたちは時々大勢であれば騒ぎ、石や棒を手当り次第にとつて戦ったから、かれらが降服してとりこになってからも、われらはその中の2,000人以上を殺した。

アルマ57,15,実際、剣を手を持って見張りながらとりこをゼラヘムラの地へ送らないならば、これを殺すよりほかに仕方がなかったのである。また、われらにはレーマン人から取った食糧があったけれども、これはただわが軍を養うに足りただけであった。

アルマ57,16,それであるから、この危険な際に当ってこのとりこの処分を決するのは非常に重大なことであったが、ついにこれをゼラヘムラの地へ送ることにきめ、わが軍の中から兵をえらんでとりこをゼラヘムラへ送ることを受け持たせた。

アルマ57,17,その翌日、この兵たちは帰ってきたがとりこがどうなったか聞くひまがなかった。それは、レーマン人がすでにわれらを攻めていて、この兵たちはわれらがレーマン人の手に落ちようとする危ないところを助ける好い時に帰ってきたからである。アモロンはすでに食糧を

アルマ57,17-1,レーマン人に送って居り、また多数の援兵もこれに送っていた。

アルマ57,18,われらがとりこにつけて送った兵士たちは、レーマン人が正に勝とうとするときに帰ってきてレーマン人を防いだ。

アルマ57,19,しかしわが2,060人の兵は必死になって奮戦し、勇敢に1歩もレーマン人にゆずらず、向ってくるすべての敵を殺した。

アルマ57,20,わが軍の他の部が退却しようとするとき、わが2,060人は勇敢に1歩も退かず、

アルマ57,21,一々の号令をみな正しく守って戦ったが、ついにその信じた通りになった。ここに於てわれは、かれらが自分の母に教えられたことであると言って、われに話した言葉を思い浮べた。

アルマ57,22,われらがこの大勝利を獲たのはひとえにわが子であるこの青年たちと、とりこをゼラヘムラへ送るために選ばれた兵士たちによる。レーマン人を負かしたのはまことにこの兵士たちである。このようにしてレーマン人はマンタイ市へ追い返された。

アルマ57,23,われらはクメナイ市を守り通した。わが軍がみな剣に倒されたと言うわけではないが、その損害は大きかった。

アルマ57,24,さて、レーマン人が逃げてからわれはすぐに命令を下して負傷したわが兵を死者の中から救い出し、その傷に繃帯を施させた。

アルマ57,25,見ると、わが2,060人の青年の中、200人ばかりは血を失って気絶し、また1人のこらず多くの傷を受けていたが神の恵みによって1人も死んだ者がなかったのには、敵味方共に非常に驚いた。

アルマ57,26,わが軍の中1,000人も殺されたのに、この2,060人の青年がことごとく死をまぬかれたのはわが全軍が驚き怪しんだことである。しかしこの2,060人の青年が正義の神がましますことと、疑わぬ者は誰でも皆神の驚嘆すべき能力で助けられることを教わ

アルマ57,26-1,これを信じて疑わなかったのであるから、その命が助かったのは神の驚くべき力によると認めざるを得ない。

アルマ57,27,わが話した2,060人の信仰は右の通りである。かれらは年は若いがその心は堅固であつてたえず神に頼っている。

アルマ57,28,さてわれらは負傷者に手当を加え、わが兵の死者もまた多くのレーマン人の死者もこれを葬ってか

ら、ゼラヘムラの地へ送るために出立したあのとりこのことをギドにたずねた。

アルマ57,29,ギドはゼラヘムラの地までとりこを見張って行く任を受けた兵を指揮する大士官であった。

アルマ57,30,このときギドは答えて言った。見よ、われはとりこをゼラヘムラへ送ろうとして出立したが、レーマン人の陣営をうかがうためにつかわされたわが軍の間者らに出逢った。

アルマ57,31,するとかれらは、レーマン人の軍が今正にクメナイ市の方へ進んで居る。かれらはクメナイ市を攻めてわが軍を亡ぼすであろうと大声で言った。

アルマ57,32,これを聞くや、われらが見張っているとりこたちは勇み立ち、あばれ沢井でわれらと戦い出した。

アルマ57,33,このようにとりこたちが謀叛したのでわれらは剣をふるってかれらを殺し始めたが、かれらは一団となつてわれらの剣に向って走りかかってきたから、その大部分は殺され、殺されなかった者たちはわが兵をおしわけて逃げて行つた。

アルマ57,34,かれらが逃げるやわれらはそのあとを追いかけたが、これに迫り着くことができなかったのもので、急いでクメナイ市の法へ進んできたが、クメナイ市を守り防いでいる味方を助けるちょうど好い時期に到着した。

アルマ57,35,見よ、われらは再び敵の手から救われた。わが神の御名に感謝し奉る。われらのためにこの大きな御業を行つてわれらを助けたもうたのはこの神である、と。

アルマ57,36,われヒラマンは、ギドの言葉を聞き終り、われらが全く亡びてしまわないよう守りたもうた神の恩恵を思つて非常な喜びが胸に満ちた。われは、ころされた人々の霊がすでにその神の安息の中へ入っていることを信ずる。

アルマ58,,アルマ書 第58章

アルマ58,*-*,ヒラマンの手紙(おわり)。マンタイ市の前に於けるニーファイ人の作戦。レーマン人の出撃。ギドとテオムネル、マンタイ市を取る。敵退く。

アルマ58,1,われらの第2の目的はマンタイ市を落すことであった。しかしわが小さな隊を以てしては、どうしても敵をその市から誘い出すことはできなかった。われらが前に用いた策はレーマン任が憶えていたから、かれらをその堅固なとりでから誘い出すことはできなかった。

アルマ58,2,また敵はわが軍よりもはるかに大軍であったから、われらは思い切つて出て行つて敵がとりでにこもっているまゝを攻めなかった。

アルマ58,3,そうするよりは、これまでに取り返した自分の地を引きつづき護るために全軍を使うことが必要であった。それであるから、ゼラヘムラの地から援兵と新しく食糧の来るのを待つよりほかに仕方がなかった。

アルマ58,4,その時、われは使者をわが国の統治者のもとへつかわし、この所のわが民の事情を知らせてゼラヘムラの地から来る食糧と援兵とを待った。

アルマ58,5,しかし、レーマン人もまた毎日多くの援兵と食糧とを受けていたから、われらがこのようにして待っているのは非常に不利益であった。実際、このころわれらはこのような有様であった。

アルマ58,6,レーマン人はたびたび出撃してわれらを攻め、計略によってわれらを亡ぼそうと決意していたが、敵には逃れる所ととりでがあつたのでわれらはどうしてもこれと戦うことができなかった。

アルマ58,7,われらはこのような難儀な有様で数箇月を送り、とうとう飢死をせんばかりであつたが、

アルマ58,8,ようやく、われらを助けるために2,000人の援兵が守って運んできた食糧がとどいた。われらとわが国とを敵の手に落ちないように守つて、無数の敵と戦うのを助けるために送られた食糧と援兵とは実際これだけであつた。

アルマ58,9,この困難の原因、すなわちもっと多くの援兵がわれらに送られなかった原因はわれらに解らなかつた。それでわれらは心配をして、何かして神の裁きがわが国に下りわれらを覆して全滅させるようになりはしないかと言ふことを恐れた。

アルマ58,10,それであるから、われらは全身全霊を傾けて神に祈り、われらを強めて敵の手から救いたまわんことと、われらにわが民を救つて養わせるため、われらのもろもろの都市と所有する土地と持物とを護る力を与えたまわんことを請いねがった。

アルマ58,11,そこでわれらの神である主はわれらを救い出すと言ふ保証をたまわり、われらの心を安んじ、熱い信仰を受け、神に依つて助けられると言ふ望みを心に起させたもうた。

アルマ58,12,これによって、われらは僅な援兵を得て勇気を出し、敵に勝つてわれらの所有する土地、持物、妻子および自由の道を守ろうと堅く決心をし、

アルマ58,13,マンタイ市にいたレーマン人と戦うために奮い立つて進軍し、マンタイ市に近い野の附近に陣を張つた。

アルマ58,14,翌日、レーマン人はわが軍が都市に近い野の附近の国境へきたことを知り、わが兵の数と力とを探り知るために間者をわが軍のまわりに出したが、

アルマ58,15,数に於てわが軍が強くないのを見、出撃してわれらを殺さなかつたなら食糧を運ぶ道がわが方に断ち

切られるかも知れないと思い、またその無数の兵でたやすくわが軍を亡ぼすことができると思って戦に出る用意にとりかかった。

アルマ58,16,すなわちレーマン人が戦に出る用意にとりかかったのを知ったから、われはギドとテオムネルおに各々僅の兵をつけて野に隠れさせた。

アルマ58,17,ギドとその兵は右に居り、テオムネルとその兵とは左に居った。こうしてかれらが隠れてから、われと残りの兵とは最初に陣を張ったところに止まっていたレーマン人が出てくるのを待った。

アルマ58,18,するとレーマン人は大軍を以てわれに向って出てきたが、進んできて正に剣でわれらを殺そうとするや、われは一しょに居た兵に命じて野の奥へ退かせた。

アルマ58,19,これを見るとレーマン人は、ぜひ追いついてわれらを殺したいと思い、大速力で野の奥へわれらを追いかけてきた。われらはギドとテオムネルとの間を通りすぎたから、この2人はレーマン人に見出されなかった。

アルマ58,20,レーマン人の軍が通りすぎてしまうと、ギドとテオムネルとは隠れていた所から出てきて、レーマン人の間者たちがマントイ市へ帰れぬようにまずその道を断ち切り、

アルマ58,21,次にマントイ市へ走って行ってその市を守るために残っていた番兵におそいかりこれを殺して市を占領した。

アルマ58,22,これはレーマン人が僅の番兵だけをのこして全軍こぞって野へ誘い出された失錯によるのである。

アルマ58,23,ギドとテオムネルとはこの機に乗じて敵のとりでを占領した。わが兵は暫くの間野を逃げて歩いてからゼラヘムラの地方を指して進んだ。

アルマ58,24,この時レーマン人はわれらがゼラヘムラの地方へ向って進のを知って、これは自分らを滅亡に誘う策があるのではないかと非常に恐しがり、われらを追いかけた道を通って野へ引き返した。

アルマ58,25,夜になってレーマン人の大士官らは、ニーファイ人は退却のためにもはや疲れたのであろうと思い、またすでにニーファイ人の全軍を追いはらってしまったと思って天幕を張り、マントイ市のことは少しも心にかけなかった。

アルマ58,26,しかしこの夜われはわが兵らを眠らせず、別の道からマントイの地へ進軍させた。

アルマ58,27,このように夜道を急いだから、われは翌日までにもうレーマン人の先になってかれらより早くマントイ市へ着いた。

アルマ58,28,この計略でわが軍には何らの支障もなくマントイ市を占領することができた。

アルマ58,29,さてレーマン人の軍が都市の近くへきて見ると、われらが先にそこに居て戦の備えをしているのを見て非常に驚きうろたえて野へ逃げて行った。

アルマ58,30,それからレーマン人の諸軍は全く国のこの地方から引き上げたが、見よ、かれらはわが国から多くの女子供をとりこにしてつれ去った。

アルマ58,31,レーマン人が前に占領していた都市は、われらがみな取り返して所有している。とりこになってレーマン人のために他国へつれて行かれた者のほかに、われらの親や女子供たちは今それぞれの家路についている。

アルマ58,32,しかし、見よ、かほどに多くの都市と広い土地と持物とを固めて守るためにはわが軍は小さすぎる。

アルマ58,33,しかしわれらは、われらにこの勝利を得させ、さきにわれらが持っていた都市と土地とを取り返させたもうたわれらの神に頼っている。

アルマ58,34,政府は何故にもっと大きな援助をわれらに送ってこないのか、われらもまたわれらの所へきた援兵もそのわけを知らない。

アルマ58,35,われが思うに政府は事に失敗し、兵を国内に出したのかも知れぬと。はたしてそうならばわれらは不平を言うまい。

アルマ58,36,もしそうでなければ、おそらく政府に或る徒党が起ってそれがためにかれらは援兵を送ってこないであろうと思う。なぜならば、政府がすでにこちらへ送った者のほかに援兵となる者が多くあることを知っているからである。

アルマ58,37,たとえどうでも、わが軍隊が弱力であるにもかかわらず、われらは神がわれらを助けて敵の手から救いたもうことを信ずる。

アルマ58,38,今は29年目の暮れであって、われらは所有の地をとり返し、レーマン人はもはやニーファイの地へ退いた。

アルマ58,39,そしてわれが先にほめたたえたアンモンの民の息子らは、今われと一しょにマントイ市に居る。主がこれを助けて剣に倒れないように守りたもうから、その中の1人も殺された者はない。

アルマ58,40,かれらは多くの傷を負ったけれども、神がかれらを自由な者になしたもうたその自由の道を堅く守り、毎日必ず自分の神である主を思い、慎んでたえず神の律法と裁決と命令とに服従し、将来にかかわる予言を固く信じている。

アルマ58,41,さてわが愛する兄弟モロナイよ、ねがわくはわれらを贖って自由になしたもうたわれらの神である主

が、常に汝を御前に居らせたまわんことを。またねがわくは主がこの民を恵みたまい、レーマン人がわれらから奪い取った生活に必要な品をことごとく汝に取り返させた

アルマ58,41-1,ことを。われはこれでこの手紙の結びとする。われはアルマの子、ヒラマンである。

アルマ59,,アルマ書 第59章

アルマ59,*-*,モロナイ、ペホーランに手紙を書いてヒラマンに加勢することを求める。レーマン人、ニーファイハ市を取る。モロナイ、政府の怠慢と不注意なことを見て怒る。

アルマ59,1,ニーファイの民を治める判事治世の30年目、モロナイはヒラマンの手紙を受け取ってこれを読み、ヒラマンが前に失った土地の取り返しに見事成功したことを非常に喜んだ。

アルマ59,2,モロナイは自分の居る地方に住むすべての民もまた喜ばせようとしてヒラマンの手紙をあまねくその地方に発表した。

アルマ59,3,そしてすぐに手紙をペホーランに送り、ヒラマンが取り替えて今まで奇跡的に守り固めている所が容易に保護されるよう、ヒラマンの軍に仮性をするために援兵を召集してもらいたいと言った。

アルマ59,4,この手紙をゼラヘムラの地へ送ってから、モロナイはレーマン人がすでにニーファイ人と戦って占領し、今なお統治している土地や都市を再び取り返す策を立て始めた。

アルマ59,5,しかしモロナイがこのようにレーマン人と戦う準備をしている内に、モロナイしとリーハイ市とモリアントン市からニーファイハ市に集ったニーファイ人は、レーマン人に攻められていた。

アルマ59,6,マンタイの地やその附近の地から追いはらわれたレーマン人の軍は、すでにやってきてこの地方に居るレーマン人の軍と聯合した。

アルマ59,7,このようにしてレーマン人の兵数は非常に多くなり毎日加勢を受けたから、アモロンの命令に従ってニーファイハ市の軍に向って進みむごたらしくこれを殺し始めた。

アルマ59,8,このときレーマン人の兵数は非常に多かったから、殺されずにニーファイハ市に残っていた人々はやむを得ず逃げ出してようやくモロナイの軍に加わった。

アルマ59,9,モロナイはニーファイハ市の人々がその市を守るのを助けるために、政府からすでに援兵が送られているはずであると思い、またその市がレーマン人の手に落ちないように守ることは的が占領してからこれを取り返すよりも容易であることを知っていたから、ニーファイ

アルマ59,9-1,容易にその市を守ることと思っていた。

アルマ59,10,それでモロナイは、すでに取り返した所を守り固めるのに自分の全軍を用いた。

アルマ59,11,従ってモロナイはニーファイハ市が占領されたと知って非常に悲しみ、ニーファイ人の罪悪のために国民が同胞であるレーマン人の手に落ちはしないかと疑うようになった。

アルマ59,12,これは独りモロナイだけでなく軍の大士官らも皆そうであった。それはレーマン人がこれほどまでにニーファイ人に勝てるのを見て、民の罪悪のために自国民が亡びはしないかと怪しみ疑った。

アルマ59,13,ここに於てモロナイは、政府が国家の自由を思わず怠慢で不注意なことを怒った。

アルマ60,,アルマ書 第60章

アルマ60,*-*,モロナイ、再びペホーランに手紙を出す。政府の怠慢を訴える。報復の危険があるため直ちに救援を求める。

アルマ60,1,そこでモロナイは、再び全国の統治者ペホーランに手紙を出して言った“われはゼラヘムラ市に居る全国の大判事兼統治者ペホーランと、この民に選ばれてこの戦争を指揮する参謀にされた人々とにこの手紙を出す。

アルマ60,2,見よ、われは汝らを責めることがある。汝らは兵を召集して剣や太刀やそのほかあらゆる武器を執らせ、レーマン人がわが国に侵入してくる所へつかかわしてレーマン人と戦わせる地位に任命されていることを自分で知っているはずである。

アルマ60,3,われとわが兵とヒラマンとその兵とは非常な困難に逢い、飢え渴き疲労などあらゆる苦痛をなめた。

アルマ60,4,しかし、これだけであったならば、われわれは眩やきもせずまた不平も鳴らさないが、

アルマ60,5,わが国の民が受けた殺戮はまことにおそろしく大きなものであって、剣に倒れた民は幾千人にも及んでいる。汝らがもしもわが軍に充分の援兵と食糧とを送ったならば、このような悲しいことにはならなかったであろうものを。汝らがわれらをかまってくれないことは実

アルマ60,6,何故汝らはこのように甚しく怠慢であったか、また何故このように不注意であったか、そのわけを知りたい。

アルマ60,7,汝らの敵が汝らのまわりに殺戮をほしいままにして汝らの同国人を幾千人も殺しているのに、汝らは考えもせずばんやりと安座しておれると思うか。

アルマ60,8,殺された同国人らは汝らが保護してくれると信じていた。実際、かれらは自分らを救うことのできる地位に汝らを立てた。従って汝らはかれらに加勢をするよう、またかれらの幾千人が剣に倒れないよう、援兵を送ること

もできたのである。

アルマ60,9,また、これだけではない。汝らが食糧を送らなかったで、多くの者たちはこの国の民の福利を切に望んで自らの血と命とをぎせいに戦った。これは皆汝らが甚しくかれらをかまいつけなかったで、飢死をするばかりの時にしたのである。

アルマ60,10,わが愛する兄弟らよ。汝らはわれらから愛せられなくてはならぬから、この国の民の福利と自由とのためにいよいよはげんで熱心に勤めなくてはならなかった。この国の民をかまいつけなかったから、幾千人もの人が死んだ責任は汝らが受けて讐を返されるであろう。そ

アルマ60,10-1,かれらの歎願と艱難とを神が知れたもうからである。

アルマ60,11,見よ、汝らはただ安座して何もしなくとも、神の厚い恵みによって救われ守られると考えることができるか。もしもこのように考えているならば、それはむだな考えである。

アルマ60,12,汝らは同じ国がかほどに多く殺されたのを見て、それはかれらが悪いことをしたからだと考えるか。もしもこのように考えているならば、それはむだな考えである。はっきりと言うが、剣に倒れた者は多い。それらはすべて汝らに罪のあることを証明する。

アルマ60,13,主はその正義と裁きとを悪人に受けさせるために義しい者が殺されることを許したもう。それであるから、義しい者が殺されたとかかれらが全く亡びてなくなったと思うべきではない。見よ、かれらはその神である主の安息に入るのである。

アルマ60,14,われはまた汝らに言うが、われはこの国の民の甚しい怠慢、実際は政府の怠慢とすでに殺された同じ国の民を甚しく心にかけなかったことのために、神の裁きがこの国の民の上に下りはしないかと非常に恐れている。

アルマ60,15,国の政治を行う首脳者から始まった悪事さえなかったならば、われらは少しも敵に負けないように防ぐことができたであろう。

アルマ60,16,もしも内乱が国民の中に起らず、また国民の中に甚しい流血をひき起した王政党がなく、王政党の人々がわれらを支配する権威を貧らず、またわれらに対して武器をとってあの甚しい流血をひき起さず、もしも自由の道に忠誠をつくしてわれらと共に一致して敵に向って

アルマ60,16-1,またあの内乱が起らずにわれらが平生のように互いに力を合せ、主の下さる力を以て敵に当ったならば、われらは必ず敵を追い退けたにちがいない。なぜならば、このように一致して戦ったならよるずの事は主の御言葉の通りになるからである。

アルマ60,17,ところが今やレーマン人はわれらに迫ってきてわれらの地をかすめとり、剣でわが民を殺し、女子供の命さえも許さず、また民を捕えてよそへ連れて行き、そのとりにあらゆる苦しみを与える。見よ、これはみな権威を貪るあの王政党が犯す大きな罪惡の結果である。

アルマ60,18,しかし、われはこのことについて多くを言う筋合はない。汝らもまた自ら権力を貧っていないこと、また国賊でないことを誰が知ろう。

アルマ60,19,汝らがわれらのことをかまいつけず食糧を送らずまたわが軍に加勢をする援兵を送らないのは、汝らが国の中心に居って身のまわりが安全であるためであるか。

アルマ60,20,汝らは自分の神である主の命令を忘れているか。われらの先祖が束縛されたことを忘れているか。われらがたびたび敵の手から救われたことを忘れているか。

アルマ60,21,汝らは、われらが安座して何もせず主がわれらのために備えたもうた手段を使わない間にも主がわれらを救いたもうと思うか。

アルマ60,22,国境では幾千の民が剣に傷つき血塗れになって倒れているのに、汝らは幾千幾万の怠け者と共に何もせずに怠けていようとするのか。

アルマ60,23,汝らが何もせずにただ安座してこの有様を見ているときに、神は汝らを罪がない者になしたもうと思うか。いや、そうではない。神は'まず器の内部を清潔にして、bサの後器の外側も清潔にせよ'と仰せになった。汝らはこの言葉を忘れないで欲しい。

アルマ60,24,見よ、汝らがこれまでにしたことを悔い改め、心を奮い起してはげみ、われらへもヒラマンへも食糧と援兵とを送り、これによってヒラマンがすでに取り返して守っている地を固く守らせ、また国のこちらの方でもまだとり返していないわれらの所有地をとり返させない

アルマ60,24-1,われらはまず内部すなわち国の政府を清潔にするまではレーマン人との戦を止めなくてはならない。

アルマ60,25,汝らがもしわが手紙で要求することに応ぜず、奮い起って真の自由心があることをわれに証明せず、われらの軍を加勢強化する努力をせず、兵を養う食糧を出さないならば、見よ、われはこの地方を守るために自由党であるわが軍の1部をここにのこしておいて、兵に神

アルマ60,25-1,祝福とを受け、われらに反対する者の策と力を空しくしよう。

アルマ60,26,神の御力と祝福とを受けるは、兵が熱い信仰と艱難に堪える力を得るためである。

アルマ60,27,それからわれは汝らに向って進軍をする。汝らの中でもし自由を求める者または自由の精神が少しでもこっている者があるならば、われは汝らの中に謀叛を起させて、権威を奪いとうとする者が1人もなくなるまで謀叛をつづけさせるであろう。

アルマ60,28,見よ、われは汝らの権能も勢もおそれない。わが畏れるのはただわが神だけである。われが国を守るために武器を執るのは神の命令に服従しようと思う心から出ている。しかるに、われらがこのように損害を受けるのは汝らが罪惡を犯すためである。

アルマ60,29,見よ、正義の劍は汝らの上にかかっているから、汝らがもし自分の国と国の子供とを保護する努力をしないなら、その劍が落ちてきてことごとく汝らを亡ぼす時がすでに来ている。

アルマ60,30,今われは汝らから救援の来るのを待っている。それで汝らがもしわれらを助けないならば、われは汝らが居るゼラヘムラへ軍を勧めて劍で汝らを撃ち、この国の民がその自由のために戦う戦の運びをこれ以上汝らが妨げる力を断じてなくしてしまおう。

アルマ60,31,主は汝らが生きて悪事を犯しながらますます悪くなり、主の義しい民を亡ぼすことを許したまわない。

アルマ60,32,レーマン人の怨みはその先祖の言伝えから生じ、それからわれらと別れた者たちのためにまたさらに烈くなったが、汝らの悪事は名誉と浮世の空しいものとの貪る心から起る。それであって、主が汝らを助けレーマン人に裁きを下したもうと考えられるか。

アルマ60,33,汝らは神の律法に背き、これを足の下にふみつけていることを自分でよく知っている。見よ、主はわれに仰せになった‘汝らが統治者として立てたる人々その罪と悪事とを悔い改めずば、汝は軍を進めてこれと戦え’と。

アルマ60,34,見よ、われモロナイはわが神の命令に服従すると言う誓約を守らなくてはならない。それであるから、汝らは神の御言葉に服従し、われにもヒラマンにも早く食糧と援兵とを送ってもらいたい、

アルマ60,35,汝らがもしもこのようにしないならば、われは速に軍を出して汝らを攻める。神はわれらが飢死をするのを許したまわないから、やむを得なければ劍の力を以てしても汝らの食糧の幾分かをわれらに与えたもうにちがいない。それであるから、慎んで神の御言葉を守れ、

アルマ30,36,われは汝らの国の軍の司令長官モロナイである。われは権力を求めず、かえってこれをうち破ろうとしている。われはまた浮世の名誉を求めず、わが神に栄光のあることを求め、またわが国の自由と福利とを求めている。これでこの手紙の結びとする”と。

アルマ61,,アルマ書 第61章

アルマ61,*-*,国を愛するペホーランの返事。ペホーラン、自身も自由党も罪なしとする。ニーファイ人の国は亡びようとしている。統治者、謀叛を止めるために軍隊の助けを求める。

アルマ61,1,モロナイは統治者にあてて手紙を出してから、すぐに統治者ペホーランらら手紙を受け取った。その手紙の中には次のように書いてあった。

アルマ61,2,”われ、すなわちこの国の民の統治者ペホーランは軍の司令長官であるモロナイにこの手紙を送る。モロナイよ、明らかに言うどわれは汝らが甚だ困難をしていることを喜ばず、むしろ心にこれを悲しんでいる。

アルマ61,3,しかし、汝らが困難にしているのを見て喜んでる人々がある。これらの人々はわれにもまた自由党に属するわが民にも背いて、その数は非常に多くなっている。

アルマ61,4,わが裁判職を奪い取ろうとした者たちこそ、すなわち汝が訴えるあの大きな悪事を起した者たちである。かれらはへつらいに長じていて多くの人の心をまどわしたから、将来われらの中に烈しい苦難を生ずるであろう。そればかりでなく、この連中は納めなくてはならぬ

アルマ61,4-1,まだ納めず、わが自由党の人々の勇気をくじいてこの人々を汝の所へ行かせないようにしている。

アルマ61,5,見よ、われらがわれを追い出したから、われは集められるだけの味方を集めてギデオンの地へ逃げた。

アルマ61,6,われはすでに国のこの地方へふれを廻したから、民はその国と自由とを守り、また不法にわれらを扱う者を撃つために日々武器をとってこちらへ集っている。

アルマ61,7,このようにわれらに味方をする者が多いから、われらに逆らった者たちも今は無視されて、われらを恐れ思い切って戦う勇気がない。

アルマ61,8,しかし、われらはすでにゼラヘムラ市を占領し、また自分らを納める王を立てている。その王はレーマン人の王に手紙を送って同盟をし、その同盟の中でゼラヘムラ市を固める誓約を立てたが、謀叛党の王はこのようにゼラヘムラ市を固めることによって、レーマン人が

アルマ61,8-1,ほかの部分もみな占領ができると思い、またこの国の民がレーマン人に負けたら自分がこの国の王になれると考えている。

アルマ61,9,汝は今手紙を以てわれを責めているが、それはどうでもよい。われはこれを怒ることなく、かえって汝の心が偉大であることを喜んでる。われペホーランはこの国の民の権利と自由とを護ることができるよう、裁判職を

保つ権力以外に何の権力を求めない、われ自身は

アルマ61,9-1,神がわれらを自由になしたもうたその自由の道によって堅く立っている。

アルマ61,10,われらは血を流しても断然悪事に反対をする。しかし、レーマン人が自国からそとへ出てこなければこれを殺さない。

アルマ61,11,またわれと同じ国民が謀叛を起し、武器をとってわれらに反抗しなければこれを殺さない。

アルマ61,12,またもし神の正義が要求するか、または神の命令であるならば、われらは奴隷のくびきでも甘んじて受けよう。

アルマ61,13,しかし神は敵に従えとは命じたまわず、われに頼れそうすれば救ってやると言いたもう。

アルマ61,14,それであるから、わが愛する兄弟モロナイよ。われらは悪を防ごうではないか。われらはわれらの自由を保ちわが教会の大きな特権及びわが贖い主と神との道を楽しむように、言葉の力で防ぐことのできない謀叛、紛争など一切の悪事は剣で以て防ごうではないか。

アルマ61,15,それであるから、汝の兵を少しばかりひきつけて早く自分の所へ来てくれ。そして残りの兵をリーハイとテアंकムの指揮にまかせ、この2人に権力を与えて、神の“みたま”すなわちかれらに宿る自由の“みたま”の指図に従ってその地方の戦を指揮することを任せよ

アルマ61,16,その血にのこっている軍のために、われは僅ながら食糧を送っておいたから、汝がここへ来るまではかれらは飢えて死ぬことはあるまい。

アルマ61,17,ここへ軍を進める道すがら集めることのできるだけの兵を集めてきてくれ。われらはわれらの信仰によって、またわれらの受けた神の力によって速に行ってあの謀叛人らを攻めよう。

アルマ61,18,そして、リーハイとテアंकムに送る食糧を手に入れるためにゼラヘムラ市を占領しよう。まことに、われらは主の御力によって出て行って謀叛人を攻め、そしてこの大きな悪事を止めよう。

アルマ61,19,さて、モロナイよ。われは同じ国の民と戦うために進むことがはたして義しいかどうか、またどうしたらよいかをきめるのに苦しんでいたから、今汝の手紙を手にして嬉しく思う。

アルマ61,20,主は、民がもし悔い改めないならば、行ってこれを征伐せよと汝に言いたもうたと、汝は言っている。

アルマ61,21,それで、必ずリーハイとテアंकムに主によって勇氣と力を受けさせよ。また神は2人を救いたまい、また神から受けた自由を堅く守って動かないすべての者を救いたもうから決して畏れるなと言え。これで愛する兄弟モロナイへ送る手紙を結ぶ”と。

アルマ62,,アルマ書 第62章

アルマ62,*-*,モロナイ、ペホーランを救うために進軍する。ゼラヘムラ市を謀叛人から取り返す。ヒラマン、リーハイ、テアंकムらへ救援を送る。レーマン人モロナイの血へ集中する。テアंकム、アモロンを殺したが同時に自分の命も失う。レーマン人を国外へ追い払う。

アルマ62,1,モロナイはこの手紙を手にとると、ペホーランが時刻と自由とを破る謀叛人でなくて忠義な人であることを知り勇氣を得て非常に喜んだ。

アルマ62,2,しかしこれと同時にモロナイは、ペホーランの裁判職を奪ってこれを追い出した者たち、すなわち自分の国と神とに背いた者たちの悪事を非常に悲しく思った。

アルマ62,3,モロナイはペホーランが望んだ通り、その地に残っている軍隊の指揮をリーハイとテアंकムとに任せ、僅の兵をひきつけてギデオンの地方へ進軍したが、

アルマ62,4,通りすぎて行く所はどこにでも自由の旗を立て、ギデオンの地へ進みながら集められるだけの兵を集めたところ、

アルマ62,5,幾千人と言う人々は、モロナイの立てた自由の旗へ集ってきて、奴隷にならないよう自由を護るために武器をとった。

アルマ62,6,モロナイは進みながら集められるだけの兵を集め、ついにギデオンの地へ着いて自分の兵をペホーランの軍に加えたから、聯合軍は非常に強くなり、ペーカスの軍よりもはるかに強力となった。ペーカスとはゼラヘムラの地から自由党を追いはい、ゼラヘムラの地を占

アルマ62,6-1,あの謀叛人の王であった。

アルマ62,7,モロナイとペホーランとは兵を率いてゼラヘムラの地へ行って市に近づき、ペーカスの軍と会して戦を開いた。

アルマ62,8,この戦でついにペーカスは殺されてその兵はとりことなり、ペホーランは再び元の通り裁判職についた。

アルマ62,9,ペーカスの味方と捕えて牢屋に入れた王政党の者たちとは、国法に照らして裁判をされたが、国かを護るために武器を執らずむしろ国家に反抗する志があった者たちはみな罪の宣告を受けて死刑に処せられた。

アルマ62,10,この時から国の安全を保つために、このような法律をきびしく執行することが必要であった。それであるから、自由の道を拒む者は誰でも速に国法に照らして死刑に処せられた。

アルマ62,11,このようにして、ニーファイの民を納める判事治世の30年目は過ぎ去った。この年の内にモロナイとペホーランとは自由の道に不忠な者を悉く殺し、ゼラヘムラの地と国民の間に平和を回復した。

アルマ62,12,ニーファイの民を納める判事治世の31年目の始め、ヒラマンがその地方を固めて護るのを助けるためにモロナイはすぐに食糧と6,000人の援兵とをこれに送り、

アルマ62,13,またリーハイとテアंकムの軍には6,000人の援兵と十分な食糧とをこれに送った。これはレーマン人を不正で国を固めるためであった。

アルマ62,14,さてまたモロナイとペホーランとは、ゼラヘムラの地に多くの非違をのこしておいてニーファイハ市でレーマン人を破ろうと決心し、大軍を率いてニーファイハの地へ進んだが、

アルマ62,15,その途中でレーマン人の兵を多く虜にしてその多くの者を殺し、その食糧と武器とを奪いとり、

アルマ62,16,それから後で、かれらに強制して2度とニーファイ人に対して武器をとらないと言う誓約を結ばせた。

アルマ62,17,かれらはこの誓約をたててから、アンモンの民と一しょに住むために送られたが、その時殺されなかったレーマン人はおよそ4,000人であった。

アルマ62,18,モロナイとペホーランとは、この4,000人を送ってからニーファイハの平原に陣を張った。

アルマ62,19,モロナイはレーマン人が出てきて平原で戦って欲しいと思ったが、レーマン人はニーファイ人が非常に勇敢であることを知り、またその数が多いのを見て出てきて戦う勇気がなかったからこの日には戦がなかった。

アルマ62,20,その読になると、モロナイは暗にまぎれてその都市の塀にのぼり、レーマン人の軍が都市のどこに陣をとっているかをうかがうと、

アルマ62,21,かれらは東の方、都市の入口の傍に居て眠っていた。そこでモロナイは軍に帰り、塀の内側に下すために強い縄とはしごとを急いで造らせ、

アルマ62,22,それから軍に号令して進んで塀の上ののぼらせ、レーマン人が陣を張っていない都市の西の方から縄とはしごとを使って塀の内側に下らせた。

アルマ62,23,兵は夜の内にみな強い縄とはしごとを使って市内に背離、夜明けごろにはもう全部塀の内側に入ってしまった。

アルマ62,24,レーマン人の兵は目を覚してモロナイの軍がもう塀の内側に入ってしまったのを見ると、非常に恐れおののいて入口から市外へ逃げ始めた。

アルマ62,25,モロナイは敵の逃げるのを見るや、軍を進めて敵と戦い多くの塀を殺しまたは多くの敵をとり囲んでこれをとりこにしたが、敵の残兵はモロナイの地で海岸に近い国境へ逃げて行つた。

アルマ62,26,このようにしてモロナイとペホーランは、自分の軍に1人の死者も出さずにニーファイハ市を占領したが、レーマン人の方は少なからぬ死者であった。

アルマ62,27,とりこになったレーマン人の中には、アンモンの民について自由の民になりたいと願った者が多かったが、

アルマ62,28,願った者はみなその願いを許された。

アルマ62,29,そこでとりこになったレーマン人は、みなアンモンの民に加わって一生けんめいになって働き、あるいは地を耕してあらゆる穀物を作り、あるいはあらゆる家畜を飼ひ始めた。ニーファイ人はとりこになったレーマン人をことごとくこのように処置したから、レーマン人

アルマ62,29-1,とりこから起る大きなわずらいをまぬかれた。

アルマ62,30,ニーファイハ市を占領してから、モロナイは多くのレーマン人をとりこにしてレーマン人の軍を大いに減らし、またとりこになっていたニーファイ人を多くとり返したが、このニーファイ人らはモロナイの軍に加勢したから、モロナイはニーファイハの地を去ってリーハ

アルマ62,30-1,軍を進めた。

アルマ62,31,さて、レーマン人はモロナイが攻め寄せるのを知ってまた驚きおそれ、モロナイの軍から逃げ去った。

アルマ62,32,しかし、モロナイはその軍を以てかれらがリーハイとテアंकムの軍に向かわれるまで都市から都市へ追撃したが、レーマン人はリーハイとテアंकムの軍に向かわれると、海岸に近い国境の地を逃げてモロナイの地まで退いた。

アルマ62,33,そしてついにレーマン人の軍はことごとくモロナイの地に集り聯合して1団となり、レーマン人の王アモロンもその中に居った。

アルマ62,34,モロナイとリーハイとテアंकムとは、モロナイの地の境であちこちに陣を張ったから、レーマン人は南は野の於てわが軍にかこまれ、東もまた野に於てわが軍にかこまれた。

アルマ62,35,この状態で夜かれらは休んだが、ニーファイ人もレーマン人もみな急いで長い行軍をしたために疲れて軍略を考える者は誰もなかったが、ただテアंकムだけはこれを考えていた。テアंकムは、ニーファイ人とレーマン人とのこの長い大戦争、すなわちこのような残酷

アルマ62,35-1,殺戮、飢饉を生じたこの長く大きな戦を起して、今もまだつづけている者はほかでもないアモロンと

その兄弟のアマリカヤであるとしてアモロンのことを非常に怒った。

アルマ62,36,テアンクムは怒りながら都市の塙をのぼって市内に下り、レーマン人の陣営へ行って縄を手にしながらあちらこちらを探ってとうとう王を見つけ、王に投槍を投げつけて心臓の際を刺した。しかし、王は死ぬ前にその家来を呼び覚し、テアンクムを追いかけてこれを殺さ

アルマ62,37,リーハイとモロナイとはテアンクムが死んだことを聞いて非常に悲しんだ。テアンクムは自分の国のために勇敢に戦い、非常に苦しい難儀を多くなめた人であって、真に自由の友であったが今やこの世を去って世の人々が必ず行く道を行った。

アルマ62,38,翌日モロナイは軍を進めてレーマン人を攻め始め、多くの敵兵を殺しまたは国外へ追い払ったから、かれらは逃げ去ってそのころ再び出てきてニーファイ人と戦うことはなかった。

アルマ62,39,これはニーファイの民を納める判事治世の31年目は過ぎ去った。ニーファイ人が長年の間、戦争、殺戮、飢饉、苦難に逢った次第はこの通りである。

アルマ62,40,その間にニーファイの民の中にも人殺し、不和、謀叛、そのほかあらゆる罪悪がたびたび行われたが、義人があったためまた義人が祈ったために国民は助かった。

アルマ62,41,ニーファイ人とレーマン人との間の戦が長かったから、心がたくなになっス者が少なくなかったが、また一方に於てその艱難のために柔和になって神の前にひくくへりくだった者も少なくなかった。

アルマ62,42,さてモロナイは、国中でレーマン人の1番攻め易いところを充分堅固に防ぎ固めてからゼラヘムラ市へ帰った。ヒラマンもまたその住家へ帰ってニーファイの民は元通り全く平和に返った。

アルマ62,43,モロナイはその軍を指揮する職をその子のモロナイハにゆずり、余生をおだやかに送ろうとして自分の家へひきこもった。

アルマ62,44,ペホーランはもとの裁判の務めにかえり、ヒラマンも再び神の道を宣べ伝える任に当った。このように多くの戦と不和がつずいたため、今1度教会の規律を正す必要があったから、

アルマ62,45,ヒラマンとその兄弟らは出て行って大きな力を以て神の道を宣べ伝え多くの民に各々その罪悪を認めさせたから、民はみな各々罪を悔い改めバプテスマを受けてその神であるしよの教会員となった。

アルマ62,46,ヒラマンとその兄弟らはまた全国に神の教会を確立した。

アルマ62,47,その上国法もまた規律正しいなり普通判事ならびに高等判事らが選んで立てられた。

アルマ62,48,やがてニーファイの民は再び地に於て栄え、人口がふえて再び事情に強くなり大いに富むようになった。

アルマ62,49,しかし、かれらは富と勢力と繁栄とを得たにもかかわらず、自ら高ぶる心がなくその神である主を思う心が冷淡であることがなく、神の前によくへりくだり、

アルマ62,50,主が自分らのためになしたもうた恵み深い大御業と死、束縛、牢屋、およびあらゆる苦難から、また敵の手から自分らを救い出したもうたことを忘れることなく、

アルマ62,51,たえず自分らの神である主に祈りを捧げたから、主はその約束通りにニーファイ人を祝福したもうた。それであるから、かれらは地に於て強くなり繁栄をした。

アルマ62,52,以上はみな実際にあったことである。ヒラマンはニーファイの民を納める判事治世の35年目に亡くなった。

アルマ63,,アルマ書 第63章

アルマ63,*-*,シブロン、ヒラマンのあとをつぐ。モロナイの死。ヒゴツ、船を造る。ニーファイ人、北方の地へ海を渡って行く。ヒラマンの子のヒラマン、記録を誌す。モロナイハ、レーマン人を破る。アルマの記録終る。

アルマ63,1,ニーファイの民を納める判事治世の36年目の始め、シブロンはアルマがさきにヒラマンへ授けたあの神聖な品々を預ることとなった。

アルマ63,2,シブロンは正しい人で神の前に正しい真直ぐな行いをし、慎んでたえず善を行いその神である主の命令を守った。その兄弟もまたその通りであった。

アルマ63,3,さてモロナイもまた亡くなったが、このようにして判事治世の36年目は暮れて行った。

アルマ63,4,判事治世の37年目、5、400人の男子とその祭司とから成る大きな1団がゼラヘムラを去って北の地へ移った。

アルマ63,5,このころにハゴツと言う非常に好奇心の強い人が居たが、デソレションの地に近いソウンテフルの国境の所へ行って自分のために非常に大きな船を造り、北方の地へ行くあの狭い地峡の近所でこの船を西の海へ進水させた。

アルマ63,6,そこで多くのニーファイ人がこの船に乗り、多くの食糧を携え多くの女子供をつれて北の方へ船出した。これで37年目は暮れた。

アルマ63,7,38年目にハゴツはさらに何隻かの船を造った。最初に造った船が帰ってくると、また多くの人々がこれに乗り多くの食糧を携えて北の方へ船出した。

アルマ63,8,ところがその船と乗組の人たちは行方不明となり、その後何の音沙汰もなかったから、われらは人々が海に溺れたであろうと面いる。今1隻の船も出沒したが、これもまた行方知れずとなった。

アルマ63,9,この年に北の方の地へ移って行った人は多かった。これで38年目は終る。

アルマ63,10,判事治世の39年目にシブロンが亡くなった。コリアントンは、すでに北方の地へ移った人々に食糧を持って行くため船に乗って出て行ったから、

アルマ63,11,シブロンは亡くなる前にヒラマンの息子にあの神聖な物を授けなくてはならなかった。ヒラマンの息子はその父の名をついでやはりヒラマンと言った。

アルマ63,12,そこで、ヒラマンが預かったあのいろいろな版に刻んである言葉は、アルマが公にしてはならないと命じた部分を除いてみなこれを書き写して全国の民に発表した。

アルマ63,13,しかし、このいろいろな版は神聖に保存されて代々伝えなくてはならぬものであるから、この年シブロンの亡くなる前にヒラマンに伝えられた。

アルマ63,14,この39年目には、また多少の謀叛人が居ってレーマン人の方へ移ったから、レーマン人がまた扇動されてニーファイ人を怒った。

アルマ63,15,そこでこの年にレーマン人はモロナイハの軍と戦うために大軍を以て出てきたが、戦に破れて大きな損害を受け自分の国へ追い返された。

アルマ63,16,ニーファイの民を治める判事治世の39年目はこの有様で暮れて行った。

アルマ63,17,これを以てアルマとその2人の子ヒラマンおよびシブロンの記録を終る。